

女子 殿にまみえたてまつり、寛政六年五月二十二日大番に列し、十一月二十五日大坂城の守衛にありて死す。年二十七。法名瑞道。大坂上本町の大福寺に葬る。妻は孝榮が女。

某 又吉 父に先だちて死す。

孝政 又五郎 實は柴田新八郎孝等が男、孝道が養子となり、のち父に先だちて死す。

孝榮 金藏 金十郎 又十郎 母は某氏。

寶曆十一年十二月九日はじめて淺明院殿に拜調し、十二年九月二十八日小十人に列す。後しばしば射的を射、或は御供に候し、鳥を射て物をたまふ。安永九年十一月十六日組頭にすむ。妻は岡本文助豊威が女、後妻は増井惣八郎忠常が女。

女子 篠山平大夫資壽に嫁し、離婚して後水野守門道鈞が妻となる。

孝東 又吉 實は横地左吉政信が二男、母は某氏、孝榮先に男ありといへども早世せるにより、養子となりて其女を妻とす。

天明六年三月二十一日はじめて淺明院

殿にまみえたてまつり、寛政六年五月二十二日大番に列し、十一月二十五日大坂城の守衛にありて死す。年二十七。法名瑞道。大坂上本町の大福寺に葬る。妻は孝榮が女。

某 早世 金十郎

常徳 求馬 横地鎮五郎福宜が養子。安五郎

某 磯五郎

孝壽 幸三郎 母は孝榮が女。

女子

家紋 下藤 丸の内に一文字 九曜

櫻井

定治 濟左衛門

三河國をいて東照宮につかへたてまつり、關東御入國のとき供奉す。

定美 濟兵衛 表御臺所人をつとむ。

定氏 藤七郎 實は定治が二男、定美が養子となる。大奥御膳所の御臺所人を勤む。

美明 平七郎 實は岡田安左衛門某が男、定氏が養子となる。表御臺所人をつとめ、元祿四年七月二十一日遺跡をつぎ、後御膳所にうつる。

貴明 辨之助 平七郎 實は福永八左衛門某が二男、美明が養子となる。元祿十年十二月十日遺跡を繼、のち表御臺所人をつとむ。

貴氏 濟助 林右衛門 實は福永八左衛門某が三男、母は岡田氏が女、貴明が養子となる。寶永六年三月十二日遺跡を繼、表御臺所人をつとめ、後西城御膳所の組頭に轉じ、元文五年閏七月二十六日班をすめられて西城御膳所の御臺所頭となる。延享二年九月朔日より本城に勤仕し、寶曆十年五月六日西城御廣敷番の頭に轉じ、十一年八月三日より本城に仕ふ。安永二年六月二十四日務を辭し、小普請となる。このとき齡古稀を

踰るにより黄金二枚をたまふ。七月四日死す。年七十九。法名法幢。淺草本願寺の光圓寺に葬る。後おなじ。妻は鈴木氏の女。

貴帷 貞之進 母は鈴木氏の女。表御臺所人をつとめ、元文四年九月五日班をすめられて御鷹匠となり、寶曆十三年八月十三日小十人に轉じ、安永二年十月七日遺跡を繼、天明六年二月二十一日老を告て番を辭す。このとき金十兩をたまふ。七年十二月十一日死す。年七十四。法名法性。妻は有馬備後守家臣富岡佐五兵衛某が女。

慈門 嘉七郎 上倉彦左衛門信門が養子。

豐威 文助 岡本善悦豊久が養子。

女子 熊谷八之助榮久が妻。

實秀 橋五郎 榊原小右衛門秀久が養子。

某 早世 可之助

貴賢 嘉八郎 母は佐五兵衛某が女。安永七年七月十九日小十人に列し、後屢的を射て物をたまふ。天明八年三月十日遺跡を繼。寛政三年七月二十

六日組頭にすむ。妻は熊谷八之助榮久が女。

康敬 猪之助 彌兵衛 米野金藏康年が養子。

某 熊藏

女子

貴道 八太郎 母は榮久が女。寛政七年六月十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。九曜。

秀賢 幾五郎 榊原橋五郎實秀が養子。

貴赴 千三郎

女子

某 彌之助 熊谷を稱す。

貴貞 鎌次郎

家紋 櫻花 九曜

小貫

元久 吉兵衛 台徳院殿の御時御臺所方にめしくはへられ、後千代姫君に附屬せられて組頭をつとむ。

元昌 小貫五左衛門昌行が祖。與兵衛實は某氏の男、元久が養子となる。吉兵衛 實は小貫與兵衛元昌が長男、元久が養子となる。千代姫君の臺所組頭をつとめ、後めしかへされて御天守番となる。

勝久 善右衛門 吉兵衛 實は今村忠兵衛某が男、貞久が養子となりて其女を妻とす。寶永五年十二月二十九日遺跡を繼、後御天守番をつとむ。

勝慶 彦三郎 致仕號良中 實は榊原友右衛門某が男、母は某氏、勝久が養子となりて其女を妻とす。享保十九年六月二十一日家を繼、後西城御廣敷の添番をつとめ、寛保元年十一月二十九日班をすめられて御勘定となる。寛延二年八月二十六日より淺草の御藏奉行をつとむ。寶曆十二年二月十一日先に榊原友右衛門某養妹を後妻とせん事を、彼が母勝慶に議するの時、なりがたき事と辨へながらこれをしるし、しかのみならず友右衛門女子出生せるを男子と偽りつけたてまつりし事、勝慶のちにこれを知る



といへどもはからひかたもあるべきのところ、等閑にせし事越度の至りなりとて、小普請に貶して出仕をとりめられ、閏四月二十日ゆるさる。安永四年九月七日致仕す。天明三年二月晦日死す。年七十六。法名良中。淺草の曹源寺に葬る。のち葬地とす。妻は勝久が女。

女子 勝慶が妻。

女子 澤井文大夫茂方が妻。

勝廣

吉次郎 母は勝久が女。

安永四年九月七日家を繼、五年十二月二十二日はじめて淺明院殿に拜謁す。天明二年正月二十五日死す。年三十五。法名良法。

盛諄 久米次郎 久米右衛門 須藤三左衛門盛幸が養子。

勝衛 吉兵衛 兄勝廣が養子。

勝衛

末次郎 吉兵衛 實は勝慶が三男、母は勝久が女、勝廣が嗣となる。

天明二年五月七日遺跡を繼。時正二十七日 寛政四年九月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は須藤三左衛門盛幸が女。

某 彦三郎 母は盛幸が女。次郎助

家紋 丸に釘抜 二巴

小貫

元昌

與兵衛 小貫吉兵衛元久が養子、實は某氏の男。御臺所人の見習をつとめ、後西城御膳所の御臺所人となる。

貞久

吉兵衛 小貫吉兵衛元久が養子。

昌季

平助 御膳所御臺所人をつとめ、其後組頭となる。

昌隆

平五郎 實は神山傳左衛門昌則が男、母は某氏、昌季が養子となる。

御臺所人の見習を勤め、享保九年八月二日遺跡を繼、御膳所の御臺所人となり、其後組頭に轉ず。寛保三年十二月二十一日班をす、められて御膳所御臺所頭となり、寛延二年六月二日死す。年五十九。法名玄成。淺草の曹源寺に

葬る。のち葬地とす。妻は江守吉大 夫久良が女。

昌曉

平三郎 五左衛門 實は松尾竹右衛門武宗が二男、母は大橋治兵衛重親が女、昌隆が養子となる。

寛延二年九月三日遺跡を繼、小普請となり、寶曆元年三月十九日はじめて惇信院殿に拜謁す。九年十二月廿五日御勘定となり、明和四年七月三日關東川川普請の事を勤めしにより時服二領黄金二枚をたまふ。安永七年十一月二日死す。年五十四。法名自紅。妻は大岡兵庫頭家臣内海平十郎某が女、後妻は清水の家臣岡本唯五郎典居が女。

女子

昌曉が妻に定むといへども、いまだ婚せずして死す。

女子

日下部彌源次利政が妻。

昌寛

三之丞 廣戸八五郎昌春が養子。

昌行

米吉 五左衛門 母は平十郎某が女。

安永七年十二月二十七日遺跡を繼。時正十 寛政四年九月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は松尾彌兵衛武雅が女。

某

彌太郎 母は武雅が女。

某 寧次郎

家紋 丸に釘抜 二巴

新親

清親

源助 三右衛門 致仕號殘少

正徳五年四月御徒にめしくはへられ、後支配勘定をつとめ、寛保元年十二月二十九日班をす、められて御勘定に列し、寛延元年十二月二十日其務にかなはずとて小普請に貶さる。寶曆五年四月十日致仕し、安永七年十一月十八日死す。年八十七。法名殘少。谷中感應寺の養善院に葬る。妻は田中氏の女。

貞房

元次郎 致仕號一徳 母は田中氏の女。

寶曆五年四月十日家を繼、十二年十二月七月初めて淺明院殿に拜謁し、安永八年八月四日致仕す。時正三 妻は高種久兵衛胤胤が女。

孟正

松五郎 茂十郎 深澤大助正備が養子。

女子

熊次郎

某

房矩

龜次郎 源助 母は與胤が女。

安永八年八月四日家を繼。時正二 九年十二月二十二日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、天明八年九月十六日小十人に列す。妻は高種藤大夫胤胤が女。

忠豊

彦次郎

女子

山崎熊太郎泰重が妻。

女子

阿部伊勢守家臣菅谷彌兵衛滿陳が妻。

女子

瀧權次郎貴遠が妻。

正親

八三郎 常五郎 母は胤胤が女。

女子

女子

家紋 丸に稻穂 丸に萬字

矢葺

もと角田を稱し、後矢葺にあらたむ。善兵衛久隆御細工所の同心にめしくはへられ、父子相續で景與に至る。

景與

兵三郎 三郎左衛門 御細工所同心の見習をつとめ、のち御賄方より組頭を経て支配勘定に轉ず。延享

某

李之助

延享四年三月十九日はじめて惇信院殿にまみえたてまつり、寶曆十三年八月二十三日さきに市人某安田甚之允周政等がたのみにまかせ、衣類あまた質いれせし事により、糺明をとけらるゝのところ、かの品は紛失物の由かつて辨へざりしむね申といへども、彼が身にも應ぜざる品なるを出所をも糺さず、ことに川上周榮が印形を質屋に預けをき、周榮にも告すしてこれを證人とせし始末、曲事の至りな



りとして改易せらる。妻は安田孫四郎政越が女。

景久

孫三郎 實は松下源右衛門綱平が三男、母は松平美濃守家臣柳澤權大夫某が女、景久が終にのぞみて養子となる。

明和元年六月三日遺跡を繼、天明六年六月二十日死す。年四十七。法名亮。妻は竹川市郎右衛門某が女。

景吉

又七郎 母は市郎右衛門某が女。天明六年九月四日遺跡を繼。時正二十二年。寛政八年十一月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。

景明

徳太郎 母は某氏。家紋 丸に七本矢車

波根

豊政

吉左衛門 元和三年御家人にめしくはへられ、表御臺所人をつとむ。

豊久

源兵衛 表御臺所人をつとむ。

元禄十二年七月九日遺跡を繼、表御臺所人をつとむ。

豊廣

李之助

源内

源内 源左衛門 實は波根氏が男、母は佐分利氏が女、豊廣が養子となる。

享保三年四月七日遺跡を繼、表御臺所人となり、後御膳所御臺所人を歴て同所の組頭をつとむ。延享元年五月二十五日班をす、められて御膳所御臺所頭に轉じ、二年九月朔日より西城に勤仕す。寶暦元年九月九日死す。年五十。法名日種。谷中宗隣寺の恵心院に葬る。後葬地とす。妻は金子甚五兵衛某が女。

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

源次郎 母は某氏。安永二年十一月二十七日遺跡を繼、小

普請となる。時正十九年五月二日御鷹匠に列し、寛政四年二月二十一日死す。年三十。法名日淨。妻は後藤重次郎唯克が女。

女子

實は豊政が女、矩久に養はれて田安の家臣出口忠兵衛元雄が妻となる。

矩行

榮五郎 實は吉田半左衛門政大が二男、母は清水の家臣原次郎四郎繁豊が女、矩孝が終に臨て養子となる。

寛政四年五月四日遺跡を繼、御鷹匠となる。時正十九年六月二十五日先に御鷹調練のため城の内邊にいたり、内藤宿にて休息し、酒食等買もとめしよし、かねてよりかゝる場所にをいては休息すべからざるむね申達するところ、等閑の至りなりとて、出仕をとめられ、同七月十五日ゆるさる。十一月十五日務を辭す。妻は田安の家臣出口岩次郎方脩が女。

家紋 黒餅に四目結 釘抜

家紋 黒餅に四目結 釘抜

家紋 黒餅に四目結 釘抜

家紋 黒餅に四目結 釘抜

家紋 黒餅に四目結 釘抜

家紋 黒餅に四目結 釘抜

家紋 黒餅に四目結 釘抜

家紋 黒餅に四目結 釘抜

常時

半右衛門 御臺所人をつとめ、後組頭に轉じ、そののち清揚院殿に附屬せられて臺所頭となる。

直政

半右衛門 父常時櫻田の館に附屬せらるにより直政に父が元の食祿をたまはりて御臺所方を勤む。

常定

又三郎 半右衛門 貞享二年七月二十九日遺跡を繼、表御臺所人をつとむ。

常久

又八郎 實は今村三郎左衛門某が男、常定が養子となる。御臺所人の見習をつとめ、享保五年七月朔日遺跡を繼、表御臺所人となり、後御膳所御臺所人に轉す。

常富

熊十郎 半左衛門 實は神谷五郎左衛門光重が男、母は本多下總守家臣關藤左衛門某が女、常久が終に臨て養子となり、その女を妻とす。

享保十一年九月四日遺跡を繼、御膳所の御臺所人となり、後表御臺所の組頭

女子

實は常定が女、常久に養はれて常富が妻となる。

道次

彌門 半十郎 實は宇垣齋宮某が二男、常富が養子となる。明和元年閏十二月廿一日はじめて淺明院殿にまみえたてまつる。時正十七年六月六日還電す。

氏富

織部 實は山角市左衛門政因が三男、常富が養子となる。安永元年六月十三日はじめて淺明院殿に拜謁す。六年十一月十六日父に先だちて死す。年二十二。

常敷

八十次郎 伊織 半左衛門 實は山本與右衛門政博が二男、母は某

女子

實は牧野日向守家臣種村勇右衛門正胤が女、常敷に養はれて天野貞之丞政直が妻となる。

某

早世 熊吉 八十次郎 母は某氏。

家紋

丸に橘 揚羽蝶



卷第千二百八十九

清和源氏 支流

杉浦

正泰

三右衛門 元和六年五月御徒にめされ、のち奥火番に轉す。

富之

吉左衛門 寛文四年御徒にめし加へられ、のち組頭となる。

某

三右衛門 正泰が家を繼。

某

岡右衛門 寶永三年十一月二十三日遺跡を繼。

元政

小左衛門 實は某氏の男、岡右衛門某が養子となる。寶永四年六月二十五日遺跡を繼。

富元

左市郎 吉左衛門 實は富之が二男、母は某氏、元政が嗣となる。正徳五年七月二十六日遺跡を繼、のち表火番を勤め、御徒目付を歴て組頭と

杉浦

なり、延享三年正月十八日班をすめられて小普請となる。寶永三年十月五日駿府におもむき、久能山御宮修理の事をつとめしにより黄金二枚をたまふ。十一年二月二十五日其務に應ぜざるにより、小普請に貶して出仕を停められ、五月十六日ゆるさる。十二年九月十三日死す。年六十六。法名皆道。淺草の乘満寺に葬る。妻は高山氏の女。

女子

川村半右衛門直政が妻。

富明

吉平 母は高山氏の女。寶曆十二年十二月十日遺跡を繼。時四十五歳。明和五年十月二日西城の小十人となり、八年八月二十日番を辭す。寛政七年十二月二十六日男富周がことに坐して出仕をとめられ、八月二十九日ゆるさる。

某

熊之丞

寛政八年六月二十三日富周つねに放埒にして遊興に耽り、また博奕を事とし、且竹内衆之丞幸實がために金子を借うくるの事により、關口官藏某が宅にをいて不法のことをいひつりのりしのみならず、妙源寺日信にこれを難じ、強て金子を借し

富周

左市郎 寛政八年六月二十三日富周つねに放埒にして遊興に耽り、また博奕を事とし、且竹内衆之丞幸實がために金子を借うくるの事により、關口官藏某が宅にをいて不法のことをいひつりのりしのみならず、妙源寺日信にこれを難じ、強て金子を借し

某

熊之丞

二月二日小普請方にうつる。妻は村高小七郎安清が女。

貞利

文藏 三宅權七郎貞が養子となり、のち故ありて兄盈永がもとにかへる。

某

安之助

女子

母は安清が女。

盈久

千次郎

盈直

千次郎

女子

家紋 隅切角の内三巴 丸に寫

光斤

幸右衛門

吉松

享保二年六月御徒にめし加へられ、のち支配勘定となり、寛延三年十二月十六日班をすめられて御勘定となる。寶曆二年十月十日死す。年六十八。法名良松。淺草の永見寺に葬る。後代々葬地とす。妻は吉松氏の女。

光傳

又六 權大夫 幸右衛門 母は吉松氏の女。

寶曆二年十二月二十六日遺跡を繼、小

吉松 大原

七八六

始末、巧なる所行かさね、其罪輕からずとて遠流に處せらる。妻は平岡荒四郎道隆の女。

富久

鎌三郎 實は川村助左衛門秀一が男、母は長沼宇右衛門政武が女、富明が養子となる。

女子

女子

家紋 左三巴 左二巴

杉浦

家傳に、市兵衛久政はじめ倉鹿野また神谷にあらため、御徒をつとめ、男久孝外祖父杉浦三左衛門正泰が家號を冒して杉浦を稱すといふ。

久孝

安兵衛

孝九

惣十郎

女子

享保十五年十二月三日家を繼、のち御徒目付をつとめ、關所物奉行に轉す。

久年

文左衛門 母は柴崎勘左衛 某が

普請となる。三年六月十一日死す。年三十六。法名良覺。

常時

松三郎 幸右衛門 實は二本氏の男、母は吉松氏の女、光傳が養子となる。

常貞

寶曆三年九月三日遺跡を繼、明和六年十一月十六日西城の小十人に列し、安永八年四月十六日より本城に勤仕す。天明元年五月二十三日死す。年四十九。法名英聽。

市十郎

母は某氏。

女子

天明元年七月八日遺跡を繼。時二寛政八年十一月二十五日はじめ將軍家にまみえたてまつる。妻は石丸孫之丞有由が養女。

女子

會離新藏定安が妻。

女子

家紋 鶴目 五三桐

大原

彦三郎某御徒にめし加へられ、男彦八郎

七八七

七八七

七八七

七八七

七八七

七八七

七八七

七八七

七八七

七八七

七八七

七八七

千次郎 文左衛門 母は某氏。安永八年十二月五日はじめて渡明院殿に拜謁し、寛政四年七月三日遺跡を繼、小普請となる。寶永三年二月五日御徒目付となり、班次もとのごとし。七年

盈永

千次郎 文左衛門 母は某氏。

女子

青木左京長國が妻。

某

中川忠助長利が妻。

某

美濃部七三郎義利が妻。

女子

川崎市三郎義武が妻。

女子

實は杉浦吉兵衛久寛が女、孝九にやしなはれて窪田十左衛門繁清に嫁し、のち離婚す。

安清

小七郎 村高五左衛門安豊が養子。寶曆八年十二月三日遺跡を繼、のち西城の表火番となり、そののち御徒目付にうつり、安永七年二月十日班をすめられて小普請方となる。寛政四年四月十四日死す。年六十八。法名道義。下谷の龍谷寺に葬る。



某がとき、外家の號高田にあらため、紹正にいたりて大原に復し、正純がとき罪ありて家たゆ。

●某 彦八郎 御徒をつとめ、のち組頭となる。

●紹正 彦八郎 彦四郎 母は某氏。 彦之助 彦八郎 彦四郎 母は某氏。 享保九年十二月二十七日遺跡を繼、のち表火番より御徒目付に轉じ、延享元年八月十一日班をす、められて御勘定となる。 享和三年八月二十五日評定所の留役にうつり、寶曆四年九月十六日大坂の御藏奉行となり、のち高田を改め大原を稱す。 八年十二月二日御勘定の組頭にす、み、十二年十二月二十九日近江國に赴き、山門修理の事をつとめしにより黄金五枚をたまひ、のち師にいたり、清涼殿御殿造營の事にづかり、あるひは京大坂の新田を檢し、または日光山にのほりて東照宮百五十圓の法會の事をつとめ、時服黄金等を賜ふ。 明和三年正月十八日御代官にうつり、安永六年五月二十四日飛驒の郡代となり、布衣を着することをゆるさる。天明元年二月二十八日死す。年六十一。法名謙雲。飛驒國高山の素玄寺に葬

る。妻は大草太郎左衛門政永が養女。

●某 早世 樗之助 勝次郎

●某 明和元年閏十二月二十一日はじめて淺明院殿にまみえたてまつる。安永二年三月二十三日父にさきだちて死す。年二十八。

●女子 松野右京照尹が妻。

●女子 萬壽庵君につかへ、のち長田阿波守繁徳にやしなはる。

●正純 初正順 勝三郎 龜五郎 安永七年八月二十一日父が職務を見ならひ、天明元年七月八日遺跡を繼、二年十一月二日父に代りて飛驒の郡代となり、布衣を着する事を聽さる。のち御勘定奉行支配の無役となり、寛政元年十二月二十五日父紹正職にあるのあひだ負金許多ありて正純にいたりても其債滞るのみならず、不相應に手代を減じ、をのがれ職務をまかれらにのみうちまかせ、農氏等より金子を借受、または年税のあまりをも割あたへず、私曲の所爲多かりしをもしらざりしこそ其罪輕からずといへども、これを宥められて遠流に處せらる。妻は町野舍人清諱が女。

●女子 三浦和泉守義和が養女。

●正純 陶太郎 寛政元年十二月二十七日父が罪に坐して放逐せらる。

家紋 丸に桔梗

飯野

又十郎貞順櫻田の館にをいて文昭院殿につかへたてまつり、寶永元年御供の列にありて御賄方にめしくはへらる。忠順實は磯野佐野右衛門某が男にして、貞順が婿養子となる。

●忠順 又右衛門 御賄方となり、のち組頭に轉ず。延享三年五月二十四日班をす、められて御廣敷の用達に列し、寶曆七年九月六日西城御廣敷番の頭にす、み、加恩ありて鷹米百俵の祿となる。十年四月朔日より本城に勤仕し、十二年七月八日死す。年六十九。法名日順。牛込の幸國寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は貞順が女。

●忠昌 與惣八 惣八郎 母は貞順が女。 延享三年十二月五日はじめて尊信院殿

千太郎 母は泰能が女。 寶曆四年十二月二十七日遺跡を繼、安永九年十二月二十二日はじめて淺明院殿に拜謁し、寛政七年七月十七日死す。年六十八。法名玄習。妻は山瀬安兵衛正盛が女。

●信定 又太郎 寛政七年十月三日遺跡を繼。 寶曆三年三月は松波左兵衛隆起が女。 山瀬利左衛門正房が養子。

●信胤 次郎吉 母は某氏。 寛政七年十月三日遺跡を繼。 寶曆三年三月は松波左兵衛隆起が女。 山瀬利左衛門正房が養子。

家紋 丸に一鱗 丸に桔梗

●信武 彌兵衛 寛永二年めされて御臺所人となり、のち組頭をつとむ。

●信安 兵助 彌兵衛 彌一兵衛 實は三浦氏の男、信武が養子となる。 延寶五年七月十二日遺跡を繼、御臺所

田代

●信久 次郎右衛門 慶安四年八月十四日さきに油井正雪丸橋忠也が徒黨を企しことを言上せしにより、めされて武藏國入間郡のうちにをいて采地三百石をたまひ、御側の支配に屬す。

●信次 惣次郎 又左衛門 實は坪内惣兵衛定仍が九男、信久が養子となり、その女を妻とす。 寛文七年七月五日遺跡を繼。

●信重 伊織 正徳元年十二月十九日家を繼。

●信明 伊右衛門 又左衛門 實は信次が二男、母は信久が女、信重が嗣となる。 享保十九年十二月二十二日家を繼、延享二年九月十三日小人に列し、寶曆元年五月二十一日番を辭して小普請となり、四年十一月二十五日死す。年五十二。法名受脫。青山の妙行寺に葬る。のち葬地とす。妻は豊嶋内藏承泰能が女。

田代 原

にまみえたてまつる。 寶曆五年十二月十三日萬次郎君に附屬せられて、近習番をつとむ。 十二年十月五日遺跡を繼、明和二年八月四日番を辭し、小普請となる。 四年十月二十五日死す。年三十五。法名日昌。妻は小普孫四郎正積が女。 安藤彌右衛門定利が妻。 式部 安五郎 小出加兵衛直春が養子。

●忠次 初直次 岩次郎 實は小出安五郎直久が二男、母は小出加兵衛直春が女、忠昌が病篤きに隨て養子となる。 明和四年十二月二十七日遺跡を繼。 寶曆三年三月安永元年二月朔日死す。年十八。法名理性。

●忠厚 仲 實は安藤彌右衛門定利が二男、母は忠順が女、忠次が終に隨て養子となる。 安永元年五月三日遺跡を繼。 寶曆七年八月二十三日はじめて將軍家に拜謁す。 妻は矢口重大夫順以が女。

家紋 丸に抱澤瀉 追澤瀉 卷第千二百八十九 清和源氏(支流)



人をつとめ、のち御膳所の組頭を歴て支配勘定となる。

女子 樋口九十郎輝孟が妻。

信休

傳左衛門 彌一兵衛 母は稻葉丹後守家臣小松了庵某が女。

享保十八年九月二日遺跡を繼、のち支配勘定の勤む。寛延三年十二月十六日班をす、められ御勘定となる。廣業百四十四寶曆二年九月七日より評定所の留役を勤め、七年十一月四日御藏奉行に轉じ、十三年六月九日御勘定の組頭に移る。明和八年七月十四日死す。年七十。法名日玉。淺草の眞如院に葬る。のち代葬地とす。妻は津輕出羽守家臣杉本隆伯某が女。

信満

半左衛門 實は富見久右衛門正武が三男、母は某氏、信休が養子となる。

寶曆五年十二月六日御勘定に列し、七年十一月朔日仰をうけて關東川々の普請を遣見す。十三年六月二十五日小人にうつる。明和八年十月四日遺跡を繼、安永元年三月十七日死す。年五十六。法名實相。妻は樋口九十郎輝孟が女。  
信孝 老之助 兄信満が養子。

信孝

老之助 實は信林が二男、母は某氏、信満が嗣となる。

安永元年六月五日遺跡を繼、小普請となる。五歳天明八年十二月廿三日初めて將軍家に見えたまつる。寛政十年二月十二日死す。年三十一。法名貞住。女子 奈佐兵九郎保弱が妻。

政孝

惣吉 母は某氏。  
寛政十年五月四日遺跡を繼。時年十六歳 廣業百四十四

女子

家紋 割菱 抱牡丹

栗林

先祖は西川を稱し、のち栗林にあらたむ。曾部右衛門家翁がとき、御留守居組の與力にめしはへられ、五代にして友兄にいたる。

友兄

八彌 平五郎

御留守居組の與力をつとめ、のち支配勘定に移る。寶曆八年十一月十八日班を進められて御勘定となる。上座 廣業百四十四 年三十三月十二日檢地の事をうけたまはりて河内國におもむく。十二月晦日小普請方にう

つり、十二年八月十一日御勘定の組頭にす、み、明和四年七月三日關東の所々に赴き、川々普請の事をつとめしにより時服二領黄金三枚を賜ふ。六年七月二十七日務を辭し、小普請となり、十二月四日死す。年五十五。法名宗實。青山の實相寺に葬る。妻は矢野源大夫某が女。

友多

金三郎 平五郎 母は某氏。

寶曆十一年二月二十五日はじめて淺明院殿に拜謁し、明和六年十二月二十七日遺跡を繼。時年三十六歳 廣業百四十四天明元年五月十二日西城御廣敷の用途となり、七年正月晦日種姫君に附屬せられ、寛政六年逝去により三月晦日務をゆるされ、八年十月二十六日御廣敷の用途となり、九年三月八日より西城のつとめとなる。妻は朝比奈權平妻納が女。

女子

栗林平兵衛直温が妻。

友章

八彌 母は泰納が女。

天明七年十二月二十三日はじめて將軍家に拜謁す。時年十六歳家紋 三頭左巴 十六葉菊  
名倉

先祖松村を稱し、のち名倉にあらたむ。

正義

庄左衛門 彦兵衛 庄右衛門

櫻田の館をいて銃炮組の與力をつとめ、寶永元年御供の列にありて御廣敷の添番となる。

勝意

藤五郎 母は下條氏の女。

享保二十年十二月廿一日家を繼、のち御廣敷の添番二丸御廣敷の添番を歴て小普請方の改役となり、拜謁をゆるさる。寶曆八年十一月十八日班をす、められて御勘定にうつる。廣業百四十四明和元年三月十五日死す。年六十。法名義前。麻布の大泉寺に葬る。のち葬地とす。妻は澤勘右衛門貴政が女。

正經

辰五郎

女子

楠源五郎某が妻。

女子

田安の家臣大岡財次郎某が妻。

正意

數五郎 藤五郎 母は貴政が女。  
寶曆十二年九月二十八日御勘定となり、天明元年四月二十六日仰をうけて關東の所々に赴き、川々普請の事をつとめしにより時服二領黄金二枚をたま

卷第千二百九十九

清和源氏 支流

清水

政茂

惣八郎

櫻田の館に仕へ、寛永元年文昭院殿の御供に候し、御家人に加へられ、御被官となり、のち御作事の調役をつとむ。

女子

石澤氏が妻。

久慶

衆之助 彌八郎 母は松平兵部大輔家臣福村次郎兵衛則之が女。

享保二十年十一月八日遺跡を繼、のち表火番を歴て支配勘定に轉ず。寶曆八年十一月十八日班をす、められて御勘定となり、十二月十六日より評定所の留役をつとむ。十三年十二月十一日長柄奉行に轉ず。寛政二年四月二日老を告て務を辭し、小普請となり、六日黄金一枚をたまふ。五月十日死す。年七十二。法名宗專。筑地の本願寺に葬る。後葬地とす。妻は大石忠左衛門高勝が女。



女子

田中重三郎正直が妻。

女子

服部伊右衛門一相が妻。

政一

彌太郎 父にさきだちて死す。

篤則

力五郎 惣八郎

明和元年四月十八日はじめて淡明院殿に拜謁し、のち多病により、家督たらず。妻は小西善三郎正元が女。

女子

美濃部半平藏壽が妻。

久知

兵部 庫吉 母は正元が女。

寛政元年十二月十八日はじめて將軍家に拜謁し、二年八月三日祖父が遺跡を繼ぐ。

女子

小西九左衛門正賢が妻。

信堅

芥一 善吉 馬場吉之助通番が養子。

苗久

留四郎

女子

錢之助

久猛

熊之助

久龍

熊之助

家紋

抱澤瀧 三鱗

千賀

久頼

才三郎 道竹 道隆 法眼

明和元年十二月十五日醫をもつてはじめて淡明院殿に拜謁し、安永四年十一月十一日めされて奥醫に列し、廩米二百俵をたまふ。閏十二月十一日法眼に叙す。天明六年閏十月七日寄合醫となり、寛政三年九月二十九日あらたにめし出され、恩祿を荷ひながら父子ともに家業を勵むるは、畢竟等閑のこゝろえなりとて小普請に貶して出仕をとめられ、十一月十九日ゆるさる。七年二月十四日死す。年七十九。法名道隆。橋場の總泉寺に葬る。妻は立花左近將監家臣角田六郎左衛門忠顯が女。

女子

才三郎 道有 法眼 母は忠顯が女。

女子

安永五年八月二十二日はじめて淡明院殿にまみえたてまつり、天明元年閏五月六日奥醫となる。時三十四 閏十二月十六日法眼に叙し、六年閏十月七日寄合に列し、寛政三年九月二十九日家業未熟なりとて父とおなじく小普請に貶して出仕をとめられ、十月二十九日ゆるさる。妻は渡邊立軒審主が養女。

女子

實は立花左近將監家臣白井郡平某

女子

が女、久頼に養はる。

女子

本田頼母正光が妻となり、のち離婚す。

定興

忠次郎 右膳 坪内久四郎定英が養子。

榮政

嘉織 實は千賀氏が男、久頼に養はれて、松平周防守家臣木村帶刀政盛が養子となる。

某

乙吉

女子

實は内藤備後守家臣神山新右衛門長衛が女、久頼にやしなはれて狩野養川院惟信に嫁す。

女子

徳崎朴庵長正が妻。

久道

傳藏 松平兵庫頭秀持が養子となり、後故ありて父がもとに歸る。

女子

辻甚太郎守貞に婚を約し、いまだゆかずして死す。

女子

才三郎 道竹 道榮 母は審主が養女。

輯

大次郎 泰安 谷邊昌仙政廣が妻。

政輦

村上三郎右衛門常福が養女となり、のち父がもとにかへり、坪内益次郎定保が妻となる。

女子

三四郎

軫

五本骨扇に日丸

家紋

九曜 三巴

小高

重吉

三郎 茂助 作左衛門

御徒にめし加へられ、のち錢藏番の頭をつとむ。

次政

三郎左衛門 作右衛門

錢藏番の頭をつとむ。

助親

萬之助 源次郎 三郎左衛門 作左衛門

貞享四年十二月九日遺跡を繼ぐ、表火番をつとめ、のち御徒目付を歴て組頭となる。

助金

萬太郎 三郎左衛門 三左衛門

享保十八年十二月二十七日遺跡を繼ぐ、のち御廣敷の添番をつとむ。

某

早世 萬太郎

女子

拾次郎 作左衛門 母は福島勘右衛門嘉勝が女。

助久

元文二年十二月二十四日遺跡を繼ぐ、のち支配勘定をつとむ。安永七年四月六日班をすゝめられて御勘定となる。時五十四 天明元年五月十九日さきに百俵月俸を五

元文二年十二月二十四日遺跡を繼ぐ、のち支配勘定をつとむ。安永七年四月六日班をすゝめられて御勘定となる。時五十四 天明元年五月十九日さきに百俵月俸を五

加へられ、五代連綿して正榮にいたる。

正榮

助左衛門

表火番をつとめ、のち御廣敷の添番となる。

正興

善五郎 助左衛門 母は酒井雅樂頭家臣白倉弁右衛門某が女。

安永元年四月十日遺跡を繼ぐ、御廣敷の添番となり、七年四月六日班をすゝめられて御勘定に轉す。時三十二 天明元年四月二十六日さきに關東の川々普請の事をうけたまはりしにより時服二領黄金二枚をたまひ、寛政元年三月二十三日仰をうけて國々の御料所を巡見す。妻は大奥の侍女某氏が養女。

正定

兵三郎 實は柑本久藏昌芳が男、母は前波氏の女、正興が養子となり、その女を妻とす。妻は正興が女。

大奥につかふ。正定が妻。

女子

正定が妻。

女子

正定が妻。

女子

正定が妻。

女子

正定が妻。

女子

正定が妻。

家紋

九曜 三巴



濱田

家紋 丸に田文字 丸に橋

恒之

三次郎

元文二年十二月二十九日西城の御徒にめし加へられ、のち御作事の下奉行となり、拜調をゆるさる。天明七年三月十六日班をす、められて御金奉行に轉じ、寛政四年八月二十二日務を辭し小普請となり、五年五月十五日死す。年七十六。法名珊瑚。増上寺の常照院に葬る。妻は阿久澤氏が女。

恒賀

長藏 父にさきだちて死す。

直連

專九郎 阿久澤専左衛門直富が養子。

女子

福島左平義博が妻。神谷又八保壽が妻。

恒久

三之丞 母は阿久澤氏が女。

天明七年九月二十八日はじめて將軍家にまみえたてまつり、寛政五年八月四日遺跡を繼。時年十五。八月十日七日表御右筆となる。妻は高橋藤藏保高が女、死してのち其妹を娶る。

女子

定信

松太郎 三十郎 仁右衛門 母は保壽が養女。

はじめ支配勘定の見習をつとめ、天明八年十二月二十四日御勘定となる。寛政元年十二月二十六日遺跡を繼。時年三十四。妻は川島專藏保孝が女。

貞孝

市五郎

定俊

三次郎 母は某氏。

某

與八郎

女子

家紋 丸に花澤瀉 五三桐

福井

立助

父碩安盛齋がときより京師にありて醫をもつて聞ゆ。寛政二年十一月二十九日召れて寄合の醫に列し、康米二百俵をたまひ、十二月十五日はじめて將軍家にまみえたてまつり、三年十月二十四日より仰をうけて書を講す。四年正月二十三日奥詰となり、十月三日死す。年六十八。法名紹圓。品川東海寺の長松院に葬る。後葬地とす。

家紋 丸に田文字 丸に橋

水上

左大夫定政其先三河國水上村に住せしより家號とす。仁右衛門定保神田の館に勤仕し、延寶八年常憲院殿御供の列にありて御家人にめし加へらる。定豐はその男なり。

定豐

五右衛門 壽光院の廣敷添番をつとむ。

定尙

勝三郎 市左衛門 享保十二年八月三日遺跡を繼、のち田安の小十人をつとむ。

貞余

初定賢 與八郎 源右衛門 武平次 母は井伊掃部頭家臣青木高右衛門某が女。

父が遺跡を繼、のち二丸の火番をつとめ、そのち支配勘定に轉す。天明八年八月十八日班をす、められて御勘定となり、寛政元年十二月五日死す。年七十二。法名良翠。市谷の長昌寺に葬る。妻は川島八右衛門保壽が養女。

承順

主一郎 母は某氏。

寛政三年十月六日はじめて將軍家に拜請し、四年十二月二十五日遺跡を繼、小普請となり、五年二月十八日寄合に列して奥詰となる。七年九月十六日死す。年四十八。法名宗梧。

某

有字

女子

聖護院の坊官雅務法印惟寅が妻。

某

午之助

女子

馬場瑞伯春英が妻。

受益

寅太郎 益之進 母は某氏。

寛政七年十二月三日遺跡を繼。時年十九。康米二百俵

家紋

五七桐 丸に二引

寺西

封元

昨松 重次郎

安永元年七月十一日西城の御徒にめし加へられ、のち本城に勤仕し、そのち組頭に轉す。寛政四年六月二十一日班をす、められて御代官となる。時年十四。妻は閑院宮家司木村石見守秀辰が女、後妻は太田岩次郎政武が養女。

某

早世 芥次郎

元永

虎之助 隆三郎 母は秀辰が女。妻は齋藤三大夫利雄が女。

女子

實は齋藤嘉兵衛專章が女、封元にやしなはれ羽太郎正定が妻となる。

家紋

笹文字 一巴

岸

はじめ岸本を稱し、のち岸にあらたむ。

雅法

友助 彦次郎 彦十郎

安永八年十一月四日御持組の與力にめし加へられ、のち支配勘定に轉す。寛政五年九月六日班をす、められて御勘定となる。時年四十三。のち川々の普請をうけたまはりて武藏、下總、上野、下野等の諸國に赴き、或は大和越後等の御料所を檢視す。八年十二月十日組頭にす、む。妻は樂人多藏岐忠長が女。

雅道

文次郎 母は忠長が女。

寛政九年二月九日はじめて將軍家にまみえたてまつる。時年十二。妻は日光門主の家士渡邊主水末員が女。

盛勝

又右衛門 寶永三年七月二十七日家を繼、のち西城の火番を歴て富士見御寶藏番となる。

盛義

彦太郎 實は利次が二男、盛勝が嗣となる。

利次

嘉兵衛

寛永十九年御徒にめし加へられ、のち御徒目付を歴て小細工奉行となる。

利尙

嘉兵衛

女子

實は樂人隱岐之秋が女、雅法に養はれて山本藤左衛門宜隣が妻となる。

中川

はじめ山尾を稱し、のち中川にあらたむ。

家紋

丸に木瓜 井筒のうち銀杏巴



享保十二年十二月二十三日家を繼、のち富士見御寶藏番をつとむ。

**盛直** 六郎右衛門 寛延三年七月晦日家を繼。

**勝根** 忠藏 又右衛門 實は窪田十左衛門繁高が二男、盛直が養子となりて其の女を妻とす。 寶曆六年十二月三日遺跡を繼、のち御徒目付となり、そのち富士見御寶藏番をつとむ。

**女子** 中島兵助教繁が妻。  
**女子** 石川大三郎總武が妻。  
**女子** 齋藤謙之丞熊利が妻。

**義勝** 又太郎 母は盛直が養女。 安永四年五月九日遺跡を繼、のち富士見御寶藏番をつとめ、そのち支配勘定となる。寛政六年五月十八日班をすすめられて御勘定に列し、評定所の留役をつとむ。 時三十八歳 九月十日さきに居宅をいいて同僚本多常次郎安貞青木熊五郎長富と會し、妓をよびて酒宴の興を催せし事その務に應ぜず、しかのみならず近頃同僚のもの御咎をかうぶりしとき嚴命ありし趣意をも辨へ

享保十四年十二月二十二日家を繼、のち富士見御寶藏番をつとむ。

**正吉** 久米之助 寶曆三年八月四日家を繼。

**正橋** 新太郎 安永元年十月六日遺跡を繼。

**正清** 十之助 母は某氏。 安永八年十二月二十六日家を繼、のち富士見御寶藏番をつとむ。寛政九年十二月二十八日班をす、められて御勘定となる。 時三十七歳 妻は小島源之助謙之が女。

**女子** 善藏 母は謙之が女。  
**女子** 丸に劍花菱 丸に澤瀉

あるべきに等閑にせしは不敬の所爲なりとて小普請に貶し、出仕をとめられ、十月二十九日ゆるさる。 妻は山王社の神職樹下内膳永成が女。

**女子** 實は中島兵助教繁が女、義勝にやしなはれて荒川主水重久に嫁す。

**女子** 實は永成が女。  
**義信** 鏗次郎 母は永成が女。

家紋 丸に揚羽蝶

**秋月**

先祖紀伊國名草郡秋月村に住せしより家號とす。 理右衛門重光紀伊家につかへ、享保九年御普請役にめし加へられ、三代にして紀林にいたる。

**紀林** 元三郎 御普請役をつとめ、のち支配勘定に轉す。

**行義** 德之進 母は秋月氏の女。 支配勘定の見習をつとめ、寛政七年十二月二十七日遺跡を繼、のち支配勘定となる。 九年十月十二日班をす、められて御勘定となり、評定所の留役をつ

卷第千二百九十一

宇多源氏

**敦實親王** 式部卿 一品 宇多天皇第九の皇子。

**雅信** 左大臣 從一位 號一條又鷹司はじめて源朝臣の姓をたまふ。

**扶義** 參議 左大辨 正三位

**成頼** 式部大夫 從五位下 近江國佐々木に住す。

**義經** 初章經 近江守 從五位下

**經方** 源次大夫 兵庫助 從五位下 號佐々木

**季定** 初爲俊 源次大夫 式部丞 從五位下

**行實** 伊庭の祖。 伊庭三郎

**家行** 山崎の祖。 源四郎大夫 號愛智

とむ。 時三十二歳 妻は安藤對馬守家臣本多作右衛門正朝が女。

**行篤** 兵三郎 英之助 母は正朝が女。

**某** 丸に九枚籬 九枚籬の陰

**坂井**

**正文** 太左衛門 台徳院殿の御時御持筒の與力にめし加へらる。

**正之** 六左衛門 神田の館につかへ、延寶八年徳松殿の御供に候し、西城に勤仕す。

**某** 權大夫 父に代て御持筒の與力をつとむ。

**正徳** 六左衛門 西城をいいて徳松殿に勤仕し、御徒となり、そのち三丸廣敷の添番を歴て富士見御寶藏番となる。

**正長** 宮之助 十郎左衛門

**行定** 五郎大夫 兵庫助 從五位下 眞野又船木、萬石、徳力、木村の家傳は行定ののちなりといふ。

**秀義** 三郎 兵部丞 近江總追捕使

**定綱** 太郎 左衛門尉 從五位下 初秀綱 三郎 左兵衛尉 號加地磯部、佐々、中島、眞野、佐々木成有等の家傳皆盛綱が後なりといふ。

**高綱** 四郎 左衛門尉 上田、佐々木十川島、大八木、三井、大澤等の家は高綱の末孫なりといふ。

**義清** 五郎 左衛門尉 號隱岐 富田の家系義清が男、信濃守泰清が四郎左衛門義泰より連綿せり。その餘隱岐、市川、山崎、土橋、井野等の家傳義清及び泰清が後胤なりといふ。

**嚴秀** 吉田の祖。 六郎 叡山の僧となり 佐々木吉田法橋嚴秀と號す。

**信綱** 四郎 近江守 從五位上 馬淵の祖。 五郎 左衛門尉 號馬淵

**廣定** 高島の祖。 次郎 隱岐守 號高島

**高信** 高島の祖。 次郎 隱岐守 號高島

**泰綱** 豊岐守 從五位上 號六角



氏信

對馬守 從五位上 號京極又桐谷

滿信

初滿綱 三郎 佐渡守

宗氏

初宗信 三郎 左衛門尉 從五位下

定信

太郎 池田の家傳、池田太郎 定信より出といふ。

高氏

四郎 左衛門尉 佐渡判官 從五位下 入道號道譽

秀綱

近江守 從五位下 山崎別當の家傳秀綱より出といふ。

高秀

五郎左衛門 大膳大夫 從五位上

宗滿

黒田の祖。四郎 左衛門尉 入道 號道法 號黒田

寺

河端の家傳に、高頼が二男左馬頭義昌が後胤なりといふ。

義賢

左京大夫 從四位下 入道號承禎 檜崎の家傳、其祖高治は義賢が三男といひ、今村の家系は定頼が子を今村掃部助高名とし、其後なりとみえたり。

高島

家傳に、高島越中守信顯が二男五郎左衛門重信近江國高島村に住す。久長はその後胤なりといふ。

久長

長太郎 祐菴 朔庵 法眼 はじめ醫をもつて田安の館につかふ。安永五年十一月十三日めされて渡明院殿につかへたてまつり、月俸三十口をたまひ、十五日はじめて拜調し、九年正月十九日種痘君水痘を患ひたまふの時、藥を調進して効ありしにより時服二領白銀三十枚をたまふ。天明四年正月二十七日西城の奥醫となり、慶米二百俵をたまひ、月俸は收めらる。十二月十八日法眼に叙し、六年七月四日種痘君に附屬せられ、寛政三年八月十三日奥醫となり、四年六月十四日務を辭し、寄合に列す。六年二月十

日死す。年七十。法名日等。四谷の法惠寺に葬る。妻は岡田圖書由茂が女。

久則

祐菴 良玄 母は由茂が女。

以直

天明六年十二月七日はじめて將軍家に拜調し、寛政六年五月四日遺跡を繼。慶長三十三歳 妻は松平三郎左衛門康淳が女。進次郎

女子

家紋 丸に蔓鳩酸草 丸に四目結

檜崎

家傳に、佐々木京大夫義賢が三男高治近江國蒲生郡檜崎村に住せしにより檜崎を稱す。

正時

三郎右衛門

神田の館にをいて鷹方をつとめ、後御家人にめしくはへられ御徒となり、そのうち二丸の張番並にうつる。

正法

三左衛門 三郎右衛門

元祿十三年七月十一日遺跡を繼、後表

寺

河端の家傳に、高頼が二男左馬頭義昌が後胤なりといふ。

義賢

左京大夫 從四位下 入道號承禎 檜崎の家傳、其祖高治は義賢が三男といひ、今村の家系は定頼が子を今村掃部助高名とし、其後なりとみえたり。

高島

家傳に、高島越中守信顯が二男五郎左衛門重信近江國高島村に住す。久長はその後胤なりといふ。

久長

長太郎 祐菴 朔庵 法眼 はじめ醫をもつて田安の館につかふ。安永五年十一月十三日めされて渡明院殿につかへたてまつり、月俸三十口をたまひ、十五日はじめて拜調し、九年正月十九日種痘君水痘を患ひたまふの時、藥を調進して効ありしにより時服二領白銀三十枚をたまふ。天明四年正月二十七日西城の奥醫となり、慶米二百俵をたまひ、月俸は收めらる。十二月十八日法眼に叙し、六年七月四日種痘君に附屬せられ、寛政三年八月十三日奥醫となり、四年六月十四日務を辭し、寄合に列す。六年二月十

家傳に、佐々木彈正少弼定頼が子掃部助高名尾張國今村城に住せしより家號とす。正武は其末孫なりといふ。

女子

伴野甲之丞常珍が妻。

女子

廣戸半十郎正玄が妻。

正方

芳太郎 政太郎 母は某氏。

正氏

萬吉

正直

斧三郎

今村

家傳に、佐々木彈正少弼定頼が子掃部助高名尾張國今村城に住せしより家號とす。正武は其末孫なりといふ。

正武

加兵衛 致仕號休山

神田の館にをいて常憲院殿にまみえたてまつり、延寶八年徳松殿にしたがひたてまつり御家人に列し、慶米二百俵月俸三口をたまひ、西城に候す。天和三年逝去のち小普請となり、元祿十年六月二十七日新番に列し、十二月二十二日慶米五十俵をくはへられ、月俸は收めらる。後番を辭し、寶永四年七月二十一日致仕す。正徳元年四月二日死す。法名休山。小石川の光岳寺に葬る。



正俊

半七郎 傳三郎 實は田澤九郎兵衛某が男、母は正武が妹、正武が養子となる。  
寶永四年七月二十一日家を繼、十二月十四日大番に列し、正徳二年七月十六日大坂城の守衛にありて死す。法名圓入。葬地正武におなじ。妻は小佐手五左衛門信忠が女。

正方

左源太 半七郎 母は信忠が女。  
寶永六年五月二十三日はじめて文昭院殿に拜謁す。時正徳二年九月二十七日遺跡を繼、享保九年八月十三日甲府の勤番となり、かの地にうつり住す。  
寛延元年十二月三日致仕し、寶曆三年十一月二十四日死す。年五十九。法名日教。甲斐國遠光寺村の佛國寺に葬る。後代々葬地とす。妻は柴田助右衛門勝則が養女。  
信安 久次郎 久四郎 小佐手喜八郎信利が養子。

正友

豐原左太郎勝房が妻。  
三宅岩次郎濟美が妻。  
嘉兵衛 母は勝則が養女。  
寛延元年十二月三日家を繼、勤番に列

し、寶曆三年十二月廿四日番を辭す。  
安永三年十二月七日致仕し、四年十二月二十一日死す。年五十七。法名日受。

某

源次郎  
信末 半藏 小佐手久四郎信安が養子。  
正安 乙五郎 兄正友が養子。  
女子 島田八郎左衛門利屋が妻。

正安

乙五郎 實は正友が四男、母は勝則が養女、兄正友が嗣となる。  
安永三年十二月七日家を繼、勤番に列す。寛政三年七月二十七日致仕し、七年八月十五日死す。年六十。法名日潤。  
妻は佐々井仁右衛門資久が女。

女子

芥川鏡之丞中が妻。

女子

小幡次郎藏直字が妻。

女子

柴田藤太郎勝房が妻。

兼安

太郎 嘉市郎 東儀主税兼房が養子。

正章

平藏 勘兵衛 母は資久が女。  
寛政三年七月二十七日家を繼、勤番となる。時二十九歳。妻は武藏孫次郎秀直が女、後妻は小幡次郎藏直字が養女。

正吉

彦三郎

正清

秀吉

幸政

銀藏 忠兵衛 實は服部友三郎保翁が二男、母は福王忠左衛門信近が女、政武が病篤にのぞみて養子となる。  
安永四年六月五日遺跡を繼、九年六月二十六日死す。年二十四。法名教山。

政信

爲之助 實は松平左大夫定章が四男、母は某氏、幸政が終りにのぞみて養子となる。  
安永九年九月六日遺跡を繼。時十歳。寛政四年九月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつり、六年十二月二十六日死す。年三十。法名湛然。

政爲

鏡三郎 實は松平仁右衛門近榮が三男、母は某氏、政信がやまひ危篤にのぞみて養子となり、その女を妻とす。  
寛政七年三月四日遺跡を繼。時十七歳。八年十一月二十五日はじめて將軍家に拜謁す。妻は政信が養女。

女子

實は酒井八左衛門忠房が女、政信にやしなはれて政爲が妻となる。

家紋

五七桐 四目結

森川

好充

初好武 主馬 新兵衛 母は正清が女。

正久

權藏 母は直字が養女。

女子

家紋 四目結 丸に四目結

河端

家傳にはく、佐々木高頼（佐々木高頼の孫）が二男左馬頭義昌近江國河端郷に住せしより稱號とす。政香はその後胤にして大奥の老女川島にやしなはれ、そのこふむねにより、めされて家を興すといへども姓氏はあらためず。川島は元松平越前守家臣松本重兵衛某が女なり。

政香

駿物 伊織 主馬  
正徳元年七月十八日めされて文昭院殿にまみえたてまつり、桐間番となり、鷹米三百俵をたまふ。三年五月十八日桐間番を廢らるゝにより御小性組に轉じ、享保九年十一月十五日より二九に勤仕し、十年六月朔日西城の御書院番にうつる。十五年七月二十一日死す。法名久遠。深川の雲光院に葬る。後代々葬地とす。妻は青山大膳亮家臣大澤久兵衛某が女。

知義

大助 實は鈴木權左衛門正乘が二

光廣

孫市 新兵衛  
神田の館にかへ桂昌院御方に附屬せられ、延寶八年御家人に列し、三九の贈組頭吟味役等をつとむ。元祿二年十二月十日班をすゝめられ、同所の贈頭となり、新恩百五十俵を賜ひ、すべて鷹米二百俵の祿となる。七年正月十一日死す。法名日陽。淺草の本法寺に葬る。後代々葬地とす。妻は稻葉内匠頭家臣緒方九大夫某が女。

女子

關口孫助元盛が妻。

好生

孫一郎 新兵衛 母は九大夫某が女。  
元祿四年十二月二日小十人となり、七年閏五月四日三九の贈頭に轉じ、七月十一日遺跡を繼。寶永元年正月二十一日加恩百俵を賜ふ。二年桂昌院御方逝去により、八月二十三日務をゆるされ、小普請となる。享保六年九月二十九日死す。年六十。法名日慈。妻は石野五大夫正清が女。

勝乘

森川新兵衛勝理が祖。市右衛門篠田孫左衛門久隆が妻。

女子

實は酒井八左衛門忠房が女、政信にやしなはれて政爲が妻となる。

成政

女子

知義が妻。

成政

鏡之助 實は政香が二男、母は某氏、知義が嗣となる。  
寛保元年十一月二日遺跡を繼、延享元年十一月二十一日御書院の番士となり、のち的を射て時服をたまふ。寶曆元年十月二十一日死す。年二十七。法名瑞法。妻は青木定右衛門某が女。

昌昭

女子

伊織 多病たるに依て家督たらず。

政武

初五郎 實は武川彦十郎恒光が二男、母は某氏、成政がをほりに臨みて養子となり、其女を妻とす。  
寶曆元年十二月二十九日遺跡を繼、安永四年三月二十九日死す。年四十一。法名得然。妻は成政が女。

女子

政武が妻。



享保六年十一月二十八日遺跡を繼。  
九歳十九年五月十三日小十人に列し、  
 寶曆六年八月十一日死す。年四十四。  
 法名日義。妻は神谷傳兵衛季豐が女、  
 後妻は杉島檢校不一が女。

女子 花井彌五八定政が妻。

好篤 主膳 主馬 九左衛門 母は季豐が女。

寶曆二年十二月二十七日小十人となり、  
 六年十一月四日遺跡を繼、九年閏七月十二日番を辭し、安永八年九月十八日死す。年五十一。法名日應。

女子 川窪吉十郎信博が妻。

某 長次郎

好察 善三郎 實は中村藤左衛門利奉が三男、母は阿部伊勢守家臣濱口多宮兼坦が女、好篤が養子となりて其女を妻とす。

安永八年十二月八日遺跡を繼、九年十二月二十二日始めて渡明院殿に拜謁し、天明元年七月二十二日西城の小十人となり、六年閏十月二十日より本城に勤仕し、のち的を射あるひは放鷹の時、鳥を射て物を賜ふ。寛政八年四月三日新番に轉じ、九月二十二日死す。

年四十四。法名日雲。妻は好篤が女。

女子 杉島豊七郎期長が妻。

女子 好察が妻。

女子 佐々布岩之助利有に嫁し、離婚のち伊藤金之丞實乾が妻となる。

好房 金八郎 實は杉原四郎兵衛正利が三男、母は杉原四郎兵衛正芳が女、好察が病あつきにのぞみて養子となり、其女を妻とす。

寛政八年十二月三日遺跡を繼。時廿三歳 康永三三歳

妻は好察が女。

女子 好房が妻。

女子 好房が妻。

家紋 鳩酸草 蔓柏 五枚柏

森川

勝乘 市右衛門 森川新兵衛光廣が二男、母は稻葉内匠頭家臣緒方九大夫某が女。

元祿十五年九月五日めされて常憲院殿につかへたてまつり、御勘定に列し、十二月二十二日鷹粟百五十俵をたまふ。享保元年二月二十二日おほせをうけたまはりて播磨、美作、備中、備後等の御料所の國々を巡見す。十八年務を辭し、小普請

となり、寛保元年七月二日死す。法名日了。淺草の本法寺に葬る。後代々葬地とす。妻は大久保平四郎忠業が女、後妻は境野八郎右衛門尙政が女。

女子 川合新兵衛正胤が妻。

女子 境野彦三郎直宗が妻。

好寛 權之丞 藤五郎 母は尙政が女。

享保十八年二月二日御勘定となり、寛保元年十月三日遺跡を繼、寶曆五年五月十八日御金奉行に轉じ、八年十一月十七日死す。年五十一。法名日光。

妻は小高作右衛門助親が女、後妻は可兒孫十郎勝氏が養女。

好量 鍋五郎 母は勝氏が養女。

寶曆八年十二月廿七日遺跡を繼、十一年五月六日死す。年二十。法名秀詠。

光好 藤次郎 兄好量が養子。

光好 藤次郎 兄好量が養子。

光好 藤次郎 兄好量が養子。

勝理 庄五郎 外記 市右衛門 新兵衛 實は川合清右衛門正運が二男、母

は服部傳兵衛保一が女、光好が終にのぞみて養子となる。

寶曆十二年十二月二十七日遺跡を繼。時廿七歳 康永十七歳

安永五年二月三日西城の小十人となり、六年十月番を辭し、天明元年十一月十一日西城の小十人に復し、五年三月二十八日また西城の小十人となり、十月七日番を辭す。七年八月十二日御鷹匠に列し、八年八月十八日務を辭し、寛政元年九月二十六日甲府にうつされ、かの地に住す。

勝廣 松之丞 母は某氏。妻は小林官兵衛正愛が女。

勝賢 吉十郎

家紋 鳩酸草 蔓柏 二重輪

村井

佐々木三郎秀恭の末孫なり。

正勝 濟左衛門

寛永十九年御徒にめし加へられ、後組頭をつとむ。

正憲 十兵衛 母は某氏。

承應二年十二月二十三日遺跡を繼、の

卷第千二百九十一 宇多源氏 村井

ち支配勘定をつとめ、そののち班々すすめられて御勘定となる。康永百天和三年二月十八日攝津河内兩國の川々を檢視し、十一月朔日淀川普請の事をうけたまはり、かの地におもむき、貞享元年六月大坂にをいて死す。法名性海。

女子 富田平右衛門久輝が妻。

正尹 十兵衛

御徒をつとめ、後兄正憲が養子となる。

儀大夫 十兵衛 實は正勝が二男、母は某氏、正憲が嗣となる。

貞享元年七月十二日遺跡を繼、御勘定奉行の支配となり、四年十二月二十一日御勘定に列し、後務を辭し、小普請となる。正徳四年六月七日死す。年五十七。法名廓信。淺草の廣大寺に葬る。後代々葬地とす。

正幾 次郎四郎 實は渡邊専右衛門某が二男、母は某氏、正尹が養子となり、其女を妻とす。

元祿十五年九月五日御勘定となり、享保二年十一月朔日駿遠三三國の川々普請の事をうけたまはりて彼地にいたる。六年六月五日年ごろ意りなくつとめしにより、黄金二枚をたまひ、元文二年ゆへありて務をゆるされ、三年十

二月死す。法名義全。妻は正尹が女。

女子 正幾が妻。

正秀 新太郎 兄正幾が養子。

正秀 新太郎 兄正幾が養子。

正秀 新太郎 兄正幾が養子。

數馬 新太郎 實は正尹が二男、母は某氏、兄正幾が嗣となる。

享保十二年四月十一日御勘定となり、元文四年三月六日遺跡を繼、のち務を辭し、寶曆六年六月十四日死す。年五十六。法名全壽。妻は村井氏の女。

正邦 新藏 市郎右衛門 母は村井氏の女。

寶曆六年九月六日遺跡を繼、八年十月二十八日始めて悼信院殿に拜謁し、明和七年十二月二十五日死す。年四十三。法名祐全。妻は津輕越中守家臣渡邊玄仙夷榮が女。

正巖 平十郎

榮胤 德太郎 母は夷榮が女。

明和八年三月五日遺跡を繼。時三三歳 康永五十歳

天明八年十二月二十三日はじめて將軍家にまみえたてまつり、寛政九年十二月二十八日御勘定となる。妻は名倉藤五郎正意が女。

八〇三



卷第千二百九十二

宇多源氏

松下

家傳にいはく、左衛門尉高長が後胤にして、勝興が父傳右衛門重興大猷院殿の御時御徒にめし加へらる。

勝興

源左衛門 はじめ御徒をつとめ、のち組頭を歴て鳥見役となる。

勝升

安兵衛 寛文三年十二月十一日遺跡を繼、鳥見役をつとめ、のち組頭となる。そののちこの役をやめらる。

勝澄

左兵衛 平左衛門 母は某氏。寶永六年六月二十三日遺跡を繼、正徳三年六月十八日小十人となる。享保二年十月十八日番を辭し、五年十二月七日致仕す。九年三月十三日死す。年五十六。法名日盛。嗣達の大恩寺に葬る。後葬地とす。妻は萩原清大夫記久が女。

興英

助左衛門 實は吉川十郎兵衛忠重が男、母は某氏、勝澄が養子となりてその女を妻とす。

享保五年十二月七日家を繼、七年十月二十二日小十人に列し、十三年四月有徳院殿日光山にまうでたまふのとき供奉す。十五年六月二十七日さきに窪寺小左衛門正房失心して興英に切かけしとき、其のへをしらざればかれこれ相さへしかど、なをしばくをよび深手をおひ、やむ事なく正房を討留し始末糺明ありしところ、正房が事全く狂氣したるにより、其親族等をよび隊長高力平八郎長行も興英が助命をこひまうせしかば、そのむねにまかせらるるといへども、同班の士を殺害せしをもつて食祿をおさめられ、男勝就に月俸を賜ひ、興英は都下をはなれて齋居すべきむね嚴命をかうぶる。妻は勝澄が女。

女子

興英が妻。

勝就

内記 傳右衛門 母は某氏。享保十五年六月二十七日父興英罪かうぶりて食祿をおさめらるゝといへども勝就に月俸十五口をたまひ、小普請と

女子

安太郎 母は正意が女。

正朝

屋次郎

某

長三郎

家紋

左三巴 蔓柏

勝明

英之助

勝殘

孫四郎 母は信富が女。

家紋

四目結 十六葉菊

松下

建當

佐五之丞

當重

左五之丞

當恒

紀伊家の臣たり。

專助

伊賀守 從五位下 母は某氏。

紀伊家につかへ、享保元年惇信院殿二丸にうつらせたまふのとき、したがひたてまつり御家人に列し、九月九日御小納戸となり、鷹茶三百俵を賜ひ、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。九年十一月十五日四百石を加恩あり

映央

與助 母は某氏。

享保十五年十月二十二日はじめ有徳院殿に拜謁す。時十九年九月三日遺跡を繼、小普請となり、元文元年七月十四日死す。年十七。法名涼泰。

女子

高井土佐守直熙が妻。

女子

兄映央が養女。

女子

神尾伊右衛門道器が妻。

女子

矢部能登守正虎が妻。

女子

小西助右衛門正峯が妻。

昭永

專助 隱岐守 從五位下 實は紀伊家の臣中野七郎兵衛某が

て鷹米を采地にあらためられ、武藏國葛飾郡のうちに於てすべて七百石を知行す。十年四月三日さきに有徳院殿小金原に獵したまふのとき、その事をうけたまはりしかば賞せられて時服四領黄金三枚をたまふ。十一年小金原鹿狩のときも、時服黄金等をたまふこと前におなじ。十三年四月日光山にまうでたまふのとき供奉す。十八年九月十一日頭取となる。十二月十八日從五位下伊賀守に叙任し、十九年六月十一日死す。年五十一。法名全覺。木下川の淨光寺に葬る。のち代々葬地とす。

男、母は同家の臣中嶋彌次左衛門某が女、映央がをばりに隨て養子となり、その女を妻とす。

元文元年十月二日遺跡を繼。時十二月十一日初めて有徳院殿に見え奉り、二年十二月廿五日西城の御小納戸に列し、此日布衣を着する事を聽さる。寶曆十年五月十三日より本城に勤仕し、十二年十月朔日頭取となり、十二月十八日從五位下隱岐守に叙任す。明和七年十一月廿八日御先銃炮の頭に轉じ、安永五年四月淺明院殿日光山に詣て給ふのとき從ひ奉る。六年正月十一日御作事奉行に進み、七年十二月十二日御鎗奉行に移り、八年十二月十二日前職にあるの時、屢々日光山に赴き、御宮御靈屋及び本坊修理の事を奉はりしにより、黄金五枚を賜ふ。寛政九年七月十一日死す。年七十七。法名了眞。妻は映央が養女。

昭徳

岩之丞 專助 母は映央が養女。

寶曆五年九月二十八日はじめ惇信院殿に拜謁し、十二年九月二十八日西城御書院の番士に列し、寛政二年四月二日より本城に勤仕し、八年十二月十日



若君に附屬せられて西城に候す。九年九月三日遺跡を繼。時七十九歳。妻は藤堂將隆良徳が女、後妻は土御門修理大夫泰榮が養女。

家紋 丸に四目結

先祖久左衛門政榮寛永十九年より小間遣をつとめ、四代にして政料にいたる。

久保田 家傳に、先祖當太郎宗氏は佐々木判官時信が四男にして近江國に住し、家號を久保田にあらたむといふ。

- 女子 深津彌市郎正勝が妻。
- 女子 小野飛騨守則武が妻。
- 女子 岡部庄九郎一寧が妻、一寧死して後岡部河内守一徳が養女となる。
- 女子 齋藤忠次郎正方が養女。
- 女子 松平伊勢守近言が妻。
- 女子 中根常次郎可道が妻、離婚して後大奥につかふ。
- 女子 松野長十郎親裕が妻。
- 女子 後藤定之丞行明が妻。
- 女子 實は神尾伊右衛門道器が女、昭永に養はれて村松四兵衛歳尹が妻となる。

某 早世 幸太郎

昭正

乙次郎 逸八 隼人 母は良徳が女。妻は松平藤九郎正邦が養女。

元隆

繁太郎 左近 孫左衛門 小濱鏡三郎盈隆が養子。

正尹

富吉 村上主計正茂が養子。

昭易

專治郎

女子

小西助右衛門西美が養女。

政料 喜八郎 小間遣をつとめ、しばく轉じて西城御膳所御臺所人となる。

政豐 紋八郎 小間遣をつとむ。のち父にさきだちて死す。

政徳 市五郎 忠左衛門 母は金澤氏の女。

安永元年七月三日家を繼、表御臺所人を務め、御膳所御臺所人を歴て同所の組頭となる。寛政十年八月四日班をすめられて西城御膳所御臺所頭となる。妻は水野氏の女。

保料 吉六郎 前原八十郎邦郷が妻。

則保 市五郎 母は水野氏の女。

家紋 五環の内平四目結 抱稻丸

房壽 六左衛門 早世 專右衛門

某 政孝 六郎左衛門 源右衛門 母は某氏。櫻田の館に在りて清揚院殿につかへ、臺所頭をつとむ。寶永元年文昭院殿西城にいらせ給ふのとき、御供の列にありて西城御膳所の組頭となり、のち西城御廣敷の添番に轉ず。六年十月七日班をすめられて月光院御方の用達となる。享保二年十月九日務を辭し、小普請となり、七年六月十三日死す。年七十七。法名祖龍。淺草の全龍寺に葬る。妻は青木半右衛門某が女。

政勝 久保田悅次郎政温が祖。新助 平藏

政隅 新五郎 母は半右衛門某が女。正徳三年閏五月朔日はじめて有章院殿に拜謁し、享保七年九月二日遺跡を

繼、九年八月十三日甲府の勤番となり、これより甲府にうつり住す。寛保二年八月二十二日死す。年五十七。法名照藤。古府中の大泉寺に葬る。のち葬地とす。妻は徳山氏の女。

政重

平次郎 久保田平藏政勝が養子。小花和武大夫成興が妻。

女子

満田左十郎勝意が妻。

女子

中村平右衛門成弘が妻。

女子

富田庄左衛門久由に嫁し、久由死するの後に花井新五左衛門貞孝が妻となり、貞孝死して三宅喜太郎與直が妻となる。

政智

内藏助 源兵衛 母は徳山氏の女。寛保二年十一月五日遺跡を繼、勤番となり、寛延元年九月十五日はじめて信院殿にまみえたまつり、天明七年四月二十九日組頭にうつる。寛政八年二月二十八日死す。年七十二。法名清光。妻は落合三郎左衛門通節が女。土橋五郎大夫喜俊が妻。

女子

其之助 實は間宮十左衛門信尹が二男、政智が養子となりて其女を妻とし、後故ありて信尹が許にかへる。

信安

甚三郎 實は樂師寺次郎左衛門

政道

卷第千二百九十二 宇多源氏

元健が二男、母は石丸一善貞則が女、政智が養子となりて其女を妻とす。安永八年十二月二十日勤番となり、天明六年七月朔日はじめて清明院殿に拜謁す。寛政元年九月十八日父にさきだちて死す。年四十。法名禪智。妻は政智が女。

女子

徳永庄五郎守壽が妻。

女子

はじめ信安に配し、信安家にかへるのち政道が妻となる。

女子

花形友之助勝守が妻。

直方

常藏 眞次郎 崎佐右衛門直藏が養子。

政徳 源右衛門 母は政智が女。

女子

寛政五年十二月三日勤番となる。時三十二歳。六年八月十五日はじめて將軍家に拜謁す。妻は花形友之助勝守が女。小幡万五郎直久が妻。

政應

庫次郎

家紋 丸に三笹の丸 丸に揚羽蝶

久保田

新助 平藏 久保田六左衛門房壽が

三男、母は某氏。櫻田の館に在りて文昭院殿につかへたまつり、寶永元年御供の列にありて西城の表火番となり、のち櫻田の御徒目付をつとむ。正徳四年二月十五日班をすめられて御細工頭となる。享保三年十一月十八日つとめをゆるされ、小普請となり、十年二月十日死す。年六十五。法名法山。麻布の教善寺に葬る。後代々葬地とす。妻は茂野彌次右衛門智次が女。

政重

平次郎 實は久保田源右衛門政孝が二男、母は青木半右衛門某が女、政勝が養子となる。

智尙

茂野彌左衛門智勝が養子、のち病によりて家にかへる。

女子

紀伊家の臣田原逸安某が養女。

政長

貞右衛門 實は井坂又十郎信友が二男、政重が養子となり、のち父にさきだちて死す。

政喜

千太郎 實は加藤氏の男、母は都築氏の女、政重が養子となりてその女を妻とす。

女子

延享二年閏十二月廿六日遺跡を繼、三

入〇七



年六月十五日はじめて悼信院殿にまゐり先たてまつり、天明四年七月九日死す。年五十七。法名素願。妻は政重が女。  
女子 政喜が妻。

政豊 平藏 父にさきだちて死す。  
政温 悦次郎 母は政重が女。  
天明四年十月六日遺跡を繼。十四歳 妻は小野捨次郎某が妹。

家紋 丸に三笹の丸 丸に揚羽蝶

栗本 家傳にいはいはく、佐々木太郎定綱の支族六角次郎清信近江國栗本郡に住す。其孫瑞迪正俊が時より醫を業とし、紀伊家につかふ。直方はその男なり。

直方 瑞見 法眼 紀伊家をいて有徳院殿につかへまつり、享保元年本城にいらせたまふのとき従ひたてまつり、六月二十五日奥醫となり、常陸國筑波郡のうちにをいて采地三百石をたまひ、七月二十一日法眼に叙し、九年十二月著述するところの醫方輯

昌友 榮次郎 元格 瑞見 法眼 致仕 號一貼 母は宮崎氏。  
寛延三年十二月二十六日はじめて悼信院殿にまゐり先たてまつる。五月安永三年五月六日奥醫の見習となり、十六日より御廣敷の療治をうけたまはる。四年四月五日遺跡を繼。十日奥醫に列し、閏十二月十一日法眼に叙し、寛政元年二月二日務を辭し、寄合となり、五年十二月二十一日致仕す。妻は杉田九郎兵衛忠暁が女、後妻は松平勘十郎隆尙が女。

昌高 繁八郎 寶曆八年十一月朔日めされながら高次郎君に附屬せられ、慶米百俵月俸十口をたまふ。

昌行 文平 利左衛門 兄繁八郎昌高が養子。

女子 須田勝之助盛英が妻。  
女子 村田香菴致和が妻。

源太郎 木村猪右衛門安存が養子。

某 亥五郎 元格 實は河野仙壽院通頼が三男、昌友が養子となりて其女を妻とし、のち父にさきだちて死す。

略二巻をたてまつる。十四年五月二十日死す。年八十一。法名奚疑。四谷の日宗寺に葬る。後代々葬地とす。妻は松平左京大夫家臣小笠原徳兵衛某が女。

昌綱 文平 元格 瑞見 法眼 母は徳兵衛某が女。  
享保十三年十二月二十六日奥醫の見習となり、十四年七月十九日遺跡を繼、この日奥醫に列す。十六年六月二十七日右衛門督宗武卿に附屬せられ、のち務を辭し、寄合となる。元文三年九月二日奥醫に復し、十二月十八日法眼に叙す。寶曆元年有徳院殿御により、七月十二日寄合となり、二年五月二十五日西城の奥醫に列し、十月十三日淺明院殿療を患給ふのとき、日夜勤勞せしを慰せられ、時服二領黄金三枚をたまふ。四年十二月廿七日より本城に勤仕し、十年五月十三日より二九に候し、十一年八月四日本城のつとめとなり、廿一日萬壽姫君生誕の事をうけたまはりしにより黄金三枚をたまひ、後孝泰院殿生誕のとき黄金二枚を賜ふ。安永四年正月廿三日死す。年七十七。法名有命。妻は吉田策庵宗仲が女、後妻は飯田茂八郎方菴が養女。

源次郎 某 源次郎 女子 家紋 丸に五星 平四目

卷第千二百九十二

宇多源氏

池田

家傳に、池田太郎定信が十四代の孫伊豫守秀雄、織田右府をよび豊臣太閤につかへ、伊豫國國分城に住す。朝鮮征伐のとき彼地に渡海し、慶長三年三月晦日安骨浦にをいて卒す。其子伊豫守秀氏父に繼て太閤につかへ、二萬石を領し、五年石田三成謀叛のときこれにくみし、關原のたゝかひ敗北のち高野山に逃れ、藤堂高虎によりてその罪を謝したてまつりしかば、東照宮御許容ありて高虎にめし預けられ、これよりその領地伊豫國にあり、のち赦免をかうぶり、京師に住す。貞雄はその男なりといふ。

貞雄

千助 勘兵衛 母は寺町氏。  
稻葉丹後守正勝がもとにあり。寛永十八年八月六日めされて大猷院殿につかへたてまつり、御納戸番となり、慶米を賜ふ。慶安二年嚴有院殿日光山にまうでたまふのとき供奉し、寛文元年十二月十二日加恩ありて慶米二百俵の祿となる。九年閏

昌臧

新次郎 元東 元格 瑞見 法眼 實は田村元雄尊が二男、母は田村氏の女、昌友が養子となりて其女を妻とす。

天明元年八月六日はじめて淺明院殿に拜謁し、五年十二月十五日奥醫の見習となり、六年十一月廿九日より西城御廣敷の療治をうけたまはり、寛政元年六月十七日奥醫に列し、のち蓮光院御方に附られ、十二月十六日法眼に叙し、三年四月二十七日寄合に列し、六月六日奥醫に復し、十四日種姫君に附屬せられ、四年四月十九日奥醫となり、七月二十三日竹千代殿生誕の事をうけたまはりて黄金二枚をたまふ。五年十二月二十一日家を繼。時三十八歳八年三月二十八日敦之助君生誕のときも黄金二枚を賜ふ。妻は昌友が女。  
女子 はじめ元格某が配にさだむといへども死するにより、のち昌臧が妻となる。

女子

昌大 亥之吉 元格 母は昌友が女。

女子 尾張家の臣寺山定四郎正暗が妻。



十月十八日としころの精勤を賞せられて黄金三枚をたまふ。延寶二年十二月二十五日御書物奉行に轉じ、七年十二月十九日百俵を加へらる。貞享元年二月四日務を辭し、小普請となる。四年六月十日死す。年七十五。法名正印。湯嶋の禪院に葬る。のち代々葬地とす。妻は松崎權左衛門吉次が女。

某

勳助 延寶三年閏四月二十一日はじめて嚴有院殿に拜謁す。

貞嗣

源兵衛 實は大河内甚左衛門忠綱が二男、母は某氏、貞雄が養子となりて其女を妻とす。

女子

延寶七年三月十九日はじめて嚴有院殿にまみえたまつり、天和三年九月二十五日大番に列し、貞享四年七月十一日遺跡を繼、元祿九年四月七日富士見番の頭に轉す。十年二月廿六日死す。年五十四。法名宗波。妻は貞雄が女。貞嗣が妻。

貞高

孫八郎 勳兵衛 母は貞雄が女。貞享元年六月二十三日はじめて常憲院殿に拜謁す。元祿六年十二月九日大番となる。十年七月十一日遺跡を繼、十五年正月二十三日死す。年二十九。

山崎

家傳にいはいく、先祖山崎六郎重清は佐々木源三秀綱が五男なり。次郎右衛門良益がとき御書院番の與力にめし加へらる。その男武左衛門良景、御留守居與力となり、四代連綿して武左衛門景亮に至る。成堯實は松井權右衛門忠和が男にして景亮が養子となる。

成堯

忠右衛門 喜内 六郎右衛門 御留守居與力をつとめ、のち御廣敷の番に轉じ、明和八年十一月二十一日班をすめられて御廣敷の用途となる。現米八安永四年八月十一日表御臺所頭に轉じ、五年二月十二日西城の御賄頭にうつり、天明五年十一月二十九日つね、勤仕をこたりなく、近來わけて御賄所の費をばぶき、作法きびしくとのひしむね賞せられて時服二領をたまふ。六年十二月二日より本城に勤仕し、寛政二年七月十五日御裏門切手番の頭に轉じ、七年十一月二十九日死す。年七十三。法名信礎。麻布の本妙寺に葬る。妻は景堯が女。

女子

武嶋釜太郎茂久が妻となり、離婚のち西城の大奥につかふ。

明堯

喜内 母は景堯が女。

法名智祥。妻は大河内市郎右衛門朝綱が女。

貞辰

孫次郎 母は朝綱が女。元祿十五年三月十九日遺跡を繼。享保四年十月十八日大番となり、十四年八月十三日死す。年三十。法名全心。妻は前田五左衛門定勝が女。

貞則

次郎四郎 勳兵衛 源兵衛 母は定勝が女。享保十四年十月九日遺跡を繼。元文元年四月廿七日大番に列し、明和七年八月二日より日御藏奉行を勤め、天明八年十二月二十八日これをゆるさる。寛政元年正月二十九日老を告て番を辭す。このとき黄金二枚をたまふ。妻は石野五左衛門基泰が女。

貞増

初政喜 庄九郎 七郎右衛門 永田權右衛門政恒が養子となり、のち家にかへり、そののち清水中納言重好卿につかふ。

三照

初貞房 鍋四郎 傳兵衛 永田市女子 武田道安信直が妻、離婚して後上田五左衛門貞明に嫁す。

貞應

友之丞 孫次郎 母は基泰が女。

寶曆十一年九月朔日はじめて澄明院殿に拜謁す。安永七年七月十九日大番となり、寛政六年閏十一月十六日御納戸番にうつり、八年十二月二十六日大番に復す。

女子

一橋の家臣仁木老之助某が妻、離婚す。

貞恒

巳之助 叔父七郎右衛門貞増が養子となり、のち家にかへり、寛政八年七月二十二日父貞則が市人よりかりうけし金子の事により、貞恒かれと相謀るところかきねて萩原久五郎某親族たるのよしにてこれを伴ひ、弟拾五郎貞成をいざなひて市人のもとに至り狼に憤りを發してこれを威し、つるに金子を借受、しかのみならず人のために任せ、これ等の事どもはかりよし、その罪輕からずとて追放せらる。

貞長

乙次郎 捨五郎

貞朝

次郎四郎 母は樋口氏。

貞時

友之丞

貞明

金太郎

家紋 丸に釘抜 蟻

役に吉政に従ひ、美濃國郷渡にいて軍功ありしかば、これより郷渡をもつて家號とす。其孫惣左衛門清行櫻田の館につかふ。正親は其男なり。

正親

金五郎 三郎兵衛

櫻田の館につかへ、寶永元年文昭院殿に従ひたてまつり、西城の御細工方に加へられ、五年八月七日班を進められて西城の御細工頭に轉じ、六年十月十九日日本城のつとめとなり、今よりのち西城の事をかかねつとむべき旨おほせをかうぶる。七年十二月十九日加増ありて慶米百五十俵月俸五口をたまふ。正徳四年二月六日務を辭し、小普請となる。享保八年十二月二十六日致仕し、十一年五月四日死す。年七十四。法名日條。四谷の善慶寺に葬る。のち葬地とす。妻は井口助右衛門某が女。

某

源次郎 實は某氏の男、正親が養子となる。

高本

萬次郎 三郎兵衛 實は荒川伴右衛門清繁が男、母は中山佐右衛門正義が女、正親が養子となる。享保八年十二月二十六日家を繼。九年十月九日小十人に列し、十一月十



五日より二丸に勤仕し、のち西城のつとめとなる。これよりのち、放鷹に供奉し、鳥を射あるひは大的の射手に列し、或は仰かうぶり、古利根川にをいて白鳥を射拂ひ、しばく物をたまふ。十九年九月十三日新番にうつり、のち御弓場始の射手にありて時服黄金をたまふ事数度にをよぶ。明和五年三月二十九日御膳奉行に轉じ、六年十一月九日より西城のつとめとなる。安永四年閏十二月二十五日さきに男高陳死刑に處せらるゝのとき、高本もまた罪を犯せる事ありて務をうばはれ、閉門せしめらる。五年四月十一日ゆるさる。天明六年三月十一日死す。年七十六。法名淨道。

高陳 頼母 母は某氏。

明和元年閏十二月十六日大番に列し、安永四年十二月二十五日不法の事ありて死刑に處せらる。妻は猪子左大夫一乗が女。

高満 慶次郎 家を出て所在をしらず。

高尙 梅三郎 三郎兵衛 母は某氏。

天明六年六月四日遺跡を繼。時年十七歳。寛政四年九月二十五日はじめて將軍家に拜調す。妻は服部源兵衛保直

が女。

女子

家紋 九曜 桐

佐々布

家傳に、尼子勝久の支族にして出雲國神門郡佐々布城に住し、これより佐々布を家號とすといふ。勝久は或本尼子の系圖を按ずるに、大膳大夫高秀が二男備前守高久を尼子の祖とし、高久より六代の孫刑部少輔勝久にいたれり。

利元 五郎右衛門 櫻田の館につかふ。

利忠 藤右衛門 母は佐久間與右衛門英普が女。櫻田の館をいて小十人をつとめ、納戸番を歴て組頭に轉す。寶永元年文昭院殿にしたがひたてまつり、御家人に列し、十二月十二日西城の御納戸番となり、慶米二百俵をたまひ、正徳四年二月番を辭し、小普請となり、元文三年五月五日死す。法名日諦。芝の長應

寺に葬る。のち葬地とす。妻は鶴殿四郎兵衛長繼が女。

利久 玄昌

女子 細谷彌次右衛門某が妻。

利有 主税 藤兵衛 母は長繼が女。寶永六年四月六日大番に列し、享保八年三月十二日年ごろをこたりなくつとめしにより黄金一枚をたまひ、二十年六月八日組頭にすむ。延享四年八月九日死す。年五十七。法名日功。妻は猪俣庄左衛門範氏が長女、後妻は範氏が二女。

直清 市之丞 龜井能登守家臣片寄角右衛門某が養子。

女子 西山三大夫某が妻。

女子 伊丹權十郎某が妻。

女子 小林左十郎長章が妻。

女子 太田仁平某が妻。

女子 實は西山三大夫某が女、利有に養はれて、梶助右衛門忠福が妻となる。

利久 喜十郎 母は範氏が長女。元文五年二月十五日、延享四年十一月五日遺跡を繼、寶曆五年八月二日死す。

盛道

父が遺跡を繼、錢藏番の頭をつとむ。大兵衛

盛直

太郎兵衛 二郎兵衛 太兵衛 母は某氏。寛文七年七月五日遺跡を繼、のち支配勘定をつとむ。のち班をすゝめられて御勘定となる。享保七年九月朔日林奉行にうつり、十年閏二月七日御代官に轉じ、享保三年二月六日さきに大坂出口三兵衛賀三村のうち、驛路にかゝりし石堤を墮ちてあらたに堤を築き、往還の地とせし事かつて御勘定奉行へ違すといへども、往還の地たる事をまうさざりしかば奉行の指揮もをのづからたがへり。去年伊勢伊勢守貞救上方川川の見分として其地にいたり、穿鑿のうへこのことをとめしむ。すべて驛路のことは道中奉行の沙汰をうくべきのところ、そのことなく越度のいたり、況在京のうち道中奉行へ違すべき事ども再三諭すといへども肯せず。歸府の後書面を出せし條、支配の指揮を用ひず、かたふく曲事の至りなりとて職をゆるされ、小普請に貶して逼塞せしめられ、八月二十六日ゆるさる。十二年十一月二十日死す。法名到善。駒込運光寺に葬る。のち代々葬地とす。

利政

年三十一。法名日自。新左衛門 田安の館につかふ。

利澄 藤兵衛 兄利久が養子。伊藤新五左衛門修省が妻。

女子 福王善五郎信好が妻。

女子 田安の館につかふ。

女子 阿部茂右衛門正旨が妻。

利啓

八十郎 藤兵衛 實は利有が三男。母は範氏が二女、利久が嗣となる。寶曆五年十二月七日遺跡を繼、十三年七月十九日大番となり、明和六年四月二日新番に轉じ、のち番を辭す。安永三年八月七日致仕し、そのち家を出て所在をしらず。

安永三年八月七日家を繼、五年正月十二日大番となり、のち番を辭す。天明三年二月十二日大番に復し、のち番を辭す。寛政七年九月六日さきに父利澄逐電せしところ告まうすこと遅々

虎之丞 主税 五郎右衛門 實は齋藤三郎左衛門利定が二男、母は某氏、利澄が養子となりて其女を妻とす。

卷第千二百九十三 宇多源氏

十六大夫 大猷院殿の御時めされて錢藏番の頭をつとむ。

高谷

家傳にいはいく、京極入道道譽の後胤富永三郎左衛門泰行が二男筑前守泰種、近江國高谷村に住せしより家號とす。盛政はその末孫なり。



盛重

清右衛門 實は安藤助之丞某が二男、母は某氏、盛直が養子となりてその女を妻とす。  
元禄八年十二月十一日御勘定に列し、寶永六年十二月十六日禁裏をよび御所の普請をうけたまはりしにより、時服二領黄金二枚を賜ふ。正徳三年七月廿三日小十人に轉じ、享保八年三月十二日年ごろをこたりなくつとめしにより金五兩をたまふ。のち番を辭し、十九年十二月十三日死す。法名寂運。妻は盛直が女。

女子

盛重が妻。  
富永孫大夫泰兼が妻。

盛澄

采女 母は盛直が女。  
享保二十年三月四日遺跡を繼、元文二年四月九日西城の小十人に列し、寛保元年四月二十九日死す。年三十四。法名淨覺。

方泰

助之丞 富永孫大夫泰兼が養子。

女子

織田權大夫正幸が妻。

根澄

幾次郎 清右衛門 實は富永孫大夫泰兼が二男、母は盛直が女、盛澄がをばりに隨て養子となる。  
寛保元年七月二日遺跡を繼。法名明和。

卷第千二百九十四

宇多源氏

男各

家傳にいはいく、佐々木佐渡判官高氏の末孫にして、もと山上を稱し、後男谷にあつたむ。

忠恕

平藏

安永五年西城御持筒の與力にめし加へられ、後支配勘定に轉じ、天明六年十月四日班をすめられて御勘定となる。時三十三歳。寛政元年六月二日同僚福島又四郎正儀罪かうぶるの時、券書の事により越度ありて出仕を停められ、閏六月二十二日ゆるさる。三年正月十七日さきに伊勢國山田におもむき、銀札引替をよび山田宇治兩會合所のことをうけたまはりしにより黄金一枚をたまふ。妻は德井氏が女。

忠孝

彦四郎 母は德井氏が女。  
寛政九年十二月二十八日御勘定となる。時三十二歳。

則方

忠藏 松坂源太郎則信が養子。

忠春

友之助 熊八 彌十郎 左太郎 實は岡村丹後守直純が五男、母は松平善兵衛景治が女、忠恒が養子となりて其女を妻とす。  
寶曆四年十二月十日家を繼、五年九月二十八日始めて信院殿にまみえたとまつる。天明二年十月二日死す。年五十。法名日教。妻は忠恒が養女。

女子

實は大橋與惣兵衛親英が女、忠恒にやしなはれて忠春が妻となる。

某

早世 熊次郎

某

早世 才三郎

女子

大橋與惣兵衛親英が養女。

忠益

平次郎 小平太 母は忠恒が養女。  
天明二年十二月二十四日遺跡を繼。時三十三歳。寛政八年十二月二十三日はじめて將軍家に拜謁す。寛政六年八月八日御納戸番となる。妻は秋山松之丞維祺が女。

保毅

伊三郎 寛源左衛門保規が養子。

某

淺五郎

某

永吉

家紋

藤巴 四目結

水谷

家紋 重深流 蕪荷巴

黒田

家傳に、黒田左衛門尉宗満が長男備前守高満が末葉なりといふ。

忠恒

小十郎 新五郎 左太郎 致仕號拙翁  
元禄十年三月十八日召れて表御右筆となり、鷹米二百俵を賜ふ。二十八日はじめて常憲院殿に拜謁す。三年四月二十七日先に日光山をいで大猷院殿五十回の法會行はるゝのとき、かの地におもむきしにより時服二領白銀十五枚をたまふ。寶永元年六月十一日新番に遷り、十二月十二日五十俵を加へられ、すべて二百五十俵となる。享保八年三月十二日としごゝり思ひなくつとめしにより、黄金一枚をたまふ。十六年七月二十五日組頭にすゝみ、寶曆三年八月十二日老をつけて務を辭し、小普請となる。このとき黄金二枚をたまふ。四年十二月十日致仕し、十三年十二月二十七日死す。年九十三。法名日種。谷中の安立寺に葬る。のちおなじ。妻は大橋與惣兵衛門親宗が女。

忠義

傳太郎 内藏助 銀十郎 母は親

卷第千二百九十四 宇多源氏

黒田 水谷

宗が女。

享保十年十月二十五日大番に列し、十三年十月十六日御納戸番に轉じ、十八年八月十六日新番にうつる。延享四年十一月七日御小納戸にすゝみ、十二月十九日布衣を着ることをゆるさる。  
寛延二年六月廿六日父にさきだちて死す。年四十二。法名日種。

忠久

銀助

寛延二年八月二十八日はじめて信院殿にまみえたとまつる。三年十二月十一日祖父にさきだちて死す。年十八。

某

早世 吉次郎

親英

幸四郎 三郎左衛門 與惣兵衛 大橋傳八郎親定が養子。

女子

松平左源太清門が妻。

女子

内藤助之進定英が妻。

親芳

實は仲澤忠三郎信久が女、忠盈に養はれて郡筑善兵衛正辰に配す。  
二男、母は某氏、忠恒が養子となる。  
寶曆元年十二月七日はじめて信院殿に拜謁す。二年十二月二十七日西城御小性組の番士となり、のち番を辭し、其のちやまひによりて兄大橋源兵衛親明がもとかへる。



家傳に、京極の支流にしてもと黒田を稱し、先祖近江國水谷の庄に住せしより稱號とすといふ。

照直

平吉 甫閑  
紀伊家をいて奥坊主をつとむ。享保三年淨圓院御方にしたがひ江戸に至り、四月十八日御家人にめしくはへられ、のち奥坊主組頭に准ぜらる。

早世 辰之助

某

彌平太 母は紀伊家の臣川村彌之右衛門寛久が女。

享保十三年十二月二十五日遺跡を繼、十八年七月二日右衛門督宗武卿に附屬せられ、右筆となる。元文四年二月十二日死す。年二十九。法名日達。麴町の善國寺に葬る。のちこの寺を牛込にうつされ、其地に改葬す。

直賢

善兵衛 兄直泰が養子。

善四郎 善兵衛 實は照直が三男、母は寛久が女、直泰が嗣となる。元文四年五月四日遺跡を繼、小普請となる。享保三年七月晦日御鷹匠に列し、天明三年八月二十一日組頭にうつり、寛政九年正月十四日御天守

番の頭にすむ。妻は佐々木勘三郎孟成が養女。

某

早世 虎八郎  
服部助三郎弘藏が女。

女子

鐵之丞 恒五郎 實は乙幡字兵衛秀豊が三男、母は酒井雅樂頭家臣伊丹城八左衛門知影が女、直賢が養子となりて其女を妻とす。

直郷

明和七年十一月二十九日より御鷹匠の見習をつとむ。享保三年六月晦日御鷹匠となる。妻は直賢が女。

女子

直郷が妻。

女子

鈴木五郎作恒甫が妻。

女子

秋元但馬守家臣岩田六左衛門和廣が妻。

直慶

善四郎 母は直賢が女。

女子

丸に花蓑荷 五三桐

大原

家傳に、佐々木信綱の後にして、大原左近右衛門惟宗、其男を四郎右衛門正貞と

し、父に繼て御家に仕へ、駿河大納言忠長卿に附屬せられ、其子四郎右衛門正高が時、忠長卿の所領没收あるにより處士となり、三代にして正純に至るといふ。舊家天野彌五右衛門昌著が譜を按ずるに、大原左近右衛門 實は天野の御孫は永祿七年三河國吉田下地の戦に討死す。嗣子なくして家たゆるといへども、繼に三歳の女子一人ありしに、かれが軍功にめでたまひ、その女子に食祿を授けらる。女子成長の後天野其右衛門繁昌が許に嫁し、む所の子伊兵衛直勝に東照宮の鈞命ありて、外祖父左近右衛門が名跡を繼しめ給ふこと、天野家寛永及び貞享の呈譜にも著るし。然るにこの家左近右衛門が子四郎右衛門正直などいふもの妄といふべし。是等の説はもとより採がたしといへども、佐々木信綱の子左衛門尉重綱が子孫皆大原を稱する時は其庶流ならんも知べからず。よりにて信綱の流におさむ。

正純

四郎右衛門 左大夫  
元祿九年中野の改役にめし加へられ、後表奥の火番を経て御鷹敷の添番となり、其のち法心院に附させらる。

正明

左源太 實は都筑久大夫義忠が二男、正純が養子となる。

享保十八年九月二日遺跡を繼、のち表火番をつとむ。

信亮

源之助 四郎右衛門 母は土橋勘兵衛直時が女。

元文三年十月四日遺跡を繼、のち表火番より支配勘定をつとめ、安永五年十二月十一日班をす、められて御勘定に列し、評定所の留役となる。九年四月十九日檢地のことをうけたまはりて越後國におもむく。寛政元年閏六月二十八日富士見御寶藏番の頭に轉じ、二年六月十二日死す。年六十九。法名一之。牛込の萬昌院に葬る。妻は澁谷氏の女。

女子

實は土橋九郎左衛門直堅が女。信亮にやしなはれて田安の家臣村松金藏歳英が妻となる。

信好

大藏 母は某氏。

天明六年六月十四日御勘定に列し、七年十月十六日田沼主殿頭意次が相良が領地を收めらるゝにより、郷村請取のことをうけたまはりて遠江國におもむく。寛政二年八月十七日より評定所留役の助をつとめ、九月四日遺跡を繼。享保四年四月四日留役となり、七年四月十八日日光奉行支配の組頭に轉じ、

卷第千二百九十四 宇多源氏

馬淵

九年十二月廿八日同僚關るところ信好一人にて勤勞せしにより白銀十枚をたまふ。妻は松平播磨守家臣松崎金平高孝が女。

某

彭之丞

女子

東條吉十郎道貴が妻、離婚の後一橋の館につかふ。

女子

家紋 四目結 五七桐

馬淵

家傳に、馬淵左衛門廣定が後胤なりといふ。

政治

傳次郎 傳榮 傳次郎  
猿樂をもつて神田の館につかふ。のち御家人に列し、天和二年十月二九の張番となり、十一月五日班をす、められ、奥醫師並となり、剃髪して傳榮にあらたむ。このとき加増ありて廩米二百俵をたまふ。三年八月六日東髪して御廊下番となり、貞享二年二月二十一日五十俵を加へらる。元祿元年七月十七日御印籠をたまひ、二十五日また五十俵を加賜せらる。十四年八月二十一日御近習番にうつり、

女子

早世 傳之助

女子

三宅權十郎政芳が妻。

女子

宇佐美久甫尙就が妻。

女子

落合吉之丞通純が妻。

政房

傳次郎 傳兵衛 母は忠重が女。  
寛保二年十月三日遺跡を繼、勤番となり、寛延元年九月十五月初めて惺信院殿にまみえたまつり、寶曆九年十二月十五日ごろをこたりなくつとめしにより白銀十枚をたまふ。安永七年六月十三日死す。年五十四。法名日潤。甲府の法華寺に葬る。妻は大島左大夫光好が女。

十五年十二月三日百俵の加恩あり、すべて四百俵の祿となる。寶永三年正月七日死す。法名淨念。淺草の密藏院に葬る。

正詮

新藏 母は某氏。

元祿八年七月十五日はじめて常憲院殿に拜謁す。享保三年二月二十九日遺跡を繼、小普請となる。享保九年八月十三日甲府の勤番に列し、かの地にうつり住す。寛保二年七月十一日死す。年六十二。法名古硯。甲府の誓願寺に葬る。妻は水谷權兵衛忠重が女。

女子

山本左門知英が妻。

某

早世 傳之助

女子

三宅權十郎政芳が妻。

女子

宇佐美久甫尙就が妻。

女子

落合吉之丞通純が妻。

政房

傳次郎 傳兵衛 母は忠重が女。  
寛保二年十月三日遺跡を繼、勤番となり、寛延元年九月十五月初めて惺信院殿にまみえたまつり、寶曆九年十二月十五日ごろをこたりなくつとめしにより白銀十枚をたまふ。安永七年六月十三日死す。年五十四。法名日潤。甲府の法華寺に葬る。妻は大島左大夫光好が女。



女子 渡邊八三郎正明が妻。

政典 喜三郎 母は光好が女。

安永七年八月六日遺跡を繼、勤番に列す。天明七年八月二十一日死す。年三十一。法名至道。葬地正證におなじ。

妻は大島助光齋が女、後妻は三宅喜太郎與直が女。

女子 三宅作左衛門與幸が妻。

女子 大島左太郎光遠が養女。

政影 政藏 母は與直が女。

天明七年十一月七日遺跡を繼。時三十三歳。未四十五歳。

政忠 傳次郎

家紋 丸に四目結 瓜の内に唐花

佐々木

家傳に、佐々木太郎定綱が後胤なりといふ。

茂雅 才次郎

櫻田の館にいて文昭殿院に仕へたてまつり、右筆をつとめ、寶永元年西城に入

女子 關根源左衛門良恭が妻。

清茂 庄五郎

元文三年三月二十八日はじめて有徳院殿に拜調し、のち多病なるにより嗣たらず。妻は山名平左衛門頼豊が女。

女子 吉松伊兵衛正音が養女。

女子 茂根が養女。

女子 飯島三右衛門國忠が妻となり、棄られてのち大奥につかふ。

盛春 半三郎 宗左衛門 須藤權之助盛連が養子。

女子 吉松伊兵衛正音が妻。

茂根

造酒之進 才次郎 實は吉野半左衛門信旨が三男、母は某氏、秀白が養子となりて其女を妻とす。

寶曆元年三月十九日はじめて惇信院殿に拜調し、六年五月十二日表御右筆となり、十一年十月二十七日諸家にたまふところの御判物御朱印のこをうけたまはりしにより時服二領黄金二枚をたまひ、十三年十一月二十三日また堂上をよび寺社の御判物御朱印等のことにあづかり、黄金一枚をたまふ。明和元年十月八日遺跡を繼。時三十三歳。未四十五歳。安永五年七月十五日に淡明院殿日光山にまうでたまふのときそのことを

卷第千二百九十五

宇多源氏

磯部

佐々木三郎盛綱が孫磯部左衛門尉秀忠が後裔なり。

盛利 源左衛門

櫻田の館に仕ふ。

盛高

源太郎 源左衛門 實は林宗兵衛爲信が二男、母は某氏、盛利が養子となる。

櫻田の館にいて文昭殿院に仕へたてまつり、小性組をつとむ。寶永元年西城にいらせたまふのときしたがひたてまつり、御家人に列し、廩米二百俵餘をたまひ、十二月二十二日西城の御納戸番となり、四年六月番を辭し、小普請となる。七年八月二十日死す。法名日妙。谷中の長明寺に葬る。妻は青木郷右衛門安明が女。

盛安

元右衛門 實は丹羽左京大夫家臣白石新之丞某が男、母は某氏、盛

女子 渡邊八三郎正明が妻。

政典 喜三郎 母は光好が女。

安永七年八月六日遺跡を繼、勤番に列す。天明七年八月二十一日死す。年三十一。法名至道。葬地正證におなじ。

妻は大島助光齋が女、後妻は三宅喜太郎與直が女。

女子 三宅作左衛門與幸が妻。

女子 大島左太郎光遠が養女。

政影 政藏 母は與直が女。

天明七年十一月七日遺跡を繼。時三十三歳。未四十五歳。

政忠 傳次郎

家紋 丸に四目結 瓜の内に唐花

佐々木

家傳に、佐々木太郎定綱が後胤なりといふ。

茂雅 才次郎

櫻田の館にいて文昭殿院に仕へたてまつり、右筆をつとめ、寶永元年西城に入

卷第千二百九十五

宇多源氏

磯部

佐々木三郎盛綱が孫磯部左衛門尉秀忠が後裔なり。

盛利 源左衛門

櫻田の館に仕ふ。

盛高

源太郎 源左衛門 實は林宗兵衛爲信が二男、母は某氏、盛利が養子となる。

櫻田の館にいて文昭殿院に仕へたてまつり、小性組をつとむ。寶永元年西城にいらせたまふのときしたがひたてまつり、御家人に列し、廩米二百俵餘をたまひ、十二月二十二日西城の御納戸番となり、四年六月番を辭し、小普請となる。七年八月二十日死す。法名日妙。谷中の長明寺に葬る。妻は青木郷右衛門安明が女。

盛安

元右衛門 實は丹羽左京大夫家臣白石新之丞某が男、母は某氏、盛

女子 關根源左衛門良恭が妻。

清茂 庄五郎

元文三年三月二十八日はじめて有徳院殿に拜調し、のち多病なるにより嗣たらず。妻は山名平左衛門頼豊が女。

女子 吉松伊兵衛正音が養女。

女子 茂根が養女。

女子 飯島三右衛門國忠が妻となり、棄られてのち大奥につかふ。

盛春 半三郎 宗左衛門 須藤權之助盛連が養子。

女子 吉松伊兵衛正音が妻。

茂根

造酒之進 才次郎 實は吉野半左衛門信旨が三男、母は某氏、秀白が養子となりて其女を妻とす。

寶曆元年三月十九日はじめて惇信院殿に拜調し、六年五月十二日表御右筆となり、十一年十月二十七日諸家にたまふところの御判物御朱印のこをうけたまはりしにより時服二領黄金二枚をたまひ、十三年十一月二十三日また堂上をよび寺社の御判物御朱印等のことにあづかり、黄金一枚をたまふ。明和元年十月八日遺跡を繼。時三十三歳。未四十五歳。安永五年七月十五日に淡明院殿日光山にまうでたまふのときそのことを

女子 渡邊八三郎正明が妻。

政典 喜三郎 母は光好が女。

安永七年八月六日遺跡を繼、勤番に列す。天明七年八月二十一日死す。年三十一。法名至道。葬地正證におなじ。

妻は大島助光齋が女、後妻は三宅喜太郎與直が女。

女子 三宅作左衛門與幸が妻。

女子 大島左太郎光遠が養女。

政影 政藏 母は與直が女。

天明七年十一月七日遺跡を繼。時三十三歳。未四十五歳。

政忠 傳次郎

家紋 丸に四目結 瓜の内に唐花

佐々木

家傳に、佐々木太郎定綱が後胤なりといふ。

茂雅 才次郎

櫻田の館にいて文昭殿院に仕へたてまつり、右筆をつとめ、寶永元年西城に入

卷第千二百九十五

宇多源氏

磯部

佐々木三郎盛綱が孫磯部左衛門尉秀忠が後裔なり。

盛利 源左衛門

櫻田の館に仕ふ。

盛高

源太郎 源左衛門 實は林宗兵衛爲信が二男、母は某氏、盛利が養子となる。

櫻田の館にいて文昭殿院に仕へたてまつり、小性組をつとむ。寶永元年西城にいらせたまふのときしたがひたてまつり、御家人に列し、廩米二百俵餘をたまひ、十二月二十二日西城の御納戸番となり、四年六月番を辭し、小普請となる。七年八月二十日死す。法名日妙。谷中の長明寺に葬る。妻は青木郷右衛門安明が女。

盛安

元右衛門 實は丹羽左京大夫家臣白石新之丞某が男、母は某氏、盛

女子 關根源左衛門良恭が妻。

清茂 庄五郎

元文三年三月二十八日はじめて有徳院殿に拜調し、のち多病なるにより嗣たらず。妻は山名平左衛門頼豊が女。

女子 吉松伊兵衛正音が養女。

女子 茂根が養女。

女子 飯島三右衛門國忠が妻となり、棄られてのち大奥につかふ。

盛春 半三郎 宗左衛門 須藤權之助盛連が養子。

女子 吉松伊兵衛正音が妻。

茂根

造酒之進 才次郎 實は吉野半左衛門信旨が三男、母は某氏、秀白が養子となりて其女を妻とす。

寶曆元年三月十九日はじめて惇信院殿に拜調し、六年五月十二日表御右筆となり、十一年十月二十七日諸家にたまふところの御判物御朱印のこをうけたまはりしにより時服二領黄金二枚をたまひ、十三年十一月二十三日また堂上をよび寺社の御判物御朱印等のことにあづかり、黄金一枚をたまふ。明和元年十月八日遺跡を繼。時三十三歳。未四十五歳。安永五年七月十五日に淡明院殿日光山にまうでたまふのときそのことを



にまみえたてまつり、安永四年閏十二月二十五日遺跡を繼時三十一歳

女子 佐々非留三郎久業が妻。

女子 浦野權九郎猶長が妻、のち離婚す。

女子 野田左太郎猛盛が妻、かの家たのめるのち兄が許にかへる。

某 元之進

盛純 金六

女子 實は服部助左衛門政信が女にして、母離婚のときしたがひて外祖父盛安がもとにいたり、のち盛中にやしなはれて佐々木忠四郎正彌が妻となる。

盛保 市之助 元右衛門 母は某氏。

寛政五年十二月三日勤番となる。時三十八歳

妻は三宅喜太郎與直が女。

女子 矢部金次郎春氏が妻。

盛重 源藏 母は與直が女。

盛方 安太郎

盛春 鎬兵衛

家紋 丸に三目結 五七桐に一文字

佐々

家傳に、左衛門尉盛綱より三代左衛門尉氏綱が後胤なりといふ。

政晴 彦兵衛

櫻田の館に仕へ、文昭院殿西城に入せ給ふのち西城山里の與力にめし加へられ、其のち法心院の廣敷添番となる。

兵太郎 彦大夫 勘兵衛 母は甲府の家臣中村兵左衛門則久が女。

寶永七年八月二十二日遺跡を繼 後壽光院の廣敷添番となり、のち支配勘定に轉ず。享保九年十月十九日班をすめられて御應匠となる。時三十一歳

年四月二十九日有徳院殿日光山に詣たまふのとき供奉せしにより黄金一枚をたまふ。二十年正月十六日さきに悼信院殿放鷹にならせたまふのとき政晴等是にしたがひ、御先に參るべき鷹選滞し、しかのみならず其羽ぶりもよからざりしこと常に心を用ひざるが故なりとて出仕をとめられ、二月六日ゆるさる。元文三年十一月十五日組頭に進み、延享三年二月二十七日御留守居組の組頭にうつる。寶曆三年六月十二日小普請の組頭となり、安永六年四月二十四日老を告て務を辭し、小普請となる。このとき黄金二枚をたまふ。六月

二十五日死す。年七十七。法名日勇。小石川蓮華寺の仙應院に葬る。妻は高木金右衛門門牧が女。

正詮 庄次郎 庄九郎 次郎右衛門 中田甚五兵衛則參が養子。

女子 水上八左衛門昌忠が妻。

政英 大藏 彦兵衛 母は頭牧が女。

寶曆四年三月十一日はじめて悼信院殿に拜謁し、十二年九月二十八日大番となり、明和四年九月八日父にさきだちて死す。年三十一。法名日方。

女子 井關彌右衛門貞經が妻。

女子 實は久保伊大夫勝知が女。政晴にやしなはれて堀内外記貞智が妻となる。

女子 實は岩波沖右衛門延幸が女。また政晴が養女となりて稻葉主税正朝に配す。

政脩 金彌 兵之丞 母は某氏。

明和六年四月九日はじめて淡明院殿にまみえたてまつり、安永五年十二月十九日大番に列す。時三十一歳天明七年正月二十三日新番に轉じ、寛政九年三月八日より西城に勤仕す。妻は野口瀬兵衛盛英が女、後妻は赤林忠右衛門公

利が女。 女子 館仁右衛門隆美が妻。

女子 早世 兵太郎

某 彦之進 母は公利が女。

女子 家紋 四目結 機欄葉

中島

常行 五郎兵衛 七郎右衛門

寶永三年六月二十五日めされて西城の土圭間番となり、月俸をたまひ、のち月俸をあらため鷹米百俵をたまふ。のち本城に候し、七年正月十八日五十俵の加恩あり。正徳三年五月十八日土圭間番の員を

常高 平吉 母は某氏。

寶永六年七月十二日はじめて文昭院殿に拜謁す。時三十一歳享保元年十二月二十五日遺跡を繼、延享四年八月六日致仕し、寶曆五年七月六日死す。年五十六。法名日理。妻は古田平助義直が女。

女子 内藤與十郎正次が妻。

女子 西村作之丞定恒が妻。

女子 和田助右衛門政英が妻。

常高 孝三郎 七郎右衛門 實は辻彌五右衛門守里が三男、母は上野國熊谷村神明の神職徳田大和政房が女、常高が養子となり、其女を妻とす。

延享四年八月六日家を繼、寛延三年十二月十六日御勘定となり、寶曆四年十二月二十五日務を辭し、九年七月十五日死す。年三十八。法名日順。妻は常高が女。

女子 常高が妻。

源次郎 母は常高が女。

眞野 理左衛門 勘右衛門 母は某氏。

御勘方となり、のちしばしば轉じて表火番に列し、其のち支配勘定をつとむ。後班次をすめられて御勘定となり、享保七年正月十八日死す。法名淨圓。深川靈巖寺の榮潤寮に葬る。のち代々葬地とす。妻は藤田氏の女。

盛次 五兵衛

御勘方をつとめ、のち組頭に轉ず。

盛正 理左衛門 勘右衛門 母は某氏。

御勘方となり、のちしばしば轉じて表火番に列し、其のち支配勘定をつとむ。後班次をすめられて御勘定となり、享保七年正月十八日死す。法名淨圓。深川靈巖寺の榮潤寮に葬る。のち代々葬地とす。妻は藤田氏の女。

常高 平吉 母は某氏。

寶永六年七月十二日はじめて文昭院殿に拜謁す。時三十一歳享保元年十二月二十五日遺跡を繼、延享四年八月六日致仕し、寶曆五年七月六日死す。年五十六。法名日理。妻は古田平助義直が女。

女子 内藤與十郎正次が妻。

女子 西村作之丞定恒が妻。

女子 和田助右衛門政英が妻。

常高 孝三郎 七郎右衛門 實は辻彌五右衛門守里が三男、母は上野國熊谷村神明の神職徳田大和政房が女、常高が養子となり、其女を妻とす。

延享四年八月六日家を繼、寛延三年十二月十六日御勘定となり、寶曆四年十二月二十五日務を辭し、九年七月十五日死す。年三十八。法名日順。妻は常高が女。

女子 常高が妻。

源次郎 母は常高が女。

眞野 理左衛門 勘右衛門 母は某氏。

御勘方となり、のちしばしば轉じて表火番に列し、其のち支配勘定をつとむ。後班次をすめられて御勘定となり、享保七年正月十八日死す。法名淨圓。深川靈巖寺の榮潤寮に葬る。のち代々葬地とす。妻は藤田氏の女。

盛次 五兵衛

御勘方をつとめ、のち組頭に轉ず。

盛正 理左衛門 勘右衛門 母は某氏。

御勘方となり、のちしばしば轉じて表火番に列し、其のち支配勘定をつとむ。後班次をすめられて御勘定となり、享保七年正月十八日死す。法名淨圓。深川靈巖寺の榮潤寮に葬る。のち代々葬地とす。妻は藤田氏の女。

常高 平吉 母は某氏。

寶永六年七月十二日はじめて文昭院殿に拜謁す。時三十一歳享保元年十二月二十五日遺跡を繼、延享四年八月六日致仕し、寶曆五年七月六日死す。年五十六。法名日理。妻は古田平助義直が女。

女子 内藤與十郎正次が妻。



盛直

理右衛門 實は幸田氏の男、母は某氏、盛正が養子となり、其女を妻とす。

享保七年四月二日遺跡を繼、小普請となる。延享三年六月十五日はじめて信院殿に拜謁し、十二月十四日西城の小人に列し、寶曆十一年八月三日より本城に勤め、十二年十二月十五日西城のつとめとなり、十三年正月十日死す。年七十三。法名常倫。妻は盛正が女。

女子

盛直が妻。  
大奥につかふ。

盛妍

三之助 母は盛正が女。

寶曆十三年四月二日遺跡を繼、明和三年十月十六日西城の小人に列す。五年七月十日番を辭し、天明八年三月二十七日死す。年五十七。法名知光。

女子

松下伊左衛門宣賢が養女。

盛英

久米五郎 母は某氏。

天明八年六月四日遺跡を繼、十二月九日死す。年二十。法名覺善。

盛方

兵吉 兄盛英が養子。

盛方

兵吉 實は盛妍が二男、母は某氏、

孟雅

猪之助 傳次郎 實は依田左助直有が男、母は依田左助直方が女、孟成が養子となりて其女を妻とす。

元文五年十二月十一日はじめて有徳院殿に拜謁し、寛延二年十月二十八日より父の勤を見ならひ、寶曆六年九月六日遺跡を繼、大筒役となる。十三年八月二十六日御鏡炮玉藥奉行に轉じ、大筒役をかぬ。明和八年御勘定吟味役にすゝみ、十二月十八日布衣を着するこゝとをゆるさる。安永三年八月八日死す。年五十六。法名義澤。妻は孟成が女、後妻は紀伊家の臣佐々木丹治季綱が女。

女子

孟雅が妻。

女子

稻富喜三郎直利が妻。

女子

實は紀伊家の臣佐々木丹治季綱が女、孟成にやしなはれて水谷善兵衛直賢が妻となる。

某

榮吉 父にさきだちて死す。

某

早世 勝三郎

成有

莊三郎 勘三郎 實は依田大助直武が男、母は酒井雅樂頭家臣福田市大夫佳重が女、孟雅が養子となりて其女を妻とす。

盛英が嗣となる。

寛政元年三月四日遺跡を繼。時十八年十一月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は馬場定右衛門政忠が養女。

家紋 丸に四目結

佐々木

成季 浦右衛門 紀伊家につかふ。

季綱 丹治 紀伊家に仕ふ。

孟成

勘三郎 母は森内記家臣小瀬六郎兵衛某が女。  
享保十年十月二十一日御鏡炮方の與力にめし加へられ、のち御大奉の頭に轉じ、元文三年十月十八日班を進められて大筒役となる。時御大奉の頭故のごとし。寶曆元年兼役をゆるさる。孟成かつてより家傳の炮術を師範し、のち代々これを教授す。六年六月五日死す。年六十一。法名股光。牛込の松源寺に葬る。のち代々葬地とす。

女子

福田孫次郎安好が妻。

女子

白須十兵衛政信が妻。

家紋 平四目結 五七桐 三星

上田

家傳に、佐々木四郎高綱の庶流にして、古志を稱し、後上田にあらむといふ。これより下の巻につらねし大澤に至るまで數家ともに高綱の後なり。

貞致

武助 五左衛門

貞享三年閏三月朔日召れて瑞春院御方に附屬せられ、のちしばしば加増ありて廩米二百俵の祿となり、元祿十五年三月二十九日寄合に列し、十二月二十二日廩米百俵を加へられ、すべて三百俵となる。正徳五年四月二十日死す。年六十七。法名良眞。大塚の智香寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は林氏の女。

敬貞

彦八郎 藏人 母は林氏の女。

寶永元年六月十日はじめて常憲院殿に拜謁し、正徳五年六月二十六日遺跡を繼、小普請となる。享保元年三月十二

貞朋

初貞伯 豐貞 彦八郎 五左衛門 母は賴氏が女。

享保十一年十月十五日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時元文四年六月二十九日御小性組の番士に列し、寶曆十年七月十三日死す。年四十四。法名大音。妻は大久保七兵衛忠喬が女、後妻は池田孫次郎貞辰が女。

女子

益貞 彦八郎 母は忠喬が女。

益貞

寶曆十年十月十日遺跡を繼、十二年十二月七日はじめて渡明院殿に拜謁す。明和三年五月七日西城の御小性組に列し、六年十一月二日死す。年二十七。法名現道。妻は榊原市郎右衛門長治が女。

貞方

熊次郎

直定

猪之助 惣使河原を稱す。

女子

見ならひ、三年三月十一日大筒役となる。

孟英

初直雅 卯之助 傳次郎 實は孟雅が四男、母は季綱が女、成有が嗣となる。

女子

平井五左衛門次昌が養女。

孟英

傳次郎 兄成有が養子。

女子

成有が妻。

女子

稻富三五郎直房に嫁し、後離婚す。

女子

明和五年四月九日はじめて渡明院殿にまみえたてまつり、八月七日より父がつとめを見ならひ、八年三月二十二日大筒役となり、安永三年十一月五日遺跡を繼。時大正五年四月七月三日御鏡炮玉藥奉行に轉ず。大筒役もとのごとし。寛政元年十二月十一日玉藥奉行を辭し、二年十二月八日さきに御鏡炮玉藥奉行をつとむるとき等閑のことあり、しかのみならず隊下のはからひもよからざるにより、小普請に貶して出仕を停められ、三年正月二十九日ゆるさる。妻は孟雅が女。



女子

一橋の館につかふ。

貞明

藏人 兄益貞が養子。

女子

八十郎 青柳半右衛門正貞が養子。

貞明

鏡之助 六左衛門 藏人 實は貞明が三男、母は忠喬が女、益貞男ありといへども病者たるにより其嗣となる。

明和六年十二月二十七日遺跡を繼。安永元年十二月二十二日はじめて湊明院殿にまみえたてまつり、五年三月二十一日西城の御小性組に列し、九月二十九日さきに從弟榊原吉十郎長路が第跡次郎長鏡道路に在いて變死せしとき、長路が申むねにまかせ、そのことを上告せず、長路やまひにかかるのときなれば、貞明始末を糺問すべきのところ、そのことなく、あまつさへ長路が家臣といつはり、死骸をひきとりしをもそのまゝにせしこと、越度のいたりなりとて、小普請に貶し、出仕をとめられ、六年正月十一日ゆるさる。寛政十年五月二十二日御小性組の番士に列す。妻は細井戸兵衛爲親が女、後妻は石川平右衛門政利が女。

某

吉之丞 病者たるにより家督たらず。

某

長三郎

某

龜太郎 母は政利が女。

家紋 三巴 丸に左萬字 三圍子

卷第千二百九十六

宇多源氏

佐々木

重綱

八右衛門

高吉

四郎兵衛

重當

櫻田の館に在いて清揚院殿につかふ。河島勝三郎高壽が祖。八右衛門河島を稱す。

高忠

大學

高麻

父に繼て櫻田の館につかふ。

準人 實は高吉が二男、母は青地次左衛門元方が女、高忠が嗣となる。櫻田の館に在いて文昭院殿につかへたてまつり、小性組をつとめ、寶永元年西城にいらせたまふのとき、したがひたてまつり、御家人に列し、十二月十二日西城の焼火間番となり、月俸五十口をたまひ、のちあらためて、慶長二百俵をたまふ。六年十月二十九日焼火

高規

初高明 喜三郎 又四郎 大學 致仕號來運 實は矢橋五右衛門良涉が二男、母は某氏、高規が養子となりてその女を妻とす。

享保九年九月二十八日はじめて有徳院殿に拜謁す。時十一月二十一日遺跡を繼、勤番となる。寶曆十三年五月十三日甲府の市人訴ふるむねあるにより、廻塞せしめられ、九月六日ゆるさる。明和八年十二月七日致仕し、安永三年八月十六日死す。年六十六。法名日法。妻は高麻が女、後妻は矢部嘉七郎春親が女。

女子

女子

女子

高定

政五郎 父にさきだちて死す。

植林小市實冬が養女。

竹田萬次郎定持が妻。

河島

卷第千二百九十六

宇多源氏

河島

高明

四郎兵衛 母は某氏。明和八年十二月七日家を繼、勤番となり、寛政八年五月二十五日死す。年五十一。法名日明。

女子

女子

女子

高房

八十吉 實は櫻井多門信久が二男、母は青柳氏、高明が養子となりて其女を妻とす。寛政八年八月四日遺跡を繼、勤番となる。時三十七歳。妻は高明が女。

女子

高陳

道太郎 母は高明が女。

家紋 四目結 葉劍梅鉢

河島

家傳に、先祖近江國河島村に住せしより家號とすといふ。按ずるに、今近江國高島郡に川島村あり。下につらねし川島家

重當

八右衛門 佐々木八右衛門重綱が二男。櫻田の館に勤仕す。

重國

八右衛門 母は松平加賀守家臣松原半右衛門某が女。

父に繼て文昭院殿に仕へたてまつり、櫻田の館に在いて小十人を勤む。寶永元年御供の列にありて西城御廣敷の添番となり、六年十月十九日班をすめられて蓮淨院の用途となり、加恩ありて慶長百五十俵を賜ふ。正徳三年十二月二十三日五十俵をくはへられ、五年六月十一日用人にすゝみ、また百俵をましたまひ、すべて三百俵の祿となり、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。享保四年十二月二十日死す。年五十。法名空山。駒込の蓮光寺に葬る。後代々葬地とす。妻は重田源左衛門某が女。

國實

利兵衛 實は太田利兵衛實久が二男、母は小林平右衛門正勝が女、重國が養子となりて其女を妻とす。



享保五年三月二日遺跡を繼、寄合に列す。七年十月二十二日新番に列し、十年十二月二十五日仰によりて古利根川に至り白鳥を射拂ふ。後物を射て物をたまふ。寶曆二年十一月二十九日御具足奉行に轉じ、十二年五月二十六日老を告て務を辭し、小普請となる。このとき黄金二枚をたまひ、明和八年十二月七日致仕し、安永元年三月十八日死す。年八十。法名速心。妻は重國が女、後妻は依田甚兵衛守相が女。國實が妻。

高道

外記 母は重國が女。

寛保三年三月十一日大番に列し、後御弓場始百手的的等の射手に候し、あるひは流鏑馬騎射をつとめてしばく物をたまふ。明和七年十一月二十七日父にさきだちて死す。年四十九。法名説心。妻は内藤平次郎寧信が女、後妻は山寺助右衛門信映が女、また小川隆好時勝が養女を娶る。  
向坂庄兵衛知興が妻。  
小川喜太郎眞圓が妻。  
小川喜太郎眞圓が妻。  
久五郎 平右衛門 小林左次兵衛 雅知が養子。

高玄

喜三郎 八右衛門 母は時勝が養女。

明和八年十二月七日祖父が家を繼、安永元年十二月二十二日はじめて淡明院殿に拜調し、六年二月七日大番となり、後物を射あるひは騎射をつとめてものをたまふ。七年六月五日新番にうつり、のち御弓場始の射手をつとめて物をたまふ。天明三年十二月二十六日死す。年三十一。法名立信。妻は鈴木次郎右衛門政明が女。  
高寛 清兵衛 兄高玄が養子。

高寛

利三郎 圖書 清兵衛 實は高道が二男、母は時勝が養女、高玄男ありといへども病者たるにより、高寛嗣となる。

天明四年二月七日遺跡を繼、六月二十八日大番となり、七年正月二十三日新番に轉じ、寛政九年十一月十八日死す。年三十二。法名諱眞。妻は山口新十郎定達が女。  
高導 八太郎 病者たるにより家督たらず。

高壽

勝三郎 母は定達が女。

て奥醫となり、鷹米二百俵をたまふ。享保元年五月十六日寄合に列し、七月九日月光院御方に附屬せらる。元文四年五月四日死す。年六十八。法名圓心。深川の木誓寺に葬る。のち代々葬地とす。

高泰

玄忠 實は立花飛騨守家臣大八木伯元保教が男、母は某氏、高豊が養子となる。

享保八年十一月十一日はじめて有徳院殿にまみえたまつり、十四年五月三日より月光院御方廣敷の療治をうけたまはり、元文四年七月二日遺跡を繼、小普請となり、五日月光院御方に附屬せらる。寶曆二年逝去により十一月四日寄合に列す。明和五年正月十九日死す。年六十七。法名良泰。妻は紅林勘九郎長祐が女。

高房

玄春 兄高泰が養子。

某

三浦藤五郎眞容が妻。

女子

小川玄達某が妻。

大八木

川島

八右衛門保政天正十年東照宮伊賀路を渡御のとき郷導したてまつり、御廣敷の伊賀者にめし加へられ、五代にして保喬にいたる。

保喬

源八郎 勘右衛門 八右衛門 はじめ明屋敷番伊賀者たり。しばく轉じて田安の徒組頭にうつり、元文五年十二月二十七日御館の小十人に列し、後職奉行をよび賄頭を歴て大番となる。明和二年五月晦日死す。年七十一。法名露白。四谷の西念寺に葬る。後葬地とす。妻は川澄彌右衛門正定が女。

長興

源八郎 母は正定が女。

明和二年八月三日遺跡を繼、小普請となり、十二月二十一日はじめて淡明院殿にまみえたまつる。安永五年三月二十六日死す。年五十三。法名須正。

保孝

兄長興が養子。

女子

天野良順敬登が妻。

女子

兄高泰にやしなはる。

高房

玄春 實は高豊が二男、高泰が嗣となる。

某

早世 辰之助

女子

初高充 玄俗 傳庵 法眼 實は立花左近將監家臣大八木伯由高氏が男、母は同家の臣大八木祐庵某が女、高泰が養子となりてその女を妻とす。

明和三年十二月二十一日はじめて淡明院殿にまみえたまつり、五年四月五日遺跡を繼、安永元年三月十四日番醫に列す。六年八月二十四日所司代土井大炊頭利里が病にかゝるにより、仰をうけて京師におもむきしにより黄金三枚をたまふ。十一月二十六日寄合に列し、天明五年九月十六日奥醫となり、十二月十八日法眼に叙す。六年十月二日先に淡明院殿御遺例のとき御薬を調進せしにより黄金三枚をたまふ。寛政四年七月二十三日竹千代殿生誕の事を

妻となる。

保孝

淺之助 專藏 實は保喬が二男、母は正定が女、長興が嗣となる。安永五年六月七日遺跡を繼、六年七月十三日死す。年四十三。法名念淨。

女子

水上仁右衛門定信が妻。

保寅

八藏 實は川島氏の男、母は川島助右衛門保重が女、保孝が終に臨て養子となる。安永六年十月八日遺跡を繼。八歳。

家紋

丸に鳩酸草 四目結

大八木

家傳に曰、大野木加賀守高盛が三代新右衛門秀盛山城國嵯峨に住し、剃髮して玄忠と改め、醫を業とす。高豊は其四代の後なり。先祖累世近江國大野木城に住して大野木と稱せしが、子孫に至り大八木にあらたむ。

高豊

傳庵

寶永五年四月二十八日はじめて常憲院殿に拜調し、正徳元年十二月十九日めされ



うけたまはりしにより、また黄金二枚をたまふ。十一月朔日死す。年五十六。法名至岸。妻は高泰が女、後妻は小川玄達子雍が女。  
 女子 盛昭が妻。  
 某 松之丞  
 女子 實は高豊が女、高泰に養はれて桂川甫筑國訓が妻となる。

高廣 玄忠 母は子雍が女。  
 寛政四年十二月二十五日遺跡を繼。七歳時

女子 直次郎  
 某 佐太郎  
 某 龜三郎 玄岱  
 女子 船橋宗純玄朝が妻。  
 女子 大奥につかふ。  
 女子 上におなじ。

家紋 丸に立四目 八重桔梗

三井

高敬 半右衛門  
 台徳院殿の御とき、御徒にめし加へられ、のち天樹院御方に附屬せらる。

高英 久右衛門  
 天樹院御方につかふ。

久勝 兵助  
 元祿五年十二月十二日遺跡を繼、のち進物取次番となり、その後富士見御寶藏番をつとむ。

高道 忠左衛門 實は西野兵左衛門高次が男、久勝が養子となる。  
 寶永六年十月二十九日遺跡を繼。

高頭 孫兵衛 實は兵左衛門高次が男、高道が養子となる。  
 寶永七年三月二十三日遺跡を繼、後富士見御寶藏番をつとむ。

高員 清左衛門 實は川上平六郎高伴が男、高頭が養子となりて其女を妻とす。  
 享保十七年閏五月十一日家を繼、のち富士見御寶藏番となる。

女子 高義 幸次郎 清左衛門 實は柳田平藏武朝が男、母は山本氏が女、高員が養子となる。  
 寶曆六年十一月四日遺跡を繼、のち富士見御寶藏番をつとめ、明和六年正月二十六日班をす、められて御助定となる。時年十八歳。妻は田安の家臣清水大右衛門正榮が女。

某 勇藏 父に先だちて死す。

高春 初義則 幸次郎 實は山中七左衛門玄祖が四男、高義が養子となりてその女を妻とし、のち父にさきだちて死す。妻は高義が養女。  
 實は田安の家臣清水大右衛門正榮が女、高義にやしなはれて高春が妻となる。

女子 實は武田道安信直が女、高義にやしなはれて小野泰三郎忠賞に嫁す。

高基 友彌 母は高義が養女。  
 某 檢次郎

家紋 丸に四目結 葛

卷第千二百九十七

宇多源氏 佐々木庶流

富田

正高 傳左衛門  
 養仙院御方の書役をつとめ、のち御侍に准ぜらる。

正定 傳之進  
 享保十六年十一月九日遺跡を繼。

正方 小三郎 實は正高が二男、母は和泉氏が女、正定が嗣となる。  
 享保十九年十一月七日遺跡を繼、後月光院御方廣敷の書役より御廣敷の書役に轉じ、其後速光院御方に附屬せられ、御廣敷添番格の用達となる。安永三年十一月七日班をす、められて御廣敷の用達に准ぜられ、六年十二月二十八日用達となる。八年十月二十七日死す。年六十三。法名日堅。丸山の淨心寺に葬る。妻は正木伴助義顯が女。

景貞 富之助 三郎助 母は義顯が女。  
 安永八年十二月二十六日遺跡を繼、小普請となる。享保九年十二月二十二日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、寛政四年閏二月二十六日一橋の小十人に列し、後彼館の大番に轉ず。

卷第千二百九十七

大澤

富田

信濃守信高が時、罪かうぶりて家たの。庶流中務知良が早踏にいふ、義泰は佐々木源三秀義か五男隱岐守義晴が五代の後胤にして、はじめ廣田を稱し、のち富田にあらたむ。

義泰 四郎左衛門

師泰 佐渡守  
 出雲國富田城を築きてこれに住す。

某 秀貞 四郎左衛門 伊豫守 富田判官  
 はじめ廣田を稱し、のち富田にあらため、正平二十二年北朝貞出雲國にをいて戦死す。

直秀 彈正少弼  
 出雲國にをいて討死す。



重知

玄蕃 玄華頭  
富田城に住し、尼子伊豫守經久がために没落す。

助知

右京 右京亮 信濃守

知信

平右衛門 左近將監 從五位下  
致仕號水西 母は某氏。

某年近江國に生れ、若年より織田右府につかへ、旗本にあり。千種台戦のとき奮戦し、剣を被る事十七所、其余のたゞかひにしばし高名をあらはす。天正十年右府事あるの後、豊臣太閤につかへ、先鋒の五奉行に列し、從五位下左近將監に叙任す。十二年十一月太閤數萬騎を率ゐて伊勢國に入。このとき織田信雄と和議あるにより、本使にさゝれて同國桑名城に赴く。此月和睦とふにより、星崎と名づけられし馬をたまふ。十四年五月太閤の妹朝日姫東照宮に御婚嫁のとき、知信御輿にそふて濱松にいたり、まづ榊原小平太康政が邸にやすらはせたまひ、それより濱松城に入興あり。このとき知信康政とともに御規式を奉行によりて東照宮より御盃をたまふ。知信歸京ののち、太閤これを賞して歸尾の兜具足一領を

與ふ。文祿元年朝鮮の役に金森兵部卿法印とともに先備となり、千三百人を率ゐて彼地に渡海し、戦功をあらはす。四年七月十五日伊勢國安濃郡のうちにをいて五萬石をたまひ、うち二萬石は嫡子信高領知すべきむね太閤より父子連名の朱印をあたへられ、安濃郡津城に住す。慶長四年致仕し、十月二十八日卒す。江雲水西正眼院と號す。京師南禪寺の瑞雲菴に葬る。室は黒田監物久綱が女。

信高

初知勝 知治 平九郎 信濃守  
從五位下 從四位下 母は久綱が女。

某年近江國に生れ、天正十六年より豊臣太閤につかふ。文祿三年從五位下信濃守に叙任し、四年七月十五日伊勢國安濃郡のうちにをいて二萬石を賜ひ、父子連名の朱印をあたへらる。慶長四年東照宮父知信が事をたづねさせたまふにより、老體にをよべるのよしを言上せしかば、知信は致仕して老を養ひ、信高これに代るべきむね仰下され、父が領知を賜ひ、すべて五萬石を領す。このとし東照宮伏見に御座のとき、石田三成等隱謀の企ありて、その地靜ならず。信高御館に候して不慮に

備ふ。五年上杉景勝御征伐として會津に御進發のとき、したがひたてまつり、下野國小山におもむき、榊原式部大輔康政に副て彼地に陣す。ときに三成叛逆のきこえあり。八月朔日伊勢國の渡海やすからざるときは上方の手遣自由ならじ。信高急ぎ本國に歸り、渡海の住來自由ならしむべしとの仰をかうぶり、分部左京亮光嘉とともにその日小山を發し、池田三左衛門輝政が居城三河國吉田にいたり、船百艘をかりて伊勢國に赴く。ときに洋中にをいて九鬼大隅守嘉隆が敗船信高が船に鉤をうかけ乗とらんとす。信高嘉隆とは舊友のよしみあるをのべて漸く虎口をまぬかれ本國に歸り、津の城に籠る。分部光嘉は其居城上野は要害よからずとて、津の城に來り、城の東門を守りて、古田兵部少輔重勝は松坂の城にありて、兵をわかつてこれを援く。二十三日より毛利秀元長束正家等大軍を率ゐて攻る事急なり。二十四日信高光嘉防戦すといへども、光嘉剣を被り、且衆寡敵せず、終に一二の丸を破られ、詰の城に引退きてこれを守る。二十五日敵詰の城をかこみ攻。信高城戸をおしひらき、突出して敵中にはせり、奮戦して五百余人を討取、敵を追拂ひ

てふたゞび城中に引入。二十六日信高籠城かなひがたきを察し、矢文を放ちて和をこひ、終に城を避 落髮し、高野山に走る。關原凱旋ののち信高が二心なきを賞せられ、伊勢國の本領をたまひ、同國のうちにをいて二萬石を加恩あり。十二年伊豫國宇和島城をたまひ、五萬石を加へられ、すべて十二萬石を領し、從四位下に昇る。これよりさき姻族坂崎對馬守直盛が甥坂崎左門某罪を犯せる事あるにより、直盛彼を罪せんとす。左門遁出て信高がもとに隱る。直盛速に馳きたり、探り求といへどもこれを得ず。このとき信高伏見にありしかば、直盛その人質として家臣を捕へ、伏見に參り、信高國制を背ける罪人を隠しをけるむねを東照宮に訴へたてまつるところ、天下の政務は將軍家に譲らせらるゝのあひだ、彼御裁斷を仰ぐべしと仰下さる。これによりて直盛怒を抑へて年月をおくる。のち左門在所あらはるゝにより、潛に去て高橋左近大夫元種がもとに住す。信高が室は左門が姑なれば、其難難をあはれみ、ひそかに書を贈りて米三百石をあたふ。時に左門直盛がもとを去しときめし具したる從者、俄に志を變じて其書を奪ひ、直盛に與ふ。直盛大

によるこび、ふかく其書を匿し、十八年にいたりて關東にまいり、これを台徳院殿に訴へたてまつる。此とき東照宮も江戸城に渡らせたまひしかば、十月八日兩御所大廣間に出御あり。老中御前に候し、やがて信高直盛をめし、決せらるゝのところ、爭論數返にして其是非を辨せず。こゝにをいて直盛彼室が書を出して證とす。もとより信高がしらざるころなりといへども、其室の所爲なれば陳するに言葉なく、終に罪に伏し、所領を沒收せられ、二十五日鳥居左京亮忠政にめし預られ陸奥國岩城に蟄居す。寛永十年二月二十九日死す。室は宇喜多和泉守家臣宇喜多入道安信が女、繼室は宇喜多中納言秀家が養女、また北條家の臣大森左近某が女を娶る。

富田

主膳 致仕號石玄 富田信濃守信高が二男、母は北條家の臣大森左近某が女。

知儀

慶長年中水戸中納言頼房卿に附屬せられ、子孫彼館につかふ。富田中務知良が祖。主膳 母は左近某が女。

知儀

神田の館にめされて常憲院殿に勤仕し、延寶八年徳松殿にしたがひたてまつり御家人に列し、廩米五百俵をたまひ、のち館林の城番となる。天和三年逝去ののち、小普請となり、貞享三年十一月十九日寄合に列し、元祿六年十二月十八日致仕す。この日養老の料廩米五百俵をたまふ。十二年二月廿九日死す。年七十九。法名石玄。駒込の養源寺に葬る。後代々葬地とす。妻は佐野喜兵衛公當が女。

知郷

初知忠 又助 頼母 甲斐守 從五位下 實は本庄因幡守宗資が四男、母は二條家の臣隱岐河内守俊實が女、知儀が養子となる。元祿五年十一月十一日常憲院殿宗資が邸に渡御のときまみえたてまつり、新

知幸

藤五郎 頼母 與右衛門 母は秀家が養女。

女子

小吉郎 修理大夫 母は信高におなじ、佐野天徳寺房綱が養子。母は某氏。紀伊家の臣近藤平右衛門周勝が妻。

信吉

某 藏人 母は上におなじ。

連一

富田檢校 母は某氏。

某

平助 母は某氏。



藤五國元の御刀をたまふ。六年十二月十八日中奥の御小性となり、常陸國眞壁、那珂、茨城三郡のうちにしてあらたに二千石の采地をたまはり、七年二月二十八日桂昌院御方より則房の刀をたまふ。九年十二月二十二日從五位下甲斐守に叙任す。十一年六月十九日采地を武藏國埼玉、下野國栗田、足利三郡の内につさる。寶永二年三月廿三日つとめをゆるされ寄合に列し、武藏國埼玉、比企、男衾、下野國芳賀四郡の内を以て五千石を加へられ、都て七千石を知行す。享保六年五月二十三日埼玉郡の采地を割て多摩郡のうちにつさる。十三年八月二十六日死す。年五十六。法名安哲。妻は大上藤某氏が養女。

日死す。年三十二。法名全如。妻は内田信濃守正偏が女。女子 實は六條中納言有藤が女。知郷に養はれて米津周防守田岡が妻となり、のち離婚し、齋藤攝津守三安に嫁す。

日ゆるさる。九年十二月二十一日務を辭し、寛政二年十一月八日死す。知良 繼太郎 中務 母は松山氏。天明八年十二月二十三日はじめて將軍家にまみえたてまつり、寛政二年十一月八日家を繼。時正十六歳。六年二月十一日より火事場見廻をつとめ、九年九月十六日定火消となり、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。妻は松平伯耆守資承が女。

某 早世 長吉 實は松平伯耆守資俊が五男、知郷が養子となる。知徳 萬三郎 主膳 實は松平伯耆守資俊が八男、母は佐々木氏、知郷が養子となる。享保十二年三月廿八日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、十三年十一月十八日遺跡を繼、寛保元年十月二十四

八十郎 致仕號左馬 實は内藤主計信安が三男、母は根來平左衛門長安が女、知徳が終にのぞみて養子となる。寛保元年十二月二十七日遺跡を繼。時正十二歳。十二月二十三日はじめて有徳院殿に拜調し、寶曆四年十二月十日致仕す。妻は松平豊後守資訓が養女。明親 初知理 豊吉 能登守 安房守 從五位下 實は牧野内膳正康周が三男、母は某氏、知眞が養子となる。寶曆四年十二月十日家を繼。時正十三歳。十二月十九日はじめて淺明院殿に拜調す。明和元年十二月九日中奥の御小性となり、三年十二月十九日從五位下能登守に叙任す。安永六年正月六日さきに歳首を賀するのとき、其序をたがへしにより出仕をとめられ、二月五

信敬 大吉 大學頭 林大學頭信敬が養子。女子 大政 駒之助 秋山次郎三郎政芳が養子。親崇 辰五郎 水野萬之助忠貞が妻。女子 親堅 勇吉 某 惠之助 母は石島氏。家紋 丸に鷹羽達 四目結 大根打達 隱岐

重世 五郎右衛門 大猷院殿の御時御先手の與力にめし加へられ、のち御側中根登岐守正盛に屬して國廻の役をつとむ。重忠 五郎大夫 母は某氏。淺草御藏目付をつとむ。天和二年四月十日班をすゝめられて小十人となる。元禄六年十月二十一日二條の御鉞炮奉行に轉じ、七年十一月十五日務を辭し、小普請となる。十六年四月七日死す。法名乘蓮。赤坂の淨土寺に葬る。後代々葬地とす。女子 初重誠 五大夫 五郎右衛門 致仕號慶北 母は某氏。元禄六年十二月九日小十人に列し、十

六年六月二十五日遺跡を繼、寶永四年十一月二十六日御腰物方に轉じ、正徳四年一月十一日新番につさる。享保三年五月十二日番を辭し、十九年六月二十一日致仕す。延享元年七月二十六日死す。年六十九。法名性安。某 傳六郎 萬次郎 女子 重春 文五郎 政珍 長四郎 森田兵衛政春が養子。女子 早世 傳次郎 某 藤助 五郎大夫 母は某氏。享保十九年三月十二日西城の御腰物方に列し、延享三年二月二十八日日本城のつとめとなり、寶曆九年十二月十五日としごろ意なくつとめしにより黄金三枚をたまふ。十年六月十三日さきに淺明院殿本城にうつらせたまふのとき、其事にあづかりしかば黄金一枚をたまふ。十三年十月十三日小普請の組頭に轉じ、明和三年六月二十一日死す。年

女子 六十。法名夢歌。義榮 十藏 兄義陳が養子。義知 十藏 實は義休が三男、母は某氏、義陳が嗣となる。明和三年九月四日遺跡を繼、安永三年十二月七日致仕す。六年八月二十七日死す。年六十六。法名了説。義村 辰之丞 母は某氏。寛政七年二月十五日はじめて將軍家にまみえたてまつり、九年四月十二日家を繼。時正十九歳。後射て時服をたまふ。妻は石川源之丞義計が女。家紋 四目結 輪違



市川

櫻田の館を以て文明院殿につかへたてまつり、勘定役をつとむ。寶永元年御供の列にありて御家人にはへられ、御勘定となり、慶永百俵をたまひ、のちつとめを辭し、小普請となる。享保三年七月二十一日死す。法名法善。市谷の安養寺に葬る。後代々葬地とす。妻は鈴木次左衛門重久が女。

昌考

庄兵衛

昌勝

長次郎 母は重久が女。

昌道

又次郎 大星勘右衛門昌豊が養子。

昌房

内藏助 母は玄春某が女。

正徳二年七月二日父が遺跡慶永百五十俵をたまふ。享保十一年正月二十八日西城の小十人に列し、寛保元年九月十九日番を辭す。寶曆四年十二月十日致仕し、七年九月二十五日死す。年五十六。法名性念。妻は木戸彦右衛門

昌忠

八十次郎 伊織 母は正勝が女。

寶曆四年十二月十日家を繼、五年九月二十八日始めて信院殿にまみえだてまつり、七年三月二十七日西城の小十人に列し、十一年八月三日より本城のつとめとなり、十二年十二月十五日西城に復す。明和四年九月八日番を辭し、天明八年七月二十六日致仕す。

忠次

長三郎 相原直右衛門忠良が養子。

昌信

彦三郎

忠斤

鍊三郎 實は石川兵右衛門忠良が三男、昌忠が養子となり、其女を妻とし、後病によりて家に歸る。妻は昌忠が女。

女子

はじめ忠斤に配し、離婚のち、大久保彦之丞忠信が妻となる。

昌春

鍊三郎 實は太田彦兵衛正森が三男、昌忠が養子となり、のち父にさきだちて死す。

女子

拾五郎 母は某氏。

昌利

拾五郎 母は某氏。

天明八年七月二十六日家を繼。享保八年十一月二十五日初 將軍家にまみえだてまつる。妻は大河原忠左衛門勝人が女。

家紋 丸に二引 丸に楓

市川

もと佐々木を稱し、先祖甲斐國市川村に住せしより家號をあらたむ。

清義

六郎兵衛

櫻田の館を以て清揚院殿につかふ。

清房

嘉右衛門 實は戸田氏の男、清義が養子となり、其女を妻とす。

父につぎて櫻田の館につかふ。

清興

清三郎

櫻田の館を以て文明院殿につかへたてまつり、寶永元年御供の列にありて御家人に加へらる。

清曜

勝之進 六郎兵衛 致仕號了養母は某氏。

享保十八年十二月四日家を繼、元文三年八月二十三日表御右筆となる。

清一

武次郎 母は久保田氏の女。

寛政七年十一月二十九日家を繼。享保八年十一月二十五日始めて將軍家にまみえだてまつる。

家紋

丸に二引 丸に楓

山崎

先祖隱岐を稱す。のち外家の稱によりて山崎にあらたむ。六右衛門重弘仙洞附の奥力となる。弘矩はその男なり。

弘矩

金左衛門

仙洞附の奥力をつとめ、後務を許され、松平美濃守吉保が所領武藏國川越に住す。そのち二丸の火番となり、寶永二年十一月十三日班をす、められて小十人に列す。享保三年二月十五日淨圓院御方の御迎として紀伊國和歌山に赴く。二十年九月六日死す。法名貞休。麻布の長谷寺に葬る。のち代々葬地とす。

重泰

村次郎 數馬 六右衛門 母は某氏。

家紋

輪造 四目結

女子

山下藤兵衛信盛が妻。

弘泰

金藏 母は某氏。

明和元年十一月十六日祖父が家を繼、安永八年十二月二十五日死す。年三十四。法名全珠。

泰重

熊太郎 母は某氏。

安永九年三月六日遺跡を繼。享保四年九月二十五日初て將軍家に拜謁す。妻は新堀元次郎貞房が女。

女子

虎之助

清定

吉次郎 父にさきだちて死す。

正房

庸之助 三左衛門 高木又四郎正常が養子。

安郷

友太郎 大岡友次郎房氏が養子と



### 卷第千二百九十八

#### 宇多源氏

##### 土橋

##### 吉寛

八右衛門  
櫻田の館につかふ。

##### 吉時

彌五郎 母は長谷川次左衛門某が女。  
櫻田の館にいて小十人をつとめ、のち納戸番に轉ず。寶永元年文昭院殿御供の列にありて御家人に加へられ、西城御廣敷の添番となり、四年十月晦日班をすゝめられて西城の御納戸番に列し、七年十二月十九日新恩ありて鷹米二百俵をたまふ。享保三年十月晦日番士の員を減ぜらるゝにより小普請となり、五年十二月七日致仕す。二十年九月十三日死す。年七十二。法名融閑。麴町の善國寺に葬る。のちこの寺を牛込にうつさるゝとき其地に改葬す。  
土橋市藏高堅が祖。源六郎

##### 善伸

八右衛門 實は石川兵右衛門忠部

が二男、母は小田切嘉兵衛昌近が女、吉時が養子となる。

享保五年十二月七日家を繼、九年八月十三日甲府の勤番となり、これより甲府に遷り住す。寶曆十年四月二十七日死す。年六十四。法名宗柏。甲斐國遠光寺村の佛國寺に葬る。妻は岩田萬右衛門富勝が養女。

##### 喜俊

##### 女子

蘆屋内藏助徳基が妻。  
五郎大夫 母は富勝が養女。  
寶曆十年七月五日遺跡を繼、勤番となる。天明四年七月朔日はじめて淺明院殿にまみえたまつり、寛政二年七月二十九日致仕す。年六十二。妻は久保田新五郎政綱が女。

##### 喜熙

##### 女子

國藏 八右衛門 實は江守傳十郎延貞が三男、母は上松氏、喜俊が養子となりてその女を妻とす。  
寛政二年七月二十九日家を繼、勤番となる。年三十二。妻は喜俊が養女。  
實は岩田萬右衛門富淑が女。喜俊に養はれて喜熙が妻となる。

##### 喜行

##### 女子

早世 彌五郎

家紋 丸に四目結 梶葉打違 丸に劍梅鉢

#### 土橋

##### 吉直

源六郎 土橋八右衛門吉寛が二男、母は長谷川次左衛門某が女。  
櫻田の館にいて勘定役をつとめ、寶永元年文昭院殿御供の列にありて御家人に加へられ、鷹米百俵をたまひ、小普請となる。正徳五年九月六日死す。年四十四。法名常閑。麴町の善國寺に葬る。のちこの寺を牛込にうつさるゝとき其地に改葬す。以下葬地とす。

##### 直時

勘兵衛 實は戸田半兵衛某が男、母は某氏、吉直が養子となる。  
正徳五年十一月晦日遺跡を繼、延享二年六月はじめて有徳院殿にまみえたまつり、寛延元年八月十四日致仕す。三年十月五日死す。年七十二。法名本往。妻は一色藤右衛門昭知が女。

##### 女子

##### 女子

大原左源太正明が妻。

##### 直堅

彌十郎 九郎左衛門 母は昭知が女。

寛延元年八月十四日家を繼、寶曆二年三月十五日はじめて惇信院殿にまみえたまつる。明和八年三月二十五日死す。年五十二。法名瑞妙。

##### 直義

##### 女子

稻五郎 父にさきだちて死す。  
大原四郎右衛門信亮が養女。

##### 高堅

市藏 母は某氏。

明和八年六月四日遺跡を繼。時三十三歳安永九年十二月二十二日はじめて淺明院殿に拜謁す。天明元年八月十三日評定所の儒者となり、二年四月二十四日將軍家御元服のとき賀文をたてまつりしにより、時服二領を賜ふ。のち將軍宣下をよび御婚禮のときもこの事によりて賜あること前のごとし。寛政二年十二月八日この役を廢せらるゝにより小普請となる。四年閏二月二十六日一橋の大番となり、のち近習番に轉ず。妻は岡野五郎大夫某が女。

##### 直恒

##### 女子

市次

##### 義方

彌太郎 母は村田氏。

家紋 輪の内四目結 梶葉打違

#### 井野

先祖信濃守泰清が後裔にして、家號を井野にあらたむ。久左衛門春次がとき慶長五年御家人にめし加へられ、後相摸國三崎走水關所の目代をつとむ。春次より四代連綿して春若にいたる。

##### 春若

##### 貞八郎 定八郎

御先手同心にめしはへられ、のち月光院殿御方廣敷の書役等を歴て、同所廣敷吟味方の添番格に轉ず。延享元年二月二十二日班をすゝめられて、同所廣敷の用達となり、寛延元年八月三日同所廣敷番の頭にうつり、寶曆二年逝去により十一月四日小普請となる。五年十月二十八日御天守番の頭となり、十三年四月十六日老を告て務を辭す。このとき黄金二枚をたまひ、五月二日死す。年八十二。法名風語。西久保の光明寺に葬る。後葬地とす。妻は内藤能登守家臣中村嘉右衛門某が女。

##### 春輔

##### 八郎治

母は嘉右衛門某が女。  
延享元年三月二十二日はじめて有徳院殿にまみえたまつり、寶曆十三年八月四日遺跡を繼、明和三年七月十九日小十人に列し、七年閏六月二十八日番

家紋 丸に四目結 梶葉打違 丸に劍梅鉢

#### 吉田

##### 吉直

源六郎 土橋八右衛門吉寛が二男、母は長谷川次左衛門某が女。  
櫻田の館にいて勘定役をつとめ、寶永元年文昭院殿御供の列にありて御家人に加へられ、鷹米百俵をたまひ、小普請となる。正徳五年九月六日死す。年四十四。法名常閑。麴町の善國寺に葬る。のちこの寺を牛込にうつさるゝとき其地に改葬す。以下葬地とす。

##### 直時

勘兵衛 實は戸田半兵衛某が男、母は某氏、吉直が養子となる。  
正徳五年十一月晦日遺跡を繼、延享二年六月はじめて有徳院殿にまみえたまつり、寛延元年八月十四日致仕す。三年十月五日死す。年七十二。法名本往。妻は一色藤右衛門昭知が女。

##### 女子

##### 女子

大原左源太正明が妻。

##### 直堅

彌十郎 九郎左衛門 母は昭知が女。

を辭す。八年六月二十日死す。年六十一。法名信涼。妻は有馬中務大輔家臣水島喜右衛門之恒が女。

##### 高伴

##### 女子

川上專右衛門忠房が養子。

##### 重房

##### 女子

小野源太兵衛賴房が養子。

##### 直春

##### 高忠

##### 女子

甚十郎 戸田市左衛門直賢が養子。  
左門 兄忠次郎高伴が養子。  
萩原長右衛門房良が妻。

##### 某

##### 女子

早世 吉彌  
尾張家につかふ。

##### 春茂

##### 春敷

半之助 母は之恒が女。  
明和八年九月四日遺跡を繼。時三十三歳安永九年十二月二十二日はじめて淺明院殿に拜謁す。妻は恒川幸助正尙が女。

##### 春完

##### 女子

定助 母は正尙が女。

##### 吉田

家紋 四目結 丸に四目結 鳩酸草 井筒  
家傳に、吉田嚴秀より五代秀時が末孫な



り。秀長はじめ佐々木を稱し、のち吉田に復すといふ。

●秀長

初長秀 文次郎 四郎三郎  
延享三年御徒にめしくはへられ、のち辭して處士となる。明和元年十一月十九日めされて天文方となり、鷹米二百俵をたまひ、二年二月二十二日測量のことをうけたまはり、京師におもむく。七年四月二十三日さきに土御門家をいて、新曆製作あるのところ、日食差へるにより、秀長脩正すべきむねおほせをかうぶり、その書十卷を著述し、脩正寶曆甲戌元曆法と題し、解義二卷、曆法新書續錄二卷をそへてたてまつりしにより、黄金三枚を賜ふ。安永八年十二月二十六日御書物奉行に轉じ、九年五月二十七日こふて家號を吉田にあらたむ。天明六年七月十二日老をつけてつとめを辭し、小普請となる。このとき黄金二枚をたまふ。七年九月十六日死す。年八十五。法名清顯。麻布の光林寺に葬る。妻は遠藤源右衛門正尹が女。

●某

女子 實は綿貫氏の女。秀長に養はれて田澤玄兆美健が妻となる。  
早世 辰五郎

●秀升

初秀房 吉十郎 惣負 母は正尹

が女。

明和二年十二月二十八日より父に添て新曆脩正の事をつとめ、三年七月十八日はじめて淺明院殿にまみえたてまつる。四年閏九月十一日天文方の見習となり、七年四月二十三日さきうけたまはりし脩正の事成により黄金二枚をたまふ。安永八年十二月二十六日天文方となり、天明七年十二月四日遺跡を繼。時三十三歳。寛政元年八月十七日さきに阿蘭陀永續曆の和解を改正し、且彼曆は天度に合ざるのむねを述、別に考ふるところありて曆日永年推見となづけし書を献せしかば白銀七枚をたまはる。二年五月二十七日御弓鎗奉行に轉じ、天文方をかぬ。九年十二月二十七日さきに京師におもむき、改曆の事をうけたまはりつとめしにより黄金五枚をたまはる。

●直頼

主馬 左京 吉田新次郎直英が養子。

●某

女子 五郎三郎

●某

女子 政之丞 中島官次郎信敬が妻。

●嘉發

吉十郎 竹村伊右衛門嘉寛が養

又兵衛信尋が女。

●女子

寛敦 岩之助 母は信尋が女。

●家紋

丸に打違鷹羽 角四目結 巴の古文字

●吉田

●郷直

梅菴 法眼 醫をもつて紀伊家につかふ。享保元年信院殿二丸にうつらせたまふのとき、したがひたてまつり、九月九日奥醫となり、下總國相馬郡のうちをいて、采地二百石をたまひ、十二月二十四日法眼に叙し、九年二月二十五日死す。年六十二。法名日終。麴町の善國寺に葬る。のちこの寺を牛込にうつさるゝのとき其地に改葬す。のち代々葬地おなじ。妻は正木氏の女。

●勝政

泉次郎 十大夫 溝口孫四郎忠勝が養子。

●郷美

宗律 梅菴 法眼 實は成田宗菴、直高が二男、母は松平加賀守家臣小倉長左衛門某が女、郷直がをばりにのぞみて養子となりてその女を妻とす。

家紋 直四目結 五七桐

●吉田

●良徹

長圓 寛永十三年御家人にめし加へられ御時計坊主をつとむ。

●宣元

永徳 永立 實は石井氏の男、良徹が養子となる。

●某

御廣間坊主をつとめ、のち良徹が男長益某生るゝにより、別家となりて石井を稱す。子孫今表坊主たり。

●包伯

長三郎 長益 父にさきだちて死す。岩之助 長圓 仁左衛門 實は宣元が男、母は内田伊勢守家臣佐藤治左衛門某が女、良徹が養子となる。

はじめ奥坊主をつとめ、のち束髪して御行水方となり、寶永五年閏正月二十一日班をすゝめられて御次番に列す。享保三年六月常憲院殿舞御により二月二十一日小普請となる。寛保三年七月十八日致仕し、八月廿二日死す。年七十七。法名秋伯。淺草の大松寺に葬る。後おなじ。妻は益池氏の女。

●包久

平三郎 父にさきだちて死す。

卷第千二百九十八 李多源氏

吉田



享保九年閏四月二日遺跡を繼、小普請となる。十二年十二月二十六日より小石川養生所の療治をうけたまはり、十六年十二月二十六日ゆるさる。十七年十二月十六日番醫に列し、元文二年四月二十六日刑部卿宗尹卿に附屬せられ、三年十二月かの卿痘をうれひたまふのとき、藥を奉りてしるしありしかば有徳院殿より白銀百枚時服三領をたまふ。寛保元年十二月十九日法眼に叙し、延享四年十一月務を辭す。寶曆元年七月二十日死す。年五十二。法名日道。妻は郷直が女。

女子 郷美が妻。

女子 土屋四郎兵衛虎信が妻。

元周 鏡藏 梅園 元周 隆菴 宗仙院 橋宗仙院元孝が養子。

郷陶 梅胤 母は郷直が女。寶曆元年十月三日遺跡を繼、天明三年八月十七日死す。年四十八。法名日養。妻は古田休甫利延が女。

豐茂 乙藏 辨藏 玉虫甚之助武茂が養子。

宗恭 文助 梅園 兵部卿 上池院 坂上池院滿賢が養子。

元貞 元貞 昌怡 小島昌怡賀和が養子。

郷教 梅菴 母は利延が女。天明三年十一月六日遺跡を繼。地三十七歳。寛政十年九月二十八日番醫に列す。

女子 橋宗仙院元周が養女。

郷行 金藏

家紋 三池紙の内鳩酸草 四目結

之參 金三郎 元卓 法眼 元文三年九月十五日之參醫業をほけむにより、めされて右衛門督宗武卿に附屬せられ、鷹米二百俵をたまふ。このとき廣く諸家の療治せるにより、遠國等醫療の事あらば憚ることなく、公達すべきむね恩命をかうぶる。寛保三年十二月二十一日法眼に叙す。延享二年五月十四日より西城御廣敷の療治をうけたまはる。寛延元年正月二十五日さきに紀伊大納言宗直卿所勞のとき藥を調進して平愈ありしにより時服三領を賜ふ。寶曆元年有徳院

吉田 家傳に、吉田徳春が後胤にして世々醫業とすといふ。按ずるに徳春は吉田式部卿宗愷が祖なり。

善正 吉田元長孫が祖。元長 桃源院 高雪 伊東高仙祐興が養子。

祐至 伊織 石寺を稱す。實は桃源院善正が長男、之參にやしなはれて別家となり、田安の館につかふ。

安甫 岩之助 松軒 實は板倉周防守家臣秋田道安壽が男、母は某氏、之參が養子となりて、その女を妻とす。

女子 實は桃源院善正が女。之參に養はれて安甫が妻となり、安甫死するのち家にかへる。

君長 長次郎 元卓 實は紀伊家の臣淺井養徳潤夫が男、母は吉田桃源院善正が女、安甫が養子となりて其女を妻とす。

明和三年七月四日遺跡を繼。時三十八歳。六年二月二十一日番醫となり、天明五年十二月二十二日家業精いるにより寄合に列す。妻は安甫が養女。

女子 實は田安の家臣石寺伊織章貞が女。安甫にやしなはれて君長が妻となる。

子兄 長次郎 元宣 母は安甫が養女。寛政七年三月十八日はじめて將軍家に拜謁す。時三十二歳。

某 龜之助 元濟

某 恒三郎

某 達四郎 石寺を稱す。

某 久橋

家紋 四目結

善正 元長 桃源院 法眼 法印 吉田元卓之參が長男、母は九鬼氏が女。元文四年十一月七日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、寛延二年十二月七日めされて西城の奥醫に列し鷹米二百俵を

賜ひ、十八日法眼に叙す。のち本城のつとめとなり、寶曆十二年十一月朔日孝恭院殿に附屬せられ、九日さきに御誕生のとき其事に預かりしにより、時服三領黄金五枚をたまふ。明和三年十二月十九日法印に叙す。安永八年四月十八日より本城に勤仕し、五月十日死す。年七十八。法名圓乘。芝の金地院に葬る。妻は紀伊家の臣淺井養徳潤夫が女、後妻は牧野升朝直貞が女、また佐脇十左衛門龍章が女を妻る。

女子 土岐元眼光好に嫁し、離婚ののち松平一學某に再嫁し、また棄られて牧村仁十郎利端が妻となる。

章貞 伊織 吉田元卓之參が養子。

女子 吉田元卓之參が養女となり、のち家にかへり、小笠原外記政孝に嫁す。

女子 内田玄勝正啓が妻。

女子 伊東高益至義が妻。

女子 紀伊家の臣淺井養徳潤夫が妻。

女子 實は喜多村一菴直定が女。善正に養はれて本康碩菴徳義が妻となる。

善之 元策

之昌 元次郎 山角五郎左衛門之富が養子。

女子

桃菴 元長 實は田安の家臣石寺伊織章貞が男、母は養春院常定が女、善正が養子となる。

安永五年八月二十二日はじめて淺明院殿に拜謁し、八年八月六日遺跡を繼、寄合に列す。時三十七歳。寛政三年九月二十九日醫業に熟せざるのみならず、家事もとのほざるにより小普請に貶され、出仕をとどめらる。十一月十九日ゆるさる。妻は稻守三左衛門榮正が女。

女子 扇地紙の内鳩酸草 四目結



卷第千二百九十九

宇多源氏

間宮

家傳に、佐々木源三秀義が末流なりといふ。以下山本富岡の二家もこれに同じ。

政清

市郎右衛門 神田の館に仕ふ。

政長

市三郎 與四郎 致仕號是誰 母は某氏。

父に繼て神田の館に勤仕し、延寶八年徳松殿に仕がひたてまつり御家人に列し、鷹米二百俵をたまひ西城に候す。天和三年逝去のち小普請となり、元祿十年七月二十三日小十人に列し、寶永二年八月二十五日番を辭す。正徳二年六月十五日致仕し、享保七年八月十二日死す。年六十。法名是誰。駒込の圓成寺に葬る。のち代々葬地とす。

義邦

彦市 實は河村彦右衛門廣俊が二男、母は某氏、政長が養子となりてその女を妻とす。

正徳二年六月十五日家を繼、三年六月十八日小十人となり、享保十三年三月十四日番を辭す。十四年十月十五日死す。年五十五。法名觀達。妻は政長が女。

政道

左膳 彦市 母は某氏。

享保十四年十二月二十五日遺跡を繼、十五年五月二十九日小十人となる。寶曆二年十月二十三日死す。年四十三。法名日登。

女子

葛木嘉七郎盛生が妻。

女子

吉田半兵衛正富が妻。

某

早世 市三郎

清成

岸之助 彦市 母は某氏。

寶曆二年十二月二十六日遺跡を繼。天明和八年十二月二十七日小十人に列し、安永四年四月二十六日番を辭す。六年七月二十三日死す。年三十。法名日觀。

女子

神原榮次郎定賢に嫁し、離婚の後東儀仁右衛門春浩が妻となり、また棄る。

正清

市之丞 母は某氏。

安永六年十月八日遺跡を繼。寛政八年十一月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつり、九年閏七月二十九日小十人となる。妻は丹羽伊右衛門氏章が養女。

女子

家紋 二重輪に四目 笹丸

間宮

平右衛門利次神田の館につかへ、延寶八年鶴姫若本城にいらせたまふの時しがひたてまつり、御駕籠者にめしはへられ、其のち紀伊家に入興のとき組頭となりてかの館に勤仕し、逝去のちめしかへさる。利賢はその男なり。

利賢

平次郎 平左衛門

小普請方の吟味役をつとむ。

救浮

熊之丞 平右衛門 母は萩原氏の女。

寶曆三年五月三日遺跡を繼、のち西城御廣敷の書役となり、御賄の調役に轉す。天明四年八月二十六日班をすめられて、御廣敷の用途となり、八年九

山本

道句政勝古田織部正重を師とし、茶道を相傳し、台徳院殿に仕へたてまつりて御茶道頭に准ぜらる。その子を道味政春といふ。政守はその男なり。

政守

善左衛門

櫻田の館にして清揚院殿につかへ、賄頭をつとむ。寶永元年文昭院殿西城にいらせたまふのときしがひたてまつり、御家人に列す。

政純

新十郎

櫻田の館にをいて文昭院殿につかへたてまつり、小十人をつとむ。寶永元年御供の列にありて、御家人にはへられ、西城御廣敷の添番となる。六年十月十九日さきに櫻田の館にをいて拜謁の士たるにより、來年より諸士とおなじく歳首を賀すべきむね、おほせをかうぶる。

女子

櫻田の館に仕ふ。のち法心院につかへ遊良野と稱す。

甫授

傳藏 七郎左衛門 久左衛門 致仕號常久 母は某氏、遊良野に養はる。

某

早世 平三郎

女子

津輕越中守家臣服部玄良良芳が妻。

某

藤崎氏の妻。

女子

藤崎氏の妻。

月五日御賄頭にすむ。寛政二年八月二十一日死す。年五十五。法名義照。深川の因達寺に葬る。妻は松本氏の女。

孝寛

乙三郎 平次郎 實は服部玄良良芳が男、母は利賢が女、救浮が養子となりてその女を妻とす。

寛政元年八月十九日初めて將軍家にまみえたてまつり、二年十一月三日遺跡を繼、小普請となる。時、二年四月十五日御天守番となり、班次ものごとし。五年九月二十七日表御右筆にうつり、十二月十九日奥御右筆の見習となり、六年八月十七日奥御右筆に轉す。妻は救浮が女。

女子

孝寛が妻。

某

早世 平三郎

女子

家紋 四目結 丸に花澤湯

卷第千二百九十九

宇多源氏

山本

某

長三郎 新十郎

享保十二年五月二日又政純が家を繼、子孫御家人たり。

矩綱

幸三郎 實は本間權九郎高豊が二男、母は牧野備後守家臣近藤玄壽某が女、甫授が養子となり、その女を妻とす。

女子

元文二年十一月二十一日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時、十寛保三年七月十八日家を繼、寶曆十一年十一月十三日大番に列し、天明元年六月十一日死す。年六十。法名日悟。妻は甫授が女。

網濃

嘉十郎 守屋傳左衛門政弘が養子。

網如

辰次郎 虎之助 母は甫授が女。安永六年七月十一日はじめて淺明院殿に



拜謁し、天明元年九月七日遺跡を繼。  
寛政元年七月五日甲府の勤番  
となり、甲府にうつり住す。

女子 勝屋甚五兵衛利有が妻。

女子 瀧野爲伯元乾が妻。

女子 淺井新三郎英政に嫁し、離婚の後津  
田富五郎某が妻となる。

家紋 四目結 五三桐

富岡

長喜

八左衛門  
慶安元年三月御徒にめしくはへられ、の  
ち組頭となる。

女子

大奥につかへ老女をつとめ、倉橋と  
稱す。

訓長

主水 平兵衛 藤左衛門 母は某  
氏。  
支配勘定をつとめ、のち務を辭し、正  
徳三年十二月二十七日姉倉橋がこふむ  
ねに任せられ、養子となり、この日御  
小性組に列し、加増ありてすべて慶米  
三百俵を賜ふ。享保九年十一月十五日

より二九に勤仕し、十年六月朔日西城  
の御書院番にうつり、元文元年五月十  
五日死す。法名日有。本所の法恩寺に  
葬る。のち代々葬地とす。

女子 姉倉橋にやしなはれ、安部主計頭  
一信が妻となる。

某 八九郎 父にさきだちて死す。

女子

甚九郎 實は三宅藤右衛門高寛が  
四男、母は三宅三郎左衛門正廣が  
女、訓長が養子となる。

長茂

元文元年八月二日遺跡を繼、小普請と  
なり、三年三月二十六日西城御小性組  
の番士に列し、寛保元年八月二十九日  
死す。年二十六。法名日芳。妻は永  
井主膳正武が女。

女子

安部主計頭一信が養女。

長行

實は三宅藤四郎康門が三男、母は  
武藤庄十郎安庸が女、長茂が終に  
隨て養子となる。  
寛保元年十一月二日遺跡を繼。時、明  
和八年十月二十日死す。年三十九。法  
名日行。

長正

萬太郎 乙三郎 母は某氏。  
明和八年十二月二十五日遺跡を繼。時、十

天明二年五月十四日御小性組に列  
し、のち的を射或は放鷹にしたがひたて  
まつり、鳥を射て物を賜ふ。妻は岩田  
彌四郎高忠が女。

女子 勝五郎 左兵衛 三宅左兵衛高次が  
養子。

某 八九郎

某 富之助

家紋 九曜 四目結

伊庭

家傳に、佐々木兵庫助経房の男伊庭四郎  
行實が後胤なりといふ。

豐祥

五大夫  
寛文五年十月二十八日めされて儒者とな  
り、慶米百五十俵月俸十口をたまひ、元  
祿五年十月三日御次番に轉じ、加増あり  
てすべて五百俵の祿となり、月俸は收め  
らる。十一月三日布衣を着する事をゆる  
さる。六年二月十一日御小納戸にすむ。  
七年十月十八日死す。年五十五。法名豐  
祥。三田の常林寺に葬る。のち代々葬地  
とす。妻は木下道圓守清が女。

正要

市兵衛  
享保三年十一月御徒にめしくはへられ、  
のち支配勘定に轉じ、元文四年八月二十  
七日班をすよめられて御勘定となる。寶  
曆三年正月晦日死す。年六十三。法名日  
應。四谷の理性寺に葬る。のち葬地とす。  
妻は森田氏の女。

兼季

惠兵衛 母は森田氏の女。  
元文五年六月二十二日御勘定となり、  
寶曆三年四月三日遺跡を繼、のち評定  
所の留役をつとむ。明和四年七月八日  
さきに科條類典を撰せらるゝのとき、  
その事にあづかりしにより黄金一枚を  
賜ふ。六年八月十四日御切米手形役に  
轉ず。寛政元年七月十七日兼季久しく  
ひとりにて勤めしにより黄金一枚を賜  
ふ。九年閏七月十四日御裏門番の頭に  
うつり、加恩ありて慶米百俵月俸五口  
の祿となる。十年五月二十九日死す。  
年八十七。法名日新。妻は藤堂和泉  
守家臣關庄七正忠が女。

正道

門三郎 鈴木傳内正移が養子。  
庄右衛門 高濱彦右衛門某が養子  
となり、後病によりて家に歸る。

清長

長十郎 市十郎 母は守清が女。  
元祿五年十月二十八日はじめて常憲院  
殿に拜謁す。七年十月十一日遺跡を繼、  
小普請となる。八年七月朔日桐間番に  
列し、十一日御近習番にうつり、のち  
御みづからかゝせたまふ篤敬忠信騎胤  
福壽の大字及び野馬、或は鷹に雁の御  
畫をたまふ。寶永六年薨御により二月  
二十一日儒者となり、六月つとめを辭  
す。享保十八年十二月四日致仕し、七  
日死す。年六十。法名自性。妻は鈴  
木唯右衛門之親が養女、後妻は大平角  
大夫盛信が女。

清盈

左金次 母は盛信が女。  
享保十八年十二月四日家を繼、寛保二  
年八月八日大番となり、安永元年十一  
月九日番を辭し、十二月十六日死す。  
年五十九。法名道關。妻は石川平右  
衛門春繁が女。

某

辨三郎 佐野傳次郎某が養子。

長勝

幸之丞 小兵衛 三郎右衛門 彦  
十郎 大井彦十郎滿雜が養子。

金丘

四郎三郎 母は春繁が女。  
寶曆六年七月朔日はじめて悼信院殿に



正啓

條所五郎

某 早世 勝之助

當登

猪與八 母は正忠が女。

寶曆十二年九月二十八日御勘定となり、安永七年九月十九日務を辭し、天明二年六月三日父にさきだちて死す。年三十七。法名要山。妻は福知百助信勝が女。

道羽

次郎兵衛 關口九郎兵衛道僧が養子。

滿槎

他三郎 大井彦十郎長勝が養子。

女子

山角貞之丞久林が妻。

當隣

鐵太郎 母は信勝が女。

天明二年十二月二十二日はじめて淺明院殿に拜調し、八年八月十八日御勘定となり、寛政十年八月三日祖父が遺跡を繼。時三十四歳。妻は中根善四郎益興が女。

道由

喜之助 關口次郎兵衛道羽が養子。

女子

富之助 母は益興が女。

直忠

利七 向山三右衛門直知が養子。

某

定五郎

家紋 丸に重釘抜 幫 三龜甲

卷第千二百

宇多源氏

山崎

家祖忠治が父益庵某は和氣氏にして、半井を稱し、神田の館につかふ。忠治は其二男なり。母半井宇庵某が女神田の館にをいて常憲院殿につかへたてまつり、某の局と稱し、のち本城にいらせたまふのときしたがひまいらす。これによりかつて忠治もめされてかの館に勤仕す。このとき祖父半井宇庵某が妻は山崎甲斐守家治が女なるにより、外家の因をもつて宇多源氏にあらため、山崎を稱す。

忠治

大助 造酒之丞 權十郎

神田の館にをいて常憲院殿につかへたてまつり、延寶八年徳松殿御供の列にありて御家人に加へられ、慶長二百俵をたまひ、小普請となる。時三十二歳。貞享二年三月十八日侍女山崎罪かうぶるのとき、忠治外戚の因あるに坐し、食祿を收めらる。また母の局も山崎がゆかりある上に、みやづかへもおろそかなりし事を咎められ、母子とも江戸に住することを定めらる。

十二月二十一日番を辭す。妻は小濱十郎左衛門縣隆が女。

忠盛

小三郎 家をいで、所在をしらず。

某

早世 芥三郎

盛房

鉄之丞 運電す。

盛武

乙吉 藤十郎 母は縣隆が女。

女子

清水庄九郎定理が妻。

家紋 檜扇の内四目結 笹龍膽扇

木村

家傳に兵庫助經方が男左京大夫寛永西暦の御兵衛助に作る行定が後なりといふ。

重和

仁助 作大夫

櫻田の館にをいて清揚院殿につかふ。

信繼

作十郎 七郎右衛門 左門 實は宮重十左衛門宮次が二男、母は奥村氏の女、重和が養子となりて其女を妻とす。

櫻田の館にをいて文昭院殿につかへたてまつり、書院番の組頭をつとめ、後番頭に轉す。寶永元年西城にうつらせたまふのときしたがひたてまつり、御

相盛

元五郎 母は某氏。

享保十五年十二月二十七日遺跡を繼、寛保二年三月九日御小性組の番士となり、延享二年九月朔日より西城に勤仕す。後番を辭し、寶曆十二年十一月十一日死す。年五十五。法名日盛。牛込の本松寺に葬る。妻は佐々與左衛門實政が女、後妻は山崎兵庫亮治が女。

盛方

八十五郎 大膳 權十郎 實は小泉兵庫清光が四男、母は某氏、相盛が養子となる。

寶曆十二年十二月二十七日遺跡を繼。時三十三歳。明和五年十二月五日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、七年八月十六日西城の御書院番に列し、寛政二年四月二日御小性組にうつり、七年

信幸

万五郎 七右衛門 母は重和が女。

女子

酒依七郎兵衛昌孝が妻。

女子

寶永二年十一月二十八日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、六年四月六日御書院番に列し、正徳三年六月二十九日遺跡を繼、四年九月十七日死す。年三十三。法名日仁。葬地信繼におなじ。

信祐

伊織 七右衛門 實は宮重十左衛門信治が二男、母は某氏、信幸が終にのぞみて養子となる。

正徳四年十一月二十九日遺跡を繼、十二月廿八日初めて有徳院殿に拜調し、享保四年十月十八日御書院の番士とな



り、九年十一月十五日より二九に勤仕し、後西城の務となる。明和三年十二月六日老を告て番を辭す。このとき黄金二枚をたまはる。五年十一月晦日致仕し、安永二年十月十七日死す。年七十八。法名日量。四谷の戒行寺に葬る。妻は五味藤四郎豊成が女、後妻は伴藤右衛門敏政が女。

女子

早世 覺十郎

某

三之丞 實は宮重十左衛門國忠が三男、信祐が養子となり、のちゆへありて家にかへる。

信方

初孝綱 求馬 左門 七右衛門 實は前田大和守利理が五男、母は某氏、信祐が養子となる。

明和五年十一月晦日家を繼。時三十五歳。六年三月十九日西城の御小性組に列し、安永八年四月十六日より本城の務となる。天明元年五月廿六日西城に復し、六年閏十月廿日又本城に勤仕す。寛政八年十二月十日より若君に附屬せられ西城に候す。妻は小林吉左衛門正甫が女、後妻は前田松堅俊精が女、又安生太左衛門直之が女を娶る。

重勇

本多彌次郎安信が妻。大奥につかふ。

女子

正義 主税 内藏之丞 小林太郎右衛門正峯が養子。

正身

門三郎 川崎善左衛門正明が養子。

女子

正有 歟五郎 兄内藏之丞正義が養子。

女子

重貞 主税

重興

芥吉

家紋

丸に釘抜 五三桐

木村

先祖近江國木村に住せしより稱號とす。半右衛門

重勝

大猷院殿の御とき徒にめし加へられ、のち御徒目付に轉す。

重信

甚大夫 源太左衛門 延寶二年十二月十六日遺跡を繼、後御徒より御徒目付を歴て組頭となる。

長羽

縫殿助 雲八 母は山本氏。

重氏

源吾 母は岡氏。妻は宮重三次郎信好が女。

家紋 丸に釘抜 五松皮菱

木村

重頼 瀨兵衛 櫻田の館につかふ。

重廣

甚三郎 瀨兵衛 櫻田の館につかふ。

重治

熊之助 母は酒井與市郎某が女。父に繼て櫻田の館につかふ。寶永元年文昭院殿御供の列にありて藤米二百六十俵餘をたまひ、小普請となる。六年七月十二日死す。法名禪慧。四谷の西迎寺に葬る。のち代々葬地とす。

政直

源次郎 兄重治が養子。

政直

源次郎 實は重廣が二男、母は重治におなじ。重治が嗣となる。寶永六年九月晦日遺跡を繼。享保十二年三月二十七日西城の小十人となり、寛保元年四月二日番を辭し、寛延二年

政直

正徳三年閏五月二十九日遺跡を繼、六月十八日小十人となる。享保三年三月十五日おほせをうけたまはり淨圓院御方の御迎ひとして和歌山におもむく。九年十一月十五日より二九に勤仕し、のち西城の務となる。十八年三月朔日西城小十人の組頭にす。元文五年四月十九日御代官に轉じ、寛保元年十月十三日さきに支配所下總國相馬郡根戸村の名主年貢割の事を讀きかぜざるむね農民等訴ふるのころ、これを扱ふものあるによりその意にまかせしときこゆ。すべて年貢割の事はあまねく農民等に申きかせしうへにて加判する事郷中の定法なり。ことにちかごろ私領までも觸られたる趣もあれば、すみやかに糺明を遂べきのころ、等閑のはからひ越度におほしめさる。役儀をも放たるべしといへども、職にあるのあひだすくなきにより、これを宥免ありて閉門せしめられ、十二月二十七日ゆるさる。寛延元年新田を墾せしにより、身を終るまで其租税の十が一分をたまふ。二年五月十六日勤務よからずとて小普請に貶され、出仕をとめらる。八月六日ゆるさる。寶曆元年正月二十三日死す。年六十五。法名唯道。淺草本願寺の長敬寺に葬る。妻は志

七月十七日死す。法名宗運。妻は小長谷九郎左衛門時苗が女、後妻は野中藤左衛門政友が女。

貴寛

加藤次 瀨兵衛 致仕號梅翁 母は時苗が女。寛延二年十月八日遺跡を繼、三年四月八日小十人となり、寶曆元年五月二十一日番を辭し、七年十一月五日小十人に復す。明和四年九月八日番を辭し、六年十二月四日致仕す。安永七年閏七月二十四日死す。年五十一。法名梅翁。

女子

字佐美次郎兵衛長孝が妻。

重好

安次郎 瀨兵衛 實は小林次郎大夫正識が二男、母は松崎四郎左衛門俊信が女、貴寛が養子となりて其女を妻とす。明和六年十二月四日家を繼。時三十八歳。八年十二月二十七日小十人に列し、安永五年四月渡明院殿日光山に詣たまふのとき供奉す。六年八月十六日番を辭す。妻は貴寛が養女。

女子

實は松崎六郎右衛門俊辰が女。貴寛に養はれて重好が妻となる。

女子

松崎市十郎俊久が妻。

重恭

萬之助 母は貴寛が養女。

女子

村藤十郎昌利が女、後妻は加藤甚右衛門休長が養女。

女子

安井六左衛門某が妻。

女子

榎原甚右衛門長嘉が妻。

女子

水野伊左衛門正恒が妻。

長祐

内藏助 母は昌利が女。寛保三年九月十三日初めて有徳院殿にまみえたてまつる。時四十。寶曆元年四月三日遺跡を繼、明和四年閏九月二十七日西城の小十人に列し、安永八年四月十六日より本城に勤仕し、天明元年五月二十六日西城に復す。六年閏十月二十日本城のつとめとなり、寛政七年四月七日番を辭し、八年十二月十九日致仕す。妻は佐原三右衛門景治が女。

女子

織部 源八郎 實は曲淵佐大夫景胤が四男、母は彦坂大膳忠孝が養女、長祐が養子となる。

信寛

寛政二年十一月九日小十人に列し、五年四月番を辭し、のち病によりて父が許にかへる。

長祐

初守嘉 金藏 忠四郎 實は水野彌兵衛守安が二男、母は依田十郎

長祐

初守嘉 金藏 忠四郎 實は水野彌兵衛守安が二男、母は依田十郎



兵衛辰政が女、長祐が養子となりて其女を妻とす。  
寛政八年十二月十九日家を繼。時二十二年のちの射て時服をたまふ。妻は長祐が養女。  
實は神保伊之助長貴が女。長祐に養はれて長弼が妻となる。

長里 縫殿助 母は長祐が養女。

家紋 四目結 古文の木文字

木村

八郎右衛門昌高櫻田の信につかへ、其子八左衛門政重がとき供奉の列にありて吹上御庭口番となり、三代相繼て喜之にいたる。

喜之

助藏 又助

吹上御庭役人の目付をつとめ、のち筆頭役となり、其後清御殿の添奉行に轉じ、寛政十年三月朔日班をすゝめられ、吹上添奉行の次に列して拜調すべきむねおほせをかうふる。時十五歳。妻は久保田氏が女。

喜繁

専助 母は久保田氏が女。

吹上御庭役人の目付をつとむ。

妻は松平近江守家臣谷川彦右衛門信由が女。

女子 女子 女子

實は鈴木氏が女。嘉之に養はれて一橋の家臣淺井平次保道が妻となる。

豊重

館藏 母は信由が女。

家紋 丸に松皮菱 丸に釘抜

徳力

家傳に、佐々木次郎行定か後にして、伊賀守良安佐々木を改めて徳力を稱す。その後裔伊賀之助一安佐々木氏の男を養て子とす。これすなはち良顯なり。

良顯

十之丞 致仕號有隣

元禄十六年六月二十五日めされて常憲院殿につかへたてまつり、儒者となり、月俸十五口をたまひ、二十八日はじめて拜調す。寶永元年十二月十五日御近習番に准ぜられ、月俸をあらためて廩米百五十俵を賜ふ。六年三月三日儒者に復し、正徳二年十二月廿七日書寫の事を勤めしにより金十兩をたまふ。享保三年十二月十

五日評定所勤役儒者にうつり、八年十月九日務を辭し、小普請となる。十五年六月六日歿し、元文三年五月十日死す。年七十四。法名有隣。日暮里の南泉寺に葬る。のちおなじ。妻は甲府の家臣布施藤左衛門政利が女。

良弼

十五郎 藤八郎 母は政利が女。

享保八年二月九日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、十五年六月六日家を繼、十九年四月廿七日評定所勤役儒者となり、元文二年七月十八日淺明院殿御生誕のとき賀章をたてまつりしにより時服二領をたまはり、是よりのち大禮の慶賀ごとに例となる。寶曆七年五月二十一日奥儒者にうつり、九月十九日政要策を獻す。十年四月朔日より二丸に候し、十一年惇信院殿御により八月四日務をゆるさる。十二年三月四日御書奉行となり、安永五年四月淺明院殿日光山に詣たまふのとき供奉し、六年二月二十二日老を告て務を辭す。このとき黄金二枚をたまふ。三月八日死す。年七十二。法名龍間。

女子

宮南氏が妻。

良翰

初良容 十五郎 嘉平

寛延三年十二月二十六日はじめて倅信院殿に拜調す。時十五歳。のち病によりて家督たらず。

女子

良弼が養女。

良興

金十郎 實は土田清助貞仍が二男、母は京極求馬高完が女、良弼が養子となりてその女を妻とす。明和六年十二月二十二日はじめて淺明院殿に拜調し、安永五年十二月十九日大番となり、後しばくの射てものをたまふ。六年六月五日遺跡を繼。時三十三歳。寛政四年三月二十二日組頭にすむ。妻は良弼が養女、後妻は木室藤右衛門朝居が養女。  
實は良翰が女、良弼に養はれて良興が妻となる。

女子

良知 銅太郎

寛政五年二月十五日はじめて將軍家にまみえたてまつり、九年二月十五日父にさきだちて死す。年二十一。

某

早世 新次郎

長軌 實は山岡五郎作景文が二男、母は山岡孫七郎景福が女、良興が養子となりて其女を妻とす。妻は良興が養女。

卷第千三百一

宇多源氏

三宅

按ずるに、この家より下矢鳥源七郎周師が譜にいたるまでみな宇多源氏にして、兒島備後三郎高德が末流なりといひ、富安はもと兒島より出るといふ。舊家三宅備後守康友が家も高德が後にして、寛永系圖は藤原支流におさめ、今の呈譜は源氏といひ、また同家の譜はもと三宅氏なりといふ。その説紛紜たるによりしばらく寛永譜にしたがひ、藤原におさむといへども、或は佐々木盛綱の嫡孫重範三宅の家を相繼す。高德はその四代の孫なりといふ説ある時は、宇多源氏といふものまた故あり。よりにてこゝにつらね、をの其家傳にしたがふ。

幸忠

次郎左衛門 御先手與力をつとむ。

與安

六右衛門 孫兵衛 萬治二年三月十日御徒にめしくはへらる。



尹親 次郎左衛門

父に繼て御先手與力を勤む。

與從

作右衛門 母は香取次左衛門某が女。

はじめ御徒を勤む。元祿七年三月十八日班をすゝめられて御廊下番となり、廩米百五十俵をたまふ。五月六日御次番に轉じ、十二月十一日桐間番にうつる。八年四月二十五日御近習番となり、七月十一日御次番に復し、十一月二日のへありて出仕をとめられ、九年二月二日ゆるさる。五月十八日御近習番にうつり、十二月二十六日また御次番となる。十年正月十一日御小納戸にすすみ、廩米四百五十俵を加へられ、七月二十六日廩米をあらためて武藏國入間高麗二郡のうちにをいて采地六百石をたまふ。十二年八月二日仰により、學問を修せんがため松平美濃守吉保が所領川越におもむき、十五年五月六日勤學のうちは采地過分なるにより、繼に父母養育の料をたまはるべきむね吉保に附て請申に任せられ、采地を收められ、廩米二百俵をたまふ。寶永六年三月六日江戸にめされ小普請となる。享保六年十二月十二日致仕し、のち男與要甲府城の勤番となるにより、した

家紋 輪寶 三星 右巴 桐 菊 四目結

三宅

與貞

九郎次郎 下野守 從五位下 三宅孫兵衛與泰が三男、母は香取次左衛門某が女。

寶永三年九月三日めされて常憲院殿につかへたてまつり、御次番となり、廩米百五十俵をたまふ。四年正月九日御小納戸に轉じ、十二月十八日御小性にすすみ、從五位下下野守に叙任す。五年正月九日加恩三百俵をたまひ、六年薨御により二月二十一日務をゆるされ、寄合に列し、享保十三年八月十日死す。年四十二。法名道悟。淺草の祝言寺に葬る。後代々葬地とす。妻は小栗庄次郎信勝が女。

與直

小市郎 母は信勝が女。

享保十三年十一月十八日遺跡を繼、小普請となる。十五年正月二十七日死す。年十九。法名常英。妻は岡部靱負勝盈が女。

與政

小八郎 作左衛門 三宅勘大夫與

卷第千三百一

宇多源氏

三宅

小島

がひて彼地にいたり、十年二月二十九日死す。年五十六。法名道音。甲斐國古府中の大泉寺に葬る。後代々葬地とす。

女子 松平美濃守家臣秋生惣右衛門茂卿が妻。

與要 勘大夫 兄與從が養子。

與貞 三宅助之允政甫が祖。九郎次郎下野守

女子 松平八郎左衛門清高が妻。

與要

初與純 勘大夫 致仕號白翁 實は與泰が二男、母は次左衛門某が女、兄與從が嗣となる。

享保六年十二月十二日家を繼、九年八月十三日甲府の勤番となり、のち代々彼地に住す。寶曆元年三月二十七日老を告て番を辭す。このとき黄金二枚をたまふ。四年四月四日致仕し、十二年正月二十二日死す。年八十二。法名白道。

與保 左門 兄與要が養子。

與保 早世 左門 實は與從が二男、兄與要が嗣となる。

與政 小八郎 作左衛門 實は三宅下野守與貞が二男、與要が養子となり、のち父にさきだちて死す。

擅泰

要が養子。小市郎 兄與直が養子。

女子

權之助 小市郎 實は與貞が三男、母は信勝が女、兄與直が嗣となる。享保十五年四月二日遺跡を繼、寛保元年二月十六日御書院番に列し、寶曆元年正月二十六日死す。年三十八。法名哲操。妻は矢部彦右衛門芳矩が養女。

政甫

初與清 助之允 母は芳矩が養女。寶曆元年四月三日遺跡を繼。享保十三年八月十日死す。年四十二。法名道悟。淺草の祝言寺に葬る。後代々葬地とす。妻は小栗庄次郎信勝が女。

女子

實は淺井休伯長年が女。政甫に養はれて山寺七藏信榮が妻となる。

與則

辰之助 實は右馬内藏之助純務が三

與直

喜太郎 母は某氏。寶曆四年四月四日家を繼、勤番となる。天明八年六月朔日はじめて將軍家にまみえたてまつり、寛政九年十二月十五日死す。年六十八。法名與直。妻は富田庄兵衛景隆が女、後妻は久保田新五郎政隅が女。

女子

磯部元右衛門盛保が妻。

與幸

磯之助 作右衛門 母は景隆が女。寛政五年十二月三日勤番となる。享保二年 妻は馬淵傳兵衛政房が女。

女子

馬淵喜三郎政典が妻。

女子

三宅吉次郎與行が妻。

女子

金三郎 母は政房が女。

與賢

銀十郎 直藏

與行

男、政甫が養子となり、のち父にさきだちて死す。吉次郎 實は幸田永次郎好理が二男、母は小野四郎五郎吉貞が女、政甫が養子となる。

政行

主水 母は與幸が女。寛政六年十二月二十二日はじめて將軍家に拜調す。妻は三宅作左衛門與幸が女。

小島

家紋 輪寶 三星 右巴 桐 菊 四目結

維和

昌怡 法眼 元祿七年十一月九日醫術をよくするによりめされて寄合醫に准ぜられ、十五日はじめて常憲院殿に拜調し、八年十二月二十五日廩米二百俵をたまふ。寶永元年十二月十一日法眼に叙し、のち常憲院殿御みづからかゝせたまふところの遠藤の畫をたまひ、その後また有徳院殿親筆山水の御畫を賜ふ。享保十六年十二月二十七日老を告て致仕す。このとき黄金三枚をたまふ。十八年七月二十四日死す。年八十九。法名昌悟。半込の大信寺に葬る。



妻は大草甚五左衛門高弘が女。

高光 早世 七左衛門

元瑛

昌與 昌怡 實は横關氏の男、母は黒澤氏の女、維和が養子となりて其女を妻とす。

享保元年八月九日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、十六年十一月二十七日家を繼、小普請となる。寛保二年六月二十日寄合に列し、寶曆二年九月晦日死す。年六十六。法名百鳥。四谷の水心寺に葬る。のち葬地とす。妻は維和が女。元瑛が妻。

和賀

昌貞 昌與 昌怡 實は横關氏の男、母は今井氏の女、元瑛が養子となる。

寛保二年十二月十一日はじめて有徳院殿に拜謁し、寶曆二年十二月十四日遺跡を繼、十一年十月十五日寄合に列す。明和六年七月十八日死す。年五十三。法名爲嶽。妻は永見主水豊利が女。元暉 春良 兄和賀が養子。清水の家臣大谷半右衛門某が妻となる。のち離婚す。

元暉

春良 實は元瑛が二男、和賀が嗣と

なる。

明和二年十二月二十一日はじめて凌明院殿にまみえたてまつり、のち父にさきだちて死す。

元貞

元貞 昌怡 實は吉田梅菴郷美が五男、母は某氏、和賀が養子となる。

明和六年十月六日遺跡を繼。時年二十五歳。安永四年九月三日番醫となり、七年十一月六日番を辭す。妻は根津六郎右衛門光利が女。彌三郎 怡菴 太田林菴教房が養子。金田新八郎正秋が妻。酒井鶴藏友綱が妻となり、離婚してのち橋本千之助忠充に嫁し、すてられて後、金森八左衛門可房に再嫁し、また離婚す。

元義

勇助 昌與 母は光利が女。

元高

昌景

元良

寅藏 林庵 太田怡庵和行が養子。良輔

元安

家紋 四目結 菱の内一文字

矢島

先祖近江國矢島の庄を領せしより稱號とす。

高周

源七郎 正徳三年十二月御徒にめし加へられ、のち月光院御方の廣敷の添番となる。

高陳

岩松 源四郎 母は仙石越前守家臣石原十右衛門某が女。

延享三年十一月三日遺跡を繼、後御徒押より御徒目付を歴て御作事の下奉行となり、拜謁をゆるさる。天明元年八月十三日班をすゝめられて佐渡奉行支配の組頭となり、五年正月十二日佐渡國にをいて死す。年六十。法名大圓。かの地の大乘寺に葬る。妻は戸高氏の女。

周師

岩松 主水 源七郎 母は戸高氏の女。中岡文大夫資綱が妻。

女子

天明元年九月朔日初めて凌明院殿にまみえたてまつり、五年四月四日遺跡を繼、小普請となる。時年三十三歳。寛政八年四月六日御勘定に列す。妻は加藤彌次郎

宇多源氏 佐々木庶流

志賀

家傳に、佐々木の支流なりといふ。是より以下岡本にいたるまで數家、或は左大辨扶養兵庫助成瀬兵部丞義經等の裔といひて佐々木遠祖の名のみをつたへ、家祖の分るゝところをしらざるものともにここにづらぬ。

忠備

權兵衛 權左衛門 嚴有院殿の御時支配勘定をつとむ。

忠政

八郎右衛門 權右衛門 實は忠備が弟にして、兄が嗣となる。延寶二年七月十二日遺跡を繼、のち御勘定に列す。時年百八十八歳。十一月二十八日仰をうけたまはりて關東の國々を巡見す。元祿九年十二月二十二日年ごろ意りなくつとめしにより黄金三枚をたまはる。十二年八月十五日漆奉行に轉じ、十一月十六日光御宮の神器を檢せんがためかの地に赴く。寶永五年十一月二十六日死す。法名道詮。深川の心行

富安

もと兒島を稱す。先祖紀伊國日高郡富安村に住せしより家號とす。

直章

代五郎 五郎右衛門 九八郎 寛保三年十二月西城の御徒にめし加へられ、のち組頭を歴て御勘定吟味方改役並となり、そのち支配勘定をつとめ、寛政二年八月二十七日班をすゝめられて御勘定となる。時年九十九歳。七月五日御金奉行に轉す。妻は矢部木彌一右衛門久隆

が女。

直温

八十郎 母は久隆が女。寛政九年十二月二十二日はじめて將軍家に拜謁す。時年三十二歳。妻は出井重四郎正恒が女。

女子

田安の館につかふ。

女子

吉藏 花田仁兵衛秀精が養子。秀苗

家紋

右三巴 枝付牡丹



寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は土井伊豫守家臣山田玄俊某が女。

忠如

藤四郎 母は玄俊某が女。元禄五年十一月二日御勘定に列し、九年十二月二十二日年ごり意りなくつとめしにより黄金三枚をたまはる。十三年四月二十八日さきに大猷院殿五十回の法會行はるゝのとき、日光山に赴き、其事にあづかりつとめしにより、金十兩をたまふ。のち御代官所をよび上地御領地等を檢し、また御料所の作毛を檢視す。享保六年六月五日年ごり意りなくつとめしにより黄金二枚をたまふ。十三年七月二日御金奉行にうつり、元文五年十二月十八日組の同心罪かうぶりしにより出仕をとめられ、二十八年日ゆるさる。寛保二年二月二十九日死す。年六十九。法名一翁。妻は奈佐四兵衛勝三が女。

忠時

善次郎 母は勝三が女。享保十三年十二月七日はじめて有徳院殿に拜調し、寛保二年五月三日遺跡を繼、小普請となる。延享元年四月六日小十人に列し、寛延二年二月二十七日死す。年四十九。法名性慶。妻は水戸家の侍女廣田が養女。

忠恭

幸三郎 致仕號勇山 實は堀權左衛門景富が二男、母は村野市郎右衛門某が女、忠時が養子となりて其女を妻とす。寛延二年五月三日遺跡を繼。時比十寶曆五年九月二十八日はじめて惇信院殿に拜調し、七年十一月五日小十人に列し、のちの射て時服二領をたまふ。安永五年四月淺明院殿日光山にまうでたまふのとき供奉す。七年九月晦日務を辭し、天明五年八月十一日致仕す。妻は忠時が女。

忠知

熊五郎 藤四郎 母は忠時が女。天明五年八月十一日家を繼。時比二十二年八月十二月二十三日はじめて將軍家に拜調し、寛政五年九月二十七日表御右筆に列し、六年四月四日奥御右筆の見習となり、十年十二月十九日西城の奥御右筆にうつる。妻は吉田快庵願幹が女。

景弘

鏡之助 堺五郎左衛門景嗣が養子。女子 水野鏡太郎忠英が妻。

女子

家紋 丸に萬 四目結

志賀

九郎右衛門 はじめ御徒をつとめ、のち組頭となる。

某

權右衛門

十右衛門 母は志賀氏が女。櫻田の館にめされて文昭院殿につかへたてまつり、右筆をつとめ、のち腰物奉行にうつり、寶永元年西城にいらせたまふのときしたがひたてまつり、御家人に列し、西城の御腰物方となり、藤米百俵月俸五口を賜ふ。六年より本城に勤仕し、七年十二月十九日百俵をくはへられ、月俸は收めらる。享保二年二月二十二日務を辭し、小普請となる。十五年八月二十三日死す。法名智順。深川の心行寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は金丸平左衛門重久が女。

忠親

小太郎 母は重久が女。享保十五年十一月四日遺跡を繼、元文二年四月九日西城の小十人に列し、寛保二年五月四日務を辭す。安永九年九月五日死す。年八十三。法名了道。妻は土岐六之助頼行が女、後妻は平井五右衛門久次が女。

忠往

年三月二十六日死す。年二十四。法名全徹。

忠光

鏡五郎 母は久次が女。安永九年十二月七日遺跡を繼、天明元年五月二日死す。年五十八。法名寂但。

某

清吉郎 加藤彌平太美雅が養子。女子 伊藤留之助令虎が妻。のち離婚す。女子 豐三郎 十右衛門 母は某氏。天明元年七月八日遺跡を繼。時比十八歳寛政四年九月二十五日はじめて將軍家に拜調す。妻は竹島小左衛門勝周が女、後妻は内山半兵衛豐範が女。

家紋 巖手の内萬 笹

岡

正久

了悦 了節 法眼 神田の館にいて常憲院殿につかへたてまつり、延寶八年本城にうつらせたまふのときしたがひたてまつり、奥醫に列し、藤米百五十俵を賜ひ、八月二十二日また百俵をくはへられ、すべて三百五十俵の祿となる。貞享四年正月十二日死す。年五十。法名意伯。駒込の高林寺に葬る。

のち代々葬地とす。妻は山崎虎之助家臣谷田太左衛門某が女。

正房

春節 了菴 母は太左衛門某が女。貞享四年七月十一日遺跡を繼、寄合となる。時比十九歳九月六日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、元禄三年九月十九日家業精入べきむね、かつて仰出さるゝのところ、療治に意りしとして御氣色かうぶりにて小普請に貶さる。四年三月二十二日死す。年二十。法名圓詳。

抽籠

了節 兄正房が養子。

女子

女子

抽籠

三之丞 了節 實は正久が二男、母は某氏、正房が嗣となる。元禄四年七月二十一日遺跡を繼。時比八歳八年七月二十五日はじめて常憲院殿に拜調し、享保十四年三月二十六日致仕し、十二月二十四日死す。年四十六。法名證應。

敬

次郎三郎 了菴 母は正岡氏。享保十四年三月二十六日家を繼、十八

年三月二十六日死す。年二十四。法名全徹。

胤信

左門 清助 伏谷彦助胤道が養子。

胤次

松仙 澁江松軒胤武が養子。

女子

窪島小平次信方が妻。

道生

萬之丞 了伯 了節 母は某氏。享保十八年六月二日遺跡を繼。時比四歳明和六年二月二十一日番醫となり、寛政四年六月二十二日務を辭し、十二月十九日致仕す。妻は村上善五郎師秀が女。

了能

了節 法眼 實は味蓼氏の男、母は某氏、道生が養子となる。安永九年三月十五日はじめて淺明院殿に拜調し、天明六年四月十一日より小石川養生所の療治をうけたまはり、寛政四年十二月十九日家を繼。時比三十二歳九年二月十三日若君に附屬せられ奥醫となり、四月二十一日西城に勤仕し、十二月十八日法眼に叙す。妻は田安の家臣石寺伊織章貞が女。

恭

了純 母は某氏。



女子 年八月三日務を辭す。安永九年十二月二日死す。年五十九。法名道得。妻は太田作右衛門勝吉が女。

家紋 五七桐 輪違

岡

もとは佐々部を稱す。義道がとき故ありて外家の稱號岡にあらむ。

義道

林竹 三左衛門 正徳五年三月六日めされて儒者に准ぜられ、月俸三十口を賜ふ。享保十三年十月九日致仕す。元文元年六月二十四日死す。年七十六。法名善達。淺草新堀の宗安寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は松田七郎左衛門正房が女。

義篤

權平 母は正房が女。 享保八年二月九日はじめて有徳院殿に拜謁し、十三年十月九日家を繼、小普請となる。元文三年四月二十二日死す。年五十一。法名了達。

義勝

龜之助 太郎左衛門 母は某氏。 元文三年七月二日遺跡を繼、延享二年四月十二日小十八人に列し、寶曆三

元壽 益菴 實は某氏の男、本固が養子となる。

神田の館につかへ、延寶八年常憲院殿本城に入れたまふのとき御供の列にありて御家人に加へられ、御醫師となる。元祿三年九月十九日家業息るべからざるむねかつて仰出さるゝのところ、療治の數すくなきよし聞しめされ、小普請に貶さる。猶慮るにをいては御沙汰にをよばるべし。しかれどもいよいよ家業を勵み、療治よろしきのきこえあらば小普請を免さるべきむね願命をかうぶる。寶永七年四月九日死す。法名元壽。四谷の養國寺に葬る。

某

友菴 父にさきだちて死す。

壽久

宗益 母は某氏。 寶永七年六月二十三日遺跡を繼、享保十八年十二月十日死す。法名全號。妻は池田平助福政が女。

壽考

宗順 母は福政が女。 享保十八年十二月二十七日遺跡を繼、延享元年六月十日死す。法名智覺。

清政

宗元 兄宗順が養子。 享保十八年十二月二十七日遺跡を繼、延享元年六月十日死す。法名智覺。

清政

宗元 實は壽久が二男、母

年八月三日務を辭す。安永九年十二月二日死す。年五十九。法名道得。妻は太田作右衛門勝吉が女。

義抽

熊七 三左衛門 母は勝吉が女。 安永九年十二月二十七日遺跡を繼。元祿十九年三月七日御鷹匠となる。妻は三橋兵右衛門信彌が女。

義富

宗次郎

早世 英之助

某

辨次郎 太郎左衛門 實は原田甚六正格が二男、母は某氏、義抽が養子となりて其女を妻とす。

寛政八年四月二十二日御鷹匠の見習となる。八歳に、妻は義抽が女。

女子

義寄が妻。

女子

女子

家紋 丸に向梅 四目結

大石

本固

宗益 神田の館につかふ。

高壽 榮之助 元菴 母は某氏。 安永六年五月六日遺跡を繼、八歳に妻は野村新平直方が女。

高壽

某

常太郎 母は直方が女。 家紋 丸に桔梗 丸に四目

小谷

忠榮 太郎右衛門 將監 權兵衛 瑞春院御方のゆかりあるにより、神田の館につかふ。延寶八年常憲院殿本城にいらせたまふにより御家人に列し、塵米三百俵をたまひ、牧野備後守成貞が支配となり、天和元年七月廿七日死す。法名圓珠。駒込の世尊院に葬る。のち代々葬地とす。

女子

母は某氏。 桂昌院御方につかへ、のち常憲院殿の御側ちかくつかへたてまつり、傳とめさる。

守榮 次郎右衛門 武左衛門 實は金井氏の男、母は某氏、忠榮が養子となり、その女を妻とす。 天和元年七月遺跡を繼、牧野備後守成貞が支配となり、元祿十年二月二十日致仕し、十四年二月二十七日死す。法名幾心。妻は忠榮が女。

守榮

女子

白須才兵衛政休が妻。

女子

某

早世 千之助

女子

牧野備後守成貞が養女。

那榮

甚四郎 實は牧甚左衛門某が二男、母は某氏、守榮が養子となる。 元祿十年二月二十六日家を繼、瑞春院御方の用達となり、十五年三月二十九日寄合に列す。十二月二十二日百俵を加恩あり、すべて四百俵の祿となる。 享保二年十一月七日死す。年五十三。法名榮心。妻は一色九左衛門定儀が女。

榮久

助九郎 母は定儀が女。 享保二年十二月二十六日遺跡を繼、小普請となる。十七年閏五月二十一日西城の御腰物方となり、延享二年九月朔日より本城に勤仕す。寶曆三年十二月二十九日務を辭し、六年四月二十三日死す。年五十六。法名道喜。妻は西尾甚之助重行が女。

守明

權太郎 母は重行が女。 寶曆六年七月六日遺跡を繼、八年十月二十八日はじめて惺信院殿にまみえたてまつり、九年十一月七日大番に列し、十三年八月十七日大坂城の守衛に赴く。のとき三河國白須賀驛にをいて死す。年三十七。法名如幼。かの地の妙泰寺に葬る。

守敬

幸之丞

定矩

忠右衛門 三浦平十郎政英が養子。

久芳

八十八

女子

飯河新右衛門盛篤が妻。

榮澄

彦次郎 元次郎 武左衛門 致仕

榮澄

八五九



卷第千二百三

宇多源氏 佐々木支流

吉川

號長率 實は大木次左衛門親盛が三男、母は入野十左衛門貞春が女、守明が病篤にのぞみて養子となり、その女を妻とす。  
寶曆十三年十一月四日遺跡を繼、明和二年十二月二十一日はじめて凌明院殿に拜謁し、三年五月四日大番となり、安永九年三月二十三日番を辭し、寛政元年四月二十二日致仕す。時年十四歳。妻は守明が女。  
榮澄が妻。

女子

忠央

源三郎 實は田村長元長壽が二男、母は松平甲斐守家臣鞍岡文次右衛門元武が女、榮澄が養子となりてその女を妻とす。  
寛政元年四月二十二日家を繼。時年十八歳。四年九月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつり、九年二月十六日大番に列す。妻は榮澄が養女。

女子

某

早世 甚四郎

家紋 丸に四目結 丸に三柏

政相

惣八郎 東照宮につかへたてまつり、鳥見役をつとむ。

政武

平十郎 惣十郎 御徒目付をつとめ、のち御臺所目付に轉す。元祿二年閏正月三日班をすめられて御細工頭となる。時年六十。六年三月十日死す。年四十三。法名宗節。牛込の實性院に葬る。後代々葬地とす。妻は松平薩摩守家臣菊地藤助某が女。

政恒

平右衛門 惣右衛門 母は某氏。御徒目付をつとめ、のち御臺所目付に轉す。元祿二年閏正月三日班をすめられて御細工頭となる。時年六十。六年三月十日死す。年四十三。法名宗節。牛込の實性院に葬る。後代々葬地とす。妻は松平薩摩守家臣菊地藤助某が女。

政峰

惣八郎 新藏 母は藤助某が女。元祿六年七月十二日遺跡を繼、小普請となる。時年十。寶永四年七月九日小十人に列し、享保六年六月五日年ごろ意りなくつとめしにより金十五兩をたまふ。十三年九月朔日死す。年四十六。法名宗貞。妻は窪寺四郎左衛門正光が女。

女子

惣八郎 實は森山勘四郎實輝が二男、母は某氏、政峯が養子となる。

從安

竹三郎 源十郎 母は頼澄が女。享保十五年十二月二十七日遺跡を繼、明和七年十一月十九日死す。年六十七。忍翁と號す。妻は能勢十次郎頼實が女。

從運

惣次郎 父にさきだちて死す。能勢十次郎頼種が養女。能勢喜十郎頼相が養女。曲木又左衛門正男が妻。

從門

幸次郎 源十郎 母は某氏。明和七年十二月二十七日祖父が遺跡を繼、寛政九年六月二十日死す。年六十一。忍澄と號す。妻は西尾七兵衛教里が女。

從方

富之助 母は教里が女。寛政九年八月四日遺跡を繼。時年十九歳。五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は清水の家臣井戸才助弘江が女。

女子

家紋 丸に葛 丸に鶴 永田

女子

おなじ館につかふ。

某

慶之助 母は某氏。家紋 抱葉荷 葛

曲直瀬

家傳に、先祖亨德院正純實は岡野井氏が男にして、曲直瀬雖知苦齋道三に養はれ、京師に住し、禁中の療治をうけたまはる。それより八代にして玄順にいたるといふ。  
壽德院 元祿五年十一月二十三日めされて奥醫に列し、麻米二百俵をたまひ、六年三月十八日番醫となり、十一年十月二十八日務を辭し、小普請となる。十四年正月十八日死す。法名玄順。小石川の龍雲院に葬る。のち代々葬地とす。

玄順

正恩 壽德院 實は曲直瀬氏が男、母は某氏、玄順が養子となる。元祿十四年七月九日遺跡を繼、寶永元年七月十一日はじめて常憲院殿に拜謁し、正徳二年七月十一日死す。法名正恩。

女子

一橋の館につかふ。



正育

正育 壽徳院 實は曲直瀬氏が男、母は某氏、正恩が病篤に臨て養子となる。

正榮

正榮 壽徳院 兄正育が養子。

正瑛

正瑛 壽徳院 實は正恩が二男、母は某氏、正育が嗣となる。

元文二年九月二十九日遺跡を繼、延享四年九月廿一日番替となり、明和七年正月二十日死す。年六十三。法名正榮。

某

岩次郎 いへをいで、所在をしらす。

正琢

正琢 壽徳院 母は某氏。

明和七年四月五日遺跡を繼、寛政三年四月五日死す。年三十九。法名正琢。妻は高月政右衛門政教が女。

女子

藤四郎

正意

順次郎 正意 壽徳院 實は片山宗哲玄年が二男、母は片山與庵玄宗が女、正琢が養子となる。

寛政三年七月二日遺跡を繼。時三十九歳。妻は辻巳之助山俊が女。

家紋 四目結 釘抜

植田

先祖近江國甲賀郡植田村に住せしより、植田と稱す。

満高

延之助 善悦 庄助

奥坊主をつとめ、後御行水方となり、其後束髪して庄助とあらたむ。元禄七年五月六日班をす、められて御次番となり、加増ありて廉米二百俵をたまふ。十一月二十五日桐間番に列し、九年七月四日御近習番にうつり、十二年五月十八日御次番に復し、寶永六年常憲院殿薨御により、二月二十一日小普請となり、享保二年四月二十四日死す。年四十五。法名日善。牛込の圓福寺に葬る。妻は近藤氏の女。

道高

庄三郎 實は村田九八郎種明が

男、母は村田茂左衛門某が女、満高が養子となりてその女を妻とす。

女子

道高が妻。

高政

九十郎 庄助 母は河野氏の女。

享保十四年十一月十一日遺跡を繼。時三十九歳。延享元年四月六日小十人に列し、八月二十五日田安の近習番となり、三年七月五日死す。年三十三。法名了脱。

高次

庄藏

女子

田安の家臣松平利左衛門氏庸が妻。

親延

鶴之助 實は植田氏が女、母は某氏、高政が養子となる。

榮充

延享三年十月二日遺跡を繼、寶曆四年八月朔日死す。年二十五。法名示宣。

勇左衛門 致仕號安易 實は田安

元高

の家臣松平利左衛門氏庸が長男、母は道高が女、親延が終に臨て養子となる。

寶曆四年十一月四日遺跡を繼、寛政九年七月二十五日致仕す。時六十六歳。

高氏

主馬 母は乗集が養子。

家紋 四目結 桶

大塚

重時

濟六郎

神田の館にいて小十人をつとむ。延寶八年徳松殿西城にいらせたまふのとき、したがひたてまつり御家人に列す。

時宜

彦之丞 濟兵衛 母は岡野九郎兵衛某が女。

女子

孫十郎 宇右衛門 松居忠次郎 善昌が養子。

昌朝

清三郎 實は時宜が三男、母は元知が女、時睦が嗣となる。

延享三年三月二十三日はじめて樟信院殿にまみえたてまつり、寶曆九年十二月十八日家を繼、明和元年閏十二月五日死す。年四十八。法名如雲。妻は玉井吉十郎貫忠が女。後妻は山田庄右衛門長秀が女、また竹村忠次郎嘉教が女を娶る。

義一

彦十郎 服部久右衛門義府が養子。

正儀

時之丞 山本金左衛門正信が養子。

女子

堀川主馬正岑が妻。

某

又五郎

女子

岡田小十郎正英が妻となり、正英死するのち其父平三郎正武に養はる。

女子

女子

女子

時常

秀之丞 三郎左衛門 實は松平歳



岐守家臣栗生宗左衛門躬忠が男、母は窪田十左衛門繁高が女、時央がをばりにのぞみ、養子となりてその女を妻とす。

明和元年閏十二月二十七日遺跡を繼。時房 彦市 清兵衛 母は時央が女。寛政四年七月朔日はじめて將軍家にまみえたてまつり、六年十一月十四日大番に列す。

正壽 德之助 山本勘之丞正員が養子。某 鏡之助 女子 德之助 女子 安之丞 某 象吉 家紋 丸に豎二引 餅の内抱澤瀉

大塚

友昌

彌門 彌忠

はじめ紀伊家につかへ、享保元年有徳院殿本城にいらせたまふのとき、したがひたてまつり、御家人に列し、十一月二日廩米二百俵をたまひ、小次郎君の抱守となる。のち近習番にうつり、田安の館に勤仕す。十六年九月十六日百俵の加恩あり、すべて三百俵の祿となる。延享四年六月十三日老を告て番を辭し、小普請となる。このとき黄金二枚をたまひ、十一月二十九日致仕す。寶曆四年正月十九日死す。年七十九。法名良存。武藏國多摩郡代々木村の福善寺に葬る。後代々葬地とす。妻は紀伊家の臣柳田彌三郎某が女。

女子

戸田藤四郎光直が妻。

友直

圖書 彌忠 母は彌三郎某が女。享保十八年六月十三日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時比十 延享四年十一月二十九日家を繼、天明六年十一月二十六日致仕し、寛政六年二月十六日死す。年七十六。法名壽榮。妻は遠山半助景明が女。後妻は豊島孫七郎泰基が女。貞益 楠之助 源右衛門 松平隲岐守家臣安東源右衛門貞時が養子。

忠居 角彌 十郎右衛門 遠山半助景光が養子。小南市郎兵衛達徳が妻。

友幾 金藏 父にさきだちて死す。

友次 友次郎 八郎左衛門 彌忠 實は津金助之進胤貞が六男、母は某氏、友直が養子となりて其女を妻とす。天明六年十一月二十六日家を繼。時比四 寛政四年九月二十五日はじめて將軍家に拜調し、十年五月六日田安の館に附屬せられて小十人の頭となる。妻は友直が女。友次が妻。

女子

友時

監物 實は酒井大炊頭忠道が二男、友次が養子となりて其女を妻とし、のちゆへありて兄鏡藏友綱が許にかへる。妻は友次が養女。實は遠山政之丞景持が女。友次に養はれて友時に配し、友時家にかへるとき離婚し、のち家にかへる。

女子

家紋

丸に二引 井桁

卷第千二百四

宇多源氏 佐々木支流

村田

昌伯 長庵 忠庵 長庵 杏林院 法眼 法印

醫術に善をもつて元祿十二年三月二十八日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、十三年十月十九日めされて奥醫となり、廩米二百俵をたまひ、十四年五月十二日御藥調進の事をうけたまはり、十一月十一日法眼に叙す。十五年十二月三日新恩三百石をたまひ、先の廩米を采地にあらため、上總國埴生長柄兩郡のうちをいてすべて五百石を知行す。寶永二年十二月二日法印にすゝみ、六年常憲院殿薨御により、二月二十一日寄合となり、瑞春院御方に附屬せられ、七年七月二十七日致仕す。これより後瑞春院御方の療治をうけたまはるべき旨おほせをかうぶる。享保三年十月六日死す。年七十六。法名覺源。芝の正覺寺に葬る。後代々葬地とす。妻は河村休菴某が女。

某 常庵

卷第千三百四

宇多源氏(佐々木支流)

村田

昌和

壽庵 長庵 法眼 實は藤堂大學頭家臣關本伯國某が男、母は某氏、昌伯が養子となりて其女を妻とす。

元祿十四年三月四日はじめて常憲院殿にまみえたてまつる。時比十 七年七月二十九日家を繼、寄合に列し、享保元年七月十九日番醫となり、三年四月四日瑞春院御方に附屬せられ、三九に候し、十五年十二月二十一日法眼に叙す。元文三年瑞春院御方逝去により、八月四日寄合となり、九月二日奥醫に列し、寶曆十年四月朔日より西城に候す。十一年惇信院殿薨御により八月四日日本城のつとめとなる。十一月萬壽姫君生誕のとき、其ことをうけたまはりしにより黄金三枚をたまひ、十二年十一月九日貞次郎君生誕のときも其事をうけたまはりて黄金二枚を賜ふ。明和二年十二月廿八日致仕す。此時養老の料廩米二百俵を賜ふ。七年六月廿日死す。年八十二。法名了眞。妻は昌伯が女。女子 吉田策庵宗仲が妻。女子 栗本氏が妻。女子 實は村田氏の女、昌伯に養はれて昌和が妻となる。

喜和 忠庵 壽庵 長庵 母は昌綱が女。天明元年八月六日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、六年四月六日遺跡を繼。時比三十七 妻は友田氏の女。

根一 常次郎 春庵 小島察春章が養子。

女子 曾谷伯安祐貞が妻。女子 立花助五郎種治が妻。

女子

良吉

吉田策庵宗之が妻となり、離婚ののち松平田宮恒隆に嫁す。八十郎 左兵衛 久次郎 島田伊右衛門政温が養子。

女子

致和

壽庵 杏庵 長庵 法眼 母は某氏。元文四年四月十一日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時比十 寶曆三年七月十八日より御廣鋪の療治をうけたまはり、明和二年十二月二十八日家を繼、小普請となる。三年正月十七日寄合に列し、安永五年淺明院殿日光山に詣たまふのときしたがひたてまつり、七年八月十四日奥醫となり、十二月十六日法眼に叙す。天明六年正月二十日死す。年六十一。法名的應。妻は栗本瑞見昌綱が女。



宗九 千次郎 策庵 吉田周宗翼が養子。  
 女子 森川龜太郎長祇に婚を約し、いまだ嫁せずして長祇死するにより、前川玄徳雄氏が妻となる。  
 女子 能勢市兵衛頼能が養女。  
 用和 杏樹  
 頼章 斧次郎 等春 西庵 小森西倫頼長が養子。  
 祐壽 玄梁 曾谷祐伯祐幹が養子。  
 女子 奥田八十郎忠良が妻。  
 女子 島田久次郎良吉が養子。  
 敬仲 初有慶 大輔

昌英 杏庵 母は某氏。  
 昌弘 杏園  
 昌行 重三郎  
 家紋 丸に泡澤瀉 三巴

森 延寶三年、一にめし加へられ、後御盛澄 與五左衛門

すゝみ、十二月十六日布衣を着する事をゆるさる。妻は山高左大夫信芳が三女、後妻は信芳が四女、また阿部鏡次郎達磨が女を娶る。  
 女子 實は一橋の家臣中島庄藏正交が女、盛丸に養はれて龜井駿河守清容が妻となる。  
 盛壽 多宮 母は信芳が三女。  
 天明七年九月初めて將軍家に拜謁す。時三十四歳 妻は土岐彦九郎頼門が女。  
 盛正 初盛良 綱次郎 源助 横山甚左衛門平平が養子。  
 正道 三之助 一橋の家臣中島大八郎盛忠が養子。

女子 角繫四目 龜の丸 五三桐  
 家紋

奥谷 はじめ猿樂の列にして櫻田の館より扶助をうく。

國當 主計 彌三郎 片山三七郎滿國が養子。  
 女子 西川兵衛門利規が妻。  
 女子 糟屋彦三郎正易が妻。  
 女子 中根九郎兵衛正孝が妻。  
 盛安 主計 父にさきだちて死す。妻は萩原伯耆守美雅が女。  
 女子 一橋の家臣中島庄藏正交が妻。  
 女子 實は片山彌三郎國高が女、盛州に養はれて淺井平八郎光春が妻となる。

盛高 橘五郎 與五左衛門 母は美雅が女。  
 寛保元年九月六日祖父が遺跡を繼、小普請となる。御書院番に列し、四年七月二十三日死す。年三十。法名善昌。  
 盛九 次郎助 與五左衛門 實は一橋の家臣中島庄藏正交が男、母は盛州が女、盛高が終に隨て養子となる。  
 寶曆四年十月四日遺跡を繼。時九歳。地七百石。明和三年三月十九日御書院番となり、後しばし騎射及び的を射て時服黄金等を賜ふ。寛政三年九月十一日御頭

徒目付を経て、小細工奉行に轉じ、元祿十一年十月十三日班をすめられて八重姫君の用達となり、加増ありて厩米二百俵月俵五口を賜ふ。寶永五年二月七日五十俵をくはへられ、正徳元年一月十六日おなじ御方の用人に准ぜらる。この日二百五十石を加恩あり、厩米を菜地にあらため、武藏國入間比企兩郡のうちをいて五百石を知行す。これよりさき月俵はおさめらる。十二月十八日布衣を着することゆるさる。三年五月十六日用人に列し、二百石を加賜せられ、すべて七百石となる。五年十一月十七日死す。年五十八。法名好雪。赤坂の大安寺に葬る。後代々葬地とす。妻は小山彌左衛門保雪が女。

直重 七左衛門 庄兵衛 致仕號自甘  
 元祿十四年九月十九日めされて御廊下番となり、厩米百五十俵をたまふ。寶永六年二月二十一日土圭間番に轉ず。正徳二年五月二十三日致仕し、享保八年二月十二日死す。年七十一。法名辨隨。小石川の善仁寺に葬る。後代々葬地とす。

某 早世 七三郎  
 女子 加藤長三郎景當が妻。  
 直教 半次郎 半四郎 母は某氏。  
 正徳二年五月二十三日家繼。この日土圭間番に列し、三年五月十八日この番の員を減ぜらる。により、小普請となり、享保十二年四月十一日御勘定に列し、十三年四月有徳院殿日光山にまうでたまふにより、二十九日其事にあづかりしとて黄金一枚をたまひ、後國の新田を検しあるひは陸奥出羽兩國におもむき、買米の事をうけたまはり、あるひは金銀の制をあらためらる。のとき、そのことにあづかり、京師大坂にいたり、あるひは大和國の論地を検視し、しばし黄金を賜ふ。寛保三年九月二十九日御代官に轉じ、寛延二年六月十日其務にかなはざるにより、職を奪はれ小普請に貶され、出仕をと

めらる。八月二十九日ゆるさる。寶曆四年八月二十六日死す。年六十二。法名榮照。妻は萩原兵助重興が女、後妻は兒玉氏が女。  
 正方 長十郎 忠兵衛 戸田忠兵衛正矩が養子。  
 直年 久次郎 左平太 小作 富山久右衛門某が養子となり、後ゆへありて家にかへる。そのうち神谷小作直勝が養子となる。  
 善附 李之助  
 女子 はじめ松井市郎左衛門忠隆に嫁し、離婚のち本多内匠政良が妻となる。  
 直好 早世 久四郎  
 直照 仙十郎 母は兒玉氏が女。  
 寛保元年十一月二十九日御勘定となり、寛延元年十二月二十日務を辭し、寶曆四年十一月四日遺跡を繼。八年十一月朔日清水の近習番となる。九年二月二十四日死す。年三十五。法名榮空。妻は松平播磨守家臣小原通挺正酉が女。  
 女子 大奥につかふ。  
 女子 清水の館につかふ。  
 女子



直通

太三郎 仙十郎 四郎兵衛 實は本多内匠政良が三男、母は直救が女、直照が終にのぞみて養子となる。

寶曆九年五月四日遺跡を繼、明和三年七月三日田安の近習番となり、後番を辭し、寛政元年二月十六日死す。年四十七。法名殊勝。妻は内藤久之丞政植が女。

女子

久米五郎 母は政植が女。

寛政元年五月三日遺跡を繼。時十九歳。四年九月二十五日始めて將軍家に拜謁す。妻は林吉五郎相如が女。

直一

林吉五郎相如が養子。

安信

半次郎 田安の家臣松浦又次郎の廣が養子。

政道

淵之助 政之助 土田彦九郎武貴が養子。

貴明

女子

乙吉

某

直昌 縫殿之丞 母は相如が女。實之助

蘆田

女子

錫之助

家紋 丸に四目結 瓜の内巳の字 五三桐

蘆田

先祖備後國葦田郡に住せしにより、葦田を家號とし、その後蘆田にあらたむ。

高俊

作平

慶長二年御徒となり、清揚院殿に附屬せられ、後櫻田の館に在りて藏奉行をつとむ。

宗悟

孫平次 母は某氏。

櫻田の館に在りて勘定役をつとめ、寶永元年文昭院殿西城にいらせたまふのとき、したがひたてまつり、御家人に列し、鷹米百俵を賜ひ、御勘定となる。正徳元年十一月十五日死す。年五十七。法名宗悟。谷中の玉林寺に葬る。後代々葬地とす。

常徹

作十郎 母は某氏。

正徳元年十二月十九日遺跡を繼、小菅

八六八

請となり、享保九年五月二十九日死す。年三十一。法名常徹。

利慶

作之丞 母は某氏。

享保九年八月二日遺跡を繼。時二歳。寛保元年十一月九日刑部卿宗尹卿に附せられ、小十人をつとむ。後務を辭し、天明三年二月十七日死す。年六十一。法名日了。妻は松平甲斐守家臣掛田喜兵衛信道が女。

利宴

孫次郎 母は信道が女。

天明三年五月六日遺跡を繼、五年十月二十四日死す。年三十二。法名了性。小宮山吉之助政成が妻。

女子

常貞

鍋五郎 兄利宴が養子。

常貞

鍋五郎 實は利慶が二男、母は信道が女、兄利宴が嗣となる。

天明五年十二月二十五日遺跡を繼。時二十歳。八年十二月二十三日はじめて將軍家に拜謁し、寛政九年五月二十八日御鷹匠となる。

常政

源三郎 母は某氏。

常武

金五郎

卷第千三百五

宇多源氏 佐々木支流

松井

義隆は阿部伊勢守家臣松井與市右衛門忠頼が男にして、桂昌院御方の侍女松井が養子となり、御家人にめし加へらる。松井は義隆が伯母なり。

義隆

市郎左衛門

寶永元年四月朔日三丸廣敷の添番にめしはへられ、四年二月二十九日班をすめられ、小十人に列す。時五十五歳。十二月二十六日俸五口をくはへらる。享保四年五月十六日死す。年四十九。法名了空。淺草玉泉寺に葬る。のち葬地とす。妻は原田半助種則が女。

忠隆

庄之助 市郎左衛門 母は種則が女。

享保四年七月二十七日遺跡を繼、小菅請となる。時十五歳。十五年五月二十九日西城の小十人に列し、寛延三年七月十日死す。年四十四。法名秋山。妻は奥谷半四郎直救が女。

八六九

女子

實は太田岩次郎政武が女、常貞に養はる。

宇多

良茂

助十郎

寶永二年二月二十一日めされて土圭間番に列し、月俸をたまふ。三年九月二十一日鷹米百俵を賜ひ、月俸はおさめらる。七年正月十八日五十俵を加へらる。正徳四年八月十三日死す。年四十八。法名紹以。品川東海寺の定惠院に葬る。後葬地とす。妻は松本氏が女。

良政

久次郎 母は松本氏が女。

正徳四年十月二十三日遺跡を繼、小菅請となる。時十五歳。延享三年六月十五日はじめて惇信院殿にまみえたてまつり、寶曆十一年八月二十七日致仕し、明和二年死す。年六十四。法名常祐。

良長

孫市 父にさきだちて死す。

良貫

源之助 助十郎 致仕號柏翁 母は某氏。

寶曆十一年八月二十七日家を繼、明和

卷第千三百五

宇多源氏(佐々木支流)

宇多 松井



高豊 彌一郎 庄大夫 青野庄大夫正峯が養子。

忠好 作之丞 市左衛門 母は直教が女。寛延三年十月五日遺跡を繼、安永四年閏十二月二十六日小十人に列し、天明八年二月二十三日死す。年五十五。法名法恩。妻は寛與三兵衛正興が女。

忠壽 初義武 庄次郎 庄左衛門 はじめ清水中納言重好卿に附屬せられ、逝去のちめされて別に家を興す。其譜は下に見えたり。

女子 中山五郎大夫勝尹が妻。

忠俣 善之丞 母は正興が女。天明八年五月三日遺跡を繼。時比十七歳。口寛政八年十一月二十五日はじめて將軍家に拜調す。

忠得 半次郎 岩太郎

某 金太郎 母は某氏。

家紋 丸の内山に竹 丸に梅鉢 松井

忠壽 初義武 庄次郎 庄左衛門 松井市郎左衛門忠隆が二男、母は某氏。寶曆四年四月十三日めされて萬次郎君の御伽となり、清水の館にうつらせたまふのちながく附屬せられ、小性に轉じ、用人の見習をつとめ、小性頭取をかぬ。寛政七年逝去により、八月二十九日めされて清水勤番の組頭となる。時比五十歳。妻は遠山小左衛門資矩が女、後妻は吉田七兵衛盛苗が女、又石井忠四郎正方が養女を娶る。

忠周 初義類 庄之助 政藏 母は盛苗が女。はじめ清水の館に在りて近習番をつとめ、重好卿逝去の後務をゆるさる。寛政九年十二月二十二日はじめて將軍家に拜調す。時比二十六歳。妻は山口五右衛門能勝が女、後妻は一橋の家臣笠原傳五平正映が女、又古坂辨藏孟雅が女を娶る。

忠祝 銀八郎 次郎左衛門 田安の家臣幸田八左衛門親叟が養子となり、のちゆへありて家にかへる。

女子 孫三郎

女子 孫三郎

女子 孫三郎

家紋 丸の内山に竹 丸に梅鉢

蘆谷 久彌は村井氏の男にして、野村が養子となり、其家號蘆谷を稱す。野村は有章院殿の御乳人にして、蘆谷氏の女なり。

久彌 主殿 權九郎 享保元年四月二十一日めされて御小性組の番士となり、廩米三百俵をたまふ。元文二年閏十一月二十二日西城の務となり、寶曆六年八月十三日老を付けて番を辭し、小普請となる。このとき黄金二枚をたまふ。十二月十六日死す。年七十。法名日穩。淺草の幸龍寺に葬る。のち代葬地とす。妻は星合源左衛門顯英が女。

久依 一六 傳十郎 實は村井小大夫泰節が男、母は蘆谷氏の女、久彌が養子となりて其女を妻とす。寶曆七年三月六日遺跡を繼、八月二十五日西城御小性組の番士に列し、十年八月三日西城の務となり、十二年十二月十五日より西城に勤仕し、のち放鷹に感従し、鳥を射て時服をたまふ。安永元年九月二日死す。年五十。法名日

久高 爲八郎 權九郎 母は久彌が女。安永元年十二月二日遺跡を繼、五年十二月二十二日はじめて淡明院殿に拜調し、九年三月十九日西城の御書院番となり、天明元年十一月二十五日死す。年二十八。法名日詠。妻は井戸三五郎弘氏が女。

某 早世 金之丞

久豊 勇之助 庄右衛門 權九郎 實は柘植平五郎兄弟が二男、母は美濃部八郎右衛門茂英が女、久高が終にのぞみて養子となる。天明元年十二月二十五日遺跡を繼。時比十八歳。四年十二月二十二日はじめて淡明院殿にしたがひたてまつり、五年八月十七日西城の御小性組に列し、六年閏十月二十日西城の務となり、八年十一月二十一日より進物のことを役し、のち放鷹のとき鳥を射て物をたまふ。寛政八年十二月十日若君に附屬せられて西城に候す。妻は山村信濃守良旺が女。

在久 德三郎 勇之助 母は良旺が女。家紋 丸に四方花菱 六日

磯野 家傳にははく、政賢は磯野丹波守秀昌が孫にして磯を稱し、政助が時磯野に復す。紀伊家につかふ。

政賢 伊右衛門 紀伊家につかふ。

政防 横之助 八右衛門 若狭守 從五位下 致仕號豐山 實は柴田才兵衛幸雄が男、母は磯伊右衛門政立が女、政賢が養子となりて其女を妻とす。

紀伊家に在りて有徳院殿につかへたてまつり、享保元年本城にいらせたまふのときしたがひたてまつり、御家人に列し、六月二十五日御小性となり、常陸國筑波郡のうちに在りて采地四百常をたまふ。十一年十二月十六日從五位下若狭守に叙任し、元文元年正月二十五日こめて磯野に復す。二年十二月十五日御小納戸にうつり、寛延元年十二月二十日務を辭し、寄合に列す。三年

女子 政助が妻。

政武 三之助 民部 右近 右近將監 丹波守 近江守 從五位下 實は平塚一郎右衛門近秀が三男、母は某氏、政助が養子となりて其女を妻とす。享保十五年十月二十二日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時比二十二年十二月二十二日御書院番に列し、元文元年五月二十五日御小納戸に轉じ、十二月十六日布衣を着することゆるさる。二年十二月十九日御小性にす。み、五年十二月二十一日從五位下右近將監に叙任す。延享元年十二月十六日おほせによりて丹波守にあらたむ。のち西城の務となり、寛延三年四月二十五日家を繼、寶曆元年有徳院殿御により、七月十二日寄合に列し、安永五年六月十八日死す。年六十。法名好山。妻は政助が妻。

女子 政武が妻。



政典

牧之助 式部 播磨守 從五位下 母は政助が女。

寛延三年十二月二十六日はじめて惇信院殿に拜謁す。寶曆元年五月十二日御小納戸となり、七月十八日より西城に勤仕し、八月二十三日西城の御小性になり、二年十二月十六日從五位下播磨守に叙任す。六年十月二十八日務を辭し、寄合に列し、七年七月八日父にさきだちて死す。年二十二。法名道微。妻は石谷淡路守清昌が女。

女子

實は大久保齋宮忠嗣が女、政武にやしなはれ、のち弟齋宮忠篤が許に歸る。

政共

又三郎 内記 實は萩原主水正雅忠が四男、母は某氏、政武が養子となりて其女を妻とす。  
寶曆十二年七月七日はじめて澄明院殿に拜謁し、安永五年九月十日遺跡を繼、小普請となる。六年十一月十九日御小納戸に列し、十二月十八日布衣を著することをゆるさる。寛政元年七月二十八日御廣敷の用人に轉じ、五年十一月七日御先鏡の頭にうつり、六年七月五日死す。年五十六。法名若龍。妻は政武が養女。

女子

實は矢部能登守正虎が女、政武に養はれて政共が妻となる。

女子

平塚三十郎爲興が妻。

政昌

久次郎 久五郎 母は政武が養女。天明六年三月二十一日はじめて澄明院殿にまみえたてまつる。時比十寛政五年十二月六日御小性組に列し、六年十月六日遺跡を繼。寶曆四年の騎射台覽の列にありて黄金二枚をたまふ。九年閏七月十七日御小納戸にすゝみ、十一月晦日より西城に勤仕し、十二月十八日布衣を著することをゆるさる。妻は新見大炊頭正偏が女、後妻は細井安藝守安常が女。

女子

榮之助 母は安常が女。

政興

丸に三葉三篠 五三桐

福林

角左衛門

都春

東照宮に仕へたてまつり、錢藏番をつとむ。

都光

勲左衛門

表火番をつとむ。

都豐

市左衛門 御廣敷の添番をつとめ、のち瑞春院御方の廣敷添番となる。

都幸

新三郎 新左衛門 實は都光が二男、都豐が嗣となる。  
享保二年二月二十四日遺跡を繼、のち二九御廣敷の添番となる。

都治

彌三郎 母は長谷川五兵衛某が女。  
享保三年十月十九日遺跡を繼、のち二九の添番をつとめ、十七年四月九日田安の小十人に轉ず。月俸五口のち番を辭し、小普請となる。明和元年八月五日死す。年六十三。法名涼雲。四谷の永昌寺に葬る。のち葬地とす。妻は安間覺右衛門堅次が女。

都照

彌五郎 母は堅次が女。  
明和元年十一月九日遺跡を繼、天明三年四月九日死す。年四十四。法名圓乘。

某

惣治郎 母は某氏。

竹内

義壽

與五郎 半十郎 寶曆十二年七月御徒にめし加へられ、のち御作事の下奉行に轉じ、拜謁をゆるさる。寛政三年十一月二十三日班をすゝめられて小普請方となり、五年三月二十三日仙波御宮諸堂社及び三芳野天神等の普請をうけたまはりてかの地に赴く。八年四月二十五日死す。年五十六。法名洞岩。東叡山の護國院に葬る。妻は日光門主の家人竹内武助善直が女、後妻は柘植又左衛門竹苞が養女。

女子

富永數馬守平が妻。

善明

八百三郎 左門 母は善直が女。  
寛政三年十二月二十二日はじめて將軍家に拜謁し、八年七月三日遺跡を繼。  
十四歳 妻は永井與右衛門定宜が女。

善高

善太郎 母は定宜が女。

岡本

家紋 丸に葛

某

初太郎 母は田代氏の女。

家紋

丸に四目結 丸に鳩酸草

淺井

淺井傳兵衛忠貞清揚院殿につかふ。重傳實は武田氏の男にして、忠貞が養子となり、其女を妻とす。

重傳

儀助 櫻田の館をいて文明院殿に仕へたてまつり、寶永元年西城に入れたまふのときしたがひたてまつり、御中間頭となり、後二九の火番をつとむ。

豫充

吉太郎 半左衛門 母は忠貞が女。  
寶永五年九月二十九日遺跡を繼、のち二九の火番となり、其のち支配勘定に轉ず。元文二年六月班をすゝめられて御勘定となり、評定所の留役をつとむ。延享四年二月十八日御勘定の組頭



先祖河内國交野郡岡本に住するがゆへに岡本と稱し、のち尾本にあらため、山科と號し、また岡本に復す。

政苗

多門 莊藏

安永五年十二月御先手與力にめし加へられ、のち支配勘定に轉ず。寛政四年十一月十六日班をす、められて御勘定となる。元禄五年十二月十三日死す。年六十二。法名忠貞。四谷の安樂寺に葬る。妻は渡邊氏の女。

女子

某 早世 内藏丞

某 早世 直彌

女子

某 泉本正助忠篤が妻。

正成

忠次郎 母は渡邊氏の女。

寛政六年三月四日遺跡を繼。時年二十八。二十六日清水の目付となり、のち勘定奉行の助廣敷用人をかぬ。七年清水中納言重好卿逝去により、八月二十九日御勘定となる。妻は呼柳武十郎輝豊が女。

正平

政五郎

德温

良藏 母 輝豊が女。

女子

家紋 花輪造 本の字

卷第千二百六

宇多源氏

杉

重清が父源左衛門重舒元龜三年三河國にをいめされて東照宮に仕へたてまつる。

重清

藤藏 源左衛門 百人組の與力をつとむ。

某

助左衛門 父に先だちて死す。

重世

源之丞 市右衛門 母は酒井河内守家臣飯島彌兵衛正勝が女。慶安三年九月三日めされて嚴有院殿に附屬せられ、小十人となり、この日はじめて大猷院殿に拜調す。十二月二十七日月俸十口をたまひ、承應元年十二月十八日廩米百俵をたまふ。明暦二年十二月廿三日百俵を加へらる。寛文六年七月十日死す。年六十。法名道榮。三田の功運寺に葬る。のち代々葬地とす。

重常

杉源八郎重明が祖。伊大夫

重春

藤兵衛 源左衛門 實は甲府の家臣杉伊大夫重常が二男、母は木村氏が女、重世が養子となる。寛文六年十二月十一日遺跡を繼、小普請となる。時年延寶四年四月二十六日小十人に列し、元禄九年十二月二十二日年ごろの精勤を賞せられて金三十兩をたまふ。十年五月十二日組頭にす、み、享保元年二月十八日富士見御寶藏番の頭にうつり、六年四月二十一日死す。年六十五。法名道仙。

女子

田澤五兵衛昌英が妻。

繁孝

藤藏 母は某氏。

元禄六年十二月九日小十人に列し、廩米百俵月俸十口をたまひ、十四年八月二十六日桐間番に遷り、九月十九日御近習に轉じ、十月二十三日御小納戸にす、み、十五年十二月三日二百俵を加賜せられ、すべて廩米三百俵の祿となり、月俸は收めらる。寶永元年九月十一日新番に轉じ、享保十一年十一月七日西城御廣鋪番の頭にうつり、元文二年十一月三日死す。年六十三。法名秀傳。妻は山本彌右衛門忠満が女。

女子

清野與右衛門貞宜が妻。

女子

山名三右衛門義成が妻。

女子

桑島左衛門持藏が妻。

葺陣

數馬 市右衛門 致仕號流夢 母は忠満が女。

享保十二年十二月十二日はじめて有徳院殿に拜調す。時年十五。元文二年十二月二十四日遺跡を繼、三年三月二十日大番に列し、寛延二年八月廿三日新番にうつり、明和二年十一月二十九日番を辭す。四年十二月十日致仕し、寛政元年九月十六日死す。年七十七。法名流夢。妻は窪田市郎左衛門正盛が女。

鎮喬

久三郎 市右衛門 實は桑島伊左衛門持藏が三男、母は繁孝が女、葺陣が養子となりて其女を妻とす。

明和四年十二月十日家を繼、安永二年十二月二十日大番となり、天明八年六月二十六日番を辭し、寛政七年十一月二十九日致仕す。時年七十一。妻は葺陣が女、後妻は大澤又七郎英景が養女。

女子

鎮喬が妻。

鎮誠

千之助 藤藏 母は英景が養女。

天明六年七月朔日はじめ、淡明院殿に拜調し、寛政七年十一月二十九日家を繼。時年三十九。九年十一月二十七日大番に列す。妻は戸張半人胤親が女。

鎮之

藏五郎 母は胤親が女。

某

久三郎

某

千之助

家紋

井桁に一本杉 唐菱

杉

重常 伊大夫 杉源左衛門重清が三男。櫻田の館にをいて清揚院殿につかふ。

重春

藤兵衛 源左衛門 杉市右衛門重世が養子。

昌雄

八兵衛 飯室孫兵衛昌興が養子。

重達

源之丞 伊左衛門 母は木村氏の女。

櫻田の館にをいて書院番を勤め、寶永

重義

三之丞 源左衛門 母は五大夫某が女。

享保二年八月三日遺跡を繼。時年十五。五年五月二十九日小十人となり、十八年八月十六日新番に轉じ、安永五年正月二十五日老を告て務を辭す。このとき黄金二枚をたまひ、九月六日死す。年七十。法名源心。妻は近藤半左衛門近定が女、後妻は大井長右衛門昌諸が女。

女子

小幡内藏助正陽が妻。

久忠

伊織 母は近定が女。

安永五年十二月十二日遺跡を繼、九年十二月二十二日はじめて淡明院殿に拜



調し、天明元年十月九日大番となり、寛政四年十二月二十九日死す。年五十六。法名大隨。妻は中村四郎右衛門則彌が女、後妻は館九八郎羽隆が女。盛方 三郎左衛門 葛木嘉七郎盛生が養子。女子 平野爲之助幸祥が妻。

重明 三之丞 源左衛門 源八郎 母は羽隆が女。天明八年二月十五日はじめて將軍家に拜謁す。寛政五年三月四日遺跡を繼。時三十三歳。慶長七年五月十六日大番となる。妻は横地彌源次安則が女。

女子 西城の大奥につかふ。長隆 卯之助 館九八郎羽隆が養子。

女子 家紋 井桁の内一本杉 唐菱

生野 先祖は岩山を稱し、のち外家の號生野にあらたむ。

宗耶 松壽丸 松壽

萬治元年はじめて嚴有院殿に拜謁し、九月十九日醫をもつてめされて密合となり、廣米二百俵をたまふ。そののち仰をうけ林春齋に添て本朝通鑑を編集す。元祿三年九月十九日さきに家業をはけむべしと仰下さるゝのころ、療治の數すくなかりしとて小普請に駭さる。しかりといへどもこのち醫療精入るのきこえあらば、恩免あるべしとの台命を蒙る。寶永元年四月二十六日死す。年六十三。法名別峰。東叡山の護國院に葬る。のち代葬地とす。妻は土岐長元敦山が女。

某 松庵 貞享四年九月六日はじめて常憲院殿に拜謁す。のち病者たるにより家を繼す。

眞齋 壽仙 松壽 致仕號覺玄 母は敦山が女。寶永元年六月二十七日遺跡を繼。時四歳。享保十三年十二月二十六日致仕し、寶曆八年二月七日死す。年六十八。法名覺夢。妻は榊原彌市郎某が女。

女子 左平太 田邊次郎大夫某が養子。武藏國比企郡松山の觀音寺祐繁が妻。

覺眞 伯壽 松壽 母は彌市郎某が女。享保十三年十二月二十六日家を繼。元

文三年六月朔日死す。年二十八。法名道圓。妻は吉田一庵某が姉。正隆 庄五郎 權右衛門 加藤安左衛門正義が養子。

克明 松之助 松壽 母は某氏。元文三年九月三日遺跡を繼。時四歳。明和三年六月二十八日密合となる。八年十二月二十四日死す。年三十七。法名一乘。妻は山田立長敬之が女。

尙義 太郎 壽軒 母は敬之が女。安永元年三月十日遺跡を繼。寛政元年八月二十九日死す。年三十四。法名承休。妻は日光門主の家士鬼平左兵衛久義が女。一承 鏡五郎 隼人 猪子六左衛門一典が養子。女子 上領玄碩利岑が妻。女子 立花吉之丞直由が妻。

尙親 亨次郎 壽軒 實は服部了元泰路が二男、母は北山氏が女、尙義が終にのぞみて養子となる。寛政元年十一月五日遺跡を繼。時三十七歳。家紋 丸に結雁金 裏菊

谷

次利 庄兵衛 大猷院殿の御時御徒目付となり、後御側衆に屬して國廻をつとめ、其のち班をすすめられて御代官に轉す。内郡二百石。寛文九年三月二十三日職を辭し、十一年二月二十一日死す。法名淪雲。淺草の天龍寺に葬る。のち代々葬地とす。

次勝 彌五右衛門 母は某氏。明曆三年小十人に列し、寛文四年二月二十三日父次利老衰せるによりこれをたすけて御代官をつとめ、九年三月二十三日これをゆるされ、小十人に列す。十一年七月八日遺跡を繼、のち番を辭し小普請となり、享保元年三月二十日死す。年八十七。法名道悟。妻は河内久五郎某が女。

利定 助右衛門 正次 庄三郎 酒之丞 母は久五郎某が女。元祿六年十二月九日小十人となり、其のち番を辭し、享保元年八月十九日遺

谷

跡を繼、四年十月十八日小十人に復し、のち番を辭す。十九年正月二十九日死す。年六十五。法名綠睡。妻は齋藤孫九郎某が女、又西郷八郎左衛門用員が女を娶る。

富次 新十郎 姪兼次が遺跡を相續す。女子 佐野十大夫政方が妻。次吉 又十郎

兼次 助三郎 母は孫九郎某が女。享保十九年五月三日遺跡を繼、廿年七月十五日死す。年三十八。法名自秋。

富次 新十郎 實は次勝が二男、母は正次におなじ。享保二十年七月十九日姪兼次が遺跡を相續し、元文三年六月二十二日死す。法名涼爽。

行次 金五郎 彌五右衛門 實は高木金右衛門頭牧が二男、母は松平兵部大輔家臣山上七郎兵衛某が女、富次が養子となり、其女を妻とす。元文三年九月三日遺跡を繼、四年三月十八日西城の小十人に列し、五年五月

三日刑部卿宗尹卿の近習番となり、八月二十日小性にうつる。寛保二年六月晦日近習番に復し、のち小五郎君に附屬せらる。寛延三年十一月二十五日御納戸番にすゝみ、寶曆十一年二月二十九日西城の新番に轉す。八月三日より本城に勤仕し、十二年十二月十五日西城に復す。安永八年四月十六日より本城に候し、天明元年四月二十七日また西城の務となり、二年三月二十九日老を告て番を辭す。このとき黄金二枚をたまふ。七年六月二十七日死す。年七十五。法名良水。妻は富次が養女。女子 實は佐野十大夫政方が女、富次にやしなはれて行次が妻となる。

女子 三田小左衛門正武が妻。女子 野田三大夫元政が妻。女子 實は高山氏の女、行次にやしなはれて福島助市正胤が妻となる。女子 實は高山氏の女、行次にやしなはれて田安の館に仕ふ。女子 高木文藏頭廣が養女。

次教 金五郎 母は富次が養女。天明七年九月十一日遺跡を繼、八年八月二十九日さきに福島助市正胤、金田惣兵衛正字等とともに松田勝十郎尙房が許に會し、或は正胤次教等が宅にし



て、しばし博奕し、尙房とおなじく娼家にあそびしこと幕下の士たるもの所行にあらずとて、遠流に處せらる。妻は山本源兵衛正度が養女。

次膳 鏡三郎

天明八年八月二十九日父が罪によりて追放せらるべしといへども、いとけなきにより外祖父山本源兵衛正度にめしあづけられ、寛政九年五月二十一日ゆるさる。

直次 龜之助

兄とおなじく正度にめしあづけられ、寛政九年五月二十一日ゆるさる。

家紋 丸に蝶 菊一

谷

先祖瀬兵衛某寛文中御持弓の與力にめし加へられ、六代にして柄明に至る。

柄明 平五郎 瀬兵衛 左中

御持組の與力をつとめ、後御勘定吟味方の改役並となり、天明六年八月四日班をすめられて御勘定吟味方の改役となる。時四十七 慶應元富 八年四月十二日さきに東海道在所々におもむき、川々の普請にあづかりしにより、時服二領黄金二枚をたま

ふ。八月十四日吟味方改役をやめられしとき、御勘定となり、寛政元年二月二十七日伴渡奉行支配の組頭に進む。妻は都筑十左衛門成輝が女。

明雅 藏之丞

實は川勝多四郎隆喜が二男、母は中岡文大夫實綱が女、柄明が養子となり、其女を妻とす。寛政二年九月三日はじめて將軍家にまみえたてまつる。時五十一 妻は柄明が女。

女子 明雅が妻

實は内藤備後守家臣神山新右衛門長衛が女、柄明に養はれて永田氏の妻となる。

家紋 丸に揚羽蝶 五三桐

卷第千二百七

宇多源氏 支流

大淵 家傳

家傳にいはいく、先祖小淵を稱し、後近江國大淵に住して家號をあらたむ。

常起 友庵

元禄九年七月二十九日醫をよくするをもつて召れて常憲院殿に勤仕し、寄合となりて年俸及び月俸をたまひ、十二年十二月二十二日加増ありて廩米百俵月俸五口の祿となる。十五年四月六日奥醫に列し、この日百俵をくはへられ、寶永三年六月十日死す。法名元謂。根津の休昌院に葬る。のち代々葬地とす。

玄通 文庵 友庵 祐庵 母は某氏

寶永二年十一月二十八日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、三年八月二十九日遺跡を繼、小普請となる。七年九月三日より三九に候し、享保十四年務を辭す。十六年五月二十七日致仕し、寛保元年四月五日死す。年六十八。法

名玄丹。妻は大久保長門守家臣安西又兵衛盛直が女。

信逸 文庵 祐閑 母は盛直が女

正徳三年四月朔日はじめて有徳院殿に拜調し、享保十六年五月二十七日遺跡を繼、十九年十一月三日死す。年三十九。法名要心。

瑞榮 幸次郎 昌菴 峰岸春庵瑞澤が養子

傳右衛門 大久保長門守家臣安西又兵衛盛直が養子。河野權兵衛通春が妻。横田登岐守榮松が妻。

信教 豐次郎 文菴 友庵 母は某氏

享保十九年十二月二十五日遺跡を繼。時九歳 寶曆十二年五月十日番醫に列し、天明二年七月八日死す。年五十七。法名維恭。妻は大膳亮好菴道知が女、後妻は津輕土佐守家臣服部又兵衛正敷が女。

女子 河野庄右衛門欲通が養女

女子 一橋の館につかふ

義長 道菴 友元 實は栗原氏が男、母は市川氏の女、信教が養子となり

永澄 十助

芝山

家紋 劍花菱 三輪

女子 實は信教が女、義長に養はれて常吉が妻となる

寛政元年八月十八日はじめて將軍家に拜調し、八年四月十九日家を繼。時五十二歳 妻は義長が養女。

常吉 友山 友菴 實は小林氏が男、母は松平肥後守家臣上羽平兵衛元珍が女、義長が養子となりて其女を妻とす。

てその女を妻とす。明和七年四月四日はじめて渡明院殿にまみえたてまつり、安永七年十二月十四日番醫に列す。天明二年十月五日遺跡を繼、寛政七年三月四日番を辭し、八年四月十九日致仕す。九年閏七月十一日死す。年五十。法名義永。妻は信教が女。

女子 義長が妻

女子 兄義長が養女

實は栗原氏が女、信教に養はれて堀本一甫舜珍が妻となる。

女子 實は栗原氏が女、信教に養はれて堀本一甫舜珍が妻となる

常吉 友山 友菴 實は小林氏が男、母は松平肥後守家臣上羽平兵衛元珍が女、義長が養子となりて其女を妻とす。

天正九年鳥見役にめし加へられ、のち關原をよび大坂兩度の御陣にしたがひたてまつり、元和九年台徳院殿洛にのほらせたまふのとき供奉し、伊勢國鈴鹿にをいて口論せしかば、御氣色かうぶりに改易せられ、寛永九年七月十七日赦免ありてめしかへされ、もとのごとく鳥見役をつとむ。

高永 市兵衛

寛文元年十二月十日遺跡を繼、鳥見役をつとむ。

正眞 市十郎 糟屋八兵衛正房が養子

元禄七年七月十日家を繼、鳥見役をつとめ、九年十月三日中野の犬預に轉す。時百其のち務をゆるされ、小普請となり、寶永元年正月八日死す。法名義精。小日向の生西寺に葬る。のち代葬地とす。

義重 藤九郎 孫左衛門 糟屋與右衛門義之が養子

左平次 糟屋八郎兵衛正良が養子。

正續 篠原左助重寛が妻

女子 篠原左助重寛が妻。



永詮

作大夫 母は某氏。  
寶永元年四月三日遺跡を繼、享保十五年五月二十九日小十人に列し、寛保二年三月二日死す。法名了智。

永弘

作十郎 母は某氏。  
寛保二年六月二日遺跡を繼、寛延二年十月二十八日死す。年二十五。法名常性。  
菴原八兵衛林學が妻。

永保

鎮五郎 實は勝屋善次郎利房が二男、母は糟屋彦三郎正易が女、永弘が終に隨て養子となる。  
寛延二年十二月二十二日遺跡を繼、寶曆五年九月二十八日はじめて惇信院殿に拜謁し、十二月十六日小十人に列す。明和七年四月二十四日番を辭し、天明八年七月二十六日致仕す。時五十六歳

某

早世 定之助

女子

熊太郎 母は金澤氏。

永昌

天明八年七月二十六日家を繼。時五十五歳  
寛政四年九月二十五日はじめて將軍家に拜謁す。妻は高野鎮三郎利春

利衡

が養女。  
永次郎 勝屋岩之助利房が養子。

永義

嘉根吉 母は利春が養女。

家紋 丸に開扇 水車

日置

忠平

七三郎 七郎左衛門 致仕號信休  
元祿八年より御廣敷の御侍を勤む。十年十月七日班をす、められて御用達となり、加増ありて鷹米二百俵の祿となる。寶永六年淨光院殿薨去により、三月二十八日つとめをゆるされて小普請となり、元文二年八月十三日致仕し、四年四月三日死す。年七十五。法名信休。淺草の壽松院に葬る。のち代々葬地とす。妻は永田半助正義が女。

忠綱

勘九郎 實は赤井甚左衛門時之が三男、母は某氏、忠平が養子となりてその女を妻とし、のち父に先だちて死す。妻は忠平が女。  
忠綱が妻。

女子

忠誠

鐵次郎 母は某氏。

家紋 丸に轡十文字 根笠

櫻井

先祖井上また林崎を稱し、忠昌がときめされて家を興し、櫻井にあらたむ。

忠昌

清左衛門 清九郎 致仕號宗祐  
はじめ松平伊豫守綱政につかふ。寶永五年四月四日常憲院殿にめされて西城土圭間番に列し、鷹米百俵を賜ひ、後本城に勤仕し、七年正月十八日五十俵の加恩あり。享保元年有章院殿薨御により、五月十六日番をゆるされ小普請となる。元文二年八月十三日致仕し、延享元年七月五日死す。年六十七。法名日本。二本榎の上行寺に葬る。後代々葬地とす。妻は内藤丹波守家臣安藤友右衛門某が女。

昌忠

七左衛門 母は友右衛門某が女。  
元文二年八月十三日家を繼、五年閏七月廿六日表御右筆となり、寛保二年七月十八日奥御右筆に移る。寶曆九年十二月十五日年頃意なく勤めしにより、黄金三枚を賜ふ。十二年十二月十五日

昌寛

七三郎 母は信明が女。  
寶曆十二年四月十八日はじめて澄明院殿に拜謁し、九月二十八日小十人となり、十二月二十日御小性組に轉じ、のち騎射流騎馬等の射手をつとめて物をたまふ。明和八年八月二十二日父に先だちて死す。年二十八。法名日因。  
法名日廣。妻は澤井平七郎信明が女。

昌榮

拾五郎 七左衛門 實は石原伊右衛門政志が三男、母は大石氏の女、昌忠が終に隨て養子となり、其女を妻とす。  
安永五年八月六日遺跡を繼。時五十九歳  
九年十二月二十二日はじめて澄明院殿にまみえたてまつり、寛政九年四月廿七日御書院番に列し、後水馬の衝を台覽ありて黄金二枚をたまふ。妻は昌忠が養女。

女子

昌忠が養女。

女子

實は昌寛が女、昌忠に養はれて昌榮が妻となる。

女子

家紋 丸に五目 五七桐

山添

以直

宗積

小兒の醫をもつて松平民部大輔吉元につかへ、寶永五年十二月十五日はじめて常憲院殿に拜謁し、晦日めされて奥醫となり、鷹米二百俵を賜ひ、大五郎君に附屬せられ、後百俵を加へられ、すべて三百俵の祿となる。七年逝去により、閏八月四日寄合に列す。享保五年七月三日死す。年五十七。法名元享。麻布の瑞聖寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は松平民部大輔家臣粕谷權六長房が女。

直房

權吉 宗壽

寶永六年十一月十三日はじめて文昭院殿にまみえたてまつり、正徳三年正月八日父にさきだちて死す。

直之

五郎吉 宗古 宗積 母は長房が女。

正徳五年七月十一日はじめて有章院殿に拜謁す。時三歳享保五年十月朔日遺跡を繼、小普請となり、元文四年六月二十五日死す。年三十七。法名淨陰。  
妻は小川玄孝永錫が女。



直紹

種松 宗積 母は永陽が女。  
元文四年九月五日遺跡を繼。時三十一寛延元年八月二十七日死す。年二十四。法名淨性。

直辰

熙春院 兄直紹が養子。

直吉

權吉 宗允 熙春院 法眼 法印  
實は直之が二男、母は永錫が女、直紹が嗣となる。

寛延元年閏十月三日遺跡を繼。時三十一  
百明和六年十一月九日西城の奥醫に列し、十二月十八日法眼に叙す。安永八年四月十八日より本城に候し、天明元年五月二十八日西城に復し、御匙となる。三年十二月十八日法印に昇り、閏十月七日より本城に勤仕し、八年二月廿一日御匙を辭す。寛政四年七月十九日竹千代殿に附屬せられ、五年七月十六日より本城の勤めとなり、九月十五日若君に附屬せられ、御匙となり、九年四月二十一日より西城に候す。十年十二月二十五日勤仕意なきを賞せられて時服二領をたまふ。妻は敷原清菴宗信が女。

直禱

五郎吉 宗積 法眼 母は某氏。  
天明六年十二月七日はじめて將軍家に

卷第千三百八

宇多源氏 支流

橋本

拜謁す。寛政九年二月十三日西城の奥醫となる。時三十三十二月十八日法眼に叙す。妻は皆川主水秀房が女、後妻は田安の家臣桂川市休親明が女、また奥田主馬寛が養女を娶る。  
大奥につかふ。  
山田立長敬信が妻となり、離婚の後西城の大奥に仕ふ。  
八十吉  
松平大膳大夫が家臣となる。

某

五郎吉 母は親明が女。

家紋

五七桐 蛇目

忠良

他之助 覺左衛門

紀伊家につかへ、享保元年有徳院殿本城にいらせたまふのとき、したがひたてまつり、御家人に列し、六月二十五日御小納戸となり、鷹米三百俵をたまふ。七月二十二日布衣を着する事をゆるさる。十一月四月朔日小金野に在りて狩したまふのとき、その事をうけたまはりしにより時服四領をたまふ。十八年六月二十四日右衛門督宗武卿に附屬せられて小性となり、二百石をくはへられ、さきの鷹米を采地にあらため、常陸國眞壁郡下野國芳賀郡のうちをいて、すべて采地五百石を知行す。延享二年十月九日死す。年五

女子

橋本大炊頭房高が妻。

忠貞

大次郎 玄蕃 織部 母は重基が女。

享保十二年十二月十二日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時三十九年三月十三日西城の御小納戸となり、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。元文三年十二月十五日西城の御小性に轉じ、寛保二年五月十日父に先だちて死す。年二十八。法名一夢。

良邦

山三郎 外記 左一

享保十三年正月二十三日小五郎君の近習番となり、後ながく一橋の館に附屬せらる。

女子

久田縫殿助宜如が妻。

正芳

織江 織部 兵部 甚九郎 井上 甚五衛門正辰が養子。

女子

鈴木兵部政方が妻。

忠辰

民部 覺左衛門 母は某氏。  
延享二年閏十二月二日祖父が遺跡を繼、小普請となる。時三十一寶曆七年十一月十一日御書院番となり、九年下總國

英房

彦兵衛

紀伊家に在りて有徳院殿につかへたてまつり、享保元年本城にいらせたまふのときしたがひたてまつり、六月二十五日御小納戸となり、鷹米三百俵をたまふ。七月二十二日布衣を着する事をゆるさる。二年十二月七日御膳の品に不念の事ありしにより、拜謁をとめられ、二十七日ゆるさる。十一年十二月八日死す。法名義誓。淺草の念佛院に葬る。のち代々葬地とす。

女子

寺島藤四郎尙包が妻。

房高

爲助 内膳 新藏 大炊頭 從五位下 母は某氏。

享保五年六月十一日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時三十九年九月二十一日御小納戸となり、十二月十九日布衣を着する事をゆるさる。十一年三月二十日西城の御小性にうつり、十九年十二月十八日從五位下大炊頭に叙任し、寛保元年十月朔日御徒の頭に轉じ、寶曆六年二月七日死す。年四十八。法名那翁。妻は橋本覺左衛門忠良が女、後妻は中島久右衛門某が女、又瑞春院御方の侍女某氏が養女を娶る。

橋本

彦兵衛正房より紀伊家につかへ、四代連綿して英房にいたる。

女子

家紋 丸に四目結 蛇目

忠充

千之助 母は信方が女。  
天明八年四月二十八日はじめて將軍家に拜謁し、十二月二十七日遺跡を繼。時五十五寛政元年六月晦日御小性の番士となる。妻は小野次郎右衛門忠喜が女、後妻は小島昌怡和賀が女、又山崎大隅守正導が女を娶る。

忠雪

三兵衛







女子 佐原三右衛門義行が妻。

政方 武太郎 彌太郎 母は良熊が女。  
寛政四年正月二十六日御勘定となる。  
時二 妻は井上三郎右衛門秀榮が女。

某 女子 吉太郎 母は秀榮が女。

家紋 丸に桔梗 角四目

岡田

正春

源太左衛門  
寛永七年御徒にめし加へられ、後進物取  
次の上番となり、其後神田の館に附屬せ  
らる。

正義

源太左衛門  
はじめ神田の館に勤仕し、延寶八年徳  
松殿にしたがひたてまつり、のち表火  
番に轉す。

正武

源七郎 母は窪田氏。  
元禄十二年十二月九日遺跡を繼、後表  
火番をつとめ、其のち御徒目付にうつ  
る。享保十二年十二月二十日班をす。

女子

正衛門某が養子。

貞恒

庄太郎 母は田中氏の女。  
寶曆四年三月十一日はじめて惺信院殿  
にまみえたてまつり、明和七年十一月  
五日遺跡を繼、小普請となる。  
妻は和田彦大夫惟智が女、後妻は内河  
七左衛門正和が養女。

女子

貞知

理兵衛  
刑部卿宗尹卿につかふ。

貞勝

龜次郎

女子

森清次郎寛柔が妻。

貞親

權九郎 母は正知が養女。

家紋 丸に十五枚笹 丸に笹龍膽

卷第千三百九

宇多源氏 支流

福村

正種

八郎兵衛  
寛政七年六月御徒となり、のち組頭に轉  
す。

正堅

市大夫 善大夫  
寛文元年十二月十日遺跡を繼。

正次

理大夫 母は某氏。  
享保元年十一月五日家を繼、後御廣敷  
の添番をつとむ。寛保元年六月十一日  
班をす、められて西城御廣敷の用達と  
なる。享保二年九月朔日より本城  
に勤仕し、十二月九日務を辭し、小普  
請となる。寛延元年九月五日死す。年  
六十八。法名取誓。下谷幡隨院の向旭  
院に葬る。のち葬地とす。妻は山口  
氏の女。

女子

正敏 金田友之丞正友が妻。  
久米之助 理大夫 母は山口氏の

新番に轉す。妻は山本武右衛門正凭  
が女、後妻は諏訪因幡守家臣遊江理兵  
衛良房が女。

女子 森勘大夫忠永が妻。

忠永

初正忠 孝五郎 實は山本武右衛門  
正凭が四男、母は某氏、正意が養子  
となる。

家紋 黒餅に洲濱 蛇目

笹瀬

貞榮

幾之助 李左衛門  
寶永三年十月御徒にめし加へられ、後御  
作事下奉行となりて拜調をゆるさる。

貞政

安次郎 伊兵衛 助右衛門 母は  
高木彌十郎某が女。  
享保十八年五月四日遺跡を繼、後刑部  
卿宗尹卿に附屬せられ、廣鋪の添番と  
なり、そののち一橋の館に在りて小十  
人に轉じ、大番の組頭を歴て目付にう  
つり、廣鋪用人にすむ。明和七年八  
月四日死す。年六十五。法名義山。深  
川本誓寺の勝徳院に葬る。妻は田中  
氏の女。

政重 治左衛門 六郷阿波守家臣荒川與

女子

寛保元年九月二十一日はじめて有徳院  
殿に拜調し、寛延元年十一月二日遺跡  
を繼、十二月二十日西城の小十人とな  
り、寶曆元年有徳院殿薨御により、七  
月十二日番を聽さる。二年十月十三日  
小十人に復し、八年十一月朔日萬治郎  
君に附屬せられ、近習番となり、のち  
清水の館に勤仕し、物頭を歴て用人に  
すむ、布衣を着する事をゆるさる。  
そののち番頭にうつり、用人もとのご  
とし。寛政三年二月八日死す。年六十  
八。法名悟春。

女子 山中主水盛連が妻。

正慰

初正豊 小善次 理大夫 母は某  
氏。  
寶曆十年四月二十八日はじめて惺信院  
殿にまみえたてまつり、十二年九月廿  
八日西城の御書院番に列し、のちしば  
しば的を射、騎射を務め、あるひは御  
弓場始流騎馬の列にあり、或は放鷹の  
とき鳥を射て時服黄金等をたまふ。寛  
政二年四月二日本城のつとめとなり、  
三年五月六日遺跡を繼。時四十八歳  
三月二十日御腰物奉行に轉じ、十二月  
十六日布衣を着する事をゆるさる。六  
年五月十四日御小納戸にうつり、九月



六日若君に附屬せられ、九年四月二十一日より西城に勤仕す。妻は押田傳左衛門勝輝が女、後妻は寛彌左衛門正休が女、また押田傳左衛門勝輝が養女を娶る。

正統 初正次 久米之助 八郎左衛門 金田友之丞正友が養子。

正武 善之丞 彌左衛門 寛彌三郎方壽が養子。

女子 朝岡八大夫興邦が妻。

正策 久米之助 母は勝輝が養女。

寛政六年八月十一日若君の御加となる。九年四月二十一日より西城に候す。

某 保次郎

女子 中條六八惟堯が妻。

女子 角藏

某 角藏

家紋 丸に釘抜 井桁

倉地

家傳にははく先祖右馬助光茂廣忠卿に奉仕す。その男彌次兵衛茂時東照宮につかへたてまつり、紀伊大納言頼宣卿に附屬

せらる。これより三代文左衛門満房享保三年淨圓院御方江戸に下向のとき従ひたてまつり御家人に列し、御廣敷の伊賀をつとむ。忠見はその男なり。

忠見 久太郎 文左衛門 仁左衛門 御廣敷の伊賀をつとめ、のち西城御庭役となり、延享二年十二月十一日班を進められて御休息御庭の者支配となり、林奉行の次席に列す。寶曆十年四月朔日より二九に勤仕し、十一年信院殿院殿御により、八月三日本城のつとめとなり、明和二年三月二十二日死す。年六十。法名常照。四谷の正見寺に葬る。のちおなじ。妻は馬場瀧右衛門包廣が女。

政之助 實は紀伊家の臣倉地文大夫忠利が男、母は同家の臣山田清之右衛門某が女、忠見が養子となる。寶曆七年三月十五日はじめて信院殿にまゐたてまつり、四月十八日御庭番となり、小十人に准ぜらる。明和二年六月三日遺跡を繼、御庭預となる。時三十二年八月五日御休息御庭の者支配にうつり、寛政六年七月十一日御金奉行に轉ず。妻は馬場善五兵衛信富が女。

満濟

政之助 實は紀伊家の臣倉地文大夫忠利が男、母は同家の臣山田清之右衛門某が女、忠見が養子となる。

國長 久太郎 母は信富が女。

寛政九年正月二十二日御庭番となり、小十人に准ぜらる。妻は一橋の家臣淺井平十郎重房が女。

某 門三郎 馬場を稱す。

家紋 藤巴 平四目結

安西

彌大夫俊次慶安三年九月御徒にめし加へらる。俊政はその男なり。

俊政 八十郎 又八郎

はじめ御徒をつとめ、のち組頭となる。

女子 多喜庄大夫道虎が妻。

政房 又五郎 彌大夫 母は梶川次郎右衛門光一が女。

はじめ西城の御徒を務め、後支配勘定に轉じ、寛保二年十二月二日遺跡を繼、寛延三年十二月十六日班を進められて御勘定となる。寶曆八年七月二日先に甲斐、美濃、伊勢等川々の普請を檢せしにより時服二領黄金二枚を賜ふ。九月六日死す。年五十四。法名日喜。淺草の本立寺に葬る。妻は稻葉越中

政次 又七郎

守家臣山田市郎左衛門忠吉が女。御徒をつとむ。

俊央

八十郎 又五郎 又八郎 彌大夫 母は忠吉が女。寶曆五年十二月六日御勘定となり、八年十二月三日遺跡を繼。天明五年十二月二十四日西城の小十人に列し、安永八年四月十六日より本城に勤仕す。天明元年五月二十六日西城のつとめとなり、三年九月十四日番を辭す。

房春 八五郎

小澤平左衛門某に婚を約し、いまだ嫁せずして平左衛門某死するに より、相樂大七郎秀猛が妻となる。

女子 岡田源藏正幸が妻。

俊正 早世 八十郎

織部 八十郎 母は足立氏。妻は酒井豊三郎定次が女。

某 五郎作

女子

家紋 丸に釘抜 丸に松皮菱

野村

氏正 彌兵衛

重氏 五左衛門

松平因幡守忠憲につかふ。

正勝 野村權九郎正福が祖。彦右衛門

正義 伊大夫

寛永十九年御徒にめし加へられ、後御徒目付を歴て紅葉山火番となる。

正宗 佐左衛門 實は高木善兵衛某が男、正義が養子となる。

延寶七年十一月二十七日家を繼、父がつとめとなる。

重義 伊大夫

寶永七年四月二十六日家を繼、のち富士見御寶藏番をつとむ。

正側 幾四郎 實は牛袋左兵衛秀胤が男、重義が養子となる。

延享四年十二月二十四日遺跡を繼、のち富士見御寶藏番をつとむ。

野村

正勝 彦右衛門 野村彌兵衛氏正が二男。

家紋 丸に角遠四目結 三頭右巴



寛永元年御徒となり、後二丸火番を歴て二丸御門番となる。

直俊

作右衛門 實は取田氏が男、正勝が養子となる。  
延寶二年四月七日家を繼、父がつとめとなる。

久吉

六郎左衛門 實は朽木民部少輔家臣北條源右衛門某が男、直俊が養子となる。  
元祿六年十二月六日家を繼、のち二丸火番より二丸御門添番を歴て八重姫君の侍をつとむ。

正英

左大夫  
正徳三年四月二十三日家を繼、のち養仙院御方の侍をつとむ。

正方

平八郎 實は牧六右衛門某が男、正英が養子となりて其女を妻とす。  
元文五年閏七月二十五日遺跡を繼、富士見御寶藏番をつとむ。

正名

權九郎 彦右衛門 母は正英が女。  
寛保二年五月三日遺跡を繼、富士見御寶藏番より支配勘定に轉じ、評定所の

野村

留役をつとむ。寶曆七年十二月二十七日班をす、められて評定所の留役となる。唐木官儀十二月二十四日檢地の事をうけたまはり、武藏國埼玉郡蒲生村におもむく。明和二年十二月二十日御代官にうつり、天明四年七月二十日職を辭し、小普請となり、十一月五日死す。年六十。法名了無。牛込の長昌寺に葬る。妻は坂本三郎右衛門品章が女。

正福

初正敏 孫六 權九郎 實は江坂孫三郎正恭が三男、母は某氏、正名が養子となりて其女を妻とす。  
安永二年三月二十五日はじめて澄明院殿に拜謁す。天明四年閏正月二十六日御勘定となり、八月十三日御代官にすすみ、十二月二十六日遺跡を繼。時正二寛政十年七月十一日美作國村々論所を檢せんがため仰をうけたまはり、彼地に赴く。妻は正名が女。

正名

實は坂本三郎左衛門某が女。正名に養はれて大奥につかふ。

正定

辨之助 爲次郎 内藤與惣兵衛正

女子

名が養子。

某

早世 萬十郎

女子

兵吉郎 母は正名が女。  
寛政十年十二月二十二日はじめて將軍家に拜謁す。時正二妻は尾張家の臣間瀬權右衛門成昌が女。

某

直次郎  
實は江坂十郎兵衛正幸が女。正福に養はる。

家紋

丸に四目結 三星 連錢 右三巴

野村

有巨

忠助  
元文二年御徒にめし加へられ、のち西城御徒目付にうつり、そのち御作事の下奉行となり、拜謁をゆるされ、寶曆八年三月二日班をす、められて佐渡奉行支配組頭に轉じ、明和元年四月二日西城切手御門番の頭に轉じ、七年十一月三日死す。年六十。法名源雄。鯉橋の發昌寺に葬る。のちおなじ。妻は内藤紀伊守家臣内藤

八左衛門實充が女、後妻は鹽野氏が女。

女子

小泉平兵衛義利が妻。

信相

勝之助 母は鹽野氏が女。  
寶曆八年三月十八日はじめて惇信院殿にまみえたてまつる。時正十明和七年十二月二十七日遺跡を繼、小普請となり、天明四年三月二十五日死す。年四十一。法名良忠。妻は小峰氏が女。

有勇

初茂成 八郎 奥山平助義求が養子となり、のち病によりて兄がもとにかへる。

政府

十三郎 半左衛門 溝口求馬政長が養子。

某

長十郎 父にさきだちて死す。

有教

松五郎 實は染木宇兵衛美啓が四男、母は松平越前守家臣白井茂左衛門勝安が女、信相が養子となりて其女を妻とす。  
天明四年六月四日遺跡を繼。時正十妻は信相が女。

女子

有教が妻。

某

早世 鈞太郎

家紋 角四目結七割 丸に梅鉢

山中

幸正

初幸寛 太郎右衛門  
寶曆十一年五月十五日御先手與力にめし加へられ、のち支配勘定に轉す。天明元年閏五月十四日班をす、められて御代官となる。時正八寛政十年三月二十七日死す。年六十四。法名常山。麻布の靈泉院に葬る。妻は分部左京亮家臣長野主税忠親が女、後妻は渡邊左門久教が女。

女子

水野小十郎元休に嫁し、離婚ののち戸田五助勝愛が養女となる。

幸侶

近之進 辰三郎 母は忠親が女。  
天明二年三月二十二日はじめて澄明院殿に拜謁し、寛政十年六月四日遺跡を繼、小普請となる。時正八十五妻は富松五兵衛廣備が女。

幸榮

求馬  
渡邊助三郎久年が養女。

女子

鈞之助 勘十郎 青柳勘七郎正之が養子。

重方

峯五郎 前嶋式部榮道が養子。  
岩之丞 大津新左衛門信就が養子

信茂

女子

女子

名が養子。

某

早世 萬十郎

女子

兵吉郎 母は正名が女。  
寛政十年十二月二十二日はじめて將軍家に拜謁す。時正二妻は尾張家の臣間瀬權右衛門成昌が女。

某

直次郎  
實は江坂十郎兵衛正幸が女。正福に養はる。

家紋

丸に四目結 三星 連錢 右三巴

野村

有巨

忠助  
元文二年御徒にめし加へられ、のち西城御徒目付にうつり、そのち御作事の下奉行となり、拜謁をゆるされ、寶曆八年三月二日班をす、められて佐渡奉行支配組頭に轉じ、明和元年四月二日西城切手御門番の頭に轉じ、七年十一月三日死す。年六十。法名源雄。鯉橋の發昌寺に葬る。のちおなじ。妻は内藤紀伊守家臣内藤

女子

乙三郎 母は廣備が女。

某

家紋 檜扇の上二挺墨 丸に橘 五輪造

星野

濟益が五代の祖彌右衛門庶榮櫻田の館にして清揚院殿につかへ、その子四郎兵衛房濟寶永元年文昭院殿西城に入せ給ふの時從ひ奉り、西城御廣敷の伊賀者を務む。

濟益

定四郎 織右衛門  
御廣敷伊賀者をつとめ、のち支配勘定に轉す。

濟興

定四郎 父にさきだちて死す。

女子

鈞三郎 母は木村氏の女。  
支配勘定の見習をつとめ、天明七年十一月七日遺跡を繼、支配勘定となり、後評定所留役の助をつとむ。八年八月十九日班をす、められて御勘定となり、評定所の留役をつとむ。時正三寛政三年二月八日寺社奉行支配留役となり、のちこの役を寺社奉行支配吟味物

益庶

鈞三郎 母は木村氏の女。  
支配勘定の見習をつとめ、天明七年十一月七日遺跡を繼、支配勘定となり、後評定所留役の助をつとむ。八年八月十九日班をす、められて御勘定となり、評定所の留役をつとむ。時正三寛政三年二月八日寺社奉行支配留役となり、のちこの役を寺社奉行支配吟味物



調役とあらためらる。妻は山岡安兵衛親方が女。

庶友 辰之助 母は某氏。

女子

家紋 丸に柏葉打違 七曜

恩田

●忠正

九右衛門

寛永四年御徒にめし加へられ、のち二丸の火番を歴て二丸御門の添番となる。

●忠重

友之助 八左衛門 九左衛門

二丸の火番二丸御門の添番を歴て御徒目付をつとむ。

●忠賢

新五郎 新八郎 九左衛門

表火番をつとめ、のち御徒押御徒目付押太鼓役等を歴て小細工奉行となる。

●忠賢

友之助 新八郎

延享三年八月四日家を繼、のち富士見御寶藏番をつとむ。

赤松の諸流師季よりいづ。

●季房

成季力 従三位

●季則

源大夫

●頼範

成頼則 播磨守 従五位上 號小田入道生佛

●則景

播磨守 従五位 號赤松太郎入道

●家範

播磨守 従四位

●久範

兵部少輔 従五位

●茂範

或茂則 赤松太郎

●義則

次郎

●則村

次郎 五位判官 入道城圓心

●範資

信濃 江見の家傳に、其祖宇野新大夫爲則は範資が三男也といふ。

●則祐

律師 號妙善

●忠礎

菊吉 新八郎 實は各務傳五郎元輝が三男、母は加賀美氏が女、忠賢が養子となる。

寛政元年十一月十九日家を繼、のち御徒目付となり、其のち鳥見役をつとむ。八年四月六日班をすゝめられて御勘定となる。和暦四月二十日 十年九月十六日美濃、伊勢、尾張等の三國川々普請の事をうけたまはり、かの地におもむく。

家紋 角四目結

卷第千二百十

村上源氏

●具平親王

中務卿 二品 村上天皇第七の皇子。

●師房

初實定 左大臣 従一位 號土御門

寛仁四年十二月二十六日源朝臣の姓を賜ふ。

●顯房

右大臣 従一位 號六條

●雅實

太政大臣 従一位 號久我

●雅定

右大臣 正二位 號中院

●雅通

内大臣 正二位 號久我

●定房

大納言 正二位 號堀川

●定忠

右少將 従四位上

●師季

近江守 左中將 正三位

●通親

内大臣 正二位 號土御門

●通光

太政大臣 従一位 號後久我

●通方

大納言 正二位 號土御門

北畠の諸流これよりいづ。

●雅家

大納言 正二位 號萬里小路又北畠

●師親

大納言 正二位

●師重

大納言 正二位

●親房

大納言 准大臣 従一位

●顯能

大納言 正二位

子孫相繼て伊勢の國司たり。

●顯泰

中納言 正二位

●滿雅

左中將

●教具

大納言 従二位

●政郷

初正具 右中將 正四位下

佐田の家傳に、其祖丹後守定具は教具が三男なりといふ。

●材親

初具方 大納言 正二位 渥美の家傳に、其祖大膳大夫政能は材親が三男なりといふ。

●具忠

彈正少弼 右中將 従四位下 號田丸 田丸の家傳、具忠を材親が三男としその後胤なりといふ。

●通忠

大納言 正三位

●通有

右少將 正四位下 六條の流これよりいづ。

●有房

内大臣 従一位 號六條

●有忠

中納言 正二位

●有光

中納言 正二位

●有孝

左中將 正四位下

●有定

大納言 従二位

●有繼

中納言 正二位

●有親

有繼より有親にいたるまで其間中絶す。初俊久 俊廣 中納言 従二位



有純

參議 正三位

有和

中納言 正三位

氏豊

子孫代々縉紳家たり。  
戸田の祖。初光教 忠元 土佐守  
侍從 從四位下

通基

内大臣 從一位 號後久我

通雄

太政大臣 從一位 號中院

長通

太政大臣 從一位 號後中院

通相

太政大臣 從一位 號千種

具通

太政大臣 從一位 號久世

通宣

大納言 右大將 正二位

清通

太政大臣 從一位 號後久世

通博

初通尙 太政大臣 從一位 號東  
久世

豐通

右大臣 從一位

某

久世之祖。左大夫

通言

右大臣 從一位

晴通

大納言 右大將 正二位

通堅

初通興 通俊 大納言 右大將  
正二位

敦通

初吉通 季通 大納言 正二位

通世

左中將 從四位下

通前

中納言 從三位

堯通

左少將 正五位下

廣通

右大臣 正二位

通名

中納言 從三位

通誠

初時通 通縁 通規 内大臣 從一  
位 子孫相繼て縉紳家たり。

廣益

有馬の祖。兵部大輔 侍從 從四位  
上 號堀川

有馬

廣益堀川を稱し、廣之がときにいたり有馬にあらたむ。

廣益

繁丸 左門 修理 兵部大輔 侍從  
從五位下 從四位下 從四位上 久  
我中納言通名が男、母は西園寺中納  
言公滿が女。

寶永七年十二月めされて江戸にいたり、  
二十五日はじめて文昭院殿に拜謁し、二  
十七日御側高家となり、從五位下侍從に  
叙任し、兵部大輔にあらたむ。この日上  
野國群馬郡のうちにをいて采地五百石を  
たまひ、御料の服をたまはる。正徳元年  
十一月二十三日從四位下に昇る。のち御  
手づから御紋の三所物をよび御印籠等を  
たまふ。二年十月十八日文昭院殿御遺物  
無銘の御脇指をよび御料の服をたまふ。  
享保元年五月十六日この勤を止らるゝに  
より高家となる。元文二年凌明院殿御生  
誕を賀せられ、勅使參向により、十月朔日  
これを謝したまふの御使をうけたまはり  
て京都におもむく。寛保元年四月十五日  
若宮降誕により賀儀の御使をうけたまは  
り、京師におもむき、五月二十日從四位  
上に昇る。延享二年六月二十六日法華八  
講行はるゝのとき、其事にあづかりしに  
より時服三領をたまふ。三年三月四日京

都にいたり、備君親王宣下のことを賀し  
たまふのとき、御使をつとめ、寶曆二年  
四月二十三日肝煎となる。六年四月七日  
卒す。年六十三。法名宗賢。澁谷祥雲寺  
の景德院に葬る。のち葬地とす。妻は  
天英院殿の老女秀小路が養女。

女子

實は久我中納言通名が女。廣之にや  
しなはれ、高島近江守廣行が妻と  
なる。

女子

島山紀伊守國祐が妻。

正輝

外記。右門 庶子たるにより二男に  
准ず。後中根平十郎正美が養子とな  
る。

廣之

初廣福 熊之丞 修理 兵部大輔  
侍從從五位下 從四位下 從四位  
上 母は秀小路が養女。

寛延二年十一月朔日はじめて惺信院殿  
にまみえたまつり、表高家に列し、寶  
曆六年七月六日遺跡を繼、七年十二月  
二十四日高家となり、從五位下侍從に  
叙任し、兵部大輔にあらたむ。十三年孝  
恭院殿御生誕により、四月朔日御使を  
うけたまはりて京師におもむく。明和  
三年五月九日孝恭院殿の御使として京  
師におもむく。これ御元服御官位のご  
とあるによりてなり。六月二十八日從  
四位下に昇り、安永五年四月四日肝煎

某

早世 恒太郎

女子

早世 林之助 川崎を稱す。

忠休

単人 平右衛門 犬塚半右衛門忠  
暁が養子。

信成

監物 平吉 安部駿河守信富が養  
子。

正孝

六之助 近藤小十郎忠興が養子。

女子

伊達遠江守候が養女。

廣春

修理 勘解由 修理大夫 兵部大輔  
侍從從五位下 母は忠寛が養女。

廣春

天明元年閏五月十五日はじめて凌明院殿  
に拜謁す。五歳この日表高家に列し、四  
年七月十二日高家の見習となり、十二  
月十六日從五位下侍從に叙任し、修理大夫  
にあらたむ。二十三日高家となる。寛政  
二年五月四日遺跡を繼。寶曆七年十二月  
十二日女院崩じたまふにより、御使にさ  
されて京師におもむく。妻は小笠原飛  
驒守信房が女。

某

金次郎 川崎を稱す。

某

甲三郎 川崎を稱す。

女子

小長谷和泉守政良が妻。

久世

家傳に、平四郎長宜が男平四郎忠定東照  
宮につかへたてまつり、忠定三代の孫才  
兵衛定勝百人組の與力をつとむ。定春は  
其男なりといふ。按ずるに平四郎長宜は  
舊家久世の祖にして彼家の系圖長宜が男  
に忠定所見なし。其祖は久我太政大臣通  
博が二男左大夫某より出、四代にして兵

某

早世 恒太郎

女子

早世 林之助 川崎を稱す。

忠休

単人 平右衛門 犬塚半右衛門忠  
暁が養子。

信成

監物 平吉 安部駿河守信富が養  
子。



宣にいたる。

●定春

平之丞 伊兵衛 平四郎 致仕號柳山。神田の館を以て常憲院殿につかへたてまつり、小姓をつとめ、後目付役を歴て作事奉行に轉ず。延寶八年本城にうつらせたまふのとき、したがひたてまつり、御家人に列し、小石川の御殿番をつとめ、鷹爪三百俵をたまふ。天和三年十二月十一日桐間番にうつり、後ゆへありて拜調をはかり、元祿五年五月九日赦免あり、此日小普請となる。十六年七月廿二日致仕し、正徳三年十二月廿五日死す。年七十八。法名日勝。本所小梅の常泉寺に葬る。妻は高井市右衛門眞清が女。

●某

具貞

早世 平太郎  
早世 四郎三郎  
初定清 定親 平之丞 平四郎  
伊兵衛 致仕號一法 母は眞清が女。  
元祿十六年七月二十二日家を繼、寶曆四年四月七日大番となり、享保十三年十月二十四日番を辭す。十二月二十六日致仕し、十五年九月二十五日死す。年六十六。法名日進。丸山の本妙寺に葬る。妻は松平越前守家臣平野仁右

衛門某が女。

●某

定堅

早世 新三郎  
早世 金五郎  
次郎大夫 伊織 平四郎 實は蜂屋十郎兵衛清綱が二男、母は瀧川八郎右衛門一俊が女、定該が養子となりて其女を妻とす。  
享保二年五月十二日はじめて有徳院殿に拜調す。十三年十二月二十六日家を繼、十四年十二月廿三日大番に列し、元文二年正月十一日二條城の守衛にありて死す。年四十。法名日繼。京都千本の愛染寺に葬る。妻は定該が養女。  
飯高源左衛門眞宣が妻。  
實は内藤源五郎正弘が女、定該にやしなはれて定堅が妻となる。  
鈴木長八郎正上が妻。

●某

定能

文四郎 父にさきだちて死す。  
初定政 次郎八 左門 平四郎  
實は久世氏の男、母は中野氏の女、定堅が養子となりて其女を妻とす。  
享保十八年六月二十八日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。元文二年四

月二日遺跡を繼、八月二十五日西城の御腰物方となり、寛保元年六月六日新番に轉じ、のちしばし射を射て時服を賜ふ。安永五年四月淺明院殿日光山に詣たまふにより、かの地にいたり宿制の事をつとむ。六年四月二十九日御鎧籠奉行に轉じ、天明四年十一月三日死す。年七十三。法名日冠。葬地定該におなじ。妻は定堅が女、後妻は新見七右衛門正治が女。  
定能が妻。

●女子

●女子

●某

定玄

早世 次郎八  
早世 亥左太郎  
亥之助 藤三郎 實は久世氏が男、母は某氏、定能が養子となりてその女を妻とす。  
明和元年閏十二月十六日大番に列し、三年八月三日父に先だちて死す。年二十四。法名日在。葬地定該におなじ。妻は定能が女。  
定玄が妻。  
初定維 平三郎 實は久世氏が男、母は某氏、定能が養子となる。  
安永六年十二月二十一日はじめて淺明

院殿に拜調す。天明四年十二月二十六日遺跡を繼。享保三十八年寛政四年十二月二十二日大番となる。  
女子 秋山爲之助正秀が養女。

●女子

●女子

●定澄

●定耀

●家紋

丸に豎一枚鷹羽 丸に橘

●戸田

●氏豊

氏豊外家の號を冒して戸田を稱す。  
はじめ母のゆかりによりて戸田左門氏鐵がもとに寄食し、その領地美濃國大垣に住す。慶安二年十月朔日はじめて大猷院殿に拜調し、十二月十五日武藏國足立郡のうちを以て采地千石をたまひ、三年十二月二十九日高家に列し、從四位下侍

從に叙任し、土佐守にあらたむ。萬治元年四月二日新院痘瘡をうれへさせたまふにより、御使をうけたまはりて京師におもむく。寛文元年五月十三日禁裏炎上ののち遺營なりて還幸のとき、おほせをうけたまはりて京師にいたる。延寶元年五月十三日禁裏院中炎上により御使にさゝれて洛におもむく。七年十月十五日つとめを辭し寄合に列す。元祿九年十二月十一日致仕し、十一年八月二十九日卒す。法名日融。本所の法恩寺に葬る。のち代葬地とす。妻は本多出羽守正勝が女。

●氏興

初豐長 圖書 中務 中務大輔  
能登守 中務大輔 侍從從五位下  
從四位下 母は某氏。  
貞享三年三月朔日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、元祿九年二月十一日家を繼、この日高家となり、二十二日從五位下侍從に叙任し、中務大輔にあらたむ。寶永二年正月十一日肝煎となり、三月二十三日さきに常憲院殿御轉、任文昭院殿御昇進により、おほせをうけたまはりて松平隱岐守定直に副て京師におもむく。この日武藏國埼玉郡のうちを以て采地千石を加へられ、すべて二千石を知行す。洛にいても禁裏より勝光御太刀を賜はり、閏

四月七日從四位下に昇る。六年七月十二日御臺所御叙任のとき、御使にさゝれて京師にいたる。十月二十五日卒す。年四十。法名日行。妻は大上藤某氏が養女。  
主水  
中條左京信慶が養女。  
阿部四郎五郎政恒が妻。  
大上藤某氏が養女となり、富田甲斐守知郷に嫁す。  
實は戸田采女正氏信が七男式部氏方が女、氏豊に養はれて松平源大夫定隆が妻となる。

●某

●女子

●女子

●女子

●女子

●氏尹

岩之助 大學 致仕號寛休 實は内藤筑後守信有が四男、母は某氏、氏興が終にのぞみて養子となり、其女を妻とす。  
寶永六年十二月廿五日遺跡を繼、表高家に列す。七年四月十九日はじめて文昭院殿に拜調し、寛保二年七月二十六日致仕し、明和六年十月二十五日死す。年七十三。法名日遊。妻は氏興が女。  
氏尹が妻。

●氏富

●内匠

文太郎 縫殿 遠江守 侍



從五位下 母は氏興が女。  
 享保十七年十二月六日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時年十寛保二年七月二十六日家を繼、寶曆二年十二月朔日高家に列し、從五位下侍從に叙任し、遠江守と稱す。六年八月二日千代姫君生誕により、おほせをうけたまはりて日光山におもむく。十一年九月三日卒す。年四十四。法名日利。妻は水野丹波守分實が女。

氏朋

文太郎 圖書 中務大輔 土佐守 侍從從五位下 從四位下 母は某氏。  
 寶曆六年十一月朔日はじめて尊信院殿に拜謁し、十一年十二月四日遺跡を繼。時年三十五。明和四年十二月十一日高家に列し、從五位下侍從に叙任し、中務大輔にあらため、五年四月十日萬壽姫君尾張中將治休卿に御婚約あるにより、御使をうけたまはりて日光山におもむく。安永五年六月朔日後桃園院麻彦御平愈の嘉儀としておほせをうけたまはりて京師におもむく。これさきに大澤相摸守基典の御使たりしに駿河國吉原驛にて病にかゝるによりてなり。上京のとき禁裡仙洞その外の御所より物をたまふ。天明二年將軍家御元服によ

家紋 九曜 龍鷹丸 丸に笹龍鷹

千種

家傳に、千種大納言長通が後裔なりといふ。按ずるに、長通は後中院と號し、其子太政大臣通相はじめ千種を稱す。

勝正

長右衛門 庄兵衛  
 天正十五年より東照宮につかへたてまつり、のち富士見番をつとむ。

勝重

忠兵衛  
 御廣敷の添番をつとむ。

女子

長谷川甚兵衛安茂が妻。  
 岡田庄大夫俊惟が妻。

勝精

忠右衛門 忠兵衛 母は某氏。  
 貞享元年十二月十八日家を繼、のち御天守番をつとめ、元祿十六年五月二十六日班をすゝめられて小十人となる。享保三年三月二十六日小普請方に轉じ、九年閏四月十八日務を辭し、小普請となり、六月二十七日死す。年六十五。法名常樂。淺草の本智院に葬る。のち代々葬地とす。妻は水戸家の臣成頼源左衛門某が女。

り五月朔日御使をうけたまはりて京師にいたり、禁裏より定行の御太刀をよび十二月花鳥和歌、仙洞より源氏八景の詞書を恩賜あり。其余御所方よりも物をたまふ。六月二十八日從四位下に昇る。寛政九年十一月十六日肝煎となる。妻は日野若狭守實陽が女、後妻は戸田主水定候が女。

某

女子 阿倍四郎五郎政景が妻。  
 女子 内藤筑前守忠が妻となり、のち離婚す。

充之

爲之助

女子

女子

女子

氏倚

文太郎 圖書 備後守 侍從從五位下 母は定候が女。  
 寛政元年五月十五日はじめて將軍家にまみえたてまつり、十年九月十四日高家の見習となる。時年三十二。十二月十六日從五位下侍從に叙任し、備後守にあらたむ。妻は戸田兵庫頭氏紹が女、後妻は松平河内守定休が女。

女子

充利

大澤内膳基靖が妻。基靖死するのち山名小次郎義矩に再嫁す。  
 勇之進

某

勝助 實は某氏が男、勝精が養子となる。  
 寶永六年四月六日小十人に列す。

勝弘

左源太 實は黒澤氏が男、母は某氏、勝精が養子となり、其女を妻とす。

享保三年七月十一日はじめて有徳院殿に拜謁し、九年九月三日遺跡を繼、十一年正月二十八日西城の小十人に列し、寶曆十一年八月三日より本城に勤仕し、十二年六月八日老を告て番を辭す。このとき金十兩をたまふ。明和二年九月十二日死す。年七十三。法名清山。妻は勝精が女。

女子

女子

女子

勝利

左仲 忠兵衛 母は勝精が女。  
 寶曆二年十二月二十七日西城の小十人に列し、十一年八月三日より本城に勤仕す。十二年十二月十五日西城に復し、明和二年十二月四日遺跡を繼、のち的を射て時服をたまふ。七年四月二十四日番を辭し、安永七年七月十五日死す。年六十一。法名空觀。妻は竹垣次郎右衛門喜道が女。

女子

勝定

百助 母は喜道が女。  
 安永七年九月六日遺跡を繼。時年二十五。天明八年十二月二十三日はじめて將軍家にまみえたてまつり、寛政九年閏七月二十九日小十人に列す。妻は野澤重次郎清雄が養女。

勝用

女子

家紋

三頭左巴 十六葉菊

卷第千三百十一

村上源氏

竹内

家傳に、久我の末流なり。正盛が父平大夫正勝、實は青木又藏兼重が長男にして竹内理左衛門盛清が養子となり、神田の館につかふ。

正盛

平左衛門  
 神田の館にをいて書院番をつとむ。八年徳松殿にしたがひたてまつり、御家人に列し、廩米二十石をたまはりて西城につとむ。天和二年十月五日死す。年四十五。法名傳心。本郷の喜福寺に葬る。のち代々葬地とす。

正祥

十内 平左衛門 實は正盛が弟としてその嗣となる。  
 父に繼て西城に勤仕し、天和三年徳松殿逝去のち小普請となる。元祿七年五月二十一日桐間の番士となり、二十九日大番に轉じ、正徳五年七月三日死す。年六十五。法名祖參。妻は山田平右衛門重利が女、後妻は佐野次郎兵



衛政時が養女。

正生

小平次 母は政時が養女。寶永二年閏四月十五日はじめて常憲院殿に拜謁す。三十七年四月六日大番に列し、正徳五年十月二日遺跡を繼、元文五年五月二十七日より御藏奉行をつとむ。寶曆四年十月十九日御具足奉行にうつり、六年正月二十六日務を辭し、十二月二十六日致仕す。明和四年四月十二日死す。年七十五。法名坦然。妻は豊原左助勝喜が女。

政敏

九十郎 平大夫 頼母 石原頼母 政員が養子。實は青木八郎兵衛道秋が女。正祥に養はれて矢頭宇右衛門長英が妻となる。

女子

實は青木八郎兵衛道秋が女。正祥に養はれて矢頭宇右衛門長英が妻となる。

正峯

次郎三郎 平左衛門 實は石原頼母政敏が二男、母は石原頼母政員が女、正生が養子となる。延享二年九月十二日はじめて有徳院殿に拜謁し、寶曆六年十二月二十六日家を繼、明和元年四月二十四日大番に列し、二年七月八日死す。年三十八。法名翠榮。妻は豊原左太郎勝房が女。

正義

誠五郎 實は豊原左太郎勝房が五

男、母は久能氏の女、正峯が終にのぞみて養子となる。明和二年十月六日遺跡を繼、四年五月二十一日死す。年三十一。法名了轉。

正相

熊五郎 小平次 實は松平次郎左衛門信村が二男、母は石原頼母政敏が女、正義が病篤きにのぞみて養子となる。明和四年八月五日遺跡を繼、安永五年十二月二十三日淺明院殿に拜謁す。天明元年七月二十七日西城の御納戸番に列し、六年四月二十七日死す。年三十六。法名道淋。妻は小幡市郎左衛門直政が女。

正武

八之丞 平左衛門 母は直政が女。天明六年七月四日遺跡を繼。寶曆四年九月二十五日はじめて將軍家に拜謁し、六年六月二十二日大番に列し、のちの射てものをたまふ。妻は本多直之進秀政が女。

女子

石川左近將監忠房が養女。久五郎 次郎左衛門 松平喜三郎信賢が養子。

家紋 源氏車 四目結

渥美

家傳に、北畠大納言材親が三男大膳大政能美濃國厚見郡を領して厚見を家號とし、のち渥美にあらたむ。其男渥正大親政親これ親貞が父なりといふ。

親貞

出雲守 伊勢國白子城に住す。永祿十二年没落し、男親吉を携へて三河國にいたり、東照宮につかへたてまつる。のち黒縮緬御頭巾を拜賜す。天正十五年死す。法名元光。伊勢國一志郡大河坂村の淨眼寺に葬る。妻は植村庄右衛門某が女。

親吉

善七郎 母は庄右衛門某が女。東照宮に奉仕し、元龜三年十二月三方原の役に討死す。年十七。法名淨雲。

親時

又右衛門 母は上におなじ。慶長元年より東照宮につかへたてまつり、のち廩米三百俵をたまふ。元和二年八月十二日死す。法名惠現。四谷の西念寺に葬る。妻は村田豊後守某が女。

貞教

與四右衛門 寛永譜阿部第三の承圖、貞友に作る。母は上におなじ。東照宮につかへたてまつり、誠炮足

某

與四右衛門 母は重吉が女。父が遺跡を繼、某年死す。嗣なくして家たゆ。

貞重

初貞俊 久五郎 兄與四右衛門某家絶るのち、舅阿部新右衛門重次に養はる。

守時

又右衛門 母は豊後守某が女。父が遺跡を繼、大番をつとむ。寛永九年より駿河城を守衛し、十一年一隊の士こぞりて交代のことを懇訴せしにより、十月十三日御勘氣かうぶり、改易せらる。慶安四年十月十七日赦免あり、承應元年十二月十八日ものとごとく廩米をたまひ、大番となる。明暦元年五月朔日死す。年六十五。法名源相。葬地親時におなじ。妻は渥美太郎兵衛友真が女。

時眞

長次郎

影吉

次郎左衛門

宗清

平左衛門 三郎兵衛 母は友真が女。

承應三年二月二十七日大番に列し、明暦元年十二月二十一日遺跡を繼、寛文元年正月より御藏奉行をつとめ、七年二月十六日これをゆるさる。九年閏十月十八日年頃意りなくつとめしにより黄金五枚をたまふ。十一年七月十八日仰をうけたまはりて上總下總等にいたり、論地を檢す。延寶三年閏四月十九日御廣敷番の頭に轉じ、天和二年四月二十二日加恩二百俵をたまひ、元祿二年四月九日務を辭し、小普請となる。十年七月二十六日廩米をあらためられ、常陸國多賀郡のうちをいて采地五百石を賜ふ。十二年九月十八日死す。年七十四。法名淨黃。高田の寶祥寺に葬る。妻は武藏孫兵衛秀貞が女。

女子

貞陳

市平

又三郎

親吉

初具番

三郎四郎

母は秀貞が女。

貞享元年五月十日はじめて常憲院殿に

まみえたてまつる。三十七年元祿十二年十

二月九日遺跡を繼、享保四年十月十八

日大番に列し、十年十一月十二日大坂

城の守衛にありて死す。年五十四。法

名後機。彼地生玉の禪林寺に葬る。

女子

女子

女子

親義

初英親

英元

平三郎

平右衛門

致仕號意閑 母は某氏。

享保十年七月朔日はじめて有徳院殿に

拜謁し、十二月二十三日遺跡を繼、十

一年十月二十二日西城の御納戸番とな

り、十五年四月十三日新番に轉じ、元

文三年八月十四日番を辭す。四年十一

月二十七日致仕し、安永四年七月十四

日死す。年七十八。法名意閑。葬地宗

濟におなじ。

親政

平之丞

母は某氏。

元文四年十一月二十七日家を繼。時比三

百石 十二月十一日はじめて有徳院殿に

まみえたてまつり、寛保元年七月八日

西城の御納戸番となり、延享元年十二

月十二日新番に轉じ、三年十二月十四

日番を辭す。天明四年四月二十二日西

城切手御門番の頭となり、寛政七年五

月二十二日老を告て務を辭す。このと



衛長富が養女、後妻は諸星傳左衛門直久が女、また榎下彦次郎盛正が女をめとる。

- 女子 田澤傳左衛門正斯が妻。
- 女子
- 女子
- 女子
- 女子

親憑 源太郎 母は直久が女。

天明四年十二月二十二日はじめて漫明院殿に拜謁し、寛政六年五月二十二日大番となる。時三のち騎射をよび大的の射手に候して時服黄金等をたまふ。妻は服部長三郎保昭が女。

女子 中澤主税助清繁が妻。

保寛 斧次郎 一郎左衛門 服部平十郎保尙が養子。

某 主殿

家紋 三扇の九十本骨 五三桐

田丸

家傳に曰、北畠大納言村親が三男中將具

忠伊勢國田丸城に住して田丸を稱號とす。其子中務大輔直昌美濃國岩村城に移住し、慶長五年石田三成に與して關原に出陣し、軍敗れてのち伊勢國朝熊に謫せられ、のち堀秀政にめし預けられて越後國に籠居す。其子兵庫後左兵衛尉直茂は松平肥前守利長が招に應じ、加賀國にあり。これより數代を歴て金大夫直好がとき、享保十四年御先手の與力にめしくはへらる。直職は其三代の孫なり。今按ずるに、北畠の系圖右中將政卿が長男を材親四男を具忠とし、具忠が男を中務大輔具安、其子を兵庫頭某とせり。その異なるものは家傳の謬にして、兵庫頭某は家系の直茂と同人なるか詳ならずといへども、しばらく家傳を存す。義祖の世系は惣括に見えたり。

直職 右門 新九郎 父祖以來相繼て御先手の與力をつとめ、直職のち小普請方の改役に轉じ、拜謁をゆるさる。寛政二年十一月二十二日班をすめられて小普請方となる。時四十八 妻は稻葉丹後守家臣上田彦大夫布脩が女。

女子 八百吉 新左衛門 實は田安の家臣

直純 八吉 新左衛門 實は田安の家臣

胡倉半彌喜祖が男、母は松平大和守家臣須川武右衛門武正が女、直職が養子となりてその女を妻とす。

寛政三年三月二十一日はじめて將軍家に拜謁し、九年六月十七日學問をこゝろみられて白銀十枚をたまふ。時三三 妻は直職が女。

女子 直純が妻。

家紋 八段の鞠袂 十六葉菊

佐田

家傳に、伊勢國司北畠大納言教具が三男丹後守定具伊勢國佐田城に住せしより佐田を家號とす。定重は其後胤なりといふ。

定重

五左衛門 兵左衛門 玉川 法眼 萬治二年十月三日誠治をよくするによりめされて嚴有院殿に拜謁し、十一月七日御醫師に列し、鷹米三百俵を賜ふ。四年二月二日嚴有院殿御筆以一張弓勢定下以三尺劍光安臣土の二句をよび龜の御畫二幅をたまふ。寛文五年十二月二十八日法眼に叙し、奥醫となる。延寶六年四月二十八日死す。年六十。法名宗川。下谷の廣徳寺に葬る。後代々葬地とす。妻は牧野備前守家臣豊田清左衛門某が女。

某 新助 玉縁

尾張大納言光友卿につかへ、男玉縁定之がときめされて奥醫に列す。これ佐田玉春道次が祖なり。

女子 小林權藏正朝が妻。

道昆

初定達 伊勢松 左兵衛 玉川 母は清左衛門某が女。

延寶六年七月十二日遺跡を繼、表針醫となる。時十 元祿三年九月十九日さきに家業精出すべきのむね仰下さるゝのころ、療治の數すくなきことそのころざし等閑なりとて、小普請に眩さる。しかりといへどもこのち治術よろしき聞えあらば恩免あるべきとの台命を蒙る。七年十一月二十一日表針醫に復し、十一年十一月十三日奥醫にすむ。十二年十二月十八日法眼に叙し、寶永六年常憲院殿御により二月二十一日寄合となる。これよりさき常憲院殿御みづから竹雪の二字を書してたまふ。七年十月十三日死す。年四十七。法名紹玄。妻は丹波長門守家臣丹羽半兵衛茂嘉が女。

某

倍川

親政

養逸 母は茂嘉が女。 寶永四年六月十三日はじめて常憲院殿

女子

伴三次郎盛尹が妻。

政房

十之進 玉川 實は佐田玉淵道故が三男、母は小尾彦大夫某が女、親政が終にのぞみて養子となり、その女を妻とす。

享保九年九月三日遺跡を繼。時十 三月二十八日はじめて有徳院殿に拜謁し、寶曆六年十二月二十七日奥醫に列す。十一年信院殿御により八月四日寄合となり、安永五年四月漫明院殿日光山に詣たまふのときしたがひたてまつる。天明二年十一月六日死す。年七十四。法名宗了。妻は親政が女、後妻は土岐重元端山が女。

女子

政房が妻。

道直

左太郎 玉庵 母は親政が女。 寶曆九年三月十五日はじめて信院殿にまみえたてまつり、天明二年十二月二十四日遺跡を繼、寛政七年十一月二十九日致仕す。時四五 妻は堀本一甫顯承が女。

政直

剛次郎 木造を稱す。

有道

熊吉 玉傳 母は顯承が女。 寛政七年十一月二十九日家を繼。時三十三 妻は

女子

徳松 玉英 英助

某

片輪車

佐田

新助 玉縁 佐田玉川定重が長男。 誠術をもつて尾張大納言光友卿に仕ふ。

定之

四郎左衛門 玉縁 法眼 實は柘植氏の男、母は佐田氏の女、玉縁某が養子となる。

光友卿につかへ、延寶七年十一月十一日はじめて嚴有院殿に拜謁し、元祿五年十一月二十三日めされて誠醫となり、六年正月二十六日奥醫にすゝみ、鷹米二百俵をたまふ。十二月十一日百俵を加へられ、七年十二月九日法眼に叙す。十年四月三日死す。年六十二。法名玄徳。下谷の正慶寺に葬る。のち



代々葬地とす。

道故

初照房 房照 晉 玉養 玉淵 致仕號徹翁 實は柘植氏の男、母は某氏、定之が養子となる。元祿八年七月二十五日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、十年七月十一日遺跡を繼、小普請となる。十三年二月二十八日奥醫に列し、寶永六年薨御により二月二十一日寄合となり、正徳元年三月晦日より二丸をよび三九廣敷の療治をつとむ。五年六月二十五日奥醫に復し、享保元年有章院殿薨御により五月十六日寄合となり、九月二十七日より月光院御方の廣敷に候し、十一月二十日致仕し、寶曆六年閏十一月二日死す。年九十一。法名唯處。妻は小尾彦大夫某が女。

某

玉庸 正徳五年十二月十五日はじめて有章院殿に拜謁す。享保十二年二月五日父にさきだちて死す。年二十五。

正房

傳七郎 井出三郎右衛門正員が養子。

政房

十之進 玉川 佐田養逸親政が養子。

通久

玉壽 玉淵 母は彦大夫某が女。

家紋 鏡萬 五三桐

根岸

忠陳

吉右衛門 根岸作右衛門忠房が二男、母は竹尾吉兵衛某が女。享保八年九月めされて御賄方となり、のち組頭を歴て支配勘定に轉す。明和二年八月十三日班をすゝめられて御勘定となる。五年七月十六日さきに銅座の事をうけたまはりて大坂に赴きしにより白銀十枚をたまふ。安永七年六月十二日死す。年七十二。法名誠圓。深川の正覺寺に葬る。後葬地とす。妻は川田氏の女。

忠興

吉五郎 母は川田氏の女。安永五年十二月十九日御勘定に列し、七年八月六日遺跡を繼、天明五年七月三日死す。年三十三。法名還到。

忠保

吉太郎 母は某氏。天明五年十月六日遺跡を繼、小普請となる。享保八年十二月二十二日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は小川氏の女。

ふ。舊家北畠系圖をよび瀧川の譜に考るに下總守雄利につくる。其世系は彼譜に詳なり。重右衛門忠方がとき櫻田の館につかへ、三代相續て忠房にいたる。

忠房

初忠郷 作右衛門 櫻田の館につかへ、寶永元年文昭院殿の御供に列し、御賄方にくはへらる。

忠興

重右衛門 御賄方をつとむ。

忠陳

根岸吉太郎忠保が祖。吉右衛門

忠鑑

三十郎 母は本多豊後守家臣杉江與左衛門廣保が女。父に繼て御賄方となり、のち改役吟味役等を歴て調役に轉す。寛政十年八月十二日班をすゝめられて御廣敷の用違となる。時五 妻は松平右近將監家臣小川隆満信季が女。

忠休

乙次郎 母は信季が女。

忠定

仁三郎

根岸

家傳に、瀧川下總守雄雅が後裔なりとい

道弘

玉春 母は某氏。天明四年十二月二十六日遺跡を繼。時十六歳 妻は美濃部八十次郎茂樹が女。

道眞

鐵三郎 政次郎

女子

鞠狭 枝菊 重菊

「忠明 文之丞 母は小川氏の女。

家紋 鏡萬 五三桐

卷第千三百十二

村上源氏

江見

政久實は石合氏の男にして、江見新左衛門政秀が養子となり、御家人に列す。其家傳に、赤松信濃守範實が三男宇野新大夫爲則が後胤にして、家號を江見にあらむといふ。下につらぬる赤松より大塚に至るまで、五家その家傳によるに赤松の支流なり。

政久

幸之助 新三郎 新五郎 明和六年二月十五日めされて御徒にめし加へられ、のち御勘定吟味方改役並となり、其後支配勘定にうつる。寛政元年三月二十一日班をすゝめられて御勘定となる。時四十四年六月二十二日さきにしばは日光山におもむき、御宮御靈屋修造の所々を檢し、また普請の事をつとめしにより、黄金二枚をたまひ、別に黄金一枚をそへらる。十月二十一日西城表御臺所頭に轉す。妻は政秀が女。

政行

巳之助 母は政秀が女。



寛政九年十二月二十八日御勘定となる。時三 妻は黒田市藏包啓が女。

新之丞

某

山中辨吉盛征が妻。

女子

女子

女子

女子

政忠 幸之助 母は包啓が女。

家紋 海老 三巴

赤松

則光

市三郎 休庵

元禄十二年三月十八日眼科の醫をよくするにより、はじめて常憲院殿に拜調し、享保二年二月二十八日めされて廣米百俵月俸五口をたまひ、寄合となり、四年四月二十六日源三君の療治をうけたまはりしにより白銀二十枚をたまふ。元文五年十一月十三日死す。法名童山。三田の大乗寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は天野清左衛門重貞が女。

某

休貞

享保三年十一月十一日はじめて有徳院殿

にまみえたてまつる。九年正月十二日父にさきだちて死す。

則福

休悦 母は重貞が女。

元文元年七月十一日はじめて有徳院殿に拜調す。時三 五年十二月二十三日遺跡を繼、小普請となる。延享二年四月七日右衛門督宗武卿に御樂を調進せしにより白銀十枚をたまふ。三年正月二十六日より御廣敷の療治をうけたまはり、寛延二年三月二十六日仰によりて竹姫君の廣敷に勤仕し、四月二十二日寄合となる。天明八年九月十四日死す。年六十七。法名樂邦。妻は大岡助七郎忠利が女。

女子

直吉

孝三郎 休悦 母は忠利が女。

天明八年十二月二日遺跡を繼、寛政元年四月二十九日より小石川養生所の療治をうけたまはり、六年八月二十一日ゆるさる。七年五月十七日死す。年四十二。法名到岸。妻は大久保三十郎忠休が女。

女子

茂隆

久米藏 長延 實は松平長庵元喬が四男、母は村岡孝運長卿が女、直吉が終にのぞみて養子となり、其女を

十五日死す。年六十三。法名日照。四谷の戒行寺に葬る。後代々葬地とす。妻は富松喜兵衛重基が女。

政峰

平藏 大之丞 母は重基が女。

享保十七年七月二十一日はじめて有徳院殿に拜調す。時三 二十年十二月十二日御小性組に列し、元文元年五月二十五日御小納戸にうつり、十二月十六日布衣を着する事をゆるさる。寛保三年六月二十二日父にさきだちて死す。年二十五。法名日實。妻は戸川民部正方が女。

勝禰

初正明 半彌 彌市郎 小左衛門伊豆守 水谷半藏勝中が養子。

政辰

左門

女子

大奥につかふ。

正盛

平藏 母は正方が女。

寶曆六年四月四日祖父が遺跡を繼、小普請となる。七年八月二十三日死す。年十八。法名日是。

女子

正房

内藏之助 喜右衛門 大之丞 實は富松喜兵衛基春が五男、母は紀伊家の臣市川内膳清喜が女、正盛

れて柴田藤三郎忠盛が妻となる。

女子

女子

某

某

女子

女子

正賢

鎌三郎 母は行貞が養女。

家紋 丸に鳩酸草 鐵蝶

大類

屋次

伊兵衛

寛永三年御徒にめし加へられ、のち組頭を歴て富士見番をつとむ。

久高

次郎兵衛

實は大類次郎左衛門某が男、屋次が養子となる。寛文十年十二月二十六日家を繼、のち御徒目付をつとめ、小細工奉行となる。そののち鳩留のことにより越度ありて追放せられ、元禄五年五月九日めしかへされて御目付の支配となる。

が病篤にのぞみて養子となる。寶曆七年十一月十二日遺跡を繼、八年二月二十日御小性組に列し、明和五年二月十一日死す。年二十八。法名日心。妻は土方左京行曹が女。

正之

鉄之助 實は水谷伊豆守勝禰が三男、母は水谷半藏勝中が養女、正房が終にのぞみて養子となる。

正秀

秀三郎 實は宮原市正義泊が二男、母は某氏、正之が男秀之ありといへども、病者たるにより正之が終に臨て養子となる。

安永七年十一月五日遺跡を繼。時三 石八 十九日淺明院殿にまみえたてまつり、天明元年八月二十二日御小性組に列し、四年十一月十八日御小納戸にうつり、十二月十六日布衣を着する事をゆるさる。のち放鷹に感従し、鳥を射て時服三領をたまふ。妻は本多志摩守行貞が養女。

秀之

女子

實は宮原市正義泊が女。正秀に養は



久寛

次大夫 次郎兵衛  
元禄八年七月十一日遺跡を繼、後御徒  
押となり、其後富士見御寶藏番をつと  
む。

久矩

十藏 伊兵衛 實は大塚氏の男、  
久寛が養子となる。  
享保八年七月二十三日家を繼、のち富  
士見御寶藏番となる。

久方

權太郎 次郎兵衛 次郎助 母は  
津田小七郎定直が女。  
寛延元年十二月三日家を繼、後支配勘  
定を勤め、明和二年八月十三日班を進  
められて御勘定となる。享保五年七月  
二十四日死す。年五十。法名日喜。本  
所法恩寺の吉祥坊に葬る。妻は山本  
市左衛門成秀が女。

爲久

權太郎 次郎右衛門 母は成秀が  
女。  
明和五年十月五日遺跡を繼、小普請と  
なる。享保五年十一月十六日西城  
の小人となり、安永八年四月十六日  
より本城に勤仕し、十二月二十四日番  
を辭す。妻は河津彌藤次祐媛が女。  
大河内源右衛門某が妻となり、離  
婚の後馬場與左衛門信景に嫁す。

大塚

盛美

庄三郎  
明和八年御徒にめし加へられ、のち御作  
事下奉行となり、拜調をゆるされ、其後  
御天守番にうつる。

盛定

龜之進 母は中山氏の女。  
寛政六年十月六日遺跡を繼、のち御徒  
目付をつとめ、八年三月十七日班をす  
すめられて町奉行支配の留役となる。  
享保四年四月二十九日役名を町奉行吟味物  
調役とあらためらる。妻は神原七郎  
右衛門長次が女。

盛服

安之助

某

龜三郎 母は長次が女。  
家紋 抱囊荷 丸に釘抜 丸に澤瀉

秋間

先祖御間を稱し、のち秋間にあらたむ。

女子

久豊 權太郎 母は祐媛が女。

屋久

荒四郎  
山本安兵衛秀門が妻。

女子

中山平藏信承が妻。

女子

渡邊

先祖與七郎則景攝津國渡邊に住せしより  
家號とす。則景四代の孫立軒則智眼科の  
醫をもて松平讃岐守頼恭につかへ、のち  
仕を辭して都下に住し、延享三年十一月  
朔日拜調をゆるされ、のち仰をうけて西  
城大奥の療治をうけたまはる。藩主實は  
松平讃岐守家臣山口彌左衛門市主が男に  
して則智が養子となる。

藩主

長太郎 道軒 立軒 法眼  
寶曆五年十二月二十八日はじめて悼信院  
殿にまみえたまつり、六年九月四日め  
されて西城の奥醫に列し、康永百俵月俸  
五日をたまふ。明和二年十二月十八日法  
眼に叙し、安永五年波明院殿日光山にま

武治

源兵衛  
大猷院殿の御とき御徒にめし加へられ、  
のち組頭となる。

武照

新右衛門 母は某氏。  
貞享二年十二月十五日遺跡を繼、のち  
御徒目付をつとめ、元禄二年八月九日  
班をすめられて御廊下番となる。  
享保十年十月二日御次番にうつり、加恩百  
五十俵をたまふ。五年八月十日御廊下  
番の組頭にすまふ。十三年正月十一日  
百俵を加へられ、すべて四百俵の祿と  
なる。十四年十二月十八日布衣を着す  
る事をゆるさる。寶永六年常憲院殿薨  
御により二月二十一日寄合となる。六  
月十一日死す。法名自休。淺草の長徳  
院に葬る。後代々葬地とす。妻は富  
本武兵衛某が女。

女子

藤井善右衛門信安が妻。

女子

萩原伯耆守美雅が妻。

女子

太田原五郎左衛門某が妻。

女子

坂田市兵衛某が妻。

武政

新右衛門 兄武照が養子。  
新左衛門 新右衛門 實は武治が  
二男、母は某氏、武照さきに男あ  
りといへども多病にして家を繼ご

うてたまふのときしたがひたてまつり、  
九年九月十五日死す。年六十二。法名日  
乘。淺草の本性寺に葬る。

則時

立篤 實は則智が三男、藩主が養  
子となる。

寶曆十年十一月二十五日はじめて波明  
院殿に拜調し、十一年七月十五日父に  
さきだちて死す。年二十七。妻は吉  
田榮元忠祝が女。

信重

八郎 久兵衛 木下直次郎信尹が  
養子。

女子

實は松平讃岐守家臣渡邊如菴則昌  
が女。藩主に養はれて千賀道有芳  
久が妻となる。

藩主

久吉 立開 立軒 法眼 母は忠  
祝が女。  
安永六年十二月二十一日はじめて波明  
院殿にまみえたまつり、のち御廣敷  
の療治をうけたまはる。九年十二月七  
日祖父が遺跡を繼、寄合となる。享保  
五年九月九日奥醫に列し、天明六年十二  
月十八日法眼に叙す。寛政四年三月二  
十一日世上廣く療治せむ事をこめて寄  
合となる。妻は紀伊家の臣近藤良三  
一吉が女。

則時

久吉 立開 母は一吉が女。

某

とあたはざるにより嗣となる。  
寶永六年八月二十五日遺跡を繼、小普  
請となる。正徳三年八月六日死す。法  
名玄了。妻は酒井雅樂頭家臣大屋喜  
大夫某が女。

女子

片山與八郎貞隠が妻となり、のち  
離婚す。

武弘

萬五郎 源兵衛 母は喜大夫某が  
女。  
正徳三年十月廿九日遺跡を繼。享保  
十五年五月二十九日御納戸番に列  
し、延享元年十一月二十八日西城の新  
番にうつり、寶曆九年十二月十五日年  
ごろの精勤を賞せられて黄金三枚を賜  
ふ。十一年八月三日本城のつとめとな  
り、十二年十二月十五日西城に復し、  
明和元年六月十一日死す。年五十六。  
法名了靖。妻は伏見猪右衛門景豐が  
女、後妻は小林勝之助正羽が女。

武福

八之丞 母は正羽が女。  
明和元年九月七日遺跡を繼、二年十二  
月二十一日はじめて波明院殿に拜調  
し、六年四月二十三日御納戸番とな  
り、九月二十一日番を辭し、安永四年  
七月十二日死す。年三十七。法名道喜。



妻は有田九郎兵衛基教が女、後妻は多田新八郎昌序が女。

武直

鈍藏 齋宮 新右衛門 實は木原七郎兵衛達白が二男、母は萩原主水正雅忠が養女、武直が終にのぞみて養子となり、その女を妻とす。安永四年十月四日遺跡を繼。時三十四歳。のち騎射をつとめて物を賜ふ。寛政四年九月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は武直が女、後妻は野本武兵衛千忠が女。

女子

阿部勘左衛門正盛が妻となり、のち棄れる。

武勝

源之助 母は千忠が女。家紋 丸に桔梗 琴柱二

忠知

善八郎 八兵衛 善右衛門

卷第千三百十二

嵯峨源氏

松浦

寛永松浦渡邊の系圖及び今の兩家の呈譜を按ずるに、嵯峨天皇の皇子左大臣融源朝臣の姓をたまひ、融より五代源次別當綱はじめて渡邊を稱し、綱が三代源次安が長男を源大夫傳といひ、二男を源七大夫至といふ。これ渡邊甚五兵衛某が祖なり。傳より三代薩摩守授が男二人分れて兩家となり、源大夫妻は松浦の祖にして豊前守繁は今尾張家の臣渡邊忠右衛門守綱が祖なり。妻が子源大夫久肥前國松浦に住せしより稱號とす。いま官本の系圖を閲するに、授が男に繁はみゆれど、松浦の祖たる妻をのせず。兄弟の順次詳ならずといへども、寛永をよび今の兩家の譜の所見をもつてしるし、その順次のごときも、寛永の例にならひ、松浦をはじめとし、渡邊をのちとす。凡こ、に收むる松浦渡邊の數家、あるひは武藏守仕、或源次綱、或源次久、或源七大夫至が後因獄佐某が族なりといひ、みなむなく融より以下の遠祖を擧て、兩家の分流稱

元祿十四年十二月二十一日めされて御部下番となり、鷹米百五十俵を賜ふ。寶永六年常憲院殿薨御により、二月二十一日番をゆるされ、小普請となる。元文五年六月十日死す。年六十八。法名日儀。谷中瑞林寺の本立院に葬る。のち葬地とす。妻は神山氏の女。

忠悦

善之進 母は神山氏の女。元文五年八月二日遺跡を繼、延享三年六月十五日はじめて惇信院殿にまみえたてまつり、寛政五年四月二十二日致仕し、七年三月六日死す。年七十六。法名日了。妻は水戸家の臣中西安兵衛元泰が女。

女子

佐原新兵衛包胎が妻。喜四郎

忠昌

善次郎 母は元泰が女。寛政五年四月二十二日家を繼。時四十四歳。八年十一月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。

女子

鹽入常三郎利至が妻。小膳 母は某氏。

號のおこるところをいはず。或その祖名を闕ものあるにいたる。ゆへにいま舊家の系圖に考てこゝに略記す。その代々の世系は、舊家嵯峨源氏惣括及び松浦渡邊兩家の譜に詳なり。

眞

庄藏

はじめ酒井遠江守忠隆につかへ、のち處士となりて、その封内にあり。林大學頭信篤が門下にして儒學をもつてきこゆ。元祿七年二月十一日めされて常憲院殿につかへたてまつり、儒者に列し、月俸二十口を賜ひ、十一月二十五日御次番にうつり、あらたに鷹米二百俵をたまはりて月俸は收められ、八年十二月十一日百俵をましたまはり、すべて三百俵の祿となり、十四年十二月二十一日番を辭し、小普請となる。享保八年七月二十八日評定所の儒者に列す。十年六月二十八日務を辭し、二十年十二月十一日死す。年六十四。法名素伯。高田の誓閑寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は佐山源兵衛貞休が女。

承

濟大夫 庄藏 母は貞休が女。元文元年三月二日遺跡を繼、寛保元年九月十九日小十人となり、寛延二年十二月二十七日番を辭し、明和七年正月

女子

澤井百太郎富富が妻。家紋 丸に豎二引 丸にむかふ梅

登

十七日死す。年六十八。法名松休。妻は佐山源右衛門高林が女。彦太郎 林傳右衛門春盛が妻。

満

與市郎 實は佐山源右衛門高林が二男、承が養子となり、のち病によりて姪源右衛門正廣が許にかへる。

忠

初忠刻 庄助 右膳 嘉兵衛 致仕號有道 實は大久保平四郎忠顯が二男、母は某氏、承が養子となりて其女を妻とす。明和七年四月五日遺跡を繼、八年五月六日西城の小十人に列し、安永五年四月十日番を辭す。寛政五年四月二十二日致仕し、九年二月五日死す。年五十六。法名華散。妻は承が女。

女子

忠が妻。

俊往

源之助 幸次郎 五郎兵衛 清左衛門 木造清左衛門俊春が養子。

教

庄助 母は承が女。寛政五年四月二十二日家を繼。時三十三歳。八年十一月二十五日はじめて將軍家に拜調す。

女子

大久保平藏忠順が妻。笹本清次郎高久が妻。



俊都

初忠次 友之助 彌五左衛門 木造  
清左衛門俊往が養子となり、のちの  
へありて兄教が許にかへる。

女子

家紋 丸に三星 梶葉 左三巴

松浦

成之

藤五郎

元祿七年十一月九日儒學をもつてめされ  
て常憲院殿につかへたてまつり、御近習  
番に列し、廩米二百俵をたまはり、九年  
十二月九日百俵を加賜せられ、すべて三  
百俵となる。寶永四年九月二十七日死す。  
年六十四。私に光翠と諱す。儒の禮をも  
つて日暮里の淨光寺に葬る。後代々葬地  
とす。

成興

藤十郎 源次郎 實は成之が弟に  
して嗣となる。

女子

小笠原藏人貞明が妻。  
朝倉新右衛門義房が妻。

成昭

半四郎 平馬 致仕號雲清 實は  
松浦氏の男、母は某氏、成興が養  
子となる。

寶永七年十二月二十六日遺跡を繼。  
時延享三年四月五日致仕し、明和五  
年十一月二日死す。年七十一。法名蓮  
阿。

成政

三九郎 母は某氏。

成庸

藤五郎 兄成政が養子。

女子

長三郎 佐山善三郎正榮が養子。

正猛

成庸

平吉郎 藤五郎 實は成昭が二男、  
母は某氏、成政が嗣となる。

明和三年八月十六日家を繼、七年七月  
二十九日西城の小人に列す。八年十  
一月二十七日番を辭し、天明六年三月  
二十五日死す。年五十七。法名智清。  
妻は大木吉兵衛種辰が女。

女子

難波田乙次郎憲古が妻。

成置

榮太郎 母は種辰が女。

成武

女子

岩次郎 兄成置が養子。

成武

女子

成武

岩次郎 實は成庸が二男、母は種辰  
が女、成置が嗣となる。

女子

寛政十年八月二十九日家を繼。時延享  
のち的を射て時服を賜ふ。

家紋 丸に三星 梶葉

渡邊

家傳に、兵八孝が子を吉左衛門悦とし、そ  
の世系譜傳左にしろすがごとし。しかる  
に舊家渡邊の系圖を按ずるに、出雲守某  
其子左馬助重其子兵九郎のち吉左衛門多  
其子兵九郎精まで四代の世系みえて、そ  
の祖名おほね相似たり。おそらくは兄  
弟同祖の家なるがごとしといへども、い

悦

また其説を得ず。異同のごときも何れか  
是なることを詳にせず。よりてその傳ふ  
るところにしたがひて各家の譜を作る。

吉左衛門

母は某氏。

東照宮につかへたてまつり、天正十年甲  
斐國に御出陣のとき石川伯耆守數正に屬  
して御供に列し、戦功あり。のち小牧を  
よび小田原陣にしたがひたてまつり、軍  
功を勵ます。そのち大番となり、采地  
二百石をたまふ。慶長五年關原の役に供  
奉し、六年十月七日死す。年五十七。

重

兵九郎 吉左衛門 母は某氏。

慶長五年九月關原の役に供奉し、六年  
十二月遺跡を繼、のち御番をつとむ。  
元和元年大坂の役にしたがひたてまつ  
り、軍功をはげます。二年九月十五日  
大猷院殿に附屬せられ、のち寄合に列  
す。寛永三年八月洛にのほらせたまふ  
のとき扈從し、そのち三百石を加へ  
らる。七年十月十八日死す。年五十。

仲

吉太郎 吉左衛門 母は某氏。

寛永七年十二月遺跡を繼、八年御書院  
番に列し、九年七月二十六日仰をうけ  
たまはりて諸國を巡見す。十一月五日  
より進物の事を役し、十年二月二日大

恒

番の組頭となり、二十三日四百石を加  
賜せられ、すべて九百石を知行す。承  
應元年正月二十七日死す。法名久傳。  
三田の大乗寺に葬る。のち代々葬地と  
す。妻は曾我又左衛門尙祐が女。

某

福壽院  
京師愛宕山の別當となる。

女子

尙祐が女。

市三郎 兵九郎 吉左衛門 母は

寛永二十年三月三日はじめて大猷院殿  
に拜謁す。承應元年十二月二十七日遺  
跡を繼、のち御小性組の番士となり、  
たまふのときしたがひたてまつり、諸  
道具の奉行をつとめ、四年八月二十二  
日仰をうけたまはりて關東の諸國を巡  
見す。八年九月五日御使番となり、十  
二月二十八日布衣を着することゆる  
さる。延寶元年九月十八日御先弓の頭  
に轉じ、六年八月十六日務を辭し、寄  
合に列す。天和二年二月晦日采地の掟  
よろしからざるよし聞えしかば御氣色  
かうぶりてことごとく公收せられ、廩  
米三百俵をたまひ、小普請に貶して出  
仕を停められ、のちゆるされ、元祿二  
年五月九日死す。法名自通。

某

吉右衛門 中川内膳正家臣田能村  
縫殿某が養子。

矩

兵九郎 母は某氏。

女子

延寶六年三月二十九日御書院番に列し、  
八年五月二十三日父にさきだちて死す。  
佐久間小左衛門信房が妻。

某

猪之助 六三郎

寛文九年四月十四日はじめて嚴有院殿に  
まみえたてまつり、天和二年父にさきだ  
ちて死す。

政

吉兵衛 致仕號永休 母は某氏。  
はじめ朝比奈惣右衛門泰周が養子  
となり、その女を妻とし、のち實家  
嗣なきにより、こふて家にかへる。

女子

元祿二年七月十日遺跡を繼、寶永五年  
十一月二十三日致仕し、享保二年六月  
二十六日死す。年五十九。法名日長。  
妻は朝比奈彌惣右衛門泰周が女。  
花房又七郎榮直が妻。

續

久三郎 實は佐久間小左衛門信房  
が二男、母は恒が女、政が養子と  
なる。  
寶永五年十一月二十三日家を繼、享保  
三年三月十六日御小性組の番士とな  
り、九年十一月十五日より二九に候し



十年六月朔日西城の御書院番にうつり、元文二年四月晦日番を辭す。寛保二年七月二十六日致仕し、延享四年四月朔日死す。年六十四。法名道彰。

雅 久兵衛 吉左衛門 致仕號高陽 母は某氏。

寛保二年七月二十六日家を繼、三年八月十九日西城御小性組の番士となり、延享元年七月十四日番を辭す。明和六年十二月四日致仕し、安永八年三月十六日死す。年六十四。法名道彰。

女子 山名隼人英豊が妻。

女子 福島八左衛門正照が妻。

女子 兄雅が養女。

女子

智

小源太 吉左衛門 實は山名惣三郎親豊が二男、母は松平大學頭家臣三宅八右衛門某が女、雅さきに男子二人ありといへども早世せるにより、智養子となりて其女を妻とす。

明和六年十二月四日家を繼、七年三月四日西城の御書院番に列し、寛政二年七月二十日死す。年五十四。法名道徽。妻は雅が養女、後妻は井戸三三郎弘民が女。

女子 實は續が女。雅に養はれて智が妻となる。

某 早世 久三郎

某 早世 藤木工

有 鶴之丞 吉兵衛 吉左衛門 母は雅が養女。

寛政二年十月九日遺跡を繼、時正三十一歳四年九月二十五日始めて將軍家にまみえたてまつる。妻は神保隼人武周が女。田澤政次郎道止が妻。

女子 繁三郎

家紋 丸に三星 九曜

渡邊

家傳に、先祖は渡邊因頼が同族なりといふ。舊家渡邊の系圖に因頼佐守みえたり。家傳によればその族なる歟、いまだ詳にせず。守は源次別當綱が三代源次安が二男源七大夫至が末葉なり。その世系は舊家渡邊の譜に具なり。

定正

善三郎 武右衛門 武田信玄及び勝頼につかへ、天正十年東照宮甲斐國にいらせたまふのときめされて御麾下に列し、のち遠江國秋葉をい

て諸士とおなじく誓詞をたてまつる。十一年三月二十八日舊領甲斐國八代巨摩兩郡のうちをいて、四十貫文餘の地を宛行はるべきむね御朱印を賜ふ。慶長五年台徳院殿眞田昌幸がこまれる信濃國上田城を攻たまふのとき、御供の列にあり。のち大久保石見守長安に副て甲府の町奉行をつとめ、御代官をかねうけたまはり、同心十五人をあづけらる。そのうち駿河大納言忠長卿に附屬せられ、寛永九年八月二日甲府をいて死す。法名源涼。巨摩郡龍王村の慈照寺に葬る。

定勝

彌兵衛 母は某氏。

大坂御陣のとき、台徳院殿にしがひたてまつり、のち父とともに忠長卿に附屬せられ、忠長卿罪かうぶりたまひ領國をのぞかれしとき定勝も處士となる。寛永十九年十二月十五日めしかへされて慶米二百俵をたまひ、甲府の町奉行をつとめ、同心七人をあづけらる。二十年八月七日甲府をいて死す。法名源勝。葬地定正におなじ。

定俊

兵五郎 彌兵衛 母は某氏。

寛永二十年十二月七日遺跡を繼、父がときのごとく甲府の町奉行をつとめ、寛文元年十月清揚院殿に附屬せられ、

貞

彌左衛門 母は道房が女。

櫻田の館をいて小性組をつとめ、寶永元年文昭院殿にしたがひたてまつり、十二月十二日西城焼火間の番士に列す。三年十二月二十三日遺跡を繼、六年十月二十九日大番にうつり、正徳元年六月二日死す。年三十九。法名玄流。葬地定長におなじ。

良久

彦兵衛 平岡次郎右衛門信由が養子。 彌兵衛 兄貞が養子。

定

彌兵衛 兄貞が養子。

高春

喜四郎 窪田肥後守忠任が養子となり、のち病によりて家にかへる。

女子

清に養はる。

某

彦五郎 實は秋元但馬守家臣伊王野彦左衛門某が女。定長に養はれて花房三郎左衛門職留が妻となる。

定

喜三郎 彌兵衛 實は定長が三男、母は某氏、さきに貞男子ありといへどもみな早世せるにより嗣となる。

女子

甲府の家臣山田善左衛門政信が妻。

定長

武右衛門 母は和由が女。

はじめ櫻田の館をいて小性組をつとめ、のち定俊が家を繼、甲府の町奉行となる。寶永元年文昭院殿にしたがひたてまつり、二年四月九日西城の焼火間番に列し、六月采地を常陸國眞壁郡のうちにつさる。三年十一月四日死す。年五十九。法名全路。市谷の宗泰院に葬る。妻は館林の家臣平岡四郎兵衛道房が女、後妻は甲府の家臣揖斐彦兵衛政易が女。

定則

渡邊甚之助定詳が祖。彌次右衛門

定明

半左衛門

定經

善太郎 善左衛門 渡邊彌次右衛門定則が養子。

女子

土岐源太左衛門某が妻。



神祇市川亦六義孝が女。

女子 大岡橋五郎直陳が妻。

女子 姉死してのち直陳が後妻となる。

女子 御崎明神の神祇市川内膳行好が妻。

女子 深澤才十郎許武に嫁し、のち離婚す。

某 早世 勝藏

守 唯藏 善次郎 母は義孝が女。

家紋 丸に三星一文字 丸に三柏

渡邊

定則

彌次右衛門 渡邊彌兵衛定俊が二男。  
はじめ櫻田の館にいて小十人をつとめ、のち納戸番となる。寶永元年文昭院殿西城にいらせたまふのときしたがひたてまつり、西城御廣敷の添番となる。

定經

善太郎 善左衛門 實は渡邊彌兵衛定俊が三男半左衛門定明が男、母は渡邊彌四郎某が女、定則が養

子となる。

櫻田の館にいて小十人を勤め寶永元年御供に列し、西城御廣敷の添番となる。六年十月十九日さきに櫻田の館にいて拜調の士の列にありしかば、來年より諸士ともまみえたてまつりて歳首を賀すべきむね仰をかうぶる。正徳二年十二月七日班をすめられて御小納戸となり、加増ありて廩米三百俵をたまふ。享保元年有章院殿薨御により、五月十六日務をゆるされ、小普請となる。十一年八月三日死す。法名光月。市谷の宗泰院に葬る。のち代々葬地とす。

定利

善太郎 善左衛門 彌次右衛門 母は某氏。

享保十一年十一月二日遺跡を繼、十五年五月二十九日御納戸番に列し、寛保元年五月十四日組頭に進み、寛延二年四月二日御納戸に轉じ、三年大猷院殿數百回の法會行はるにより、三月十五日仰をうけたまはりて日光山におもむく。寶曆六年二月二十四日より西城に勤仕し、十年正月二十八日御納戸の頭となり、七月十八日布衣を着することとゆるさる。十一年八月二十四日死す。年五十五。法名淨信。妻は松永小

八郎一興が長女、後妻は一興が二女。 岩松 八兵衛 田中半助理長が養子。

女子 雨宮次左衛門忠昌が妻。

女子 小笠原孫次郎正方が妻。

定安

甚左衛門 彌次右衛門 母は一興が女。

寶曆十年四月二十八日はじめて惇信院殿にまみえたてまつり、十一年十一月六日遺跡を繼、明和六年十二月十日御書院番に列し、寛政元年二月二十九日死す。年四十六。法名鳳樹。

定祥

甚之助 母は某氏。

天明三年十月十五日はじめて澄明院殿に拜調し、寛政五年五月三日遺跡を繼、十四日廩米三 妻は本目權十郎正忠が養女。

定行

鎮之助

女子

家紋 丸に三星一文字 丸に三柏

卷第千二百十四

嵯峨源氏

渡邊

家傳に、先祖渡邊出雲守告山城國に住し、其子宮内少輔昌豐臣太閤につかふ。其男内藏助糺豐臣秀頼に仕へ、秀頼生害のとき、大坂にいて自殺す。これ權兵衛守が父なりといふ。舊家嵯峨源氏渡邊兵九郎精が譜に、始祖出雲守某山城國田中に住し、松永久秀に屬すとし、其二男に宮内少輔某をかへけその以下所見なし。今父子の呼名おなじきより考れば、此家かの宮内少輔が子孫なるか、いまだ詳ならず。

守

權兵衛

櫻田の館につかふ。

勝

權兵衛 母は某氏。

櫻田の館にいて小性組をつとめ、のち書院番の組頭を歴て持筒の頭に轉す。寶永元年文昭院殿西城にいらせたまふのとき、したがひたてまつり、十二月十二日西城の桐間番となり、廩

女子

米倉丹後守昌甲が室。

統

甚五郎 致仕號次源 實は土方五郎兵衛某が男、母は某氏、勝が養子となる。

女子

三枝助四郎守勝が妻。

定

内藏助 權兵衛 母は種盛が女。

享保五年九月朔日はじめて有徳院殿に拜調す。寛延三年十二月二十日西城御小性組の番士に列し、寶曆十年九月二十六日家を繼、十一年八月三日日本城の務となり、十二年十二月十五日西城に

國武

求馬 八郎右衛門 飯島三右衛門國忠が養子。

某

近五 半十郎 森彌太郎某が養子。

長展

長七郎 彌三郎 堀仁十郎長賢が養子。

女子

三枝監物守興が妻。 關備後守保忠が妻。

登

主計 母は正次が女。

正永

外記 彌五右衛門 深津新右衛門 政孟が養子。

女子

字都野金右衛門正良が養女。



女子

水野圖書勝久が妻。

穀

新之丞 實は遠山清右衛門安英が三男、登が養子となり、其女を妻とし、のち父に先だちて死す。

某

早世 鏡三郎

女子

明が養女。

資宇

彈正 兵庫 左京 實は日野若狭守資陽が三男、登が養子となりて其女を妻とし、後のへありて家にかへる。

明

初濟堅 監物 甚五郎 實は大田原出守友清が三男、母は某氏、登が養子となり、其女を妻とす。

女子

天明五年三月二十九日家を繼、六年六月八日死す。年二十八。法名道光。

女子

毒は登が女。

女子

はじめ穀に配し、穀死するにより資宇が妻となり、資宇家に歸るの後、また明が妻となる。

女子

小笠原金兵衛直軌が妻。

女子

三島大助政世が妻。のち離婚す。

女子

石黒官次郎易明が妻。

均

數馬 織部 主計 實は深津彌五右衛門正永が二男、母は上倉彦左衛門信門が女、明が終に隨て養子とな

女子

天明六年九月四日遺跡を繼。時七十七歳。實は穀が女。明やしなひて均が配に定むといへどもいまだ婚せずして死す。

女子

林金五郎政幸が妻。

女子

家紋 三本骨扇に日の丸 三本骨扇に三星

渡邊

正元

仁左衛門 寛永元年御徒にめし加へられ、後火番をつとむ。

正重

仁右衛門 寛永十八年十二月四日遺跡を繼、のち二丸の火番を歴て御廣敷の添番となる。

正明

長三郎 母は某氏。享保九年十二月二十五日家を繼、のち養仙院御方の侍となり、月光院御方の廣敷添番にうつり、延享元年八月十一日班をすめられて御勘定となる。寶曆九年十月二十二日務を辭し、小普請

女子

となり、安永七年十二月十二日致仕し、八年十一月十九日死す。年八十六。法名常永。高田の寶祥寺に葬る。後葬地とす。妻は岡田氏が女。

正崎

長吉郎 十大夫 母は岡田氏の女。

女子

寶曆五年十二月六日御勘定となり、明和四年七月三日關東川々普請の事をつとめしにより、時服二領黄金二枚を賜ふ。安永六年十月二十一日父にさきだちて死す。年四十五。法名良英。妻は奥平大膳大夫家臣小柳儀左衛門義等が女。

正房

岩三郎 母は義等が女。安永七年十二月十二日祖父が家を繼。時九十九年十二月二十二日はじめて渡明院殿にまみえたてまつり、寛政九年八月十日二丸の火番となり、班次もとのごとし。妻は久世大和守家臣堀兵衛元敏が養女。

女子

朝岡新七郎國休が妻。

正吉

政之丞 母は元敏が養女。

正繁

弁次郎

家紋 丸に三星一文字 丸に鳩酸草

渡邊

伊右衛門義定慶長五年同心に召加へられしより五代連絡して美之にいたる。

美之

文藏 伊兵衛

西城御廣敷の伊賀者たり。のち天英院殿御廣敷御用部屋の書役を歴て御侍にうつり、其後二丸の添番をつとむ。延享元年八月十一日班をすめられて御勘定となり、寶曆八年三月二日仰をうけて關東及び東海道川々普請の地を檢す。後御藏奉行立合の事をうけたまはりて大坂にいたり、あるひは、鮮種人參の事により下野及び陸奥國に赴く。十三年十一月十日清水の郡奉行に轉じ、明和四年十二月九日死す。年七十。法名徳永。青山の梅窓院に葬る。妻は紀伊家の臣岡本林右衛門長房が女。

某

早世 長十郎

美實

熊之助 伊兵衛 文右衛門 母は長房が女。寶曆十一年九月四日清水の近習番となり、のち小性に轉じ、明和四年十二月

廣井

家傳にはく、もと渡邊を稱し、のち廣井にあらたむ。

朝繼

宗安

大猷院殿の御とき、外科の業をもて召出され、鷹米二百俵を賜ひ、番醫となり、萬治二年二月二日番をゆるされ、折々奥に候すべき旨仰をかうぶる。文九年十月十一日死す。法名惠眼。淺草の西光寺に葬る。のち義行にいたるまでおなじ。

朝義

宗以 母は某氏。

義行

彦一郎 宗庵 母は茂繼が女。延寶四年七月十二日遺跡を繼、寄合に列す。元祿三年九月十九日先に家業を承るべからざるむね命ぜらるゝのころ、療治の數少なきよし上聞に達し御氣色をかうぶり家祿を收められ、追放せしめらる。十三年六月七日召返されて小普請となり、十四年十二月朔日常憲院殿にまみえたてまつり、寶永七年九月十六日月俸をたまはる。享保元

家紋 丸に三星一文字 丸に小切付 笹籠

女子

早世 文吉

女子

熊之助 母は某氏。

女子

天明八年四月二十八日はじめて將軍家にまみえたてまつり、寛政二年十二月二十日小十人に列す。時二歳。妻は紀伊家の臣内藤喜兵衛備好が女。

女子

富五郎 川村與五兵衛隆政が養子。



年七月朔日死す。年四十四。法名智觀。

義房

次郎吉 宗安 實は川島了琢重昌が三男、母は栗崎道有正羽が女、義行がやまひ篤きに隨て養子となる。

享保元年十月二十日遺跡を繼。時元文二年四月十一日小石川養生所の療治をうけたまはる。寛延二年十二月朔日死す。年四十。法名日芳。谷中の龍泉寺に葬る。のち葬地とす。

朝方

田鶴見 宗以 法眼 實は川島了琢重昌が四男、母は栗崎道有正羽が女、義房が養子となる。

寛延二年十二月二十二日遺跡を繼、寶曆元年三月十九日はじめて惇信院殿に拜調し、五年七月九日より小石川養生所の療治をつとむ。八年十二月二日番醫に列し、天明四年十一月二十四日西城の奥醫となり、六年閏十月七日より本城に勤仕し、寛政元年十二月十六日法眼に叙す。五年四月二十四日死す。年六十九。法名日以。

盈顯

民次郎 宗庵 宗壽 母は某氏。安永六年十二月二十一日はじめて俊明

表火番をつとむ。

直行

二郎左衛門 治兵衛 寛文十二年十一月十日遺跡を繼、後西城御裏門番の與力をつとめ、其のち二丸の火番二丸御門添番等を歴て、西城御廣敷の添番にうつる。

直久

三十郎 三右衛門 母は松平伊豫守家臣榊原治郎兵衛某が女。寶永六年十二月二十五日遺跡を繼、後二丸の火番より刑部卿宗尹卿の添番となり、元文四年九月十四日彼卿の小十人にすゝみ、其後一橋の館に在いて組頭を歴て小十人の頭にうつり、寛延三年十月十八日死す。年六十六。法名迎天。駒込の榮松院に葬る。のち葬地とす。妻は神尾清右衛門政定が女。

女子

才兵衛 實は郡筑半六郎國之が男、母は成瀬兵左衛門某が女、直久が養子となる。寛延三年十二月二十七日遺跡を繼、小普請となり、寶曆元年三月十九日はじめて惇信院殿にまみえたてまつる。天明七年十二月十日致仕し、寛政元年十二月二日死す。年六十九。法名道忠。

向山

もとは渡邊を稱し、後向山にあらたむ。

直道

九郎左衛門 慶長四年御徒にめしくはへられ、のち表火番をつとむ。

直勝

權之丞 三郎左衛門 正保三年十一月二十八日遺跡を繼、後

卷第千二百十五

嵯峨源氏

杉浦

家傳に、はじめ渡邊を稱し、後杉浦にあらたむ。正福が祖父惣兵衛某東照宮につかへたてまつり、御船押をつとむ。其男半右衛門某も御麾下にありて遠江國高天神の役に討死す。

正福

五郎左衛門 慶長十一年御徒にめしくはへられ、後表火番より奥火番にうつる。

正親

彦大夫 杉浦が養子となり、のち御徒にめしくはへらる。

正信

五兵衛 五郎左衛門 寛文二年十二月九日遺跡を繼、後奥火番となりまた奥御臺所目付をつとむ。

正也

五郎七 半兵衛 半右衛門 貞享三年十二月十日遺跡を繼、後御徒目付をつとむ。

正方

初正直 彦五郎

正武

元祿十四年七月九日遺跡を繼、のち表火番をつとめ、支配勘定に轉す。

正平

鈍太郎 寛延三年八月三日遺跡を繼。

正英

初正意 覺五郎 五郎左衛門 實は矢部木彌一右衛門久隆が男、母は某氏、正武が終にのぞみて養子となり、その女を妻とす。明和四年十一月四日遺跡を繼、のち鳥見役をつとむ。寛政六年閏十一月十六日班をすゝめられて組頭となる。時元文四年正月五日 妻は正武が養女。

女子

實は正方が女。正武にやしなはれて正平が妻となる。

正英

半之助 實は吉田氏の男、母は平尾氏、正平が養子となりて其女を妻とす。

女子

鳥見役の見習を務む。妻は正平が女。正英が妻。

女子

大奥につかふ。

正邦

谷三郎

正弘

求馬 母は正平が女。

女子

直知

龜太郎 三右衛門 母は某氏。天明七年十二月十日家を繼。時元文四年九月二十五日はじめて將軍家に拜調し、十年十二月二十九日西城の表火番となる。班次もとのごとし。妻は神尾定右衛門道房が女。

直忠

利七 實は伊庭勘太郎當隣が二男、母は某氏、直知が養子となる。

家紋 花菱 梶葉



正好 政三郎  
正徳 三四郎

家紋 丸に三引 三菱

河田

先祖安中を稱す。子孫六兵衛忠榮秋元越中守長朝が許に寓居し、子孫家臣となる。忠榮は田助兵衛政親が女を娶りて繁持を生む。繁持外祖父の家號を冒して河田を稱す。政親は舊家藤原支流河田吉藏親黨が祖なり。

繁持

三郎左衛門  
神田の館を以て常憲院殿につかへたてまつる。

宜繁

宇右衛門 實は秋元但馬守家臣安中五郎兵衛忠久が二男、母は某氏、繁持が養子となる。  
神田の館に勤仕し、延寶八年徳松殿にしがひたてまつり、御家人にいはれ、鷹米二百俵をたまはりて西城につとむ。天和三年逝去のち、御勘定となり、元禄元年三月二十九日仰によりて武蔵國堤川餘の普請を檢し、三年

三月二十五日御材木石奉行に轉す。正徳三年九月二十六日死す。年六十二。法名雪江。本郷の喜福寺に葬る。後代代葬地とす。妻は大澤勘兵衛某が女。

親貞

甚太郎 實は山本彌右衛門忠滿が二男、母は鈴木氏の女、宜繁が養子となり、其女を妻とす。  
寶永元年七月十一日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、六年四月六日大番に列し、元文五年二月二十二日より御勘定見分役をつとむ。三月二十三日仰によりて日光山におもむき、神器を檢す。寛保二年二月十四日またこれ等のことにより久能山に至る。延享二年八月十七日より御藏奉行をつとめ、寶曆六年七月十九日西城御廣敷番の頭に轉じ、十年三月二十六日死す。年七十六。法名了雄。妻は宜繁が女、後妻は秋元但馬守家臣安中六兵衛惟忠が女、また菅沼新五左衛門定尙が女を娶る。

正意

磯五郎 兵右衛門 三橋兵右衛門親貞が妻。

親生

孫吉 三郎左衛門 母は宜繁が女。  
享保五年五月十五日はじめて有徳院殿

にまみえたてまつる。寛保二年十二月三日大番に列し、安永六年十月二十二日先に松田伊織直勝が妻を預るのとき、直勝其弟百次郎某變死の風聞あるのよし告おくの處、言上のうちにこれを除きて記さず、稻垣長門守定計其子細をたづぬるにをよびて、其實否さだかならざるにより、これをしるさざるの由を申、しかのみならず直勝が妻親生が許にて出産せしをもすみやかに達せず、日を經て言上に及びし事ふつかのいたりなりとて、小普請に貶され、出仕をとめられ、七年二月三日ゆるさる。九年八月十二日死す。年七十五。法名宗儀。妻は山本彌七郎忠重が女。

親正

鏡次郎 山本善五郎忠直が養子。  
鎮恒 鏡之助 與三郎 河尻與四郎鎮番が養子。  
徳四郎

某

河尻八郎右衛門鎮妍が妻。  
桑島元太郎持古が妻。

親茂

鏡太郎 致仕號自樂 母は忠重が女。  
寶曆十年八月二十八日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、安永九年十一月四日遺跡を繼、寛政五年十二月二十

某

熊次郎  
家紋 五七の桐 左巴 庵に木瓜 五三桐 隅切角の内に安文字  
家傳に、木瓜及び桐の紋は河田と稱せしより用ふといふ。

鵜飼

はじめ安中を稱し、のち鵜飼にあらたむ。次兵衛政長永祿十年より仕へ奉り、其子權左衛門政尙御廣敷の伊賀者となり、夫より五代相續て政福にいたる。

政福

佐市郎  
御廣敷伊賀者より御廣敷添番並となり、後添番に遷る。

政信

長次郎 父にさきだちて死す。  
三郎右衛門 高井善次郎良賢が養子。

正博

鏡三郎 實は古屋藤右衛門正英が男、政福が養子となり、其女を妻とし、後病によりて正英がもとに歸る。

女子

政弘が養女。  
格馬 次兵衛 實は松平上野介家臣川島太嶽養貴が男、母は本多中務大輔家臣千田頼五郎氏信が女、政福が養子となりて其女を妻とす。  
安永五年六月七日遺跡を繼、御廣敷の添番をつとめ、天明八年十月二十九日班をすめられて安祥院の用人となる。寛政元年卒去により六月六日御廣敷の用達にうつり、十月六日御細工所に轉じ、十年十二月四日御金奉行となる。妻は政福が女、後妻は尾張家の臣小倉半九郎隆亮が女。  
はじめ正博に配し、正博家に歸るのち政弘が妻となる。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

女子

實は正博が女。政福にやしなはれて金田喜三郎某が妻となり、のち離婚す。

親房 弁太郎 母は親茂が女。

女子

河野四郎左衛門晏道が妻。

女子

親良が妻。

親定

長之助 父にさきだちて死す。

親良

甚太郎 實は植村平藏正定が二男、母は植村庄五郎正賀が女、親茂が養子となり、その女を妻とす。  
寛政五年十二月二十一日家を繼。將軍家に拜調し、十年六月十四日大番に列す。妻は親茂が女。

親久

宇右衛門  
安永六年十月二十二日先に從者のもとより弟親定にあたへし所の玩物博奕に用ふる品なれば、これをばかるといふにそのことなく、去四月四日夜飯室八郎左衛門某が請に任せ、其もちふる所をも糺さず、これをかしあたへ、すでにその品にて八郎左衛門等博奕を催し、つるに松田百次郎某と口論に及びて、百次郎殺害せらるゝに至りし事、畢竟かの品を貸せしより起りしところなりとて追放せらる。

親成

一日致仕す。十一歳 妻は三田八郎兵衛伴成が女、後妻は山名三右衛門義成が女、また福島傳次郎國豊が女を娶る。  
女子 伊東多宮祐重が妻となり、のち離婚す。



家紋 丸に一文字 五三桐

河原

満正

七左衛門

大猷院殿の御とき御徒にめしくはへられ、のち御廣敷の添番をつとむ。

正永

長八郎 七左衛門

寛文十二年七月十二日遺跡を繼、のち支配勘定をつとむ。

正眞

惣大夫 清兵衛 實は河原伊大夫

正吉が男、母は満正が女、正永が養子となる。

貞享二年十二月十五日遺跡を繼、のち支配勘定をつとむ。其後班をすゝめられて御勘定となる。享保元年九月十二月二十二日としごろ意なくつとめしにより黄金三枚を賜ふ。十年十二月二十九日先に駿河、三河、遠江三國に赴むき、寺社の修造を檢せしにより、時服二領をたまひ、十一年十二月二十一日金銀の製を改めらるゝのとき、そのことにあづかりしにより黄金一枚をたまふ。十五年三月二日川船奉行に遷り、十六年七月二十一日御代官に轉ず。享

保十一年六月十二日死す。年六十七。法名宗覺。牛込の養善院に葬る。のち代々葬地とす。妻は森川出羽守家臣青木七郎右衛門時次が女。

女子

坂部又八郎正房が女。

卿正

清次郎 母は時次が女。

寶永三年四月十四日はじめて常憲院殿にまみえたてまつる。時正十六年四月六日御勘定となり、正徳三年七月二十三日小十人に轉じ、享保八年三月十二日としごろ精勤せるにより金五兩をたまふ。十一年二月十六日西城小十人の組頭となる。十九年二月二日死す。年四十二。法名淨雪。妻は松平源左衛門舎信が女、後妻は佐藤小右衛門信一が女。島津八郎右衛門久経が妻。元孝 島左平次元保が養子。實は森川出羽守家臣青木彌左衛門時房が女。正眞にやしなはれて伴野新助貞榮が妻となる。

女子

清三郎 父にさきだちて死す。

某

喜四郎 七左衛門 清兵衛 致仕。號聊閑、母は舍信が女。

享保十九年五月三日遺跡を繼、小普請となり、元文元年十月十九日西城の小十人に列し、五年五月三日一橋の近習番となり、延享三年十二月十一日御納戸番に轉じ、寛延三年十月二十九日番を辭す。寶曆十三年四月晦日抱屋敷のうちを湯島靈雲寺の僧契深にかし、彼僧死せしち弟子ども退散すべきを、其まゝにさし置、剩先年書出せしより坪敷をまし、不相應の家作せしをも知らせること等閑なりとて、出仕をとめられ、八月十日ゆるさる。安永二年四月八日致仕す。四年十二月三日死す。年五十九。法名聊閑。

某

右膳

女子

仁木貞八直道が妻。

正長

内藏允 九助 清次郎 母は某氏

安永二年四月八日家を繼。時正二十五歳三年九月十九日小十人に列し、五年四月澄明院殿日光山にまうてたまふのとき供奉す。

女子

初正談 内藏允 隼人 母は某氏。寛政六年十一月十四日小十人に列す。

篤

初正談 内藏允 隼人 母は某氏。寛政六年十一月十四日小十人に列す。

女子

五十二 九年四月二十三日表御右筆となる。妻は小野四郎五郎言貞が女。

女子

賀茂宮六郎右衛門直汎が妻。

信彦

吉十郎 尾島鑄三郎信賢が養子。

家紋

丸に一劍鳩酸草 揚羽蝶

間瀬

義東

佐右衛門

櫻田の館をいて清揚院殿につかふ。

義紋

舍人 實は青木左衛門政之が二男、母は松平筑前守家臣佐藤甚兵衛某が女、義東が養子となる。

櫻田の館をいて文昭院殿につかへたてまつり、寶永元年西城にいらせたまふのときしがひたてまつり、御家人に列し、原米二百俵をたまひ、小普請となり、享保十五年十二月二十八日死す。法名一無。小石川の喜運寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は三十左衛門有文が女。

義延

丹下 左衛門 實は青木小左衛門

卷第千三百十五

嵯峨源氏

間瀬

女子

義物

女子

家紋

丸に籬龍膽

丸に三星一文字

幸次郎

實は恒川幸助正尚が二男、母は川口鏡次郎歳胤が女、義綱が養子となりて其女を妻とす。

寛政十年

七月四日遺跡を繼。時正二十五歳

妻は義綱が女。

義綱が女。

義綱

鑑次郎

實は三輪實宮久經が二男、母は本多五郎兵衛成恭が女、義忠が終に隨て養子となる。

寶曆二年

十一月三日遺跡を繼。時正十安

永元年

十一月二十九日大番となり、二

年十二月

二十七日番を辭し、寛政十年

四月二十四日死す。年五十七。法名見

與。妻は町野傳左衛門三彰が女。



卷第千三百十六

嵯峨源氏

丸山

もと寺内を稱し、宗悦某外科の醫を業とす。其男玄棟が時に丸山にあらたむ。

玄棟

昌貞 法眼

外家の醫を善するにより、寶永元年閏四月二十八日はじめて常憲院殿にまみえたまつり、二年九月朔日召されて番醫に列し、康米二百俵をたまふ。五年五月朔日醫業精いるにより番をゆるされ、寄合に列し、正徳五年三月二十四日光山にをいて法會行はるにより仰をうけたまはりて彼地に赴く。享保九年閏四月二十六日奥醫となり、十二年十二月十八日法眼に叙す。十三年四月有徳院殿日光山にまうでたまふのときしたがひたてまつり、元文五年二月二日致仕し、延享元年正月十四日死す。年八十三。法名梁翁。下野國大前村の自性院に葬る。妻は熊澤氏の女。

宜喬

貞安 昌貞 法眼 實は青木氏の

女子

實は上におなじ。また養はれて長鹽市郎左衛門正球が妻となる。

英積

昌倫 昌貞 實は曾谷伯安祐之が五男、母は某氏、英積が養子となり、其女を妻とす。

明和六年四月九日はじめて澄明院殿にまみえたまつり、安永二年閏三月五日遺跡を繼、四年六月三日番醫に列し、六年六月二十四日死す。年二十九。法名蓮閣。妻は英貞が女、後妻は青木氏の女、死してのちその妹を娶る。英積が妻。

美英

英藏 昌貞 實は岡本玄治松山が三男、母は曾谷長順俊字が女、英積さきに男ありといへども早世せるにより終に隨て養子となり、其女を妻とす。

安永六年九月七日遺跡を繼。時年十七歳。寛政元年十月二十六日番醫に列す。妻は英積が女。

女子 美英が妻。  
女子 富永八五郎泰護が妻。  
某 早世 辨之助

傳右衛門長記が女。

女子 豐之助 病者たるにより家を繼す。

女子 宜喬が養女。

女子 上におなじ。

女子 小尾十郎右衛門信房が妻。

女子 長谷川玄通某が妻。

女子 實は伊丹權大夫康利が女。宜喬に養はれて石野甚左衛門廣貞が妻となり、離婚して後梶新次郎某に嫁す。

女子 實は青木氏の女。宜喬に養はれて佐藤慶南祐久が妻となる。

女子 昌倫 昌貞 實は尾張家の臣丸山平次郎某が男、母は某氏、宜喬が養子となりて其女を妻とす。

女子 寶曆九年三月十五日はじめて惇信院殿に拜謁し、十二年八月三日遺跡を繼、小普請となり、二十五日寄合に列し、明和二年三月十五日日光山にをいて法會行はるにより、仰をうけたまはりて彼地に赴き、八年九月二十二日番醫となり、安永二年正月二十九日死す。年五十。法名泰山。妻は宜喬が養女。

女子 實は紀伊家の臣岡田昌作某が女。宜喬に養はれて英貞が妻となる。

女子 實は義誠が女。宜喬に養はれて大久保平右衛門忠辰に嫁す。

女子 列す。時年三十五歳。妻は山田市右衛門忠吉が女。

女子 初正信 安之丞 半兵衛 若林彌十郎記隆が養子。

女子 忠三郎

家紋 丸に梶葉 三扇

瀧

もとは大黒を稱す。又助恒房三河國額田郡瀧村に住せしより家號とし、東照宮の御時御中間頭をつとめ、三代相繼て又助恒忠がとき、嗣なくして家たゆ。恒房が三男三十郎恒知、大猷院殿の御時召れて別家となり、のち清揚院殿に附屬せられ、櫻田の館に勤仕す。恒貴實は渡邊氏が男にして恒知が養子となるといふ。

源内

櫻田の館につかへ、寶永元年文昭院殿西城にうつらせたまふのときしたがひたてまつる。

好房 新兵衛 實は大岡源右衛門正信が二男、恒貴が養子となる。

享保十五年十二月三日家を繼、のち御

某 吉次郎 母は英積が女。

女子

女子

女子

家紋 丸に扇

大野

先祖六兵衛義豐寛永五年御弓矢鎗奉行の同心に召かへられ、三代連綿して三代夫義知にいたる。義著は其男なり。

義著

三郎兵衛 左門

御天守の下番をつとめ、後御廣敷の伊賀者より添番格となりて蓮光院御方に附られ用進をつとむ。安永三年十一月七日班をすめられて御廣敷の用進並となる。

時年五十六年十二月二十八日蓮光院御方の用進となり、天明八年九月五日御幕奉行にうつる。妻は松平阿波守家臣關口道仙

女子

女子

義一

善吉 母は正明が女。

安永八年八月二十一日はじめて澄明院殿に拜謁し、寛政六年五月二十六日大番に

加藤三郎兵衛忠壽が妻。

善吉 母は正明が女。

安永八年八月二十一日はじめて澄明院殿に拜謁し、寛政六年五月二十六日大番に



留守居組の與力をつとむ。

恒好

佐兵衛 文右衛門 實は本多唐之助家臣藥師寺惠左衛門元勝が男、好房が養子となり、その女を妻とす。

御留守居組の與力をつとむ。

邦好

市三郎 左十郎 又右衛門 實は猪俣庄右衛門範英が二男、母は内田氏の女、恒好が養子となる。はじめ支配勘定をつとむ。安永七年四月六日班をす、められて御勘定となる。享和三年八月二十三日美濃伊勢川々普請のことにあづかりしにより時服二領黄金二枚をたまふ。天明六年八月三日金銀融通の事をうけたまはり大坂におもむく。七年八月四日故ありて小普請に罷され、十二月二十二日さきに勤に在のうち、越後國にて新田の地を願ふものなりとて、面會のことをいひいれしに、出入するもの、申にまかせ、その素性をも糺さず、宅にて面談し、しかのみならず越後に在役せし御普請役のもとへ、永田藤助隆久と連名の書状をわたし、且かのもの邦好が従者なりと偽り、越後に赴かんとするよしをき、これをとめしむといへども、その實否をもたげねず、かたぐ

等閑のはからひゆへ、かのものつるに邦好隆久等が従者なりとて、苗字帯刀して旅行するに及び、不束の至りなりとて出仕をとめられ、八年二月十三日ゆるさる。寛政七年十月十四日死す。年五十四。法名恒孝。淺草の貞源寺に葬る。妻は石井軍次郎直美が女、後妻は木村氏の女。

貴途 權次郎 母は直美が女。寛政七年十二月二十七日遺跡を繼。時三十八年十一月二十五日はじめて將軍家に拜調す。妻は新報源助房矩が女。

某 半次郎 森川庄左衛門氏榮が妻となり、氏榮死するのち父がもとにかへる。

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

女子 家紋 二重龜甲の内流鼓

醍醐源氏

河尻

家傳にいはいく、西宮左大臣高明の後胤三郎實明頼朝將軍に仕へ、肥後國能田郡河尻に住せしより稱號とす。其後裔肥前守鎮吉織田家に屬し、その長男肥前守直次

關原の役に戦死す。鎮行は鎮吉が二男なり。官本系圖を按ずるに、高明は醍醐天皇第十六の皇子にして源姓をたまふといふ。

鎮行

東照宮の御時御家人に召加へらる。

鎮政

治右衛門 東照宮台徳院殿大猷院殿に歴仕す。

鎮宗

惣兵衛 實は井出權大夫某が男、母は某氏、鎮政が養子となり、其女を妻とす。

鎮員

八郎右衛門 母は鎮政が女。正保元年十一月十三日はじめて大猷院殿にまみえたてまつり、二年八月五日大番となり、慶安元年十二月十一日遺跡を繼、萬治二年二月十一日より御藏奉行をつとめ、のち番を辭し、小普請となる。元祿七年八月二十四日死す。

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

豐明 初將領 甲之進 毅輔 母は鎮妍が女。貞鎮 金之助 庄次郎 家紋 左三巴 丸の内水色に揚羽蝶 稻丸

河尻

鎮賢

初鎮房 七左衛門 市右衛門 河尻 惣兵衛鎮宗が二男、母は河尻治右衛門鎮政が女。寛文二年十月九日めされて小十人となり、十八日はじめて嚴有院殿にまみえたてまつり、十二月二十二日月俸十口を賜ひ、四年十二月二十五日廩米百俵をたまふ。貞享元年二月八日死す。年五十二。法名日勝。牛込の久成寺に葬る。後代々葬地とす。妻は酒井極之助實次が女。

鎮直

十兵衛 與八郎 母は實次が女。天和三年九月二十五日小十人に列し、のち廩米百俵月俸十口を賜ひ、元祿九年十二月二十二日年ごろ意りなくつとめしにより金二十兩をたまふ。十三年十月六日新番に轉じ、十二月二十二日加恩ありて二百五十俵の祿となり、月俸は收めらる。寶永二年十月二十二

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

て時服をたまふ。寶曆元年十二月十八日死す。年五十七。法名日經。妻は鎮妍が女。

鎮妍 平次郎 八郎右衛門 母は鎮年が女。寶曆二年三月六日遺跡を繼、四年五月十八日大番となり、九年九月八日御納戸番に轉じ、十三年四月十八日新番にうつる。八月十六日死す。年三十九。法名日葉。妻は河田甚太郎親貞が女。

壽倍 初忠休 寅之助 八之助 亦右衛門 逸見備中守忠榮が養子。

鎮海 初鎮隆 鎮藏 與兵衛 實は河野八左衛門通虎が二男、母は飯室傳次郎昌因が養女、鎮妍が病篤に臨て養子となり、その女を妻とす。

寶曆十一年十一月四日遺跡を繼。時三十八年九月十一日御納戸番となり、七年正月二十二日新番に轉す。妻は鎮妍が女。

鎮海 鎮海が妻。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

女子 田安の家臣坂井每五郎苗成に嫁し、離婚してのち武藤鎮三郎安達が妻となる。

隆鎮 長十郎 八郎右衛門 實は河尻與八郎鎮直が三男、母は逸見彦左衛門忠利が養女、鎮年が終に臨て養子となり、其女を妻とす。寶永三年十一月十二日遺跡を繼。時三十八年三月二日大番となり、元文元年十月十二日新番に轉じ、後射

隆鎮

女子

女子

女子

鎮年

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

法名日觀。妻は齋藤金七郎政吉が女。河尻甚五郎春之が祖。初鎮房 七左衛門 市右衛門 彌左衛門 新右衛門 江右衛門 子孫七藏某がとき家たの。ことは下にみえたり。甲府の家臣坂部四郎右衛門宗勝が妻。

鎮賢

鎮昌

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子



日番を辭し、小普請となり、正徳五年十二月十三日死す。年五十四。法名日住。妻は逸見彦左衛門忠利が養女、後妻は近藤彦大夫正義が女。

某 平七郎

市左衛門 窪田勘右衛門某が妻。

女子

某 早世 彦次郎

鎮喬 初政房、牛之助 與四郎 母は忠利が養女。享保元年二月二十七日遺跡を繼、五年十月二十九日新番となり、九年十一月十五日より二九に勤仕し、のち西城に候す。そののちしばしば射を射て時服をたまふ。元文二年閏十一月二十三日本城のつとめとなり、寶曆元年十二月二十七日番を辭す。四年十月二日死す。年六十三。法名日山。妻は山本彌七郎忠重が女。

隆鎮 長十郎 八郎右衛門 河尻惣兵衛鎮年が養子。

鎮休 鎮之助 藤助 榊原作大夫直矩が養子。

女子

某 早世 孫十郎

鎮恒 鎮之助 與三郎 實は河田甚太郎親貞が三男、母は河田守右衛門宜繁が女、鎮喬が養子となりてその女を妻とす。寛保二年十二月三日大番となり、のちしばしば御弓場始の射手に候し、あるひは射を射て時服黄金等をたまふ。寶曆四年十二月二十七日遺跡を繼、九年十二月十五日年ごろ意りなくつとめしにより黄金一枚をたまふ。明和元年閏十二月二十九日組頭に遷り、七年十一月二十四日務を辭す。安永元年七月二十一日死す。年五十七。法名日安。妻は鎮喬が女、後妻は伴道與榮宣が女。

某 早世 牛之助

春之 初育 甚五郎 母は榮直が女。安永元年十月六日遺跡を繼。天明二年四月十三日西城の御納戸番に列し、六年閏十月二十日より本城のつとめとなり、寛政四年六月廿一日御代官に轉す。妻は石川造酒助公地が女。牛與善藏昌福が妻となり、離婚してのち石坂彦三郎善教に嫁す。

女子 實は松平伊賀守家臣由利三右衛門篤恭が女、春之に養はれて青山源三郎正知が妻となる。

女子 家紋 左三巴 丸の内水色に揚羽蝶 稻穂丸

河尻 七藏某嗣なくして家たの。

鎮昌 彌左衛門 新右衛門 江右衛門 河尻惣兵衛鎮宗が二男、母は河尻治右衛門鎮政が女。櫻田の館にいて小十人及び納戸の組頭をつとむ。寶永元年文昭院殿西城にうつらせたまふのとき、したがひたてまつり御家人に列し、鷹米二百俵を賜ひ、小普請となる。二年十一月十八日死す。法名日明。牛込の久成寺に葬る。のち葬地とす。妻は小野甚左衛門高重が女。

某 喜平治 母は高重が女。寶永三年二月二十九日遺跡を繼、正徳二年二月十四日死す。法名日定。

某 七藏 實は某氏の男、喜平治某が養子となる。

正徳二年五月二十六日遺跡を繼。九年二月十五日死す。年十二。嗣なきにより家たの。

三宅

家傳に、貞勝は播磨守允明官本末を知らず。九郎は明は明徳天皇第十皇子が末孫近江國の住人與五郎貞房が男なりといふ。

貞勝 源助

三河國にをいて東照宮につかへたてまつる。

正勝 立春頭 母は某氏。

元和六年六月東福門院入内るとき附屬せられ、御賄頭となりて御納戸の頭を兼、寛永八年七月二十二日京師にをいて死す。年五十五。法名淨正。北野報土寺の照福院に葬る。

陳忠 立春 新左衛門 母は某氏。

父に繼て東福門院に仕へたてまつり、御賄頭をよび御納戸頭をつとめ、現米百石月俸十口をたまふ。延寶六年崩じたまふにより、七年二月江戸に召れて小普請となる。元祿六年十月二日死す。法名圓大。

長房 三宅左近長爲が祖。左近

行賢 權之助 母は某氏。東福門院の御所につかへたてまつり、御納戸番をつとめ、のち父に先だちて死す。

陳壽 千之助 新五郎 母は某氏。

延寶七年十二月十一日父が遺跡をたまひ、小普請となる。元祿五年八月十二日御近習番に列し、十月十八日大番に轉す。六年十二月十一日祖父が遺跡を繼、先の原米は收めらる。寶永七年正月二十五日番を辭し、享保九年八月十三日甲府城の勤番となり、彼地にうつり住す。十二年五月十七日死す。年五十一。法名淨覺。甲府の法華寺に葬る。

陳寛 鎮次郎 新左衛門 實は太田新十郎林寛が二男、母は太田彦右衛門光重が女、陳壽が養子となる。

享保十二年八月三日遺跡を繼。三浦十のち勤番となり、十六年十一月二十八日はじめて有徳院殿にまゐたてまつる。寶曆九年十二月十五日年ごろ意りなくつとめしにより白銀二十枚をたまふ。安永三年正月十四日組頭に轉じ、

女子 實は松平伊賀守家臣由利三右衛門篤恭が女、春之に養はれて青山源三郎正知が妻となる。

女子 家紋 左三巴 丸の内水色に揚羽蝶 稻穂丸

河尻 七藏某嗣なくして家たの。

鎮昌 彌左衛門 新右衛門 江右衛門 河尻惣兵衛鎮宗が二男、母は河尻治右衛門鎮政が女。櫻田の館にいて小十人及び納戸の組頭をつとむ。寶永元年文昭院殿西城にうつらせたまふのとき、したがひたてまつり御家人に列し、鷹米二百俵を賜ひ、小普請となる。二年十一月十八日死す。法名日明。牛込の久成寺に葬る。のち葬地とす。妻は小野甚左衛門高重が女。

某 喜平治 母は高重が女。寶永三年二月二十九日遺跡を繼、正徳二年二月十四日死す。法名日定。

某 七藏 實は某氏の男、喜平治某が養子となる。

勝方 林右衛門 母は成房が女。安永八年十二月二十日勤番となり、九年五月十五日はじめて淺明院殿に拜謁す。天明六年四月六日遺跡を繼、寛政二年七月二十日駿府城の勤番に遷る。これよりのち彼地に住す。八年十一月十四日死す。年五十六。法名日信。駿府の感應寺に葬る。妻は朝比奈彌左衛門忠候が女。

惟清 五郎藏 伏木善兵衛惟定が養子。

正教 圓四郎 彌八郎 五郎兵衛 石野太郎兵衛正一が養子。

女子 諏訪祐右衛門頼保が妻。

陳永 定次郎 新左衛門 父に先だちて死す。妻は瀧野元壽元智が女。

成富 永吉 牧野岩藏成表が養子。

女子 石川五郎右衛門次祥に嫁し、離婚のち岡野源之助房安が妻となる。



勝光 浦吉

勝直 元左衛門 母は元智が女。

寛政八年十二月廿七日祖父が遺跡を繼。  
百五十月十日

女子

家紋 八劍輪寶 丸に三文字

三宅

長房

左近 三宅玄蕃頭正勝が二男、母は某氏。

東福門院御所につかへ御膳奉行をつとめ、のち御賄頭に轉す。

尙房

十次郎 實は村田氏の男、長房が養子となりてその女を妻とし、のち故ありて父が許にかへる。

女子

尙房が妻、のち離婚す。

直賢

勝之助 孫十郎 孫七郎 實は尙房が男、母は長房が女、祖父長房が養子となる。

寛政六年十二月十一日遺跡を繼、延寶六年八月十日小十人に列す。  
八年八月八日死す。年二十。法名宗慶。駒込の淨心寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は福田五郎助某が女。

拜調す。時比二

女子 左太郎

家紋 輪寶 丸に三文字

後三條源氏

田代

家傳には、田代冠者信綱が後胤にして、のち我孫子を稱し、賀次がとき葛野一郎兵衛が弟子となり、猿樂の技をもつて相馬圖書頭が扶助をうく。後御家人に召加へらるゝに及びて田代に復す。今按ずるに、官本の系圖後三條院第三の皇子輔仁親王の子左大臣有仁に源朝臣の姓を賜ふといひ、また藤原氏兼家の三男道綱より三代顯綱が子の系に兵衛佐有佐を係、實は後三條院の御子なりと記す。同書に田代冠者信綱は藤原氏爲憲流工藤介茂光が孫の系に出し、光茂が息女の子なり。實子にあらずと記し、これを源平盛衰記に考るに、田代冠者は後三條院第四皇子の御子有佐五代の孫とぞうけたまはる。父爲綱卿伊豆國司を賜り、任國の神拜に下り、在國のあひだ工藤介茂光が女に儲たる子なりとみえたり。これによれば信

行寛

初正之 賀寛 八之助 織部 實は糟屋彦兵衛義矩が五男、母は某氏、賀英が養子となる。

天明四年十二月二十二日はじめて凌明院殿に拜調し、寛政元年四月二十二日家を繼。時比三十一歳 十年二月七日二條の御藏奉行となる。妻は今西善次郎長郷が女。

女子

行綱

行忠

家紋 丸に角四目結 丸に花菱 丸に丸文字

英三郎 母は長郷が女。

賀信

勘平 織部 實は賀次が弟なり、賀次さきに男ありといへども早世せるにより嗣となる。

正徳四年三月七日はじめて有章院殿にまみえたてまつり、享保十五年六月四日遺跡を繼、小普請となり、延享二年六月十日死す。年五十三。法名雲峯。早世 數馬

賀次

綱は有佐が五代にしてその系統官本系圖にみえずといへども、有佐實は後三條院の皇胤たるをもつて子孫また後三條源氏と稱せしものか。

源太郎 五右衛門 主馬

賀久

卯之助 實は松平右京大夫家臣熊井小善次邦高が男、賀英が養子となる。

賀萬

初正之 乙次郎 五右衛門 實は大草三郎左衛門公隆が三男、賀英が養子となる。

明和八年三月二十五日はじめて凌明院殿にまみえたてまつり、天明三年十一月二十八日父にさきだちて死す。年三十四。妻は村上新左衛門正房が女。



卷第千三百十七

未勘源氏

諸家呈するところの譜、只源氏とのみ記してその祖の出所をしらざるものあり。今本國及び稱號家紋等を考へて據ある者は、清和もしくは宇多村上等もろくの源氏に收む。其證なきものはあつめてこゝにつらね未勘源氏と號く。

乙幡

半右衛門重行がとき家たゆ。

重義

勅次郎 東照宮につかへたてまつり、武藏國拜島領の御代官をつとむ。

重親

六右衛門 母は某氏。父に繼で御代官をつとむ。

重行

半右衛門 母は某氏。父に繼で御代官をつとむ。

重豊

勅助 父死するのとき會計の滞あるにより遺跡をたまはらず。

重友 乙幡字兵衛季豊が祖。六右衛門重房 木工右衛門 水戸家につかふ。

女子

深谷喜右衛門吉政が妻。乙幡甚五左衛門某が妻。

女子

家紋 丸に三鱗 上藤の丸

乙幡

重友

六右衛門 乙幡半右衛門重行が二男。神田の館につかへ、延寶八年徳松殿西城に入せたまふのときしたがひたてまつり、後御徒を勤む。

重季

與五兵衛 六右衛門 實は近藤彦大夫正義が男、重友が名跡となる。はじめ御徒をつとめ、のち組頭にすむ。

某

早世 龜三郎

季豊

萬之丞 宇兵衛 母は松平日向守家臣村越萬右衛門安方が女。享保九年四月二日遺跡を繼、元文三年十二月二十七日班をすゝめられて御座

匠となる。時十九歳 寶曆十年四月朔日より西城の御座匠をかぬ。安永九年十二月十六日組頭にすゝみ、寛政六年二月六日御座門切手番の頭に轉す。妻は酒井雅樂頭家臣伊舟城八左衛門知影が女。

女子

横山孫市利春が養女。庄之助 父に先だちて死す。

季邦

龜吉 勅次郎 母は知影が女。寶曆十二年九月二十八日御座匠の見習となり、天明二年八月二十九日父にさきだちて死す。年三十七。法名淨照。駒込の大林寺に葬る。妻は岡本善藏久致が女。

女子

季珍が妻。

直郷

鎮之丞 恒五郎 水谷善兵衛直賢が養子。

女子

實は村越氏の女、季豊にやしなはれて横山伊兵衛利直が妻となる。

女子

初季成 幸藏 助三郎 左兵衛 山田安の家臣小泉淺五郎昌風が妻。實は村越氏が女、季豊に養はれて横山伊兵衛利直が後妻となる。深津鈴之助憲成が妻。

女子

季珍

萬之助 治兵衛 實は可兒伊織勝威が三男、母は横山孫市利春が養女、實は季豊が養子となりてその孫女を妻とす。天明七年十一月八日より御座匠の見習をつとめ、寛政六年三月二十日御座匠となる。時十九歳 妻は季一が女。

某

勅之丞 母は季一が女。

女子

家紋 丸に三鱗 上藤の丸

石卷

忠之

庄兵衛 東照宮台徳院殿につかへたてまつり、御細工頭をつとむ。寛永七年十月七日死す。

忠章

章九郎 實は忠之が弟にして其嗣となる。大徳院殿につかへたてまつり、康永二百俵を賜ふ。正保二年八月五日大番となり、慶安元年六月十四日新番に轉す。四年八月九日死す。

忠邑

次郎八 次郎大夫 母は某氏。

忠武

千太郎 母は某氏。延寶四年七月十二日遺跡を繼。時十九歳 享保九年六月七日死す。年五十四。法名秀基。

忠總

内藏助 治郎大夫 庄兵衛 致仕 號隱齋 母は某氏。享保九年九月三日遺跡を繼。時十九歳 元文二年二月二日大番に列し、三年十一月八日刑部卿宗尹卿の近習番となり、のち小性にうつり、近習番に轉す。延享元年正月二十二日大番となり、二年七月十八日番を辭し、安永八年八月四日致仕す。寛政二年四月五日死す。年七十九。法名道樹。妻は大久保源之丞忠房が女。

女子

八十郎 母は忠房が女。安永八年八月四日家を繼。時二十九歳 寛政四年九月二十五日はじめて將軍家に

忠頼

承應元年十二月二十七日遺跡を繼、小普請となる。寛文六年三月大番となり、十年十月六日御納戸番にうつる。延寶四年二月十八日死す。法名道慶。四谷の長善寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は矢部助之進定成が女。

女子

まみえたてまつり、十年六月十四日大番に列す。妻は寛吉太郎政敏が女、後妻は木村源助敬忠が女。

忠慎

佐太郎 母は敬忠が女。午之助

某

家紋 鶴の丸 二巴

澤

八郎兵衛某がとき家たゆ。

某

四郎左衛門 台徳院殿につかへたてまつり、御簞笥奉行をつとむ。寛永二年死す。

某

八郎兵衛 寛永二年遺跡を繼、この年死す。年九。嗣なくして家たゆ。

貴茂

澤助右衛門義保が祖。庄七郎 四郎左衛門



某が二男。母は某氏。  
正保四年十二月二十五日めされて小十人に列し、後藤米百俵月俸十口をたまひ、のち番を辭し、小普請となる。元禄六年十二月六日致仕し、正徳元年正月二日死す。年八十七。法名養心。小日向の龍興寺に葬る。後代々葬地とす。妻は土屋相摸守家臣新山孫右衛門某が女。

某

平兵衛 母は孫右衛門某が女。  
延寶六年三月二十九日小十人に列し、元禄六年三月十二日父にさきだちて死す。法名了正。

信之

權六郎 森川次郎信貞が養子。

貴政

勘右衛門 實は森大勝某が男。母は某氏。貴茂が養子となる。  
元禄六年十二月六日家を繼、十年七月二十三日小十人となり、正徳三年五月六日番を辭し、享保十三年十月十四日死す。年六十三。法名全空。妻は間宮三右衛門元信が女。

貴隆

四郎左衛門 母は元信が女。  
寶永六年四月六日小十人に列し、元文五年閏七月九日番を辭す。延享元年四月四日致仕し、二年三月七日死す。年五十三。法名道久。妻は蜂屋多宮某

承應元年十二月十八日廣米二百俵に復す。のち番を辭し、小普請となる。延寶元年九月二十六日死す。法名了心。市谷の月桂寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は山下庄大夫義勝が女。

某

太郎兵衛 母は某氏。  
某年大番に列し、廣米二百俵をたまふ。寛文八年十一月十一日大坂の御弓奉行にうつり、十二月十二日百俵をくはへらる。九年二月八日彼地に在りて死す。法名元忠。

元喬

太郎右衛門 母は義勝が女。  
寛文九年七月十九日さきに兄太郎兵衛某終に隨て、元喬をしてその遺跡を繼しめん事を請申といへども、父元明存在せるにより其旨をゆるされず。しかりといへども太郎兵衛某が勤勞をおほしめされ、更に廣米二百俵を賜ひ、大番に列す。天和二年八月十九日死す。法名宗英。妻は天野又太郎貞重が女。

元住

八十郎 甚左衛門 源左衛門 實は小林左次兵衛重信が四男、母は某氏。元喬が養子となりてその女を妻とす。  
天和二年十二月十六日遺跡を繼。時二十  
貞享元年十二月十八日大番に列し、元

が女、後妻は佐橋七左衛門佳清が女。  
女子 和田彌五左衛門某が妻。  
女子 千種清右衛門某が妻。  
女子 名倉藤五郎勝意が妻。

貴允

喜三郎 母は多宮某が女。  
延享元年四月四日家を繼、三年七月十一日西城の小十人に列し、寶暦十一年八月三日より本城のつとめとなり、十二年二月十五日西城に勤仕し、明和四年七月朔日死す。年四十四。法名道樹。

某

早世 多四郎

女子

清三郎 彌四郎 勘右衛門 母は某氏。

義保

明和四年閏九月四日遺跡を繼。時二十  
寶暦五年十月二日西城の小十人となり、安永八年四月十六日より本城に勤仕し、天明元年二月十六日西城に復し、六年閏十月二十日本城の務となり、十一月十三日番を辭す。

勝政

鑄五郎 父に先だちて死す。

女子

祖父義保が養女。

貴房

清三郎 父にさきだちて死す。

正常

直八郎 田安の家臣生形八右衛門正明が養子。

貴恒

斧藏 實は丸橋茂八郎茂矩が三男、母は吉田氏の女、義保が養子となりて其女を妻とす。妻は義保が養女。

女子

實は勝政が女、義保にやしなはれて貴恒が妻となる。

女子

家紋 丸に三柏 丸に花菱

三輪

家傳に、紀伊守元勝今川家につかへ、後東照宮につかへたてまつる。其男彌左衛門元繼武田萬千代君に屬せらる。元明は其男なりといふ。

元明

小左衛門  
台徳院殿につかへたてまつり、大番をつとめ、廣米二百俵を賜ふ。寛永十一年十月十三日先に駿府城の守衛にありて同僚とおなじく交代の事を懇訴せしにより改易せられ、慶安四年十月十七日赦免あり。

元幹

金三郎 母は忠清が女。  
安永元年九月六日遺跡を繼。時十四  
天明八年十二月二十三日はじめて將軍家にもみえたてまつり、寛政三年六月十七日駿府の勤番となり、彼地にうつり住す。妻は清水の家臣大久保藤四郎忠時が女。

某

卯之吉 母は忠時が女。

元知

安吉 大等  
出家して駿府の寶臺院の弟子となる。

元喬

彌三郎  
家紋 丸に須濱 破風の下須濱

花村

家傳、小田初め廣瀬を稱し、正實が時武田信玄の命により花村に改む。







忠長卿につかへ、書院番をつとめ、彼卿所領没せらるゝのとき處士となり、のちめしかへされ、御家人に列し采地をたまふ。其後ゆへありて御勘氣を蒙り、采地を收めらる。慶安元年六月三日赦免あり。三年廩米を賜ひ、四年十一月四日廩米を采地にあらためられ、武藏國足立郡のうちに在いて百五十石を知行す。承應三年七月十八日大番に列し、萬治元年六月十四日廩米五十俵を加へられ、すべて二百石となる。寛文二年九月三日死す。法名松榮。小日向の月輪寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は松平加賀守家臣本多安房守政重が女。

元脇

次郎四郎 五平次 實は松平九郎右衛門重利が二男、母は長鹽又左衛門正家が女。  
寛文元年二月二十八日はじめて殿有院殿に拜調す。二年十二月九日遺跡を繼、八年八月二十二日としごろ意りなく勤めしにより黄金五枚を賜ふ。寶永元年六月六日番を辭し、小普請となり、享保七年五月十八日死す。年七十三。法名宗源。妻は元繼が女。  
元脇が妻。

赤坂

正勝

四郎右衛門 大猷院殿の御とき御徒にめし加へられ、後組頭となり、そのち御廣敷の添番に轉す。

正相

孫七郎 四郎右衛門 孫七郎 母は田中筑後守家臣服部吉右衛門某が女。

寛文六年十二月十一日遺跡を繼、後支配勘定をつとめ、延寶五年二月十九日班をすゝめられて御勘定となる。四月十九日仰をうけて上方に赴き、御料の地を檢し、天和二年三月二十八日武藏、常陸、下總、駿河、遠江の國々におもむき、堤川除の修造を檢す。貞享四年十一月十九日殘物奉行にうつり、元祿三年十一月九日ゆへありて小普請に貶され、七年七月十日致仕す。享保八年二月二十七日死す。法名知善。下谷の天龍寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は吉田仁右衛門定安が女。

正堅

四郎右衛門 母は定安が女。  
元祿七年七月十日家を繼、寶永二年十月十三日小十人となり、享保七年二月

元智

喜太郎 十右衛門 母は元繼が女。  
天和二年六月二十六日はじめて常憲院殿に拜調す。元祿六年十二月九日大番となり、享保七年八月二日遺跡を繼、十七年五月十二日番を辭し、元文元年十月二十四日死す。年六十五。法名玄心。妻は佐橋甚兵衛佳成が女。  
傳十郎 菅八郎

元倚

千之助 母は佳成が女。  
元文元年十二月二十九日遺跡を繼、三年三月二十日大番に列し、寛保三年十二月二十日番を辭す。寶曆元年六月廿四日死す。年三十四。法名玄境。妻は山角主膳定喜が女。  
元宣 猶三郎 兄元倚が養子。

元宣

猶三郎 實は元智が二男、母は佳成が女、元倚が嗣となる。  
寶曆元年八月四日遺跡を繼、七年八月二十九日死す。年二十八。法名帶雲。  
元宣が養女。

元久

左膳 實は山角四郎兵衛定福が二

元壽

男、母は石川五郎七成伊が女、元宣が終にのぞみて養子となり、その女を妻とす。  
寶曆七年十一月十二日遺跡を繼、明和五年十二月五日はじめて渡明院殿に拜調し、六年七月二十八日死す。年二十九。法名利乘。妻は元宣が養女。  
實は元倚が女、元宣にやしなはれて元久が妻となる。

元長

富五郎 實は一場庄右衛門政武が二男、母は酒井下野守家臣久保次郎兵衛重通が女、元久がをばりにのぞみて養子となる。  
明和六年十月六日遺跡を繼。七年八月晦日大番に列し、のちしばしば射を射て時服を賜ふ。天明二年十一月二十九日西城の新番に轉じ、六年閏十月二十日より本城に勤仕し、寛政九年三月八日西城に復す。妻は中山彌左衛門義陳が女、後妻は金田友之丞正友が女。

元長

岩次郎 實は郡筑又十郎晴本が二男、母は田安の家臣守山七郎祐之が女、元壽が養子となる。

正乙

權之丞 四郎右衛門 母は俊智が女。  
天明元年十二月十二日家を繼。八年十二月二十三日はじめて將軍家に拜調す。妻は田安の家臣渡邊源四郎寛が女。

女子

土肥新助惟直が妻。

秀俊

源三郎 藤左衛門 小野寺彦十郎秀鎮が養子。

女子

大奥につかふ。

正休

政五郎

女子

家紋 丸に萬 蛇目

久保

玄貞 法眼  
醫を善するをもつて寛文六年十一月二十八日はじめて殿有院殿にまみえたまつり、延寶三年九月十九日めされて廩米二百俵月俸十口を賜ひ、寄合に列し、のち奥醫となり、八年十二月二十八日法眼に叙し、貞享二年八月七日務を辭し、四年



七月致仕し、十七日死す。法名實通。東叡山の壽昌院に葬る。のち代々葬地とす。妻は松平出雲守家臣大藏源兵衛某が女。

**徳直** 玄長 玄貞 法眼 母は源兵衛某が女。  
延寶四年九月十三日はじめて殿有院殿にまみえたてまつり、貞享四年七月十日家を繼、元祿二年四月九日奥醫となり、五月七日法眼に叙し、十三年八月二十五日奥の務にかなはざるにより近侍をゆるされ、宅地を本所に移さる。寶永七年九月三日番醫となりて三九に候し、正徳元年九月九日死す。法名玄如。妻は島田越中守重頼が女。  
女子 鈴木治左衛門重直が妻。

**徳恒** 玄長 玄貞 母は重頼が女。  
元祿十二年三月十五日はじめて常憲院殿にまみえたてまつる。時正徳元年十一月二十五日遺跡を繼、享保十九年二月三日死す。年四十九。法名實幽。妻は菊地氏の女。

**徳尊** 幸之助 玄長 玄貞 母は菊地氏の女。  
享保十九年五月三日遺跡を繼、十二月十一日はじめて有徳院殿に拜謁し、寛

保二年六月二十日番醫となり、寛延三年十一月二十九日番を辭し、寶曆五年六月五日死す。年四十一。法名實應。妻は堀田相摸守家臣高村良務某が女。  
**高平** 源之助 要人 三右衛門 辻新之丞 高豊が養子。

**徳堯** 玄長 玄貞 實は横井氏の男、母は藤堂氏が女、徳堯が養子となりてその女を妻とす。  
寶曆四年十一月二十五日はじめて惇信院殿にまみえたてまつり、五年九月三日遺跡を繼、六年十二月四日番醫となり、七年六月十八日番を辭す。安永四年閏十二月十二日致仕し、天明五年三月十一日死す。年五十三。法名遊仙。妻は徳堯が女。  
女子 徳堯が女。

**徳盛** 左仲 玄仙 玄長 實は栗原氏が男、母は某氏、徳盛が養子となりてその女を妻とす。  
安永四年閏十二月十二日家を繼。時正徳元年十一月十八日はじめて澄明院殿にまみえたてまつる。妻は徳堯が養女。  
女子 實は飯高孫左衛門胤節が女、徳堯に養はれて徳盛が妻となる。  
女子

某 辰次郎 母は徳堯が養女。  
家紋 四菱 五三の桐

**守能** 庶流圖書慎明が家傳に、先祖はじめ森を稱し、のち守能にあらたむといふ。熊之丞方明がとき嗣なくして家たゆ。

**通明** 五左衛門

**芳明** 五郎兵衛  
神田の館にいて常憲院殿につかへたてまつる。

**繼明** 守能圖書慎明が祖。斤左衛門

**長成** 五郎右衛門 實は守能斤左衛門繼明が長男、母は京極備中守家臣野間小左衛門某が女、芳明が養子となりて其女を妻とす。  
はじめ神田の館に勤仕す。延寶八年常憲院殿本城に入せ給ふのとき御家人に加へられ、後三九御廣敷番の頭となり、元祿二年十二月二十一日加恩ありて廩米二百五十俵を賜ひ、これよりさき賜ふところの月俸は收めらる。六年十月

九日三九の用人にうつり、百石を加増あり、廩米を采地にあらためられ、すべて三百五十石を知行し、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。九年八月十七日死す。法名是空。淺草の安養寺に葬る。後葬地とす。妻は芳明が女。  
女子 長成が女。

**方明** 千太郎 熊之丞 母は芳明が女。  
元祿九年十二月九日遺跡を繼、寄合となる。時寶永二年七月十三日死す。年十三。法名幼無。嗣なくして家たゆ。

**守能** 斤左衛門 守能五左衛門通明が二男。  
京極若狹守高成につかふ。

**長成** 五郎右衛門 守能五郎兵衛芳明が養子。  
**安明** 宇兵衛 吉兵衛 母は京極備中守家臣野間小左衛門某が女。  
父に繼で高成につかへ、元祿九年三九御廣敷の番にめし加へられ、十二年十月七日班をすゝめられて三九御廣敷番の頭にうつり、加増ありて廩米二百

五十俵を賜ひ、これよりさき賜ふところの月俸は收められ、十四年十一月七日五十俵を加賜せらる。寶永元年正月二十一日また二百石をくはへられ、廩米をあらため常陸國眞壁郡のうちにをいてすべて五百石の采地を賜ふ。二年桂昌院御方逝去により、八月十四日務をゆるされ、小普請となり、四年四月七日大番に列し、正徳二年四月二十五日御鏡炮玉藥奉行に轉す。享保四年十二月十五日さきに本郷村御鏡炮藥調合場にいて藥より火うつりし始末をたださるゝのところ、常に人数を省き、しかるのみならず其しめすと、ころもおろそかなるがいたすところなりとて、出仕を停められ、五年正月十六日赦免あり。十年九月十二日御鏡炮藥調合場に、穿鑿を違はるゝのところ、ことさらに減少す。かゝる始末不念のいたりなりとて、出仕を停められ、十一月二日ゆるさる。二十年十一月十七日死す。年七十一。法名元誠。品川の大龍寺に葬る。後代々葬地とす。妻は分部若狹守家臣佐治與右衛門某が女。

**博明** 松太郎 宇兵衛 母は與右衛門某が女。

正徳元年五月十五日はじめて文昭院殿にまみえたてまつる。時享保十六年十一月二十五日大番に列し、二十年十二月二十二日遺跡を繼、寶曆四年五月二十一日組頭にうつる。これより先射を射て時服をたまふ。安永四年九月十一日死す。年七十七。法名淨説。妻は京極佐渡守家臣守能斤左衛門知明が女。  
女子 遠山三大夫安定が妻。  
女子 水戸家につかふ。

**長榮** 千之丞 吉兵衛 母は知明が女。  
寛延元年五月朔日はじめて惇信院殿に拜謁す。時寶曆二年十二月二十七日大番となり、安永四年十二月六日遺跡を繼、寛政三年五月廿日その務に應ぜざることあるにより、小普請に貶して出仕をとめられ、七月十日ゆるさる。これよりさき御弓場始の射手に候し、或は騎射歩射をつとめ、あるひは放鷹のとき鳥を射て時服黄金等を賜ふ事しばしなり。五年八月十二日死す。年六十。法名行節。妻は松平源四郎勝友が女、後妻は長田新五郎直房が女。  
女子 壺井小左衛門長教が妻。

**廣高** 初廣吉 主税 十郎右衛門 能登



守 山城守 坂部三十郎廣保が養子。

正明 内蔵丞 松波九左衛門久禰が養子。

女子 石巻権右衛門康福に嫁し、離婚してのち石丸孫之丞有由が妻となり、またすてられて兄山城守廣高にやしなはる。

辰明 五百之丞 小倉孫太郎正榮が養子となり、後博明が許に歸る。

慎明 李之允 圖書 母は直房が女。安永七年三月朔日はじめて凌明院殿にまみえたてまつり、七月十九日大番に列し、寛政五年十一月五日遺跡を繼ぐ。

利運 初利吉 長之丞 惣右衛門 石河 理右衛門利陳が養子。

景鏡 長三郎 久左衛門 市左衛門 都筑藤助景備が養子。

女子 田澤松三郎正申に嫁し、後離婚す。

女子 都筑市左衛門景鏡が養女。

某 早世 新太郎 鎌藏 母は久藏が女。

近明 國次郎 横平 堤左衛門光迢が養子。

某 又藏

家紋 五三桐 九曜

森

容甫 雲仙 養春院 法眼 法印 はじめ五雲子が弟子となり、醫を業とす。延寶八年十二月十一日めし出され、十五日はじめて常憲院殿に拜謁し、天和二年五月二十七日廣米二百俵月俸十口をたまひ、元祿二年四月九日奥醫にすゝみ、五月七日法眼に叙し、四年正月十三日百石を加恩あり、廣米を采地にあらためられ、すべて三百石を知行す。十二年十二月十八日法印にすゝむ。後また采地を廣米にあらためらる。十五年二月九日死す。法名泰剛。西久保の青龍寺に葬る。後代々葬地とす。妻は伏田左近某が女。

延龍 雲長 雲仙 致仕號雲翁 母は左近某が女。貞享四年九月六日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、元祿十五年六月二十三日遺跡を繼ぐ、寄合となる。享保五年十二月二日より月光院御方の奥醫となり、法心院蓮淨院の療治をかぬ。二十

年閏三月七日番を辭し、後また月光院御方の療治をうけたまはる。元文元年十一月二十六日致仕し、五年十二月四日死す。年七十三。法名即心。妻は松平越後守家臣不破兵助某が女。

親喜 初勝信 作十郎 庄右衛門 常憲院殿の仰により松平久之丞康納が弟となり、松平五郎兵衛甫昌が養子となる。これ甫昌が家は御庶流たるによりてなり。

宗堅 順庵 中村を稱す。内藤能登守が家臣となる。

女子 内藤久五郎政矩が妻。

某 雲長 母は兵助某が女。正徳四年十二月二十八日はじめて有章院殿に拜謁し、享保十四年五月三日月光院御方廣敷の療治を奉はり、某年父に先たちて死す。法名良芳。妻は土岐吉右衛門頼顯が養女。

好爲 雲竹 雲庵 雲仙 致仕號海鷗 母は上におなじ。享保十七年十二月六日はじめて有徳院殿に拜謁し、元文元年十一月二十六日家を繼ぐ、小普請となる。二年十二月二十日番醫に列し、寛保元年五月十四日番を辭す。延享二年四月九日致仕し、

寶曆三年十二月二十八日死す。年五十二。法名道音。

當定 長十郎 雲禎 養春院 法眼 法印 實は中村氏が男、母は某氏、好爲が養子となる。延享二年四月九日家を繼ぐ、四年九月二十一日番醫に列し、寶曆六年九月四日西城の奥醫にすゝみ、十二月十二日法眼に叙す。十年五月十三日より本城に候し、十二年十一月九日孝恭院殿御誕生のとき、其事をうけたまはりしにより黄金二枚を賜ふ。安永五年四月凌明院殿日光山に詣たまふのときしたがひたてまつり、六年十二月朔日西城のつとめとなり、この日法印にすゝむ。八年孝恭院殿薨去により、四月十六日日本城に勤仕し、天明元年五月二十八日西城に復す。十一月十六日死す。年六十五。法名英哲。妻は諏訪數馬知高が女、後妻は數原清庵宗勝が女、また宗勝が二女を娶る。

當光 仙太郎 雲悅 雲禎 法眼 母は某氏。寶曆四年十一月二十五日はじめて惇信院殿に拜謁す。九年二月七日西城御廣

數の療治をうけたまはり、十一年八月五日より本城御廣敷の療養をうけたまはる。安永五年三月十二日奥醫に列し、十二月十六日法眼に叙す。天明元年十二月二十五日遺跡を繼ぐ、後種姫君及び安祥院の療治をかねうけたまはる。寛政三年四月七日死す。年五十四。法名道功。妻は池原長仙院良誠が女。

女子 田安の家臣石寺伊織章貞が妻。

某 常之丞 雲琢 道和 岡道和壽倫が養子。

某 乙之助

女子 須田三十郎盛鷹が妻。

女子 峯彌

女子 座光寺與市爲貞が妻。

當信 雲悅 父にさきだちて死す。

當寬 吉五郎 雲南 母は良誠が女。寛政三年七月二日遺跡を繼ぐ、寄合となる。時七十七歳。享年十一月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。

女子 田安の家臣石寺龜六高行が妻。

女子 家紋 二重龜甲に唐花 裏梅

森 寛政はじめ喜多を稱し、めし出さるゝにをよびて森にあらたむ。

寛政 權之丞 甚兵衛 致仕號常久 元祿三年八月十八日めされて常憲院殿につかへたてまつり、御廊下番に列し、廣米百五十俵を賜ふ。十一月四日御次番に轉じ、四年四月廿三日御廊下番に復す。寶永六年二月二十一日土圭間番にうつり、享保元年五月十六日土圭間番を廢せらるゝにより、小普請となり、二十年十二月二十一日致仕し、寛保元年九月二十三日死す。年七十七。法名日長。谷中の妙法寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は川上源五兵衛直重が女、後妻は半井氏の女。

寛治 作之丞 清次郎 紀内 致仕號如心 母は直重が女。元祿十四年三月四日はじめて常憲院殿に拜謁す。時八歳。後父にそふて御廊下番をよび土圭間番の見習をつとめ、のちゆるさる。享保二十年十二月二十一日家を繼ぐ、元文五年十二月三日致仕し、寛保二年六月二十九日死す。年四十九。法名日性。



和寛 重次郎 兄寛治が養子。  
女子 東條平左衛門道源が妻。

寛明 重次郎 實は寛政が二男、母は半井氏が女、兄寛治が嗣となる。  
元文五年十二月三日家を繼、延享三年四月十八日表御右筆となり、寶曆七年七月九日死す。年四十七。法名日清。

寛明 門彌 甚十郎 其三郎 致仕號茂久 實は高橋久兵衛與胤が四男、母は永井伊賀守家臣杉本新左衛門某が女、和寛が終にのぞみて養子となり、その女を妻とす。  
寶曆七年十月八日遺跡を繼、八年十月二十八日はじめて信院殿に拜謁し、十年正月二十三日西城の小人に列す。十一年八月三日より本城に勤仕し、十二年十二月十五日より西城に復す。十三年七月十七日番を辭し、寛政五年十二月二十一日致仕す。法名日清。妻は和寛が女。

寛柔 甚之丞 清次郎 母は和寛が女。  
寛政五年十二月二十一日家を繼。時比三十五歳。妻は佐山九十郎朝義が女、後妻は笹瀬庄太郎貞恒が女。  
女子 寛明が妻。

高郷 小平太 母は與右衛門某が女。  
元祿三年二月五日父が罪に坐して放逐せられ、五年五月九日ゆるさる。十二年七月六日家を繼、十四年六月十一日小人に列し、十二月二十二日百俵を加へられ、すべて廩米百俵月俸十口の祿となる。享保七年二月十一日としごろの精勤を賞せられて金十兩をたまひ、十三年七月二十日番を辭し、十七年正月二十七日死す。年六十七。法名常全。妻は有馬中務大輔家臣佐竹左衛門某が女。

高郷 源太郎 母は李左衛門某が女。  
寶永六年四月六日小人となり、享保六年六月五日としごろをこたりなく勤めしにより、金十五兩を賜ふ。元文四年八月十八日死す。年四十七。法名常光。

某 父が罪に坐して兄とともに放逐せられ、のちゆるさる。

某 久次郎  
久豊 富藏 高田萬藏久徳が養子。

某 市之丞 母は某氏。

某 勝次郎

某 丸に梅鉢 丸に松皮菱

家紋 丸に梅鉢 丸に松皮菱

卷第千二百十九

未勘源氏

若藤

高豊 左右衛門 致仕號法入

神田の館につかへ、延寶八年常憲院殿本城にいらせたまふの時、したがひたてまつり御家人に加へられ、御馬方となり、廩米百五十俵を賜ひ、十二月二十六日五十俵をくはへらる。天和元年七月十日桐間に候すべきむね仰をかうぶる。十一月二十一日百俵を加増あり。貞享元年十一月二十一日御小納戸に轉じ、十二月二十六日二百俵をくはへられ、總て五百俵の祿となる。二年四月四日布衣を着することとゆるさる。元祿三年二月五日高豊卑賤の勤より追々昇進せるのころ、勤務等閑にしてしばしば御叱ありといへどもあらためず。老年のものに似あはざる所爲なるにより嚴重の御沙汰によはるべしといへども、年久しき勤仕のゆへをもつて身命を助けられ、改易せしめらる。五年五月九日ゆるさる。十年四月二十日めされて月俸十口をたまひ、小普請となり、十二年七月六日致仕す。正徳三年三

女子 養女。相澤定次郎春常が妻。

家紋 五本骨扇子日の丸 丸に角四目結

須田

某 玄碩 醫業をもつて神田の館にをいて常憲院殿につかへたてまつる。

某 玄貞 母は某氏。

神田の館に仕ふ。延寶八年常憲院殿本城にうつらせたまふのとき御家人に列し、廩米二百俵をたまふ。元祿元年八月二十五日奥醫となり、三年九月十九日さきに家業を勤むべきむね仰出さるのころ、これを怠るにより小普請に貶さる。今よりのちなを憐愍せるにをいては嚴重の御沙汰に及ばるべし。療治善脩するにいたらば席をもすゝめらるべし。この旨得道すべきむね命ぜらる。七年十一月二十一日許されて寄合に列し、なを家業を勤むべき旨仰下さる。九年八月廿五日奥詰となり、寶永六年常憲院殿薨御により、二月廿一日務を聽されて寄合となる。享保十八



年七月廿九日死す。法名全柱。江戸見坂の陽泉寺に葬る。後代々葬地とす。妻は島十郎右衛門秀政が女、また秋山五郎兵衛政勝が女を娶る。

某 玄貞

寶永二年十一月二十八日はじめて常憲院殿に拜調す。享保十六年五月三日父にさきだちて死す。

正久 玄碩 正養が養子。

政甫 熊之助 九左衛門 秋山五郎兵衛政勝が養子。

政房 五八郎 九左衛門 兄政甫が養子。

正養 玄通 母は政勝が女。

享保十八年十月二十六日遺跡を繼、小普請となる。明和四年二月十八日死す。年五十三。法名良的。

女子 岡田庄大夫俊惟が妻。

正久 玄碩 實は玄貞某が長男、母は某氏、正養が養子となる。

明和四年五月六日遺跡を繼、六年十二月四日致仕し、安永八年六月十八日死す。年五十二。法名全始。

正武 玄谷 實は多田氏が男、母は上領

重陸

市太郎 春菴 母は某氏。

神田の館につかへ、延寶八年常憲院殿本城にいらせたまふの時、したがひたてまつり、御家人に列し、番醫となり、元祿三年九月十九日家業精入べきのむね、かつて仰出さるゝのころ、療治の數すくなきよしをきこしめされ、小普請に貶さる。なを意るに於ては嚴重の御沙汰に及ばるべし。しかれども今よりのち業を勵み、療治善備するにいたらば、小普請をゆるさるべきむね命をかうぶる。七年十一月二十一日のるされて寄合に列し、十一年十月二十八日また小普請に貶さる。十三年七月十二日番醫となり、十四年十二月二十一日奥醫にうつる。この日八十俵を加へられ、すべて慶米百俵月俸五口をたまふ。寶永六年番醫に復し、正徳元年十二月二十三日月俸五口を加へられ、享保八年三月二十七日番を辭す。十八年五月二十五日致仕し、元文四年十二月九日死す。年八十六。法名半野。小日向の高源寺に葬る。のち同じ。妻は岡見氏の女。

某 貞菴

寶永二年十一月二十八日はじめて常憲院

氏が女、正久が養子となる。

明和六年十二月四日家を繼、安永元年三月十四日番醫に列す。十五年六月二十七日死す。年四十一。法名榮全。妻は龜井能登守家臣寺西久右衛門時章が女。

女子 三島七之助賢充が妻。

正勝 喜藤太 昌意 母は時章が女。

安永五年九月十日遺跡を繼。慶長二百俵。妻は目黒氏が女。

女子 堅治

女子 一郎 母は目黒氏が女。

女子 家紋 橘

吉登 貞菴

外科の醫をもつて神田の館につかふ。

殿に拜調し、正徳二年六月三日父にさきだちて死す。

忠園 友三郎 玄忠 母は岡見氏の女。

正徳三年四月朔日はじめて有章院殿にまみえたてまつり、享保十八年五月二十五日家を繼、このとき請むねにまかせられ、内科の醫となる。二十年十一月九日番醫に列し、明和五年八月二十八日死す。年七十八。法名良關。妻は松平加賀守家臣木村又右衛門某が女。

女子 松平素菴茂喬が妻。

忠徴 市太郎 春厚 母は又右衛門某が女。

明和元年四月十八日はじめて淺明院殿に拜調し、五年十一月四日遺跡を繼、寛政五年八月九日致仕す。時五十五。妻は本康宗碩徳養が女、後妻は大岡五平次清長が女。

女子 小笠原吉兵衛元珍が妻。

女子 文次郎

通洪 主殿 安藤忠右衛門英次が養子。

父にさきだちて死す。

忠尙 春菴 父にさきだちて死す。

直堯 主計 伊織 織部 伊織 靱負 永井筑前守直廉が養子。

女子 川勝頼母廣永が妻。

忠温 流謙 春菴 元春 實は小島氏の男、母は中村氏の女、忠徴が養子となりてその女を妻とす。

寛政五年八月九日家を繼、家祿のうち十五俵を收めらる。時七十九年八月二十七日番醫となり、舊祿に復す。妻は忠徴が女。

女子 忠温が妻。

某 銚吉 母は忠徴が女。

某 金藏

某 鑑助

家紋 九曜 四目結

清勝 甚五左衛門

神保

神田の館に在りて常憲院殿につかへたてまつり、書院番をつとめ、のち使番に轉す。延寶八年徳松殿の御供に候し、御家

人にくはへられ、慶米三百俵を賜はりて西城に候し、天和三年逝去により、小普請となる。貞享元年七月十八日桐番間に列し、のち番を辭す。二年十二月十三日死す。年五十三。法名日久。駒込の大恩寺に葬る。のち代々葬地とす。

清満 甚三郎 母は某氏。

貞享三年七月十日遺跡を繼、元祿二年九月二十二日桐番となり、三年二月二十一日ゆへありて小普請に貶され、出仕をはかり、四年四月二十四日御ゆるしありて大番に列し、九年十二月二十二日としごろ意りなくつとめしにより黄金三枚をたまふ。正徳三年六月十二日御金奉行に轉じ、享保元年七月十一日御代官に移り、五年七月三日手代ならびに家従の業よからざる風聞ありしかば、去秋よりの事なりしに、既に糺明を達らるゝまでこゝろつかざりし越度により職を奪はれて出仕をとめられ、六年四月二十四日ゆるされて御勘定奉行の支配となる。寛保二年八月十八日死す。年七十四。法名日實。

清信 三右衛門 兄清満が養子。

長矩 權之丞 甚左衛門 名取半左衛門信突が養子。

女子 松下半左衛門氏庸が妻。



清信

三右衛門 實は清勝が二男、清滿が嗣となる。  
寶永六年八月二十八日はじめて文昭院殿に拜謁し、のち父にさきだちて死す。妻は久保田佐次右衛門隆政が女。

清綱

政之丞 母は隆政が女。  
寛保二年十一月五日祖父清滿が遺跡を繼、御勘定奉行の支配となり、清滿が職にありしとき、負金を償へしとの嚴命をかうぶり、寶曆六年六月その會計をはりしにより、十一年九月二十三日小普請となる。十二年十二月七日はじめて淺明院殿に拜謁し、十三年二月四日死す。年四十三。法名日慈。妻は森平右衛門久征が女。

清智

徳市郎 藤左衛門 母は久征が女。  
寶曆十三年五月三日遺跡を繼。時三十三歳。安永五年十二月二十三日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、天明八年十月二十五日大番となり、寛政三年七月五日番を辭す。妻は多賀谷幸次郎光長が女。  
女子 鈴木萬右衛門正英が妻。

清忠

勝太郎 母は光長が女。

女子

清久 金三郎

家紋 丸に四目結 五三桐

大塚

某

茂右衛門 御鷹方をつとむ。

光廣

太左衛門 實は村上權兵衛某が男、母は某氏、茂右衛門某が養子となる。  
神田の館にをいて右筆をつとむ。延寶八年徳松殿西城にいらせたまふのとき、たがひたてまつり、御家人に列し、鷹米百俵月俸五口をたまはりて西城に勤仕し、天和三年逝去により小普請となり、七月二十三日御右筆に列し、貞享三年十二月十一日五十俵を加へられ元祿七年十二月二十三日また五十俵を加賜せられ、月俸は收めらる。九年十二月二十二日としごろ意なくつとめしにより黄金五枚をたまひ、寶永六年三月十三日務を辭す。享保元年十二月十九日死す。年七十九。法名消無。駒込の江岸寺に葬る。のち代々葬地とす。

某

妻は松井氏の女。  
父に繼て御鷹方をつとむ。

光音

三三郎 三左衛門 母は松井氏の女。  
貞享四年九月六日はじめて常憲院殿にまみえたてまつる。時十歳。元祿十年三月十八日御右筆となり、寶永二年十二月十九日務を辭し、寛延二年三月三日死す。年七十二。法名無量。

光英

庄左衛門 末吉孫左衛門喜干が妻。

徳光

頼母 太左衛門 母は某氏。  
寛延二年六月二日遺跡を繼、十月六日西城の小十人に列し、三年十月二十八日番を辭す。寶曆九年八月十二日小十人に復し、明和六年四月二日新番にうつり、寛政七年十二月二十八日老を付けて番を辭す。このとき黄金二枚をたまふ。八年八月十四日致仕す。九年九月二十一日死す。年七十六。法名全光。妻は石井庄左衛門某が女。

光清

源六 勝之助 又八郎 入江又八郎倫毅が養子。

卷第千三百二十

未勘源氏

新井

正次

權左衛門 神田の館にをいて常憲院殿に奉仕し、簞笥奉行をつとめ、延寶八年徳松殿にしたがひたてまつり、御家人に列し、鷹米二百俵を賜ひ、西城につとめ、天和三年逝去のち小普請となり、元祿六年十二月六日致仕し、七年九月二十六日死す。年七十二。法名元指。駒込の高林寺に葬る。のち代々葬地とす。

正清

理右衛門 母は某氏。  
元祿六年十二月六日家を繼、十年七月二十三日小十人に列し、寶永元年八月九日御腰物方にうつり、正徳三年七月十四日昨夕正清等當直のとき表に渡御ありしに、御腰物方の部屋ものさしがしかりし事不敬のいたりなりとて、出仕を停められ八月十七日ゆるさる。享保元年十月十一日番をゆるされ、六年十二月三日死す。年六十二。法名傳榮。

某

妻は内藤丹波守家臣川村九大夫某が女。

女子

小澤庄大夫忠順が妻。

正豊

平藏 母は九大夫某が女。  
享保六年十二月二十七日遺跡を繼、九年十月九日小十人に列し、十一月十五日椋信院殿に附屬せられて二九に勤仕し、のち西城に候す。十一年十月二十二日西城の御納戸番に轉じ、十五年四月十三日新番にうつり、十九年四月二十九日小太郎君の近習番となり、後一橋の館にしたがひまいらせ、そのち務を辭し、寛延三年六月二十九日死す。年五十一。法名良休。妻は大久保伊八郎正方が女。

女子

鈴木兵左衛門政之が妻。

正清

内藏助 母は正方が女。  
寛延三年九月二日遺跡を繼、寶曆八年三月八日死す。年二十六。法名了縁。  
正良 仙次郎 中島新藏正清が養子。  
正房 平藏 兄正清が養子。  
清休 忠兵衛 清水の家臣萩野小十郎某



中川

正行 七藏

が養子。  
正房が家を相続す。

正房

松三郎 平藏 實は正豊が三男、母は正方が女、正清が嗣となる。寶曆八年六月三日遺跡を繼、十月二十八日はじめて悼信院殿にまみえたてまつり、十一年十一月十三日大番となる。安永二年九月十八日死す。年三十七。法名徹心。妻は村上與左衛門宜如が女。

正行

七藏 實は正豊が五男、母は正方が女。

正富

千藏 實は横田十郎兵衛延松が五男、母は松平作五郎忠之が養女、正行が養子となる。寶曆三年八月六日遺跡を繼。時元二十二年。家紋 丸に井桁

女子 飯島次平國方が妻。

直政 善大夫

神田の館に在りて常憲院殿につかへたてまつる。

直茂

武右衛門 母は某氏。神田の館に在りて代官をつとむ。延寶八年徳松殿にしたがひたてまつり御家人に列し、廩米百三十俵をたまひ、西城に候し、天和三年逝去により、十一月二十五日御勘定となる。貞享四年七月二十五日材木の事をうけたまはりて甲斐國に赴く。元禄元年十二月十一日加増ありて百五十俵の祿となる。三年十月十五日漆奉行に轉じ、六年四月三日務を辭し、小普請となり、十二年二月二十二日死す。法名喝道。中郷の福嚴寺に葬る。のち代々葬地とす。

直行

九左衛門 吉左衛門 實は某氏の男、母は内藤氏の女、直茂が養子となりてその女を妻とす。元禄二年八月六日御勘定となり、七年十二月二十二日としごろをこたりなくつとめしにより黄金三枚をたまふ。九月十三日仰をうけて關東諸國の郡村を巡視し、十二年九月二十六日長崎にお

もむき、會計を執す。十三年七月二十九日御代官に轉じ、正徳五年八月十五日御金奉行にうつり、享保七年九月二十四日死す。年六十三。法名道輝。妻は直茂が女。

直恒

傳五郎 母は某氏。正徳三年四月朔日はじめて有章院殿に拜謁す。享保七年十二月二日遺跡を繼、十二年三月二十七日西城の小十人となり、元文三年十二月二十六日二條の御藏奉行に轉じ、寛延二年八月十二日京師に在りて死す。年五十一。法名日義。

忠英

傳六郎 傳兵衛 伊奈主税忠永が養子。鈴木宇右衛門重房が妻。

直久

大助 母は某氏。寛延二年十一月二日遺跡を繼、寶曆元年三月十九日はじめて悼信院殿に拜謁し、天明七年十月六日死す。年五十七。法名了全。妻は伊奈主税忠永が女、後妻は田安の家臣加藤勝三郎某が女。

直爲

傳八郎 致仕號如勇 母は忠永が

女。

天明七年十二月二十九日遺跡を繼、寛政六年七月十一日致仕す。時元十四。妻は加藤亦次郎勝房が女。

直侯

藤太郎 藤大夫 母は勝房が女。寛政六年七月十一日家を繼。時元十九。家紋 丸に五枚笹 三扇

某

政五郎 大良 出家して深川廣濟寺の弟子となる。直定 喜三郎

中川

先祖中川を稱し、のち上村に改め、尹貞が時中川に復す。

尹勝

文右衛門 神田の館に勤仕す。

尹貞

傳右衛門 彦六 母は阿部伊勢守 家臣高久平左衛門某が女。神田の館に在りて常憲院殿につかへたてまつり、延寶八年徳松殿の御供に列し、御寶藏番にめしくはへらる。正徳

卷第千三百二十

未勘源氏

中川

五年三月六日班を進められて表御右筆となり、加恩ありて廩米百五十俵を賜ふ。元文元年六月請て中川の舊稱に復す。九月二十五日死す。年六十九。法名日量。高田の妙泉寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は小池七左衛門貞勝が女。

尹忠

傳右衛門 母は貞勝が女。享保元年八月九日はじめて有徳院殿に拜謁し、十三年三月八日表御右筆となり、元文元年八月十五日父に先だちて死す。年四十三。法名日悟。

尹趣

政五郎 實は安藤甚五右衛門某が男、母は松平相模守家臣藤田平右衛門某が女、尹貞が終に隨て養子となり、その女を妻とす。元文元年十二月二日遺跡を繼、小普請となる。四年正月十九日西城の表御右筆に列し、寛保三年四月務を辭す。寶曆四年十一月十九日死す。年四十五。法名日妙。妻は尹貞が女、後妻は美濃部伊織茂伯が女。

女子

女子

女子

女子

尹度

彦三郎 文右衛門 實は阿部伊勢

辨之助 八郎 傳左衛門 母は尹趣が女。寛政五年五月三日遺跡を繼、時元三十八。八年十二月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は猪飼兼次郎正道が女。

尹孝

兼次郎 猪飼五郎左衛門正備が妻。

女子

女子

大島新藏勝政が妻。

尹義

正五郎 母は正道が女。家紋 丸に鳩酸草 丸に三階松

女子

守家臣小池十藏道久が男、母は同家の巨高久庄右衛門久信が女、尹趣が終に隨て養子となり、その女を妻とす。寶曆五年三月四日遺跡を繼、明和二年十二月二十一日はじめて漫明院殿にまみえたてまつり、三年七月十九日小十人に列し、のち的を射て時服をたまふ。安永五年四月日光山にまうでさせたまふのとき供奉す。寛政四年十二月二十八日番を辭し、五年二月二日死す。年六十一。法名日照。妻は尹趣が女、後妻は蝦澤源左衛門親貞が女。

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子



石井

定次

治大夫 神田の館をいて常憲院殿につかへたてまつり、勘定方をつとむ。延寶八年徳松殿にしたがひたてまつり、廣米百俵を賜はりて西城に勤仕し、天和三年逝去により十一月二十五日御勘定となり、貞享四年十二月十日五十俵を加へられ、元祿十三年正月二十八日漆奉行に轉じ、十四年八月二十六日仰をうけて駿府に赴き、淺間社の神具を檢す。正徳四年十二月十八日平素癩未なるつとめかたりとて、小普請に貶され、出仕をはかり、五年九月二十六日ゆるさる。享保二年五月七日死す。年七十五。法名宗源。牛島の福嚴寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は近藤又兵衛某が女。

某

源四郎 八右衛門 源四郎 母は又兵衛某が女。元祿二年八月六日御勘定となり、のち務を辭し、そののち病によりて嗣をのぞかる。享保九年八月十九日死す。妻は水戸家の臣中川四郎右衛門某が女。長井彦三郎盛次が妻。

定該

五左衛門 實は八木岡氏の男、母

定勝

小千次 母は祐村が女。寛政八年四月十九日家を繼。時三十三歳。妻は柳忠四郎豊詮が女。中川吉五郎忠盛が妻。

女子

女子

女子

定直

定久

女子

女子

某

松次郎 母は豊詮が女。家紋 丸に二引龍 藤の丸

石井

政長

彌六 彌左衛門 享保二年九月小普請方の目付にめしくはへられ、のち植木奉行にうつる。十五年三月二十九日班をすゝめられて御登奉行となり、十九年九月十一日故ありて小普請に貶され、出仕をとめられ、十二月二十九日ゆるさる。寶曆八年三月十七日

は某氏、定次が養子となりてその女を妻とす。正徳三年十二月十一日はじめて有章院殿に拜謁し、享保二年八月三日遺跡を繼、六年三月九日死す。年四十四。法名宗英。妻は定次が女。

女子

定該

某

信美

某

早世 岩太郎

早世 彌之助

定好

吉次郎

致仕號梅我

母は正爲が女。

某

早世 彌之助

寛延三年十二月二十六日はじめて悼信院殿にまみえたてまつり、寶曆二年九月四日遺跡を繼、四年二月晦日小十人となり、十二年十二月十三日番を辭し、寛政八年四月十九日致仕す。時六。妻は伊東太次右衛門祐村が女。

死す。年七十三。法名無休。絞橋の一行院に葬る。のち葬地とす。妻は井伊掃部家臣津田源左衛門某が女。

政久

慶次郎

彌左衛門

致仕號宗久

正久

母は源左衛門某が女。

享保十五年十月二十二日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、寶曆八年六月三日遺跡を繼、安永四年九月七日致仕し、寛政四年正月八日死す。年八十四。法名正久。妻は竹尾清左衛門忠央が女。

定孝

新次郎

榊原求馬忠定が養子。

女子

實は津田氏の女、政長にやしなはれて鈴木三郎左衛門茂福が妻となる。

定直

辰次郎

小左衛門

榊原新次郎定孝が養子。

女子

堀松次郎利文が妻。

女子

一橋の家臣逸見伊右衛門光柄が妻。

信包

間宮造酒丞伊澄が妻。

富曹

安十郎

實は山崎岡右衛門信篤が二男、政久が養子となり、のち病により信篤が許にかへる。

城之助

實は間宮造酒丞兼澄が二男、母は六郷平左衛門政守が女、政久が養子となる。

政幸

孫次郎

平左衛門

源左衛門

六郷

家紋 丸に橘 法螺貝

助久

十兵衛

神田の館をいて鳥見役をつとめ、延寶八年徳松殿西城に入せたまふのときしたがひたてまつり、御家人にくはへられ西城に候し、逝去のち小普請となり、そののち上野下野兩國水路の奉行をつとめ、元祿五年ゆへありてこれを許され、拜謁をとめられ、九年五月廿四日赦免あり、十六年四月十八日死す。年七十七。法名道樹。牛込の願正寺に葬る。のち代葬地とす。妻は立花左近將監家臣井手口壹岐融が女。

助英

孫八郎

母は融が女。

元祿二年八月六日御勘定に列し、廣米

大岡

女子

實は板倉内膳正家臣中島作十郎某が女、助久にやしなはれて原久左衛門充活が妻となる。

助尹

十五郎

甚太郎

實は原久右衛門充活が男、母は助久が養女、助英が終に隨て養子となる。

寶永六年三月十二日遺跡を繼。時三十三歳

寶四年十月十八日小十人に列し、延享四年四月二十九日組頭にすゝみ、寶曆元年九月十日死す。年五十三。法名寂圓。妻は木原文右衛門利貞が女。

助誥

奔太郎

十兵衛

母は利貞が女。

寶曆元年十二月四日遺跡を繼、十二月七日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、明和三年七月十九日小十人に列し、天明八年十月二十二日死す。年五十四。法名信擔。妻は勝屋治兵衛豐明が女。

正武

豐三郎

平兵衛

大久保吉左衛門正斯が養子。

女子

中村淺右衛門好總が妻。



女子 阿久澤治右衛門行充が妻。

成寛

傳之助 金十郎 次兵衛 實は立花左近將監家臣牛田長次郎忠光が男、母は紀伊家の臣小川元悦豊則が女、助語が養子となり、その女を妻とす。

天明八年十二月二十七日遺跡を繼。寛政三年五月十六日表御右筆に列し、四年六月五日奥御右筆の見習となり、十月二十四日務を辭す。妻は助語が養女、後妻は佐藤文藏影遠が女、又紀伊家の臣淺井養徳潤夫が女を娶る。

女子

女子

女子

女子

實は水野彌平大夫忠篤が女、助語にやしなはれて成寛が妻となる。

女子

温太郎 母は影遠が女。

家紋 丸に稻穂

卷第千三百二十一

未勘源氏

瀧野

忠直

又兵衛 大猷院殿の御時御徒にめし加へられ、のち組頭をつとむ。

忠央

九郎右衛門 十右衛門 母は稻垣攝津守家臣佐々木久右衛門某が女。

寛文四年十二月十日遺跡を繼、のち支配勘定となり、天和元年班をすゝめられて御勘定となる。享保三年十一月十一日御代官となり、正徳二年十二月二日死す。法名淨雪。淺草の正行寺に葬る。後代々葬地とす。妻は榊原彌左衛門政友が女。

某

其四郎 實は石川近江守家臣蜂屋彦八郎某が男、母は某氏、忠央が養子となる。

元禄十一年八月十四日はじめて常憲院殿にまみえたてまつる。寶永六年四月六日御勘定となり、のち家を出て所在をしらす。

忠隆

十助 十右衛門 實は諏訪治兵衛頼盛が二男、母は高山孫左衛門政一が女、忠央が養子となりて其女を妻とす。

女子

女子

女子

忠郷

助十郎 實は山高圓七郎信保が二男、母は比留半藏正元が女、忠隆が病篤に臨て養子となり、其女を妻とす。

女子

女子

女子

忠昌

六次郎 實は久間佐兵衛盛美が二男、母は某氏、忠郷が養子となる。

女子

女子

女子

保近

萬吉 與左衛門 實は保明が二男、母は信昌が女、保正が嗣となる。

女子

保孝

長三郎 實は竹本五左衛門正豊が二男、母は竹本佐助正寧が女、保近が病篤に臨て養子となり、其女を妻とす。

女子

保卓

彦五郎 彦左衛門 實は竹本八郎正甫が二男、母は遠山三郎右衛門景貞が女、保孝が終に臨て養子となり、其女を妻とす。

女子

保正

幸次郎 八郎右衛門 母は信昌が女。

女子

保近

與左衛門 兄保正が養子。中山長七郎信光が妻。

女子

女子

女子

女子

女子

忠貞

鍋三郎 實は八十島市郎左衛門豫高が男、母は片岡孫助某が女、忠貞が養子となりて其女を妻とす。妻は忠昌が養女。

女子

家紋

瀧野

保章

與左衛門 大猷院殿の御時伊賀者の列にあり。のち東福門院につかへたてまつる。

保吉

保武

八郎右衛門 父に繼て東照宮につかへたてまつる。李之丞 平右衛門 母は某氏。天和元年七月十二日遺跡を繼、のち二



女子 保卓が妻。

保効 幸太郎 實は竹本佐助正武が男、母は松平出雲守家臣關口道榮周封が女、保卓が終に隨て養子となる。  
寛政七年六月三日遺跡を繼。時年十七歳。五月廿五日。

山本

辰之助正武がとき家たゆ。庶流山本儀助勝英が呈請を按ずるに、武田家の山本勳助晴幸入道道鬼が子孫にして正重が父祖は牧野右馬允康成につかふ。

正重

九兵衛 九郎兵衛  
寛永十二年御持筒の與力にめし加へられ、のち國廻役となりて御側に屬す。天和二年四月十日班をす、められて小十人に列す。法名玄越。貞享二年十二月六日死す。後代々葬地とす。妻は大久保次郎忠重が女。

正勝

勝之丞 庄九郎 勘左衛門 庄左衛門 致仕號元休 實は牧野越中

下勝榮 庄八郎

正房 九左衛門 庄兵衛 母は昌忠が女。  
享保十九年十二月二十二日祖父が家を繼。元文元年十二月二十三日大番に列し、寛保二年八月七日新番にうつり、延享二年五月二十七日番を辭し、寶曆六年六月十三日死す。年四十五。法名良提。妻は杉山檢校和一が女、また川口茂左衛門尹張が女を娶る。

女子

正武 辰之助 實は武井治部左衛門頼庸が男、母は正勝が女、正房が養子となる。

寶曆六年九月六日遺跡を繼。時年十一。七月二十二日逐電して家たゆ。

家紋 三頭左巴 蛇目

山本

勝延 長十郎 主殿 十左衛門 山本庄左衛門正勝が二男、母は某氏。  
享保二十年六月二十四日めされて小五郎君に附屬せられ、小性となる。元文二年正月十二日庶米二百俵をたまひ、寛

守家臣山本三左衛門勝治が男、母は河内長左衛門久次が女、正重が養子となる。

貞享二年十二月十五日遺跡を繼、元祿六年五月十九日小十人に列し、寶永元年八月御腰物方に轉じ、正徳四年二月十一日新番にうつり、享保二年十月七日番を辭し、小普請となり、十九年十二月二十二日致仕し、二十年十月二十四日死す。年七十一。法名元休。妻は和田氏の女。

恒忠

庄九郎 實は牧野越中守家臣山本三左衛門勝治が男、母は河内長左衛門久次が女、正勝が養子となる。

女子

永井左源次某が妻となり、離婚してのち武井治部左衛門頼庸に嫁す。

勝延

山本儀助勝英が祖。長十郎 主殿 十左衛門

信勝

庄九郎 阿部貞右衛門信看が養子。

信定

半右衛門 櫻田の館にいて清揚院殿につかふ。

定利

小左衛門 櫻田の館につかふ。

光定

小平次 實は某氏の男、定利が養子となる。 櫻田の館につかふ。

光長

小平次 實は權田彦兵衛某が男、母は某氏、光定が養子となる。 櫻田の館にいて文昭院殿につかへたてまつり、寶永元年西城に入せたまふるとき、御家人に列し、庶米百二十俵餘をたまひ、小普請となる。元文四年十一月廿五日死す。法名日圓。深川の玄信寺に葬る。のち代々葬地とす。

忠利

大助 母は某氏。  
元文四年十二月二十七日遺跡を繼、寶曆七年三月四日死す。年三十六。法名日達。

利信

與市郎 實は片岡宇右衛門某が男、母は片岡彌市右衛門某が女、

女子

長谷川左膳藤光が妻。  
大藏 保右衛門 儀助 母は長春が女。  
安永三年四月四日遺跡を繼。時年二十八。四年閏十二月二十六日小十人となり、五年四月淺明院殿日光山にまうでたまふのとき、しがひたてまつり、六年八月十六日番を辭す。妻は宮城靱負朝雄が女、後妻は高木十郎左衛門貴徳が女。

政直

鹿倉仙庵格方が妻。  
甚之助 實は加藤乙次郎利寛が二男、勝英が養子となり、のち利寛がもとに歸る。

某

某 忠吉 母は貴徳が女。

女子

某 鑄次郎

山本

家紋 三頭左巴 蛇目

未勸源氏

山本 松井

法重

市太郎 母は繁度が女。  
明和四年八月五日遺跡を繼。時年十三。天明八年十二月二十三日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は上野勘右衛門胤屋が女。

政因

彌市郎

女子

重房 作五郎 母は眞屋が女。  
定興 鐵五郎

家紋

下藤

松井

正勝もと猿樂をもつて神田の館に仕へ、徳松殿西城にうつらせたまふのときしがひたてまつり、尙猿樂の列たり。



正勝

宗左衛門 正覺 源左衛門 宗左衛門

天和三年正月十三日めされて二丸の張番となり、拜調をゆるさる。七月四日班をすめられて奥醫師に准ぜられ、御側に候す。このとき剃髪して正覺とあらため、加恩ありて廩米二百俵をたまふ。八月二十九日仰によりて還俗し、御廊下番に列す。貞享二年二月二十一日また五十俵を加へらる。元禄十二年七月九日さきに宿直のとき同僚大澤吉右衛門豊昌御小納戸日向喜之助正茂が非禮を咎めて難言にをよびしとき、正勝等がはからひ等閑なりとて逼塞せしめられ、十月二十日ゆるさる。十五年十二月三日御近習番にうつり、百俵を加増あり。寶永六年常憲院殿薨御により、二月二十一日つとめをゆるされ、小普請となる。七年四月二十六日致仕し、享保元年九月二十八日死す。年七十三。法名日恕。下谷の廣徳寺に葬る。

正宣

喜太郎 源左衛門 母は某氏。

元禄八年七月二十五日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、寶永七年四月二十六日家々繼、享保九年八月十三日甲府の勤番となり、のち代々彼地に住る。

す。十三年八月二十二日死す。法名日葉。甲斐國遠光寺村の佛國寺に葬る。のち葬地とす。  
女子 米倉又十郎基繼が妻。

正知

織部 惣左衛門 母は上田氏。

享保九年九月二十八日はじめて有徳院殿に拜調し、十三年十一月十八日遺跡を繼、勤番となる。寶曆六年四月二十六日死す。年五十六。法名日久。妻は和田傳藏長章が女。

正則

勝太郎 父にさきだちて死す。

正吉

惣次郎 母は長章が女。

寶曆六年七月六日遺跡を繼、勤番となる。十二年三月朔日はじめて淡明院殿にまみえたてまつり、寛政七年四月十八日致仕す。十三歳。

正顯

庄八郎

女子

柴田忠九郎正幸が妻となり、のち離婚す。

女子

鳥居久五郎直道に嫁し、離婚ののち間宮十左衛門信憑が妻となる。

正房

鶴藏 母は堀川氏。

寛政七年四月十八日家を繼、勤番と

なる。八年七月二十一日死す。年二十五。法名日行。妻は小林官兵衛政愛が女。

女子 森武太郎貞福が妻。

女子

正清 徳藏

正永

留藏

女子

正壽 力藏 母は政愛が女。

女子

寛政八年十月三日遺跡を繼。三百五十俵。

家紋 丸に一笠 花菱

宗光

七兵衛 宇右衛門

神田の館をいて常憲院殿につかへたてまつり、勘定役をつとめ、のち納戸役となる。延寶八年徳松殿にしたがひたてまつり西城に勤仕し、逝去ののち務をゆるされ、其後二丸の火番となり、元禄十年五月二十一日班をすめられて小十人に列す。五十五歳。寶永六年六月十九日務を辭

し、小普請となり、享保二年十月二日死す。年八十二。法名昌翁。本所の華嚴寺に葬る。のち代々葬地とす。

昌貞

三左衛門 實は某氏が男、宗光が養子となり、其女を妻とす。

寶永六年四月六日小十人に列し、享保二年十二月二十六日遺跡を繼、延享四年五月二十日死す。年七十二。法名榮跡。妻は宗光が女。

女子

昌貞が妻。

女子

長谷川甚兵衛安貞が妻。

善昌

忠次郎 母は某氏。

延享四年八月五日遺跡を繼、寶曆三年十一月八日死す。年三十七。法名性山。妻は高木彦右衛門某が女。

昌朝

孫十郎 宇右衛門 實は大塚清兵衛晴宣が四男、母は某氏、善昌が養子となる。

寶曆三年十二月二十四日遺跡を繼、五年九月二十八日はじめて惇信院殿にまみえたてまつり、七年三月二十七日西城の小十人に列し、十一年八月三日本城の務となり、明和六年十二月二十九日番を辭し、天明六年五月五日死す。

年六十六。法名瑠生。

昌孝

孫三郎 母は某氏。

女子

天明六年八月四日遺跡を繼。時年十七歳。寛政四年九月二十五日はじめて將軍家に拜調す。

某

乙五郎

家紋 丸に五葉根笹 梶葉

卷第千三百二十二

未勘源氏

鈴木

善春もと鈴木氏たりといへども田中を稱し、猿樂をもて神田の館につかへ、家を興すにをよびて鈴木に復す。今按ずるに、この家及び下につらねし甚三郎之章が家は、稱號をよび家紋等を考るに穂積氏たるに似たり。また下の龜井文左衛門利勝が家も、龜井六郎重清が後胤といふ。舊家鈴木の譜を按ずるに、重清は鈴木庄司重倫が二男にして、穂積氏たり。しかれども三家ともに源氏と傳へ稱するがゆへに、姑らくこゝにおさむ。

善春

善兵衛

天和三年七月めされて廩米百五十俵をたまひ、侍醫に准ぜられ、八月御廊下番となり、おほせによりて束髪し、善兵衛と稱す。貞享二年二月二十一日五十俵の加恩あり、のち番を辭し、小普請となり、元禄二年七月十一日桐間番に列す。四年八月二十二日御次番に轉じ、のち廩米百五十俵を加へられ、明和八月二日ゆへあり



て食祿のうち二百俵を削りて二九の張番に貶さる。七年六月二十六日御廊下番に復し、寶永六年二月二十一日この番を廢せらるゝにより、務をゆるさる。元文五年七月六日死す。法名日詠。麻布の妙像寺に葬る。のち葬地とす。妻は永井氏の女。

經善

庄之助 母は永井氏の女。

元文五年九月四日遺跡を繼、延享三年五月二十五日西城の表御右筆となる。寬延元年九月三日務を辭し、天明六年四月八日致仕す。八月二十一日死す。年六十一。法名日法。妻は岡田忠八郎武彰が姉。

經政

利喜太郎 父にさきだちて死す。

經甫

五郎作 母は某氏。

天明六年四月八日家を繼。時年二十五。寬政四年四月十三日御鷹匠となる。妻は水谷善兵衛直賢が女。

經勝

恒三郎 母は直賢が女。

家紋 丸に鳩酸草 下藤

鈴木

直親

三郎右衛門

櫻田の館に在りて清揚院殿につかふ。櫻田の館に勤仕し、寶永元年御供の列にありて御家人に加へられ、御徒となり、のち西城御廣敷の添番を勤む。

勝直

甚兵衛

致直

甚助 久次郎 母は某氏。

享保十年七月二日遺跡を繼、寬保二年九月七日一橋の小十人となり、のちおなじところの大番に轉ず。延享四年九月二十日死す。年二十三。法名淨範。高田の誓閑寺に葬る。妻は紀伊家の臣淺井養信保定が女。

之章

右兵衛 甚三郎 母は保定が女。

延享四年十二月二日遺跡を繼、小普請となる。時年八。寬政九年十二月二十二日二九の火番となり、班次故のごとし。妻は一橋の家臣池田平左衛門安清が女。

家紋 稻穂丸 丸に桔梗

龜井

先祖治右衛門利延が時岡崎に於て御家人に召加へられ、三代にして勝延に至る。

勝延

權右衛門

黒鐵の頭をつとむ。

利景

治右衛門 文右衛門

紅葉山の火番をつとめ、支配勘定に轉じ、寬保元年六月二日遺跡を繼。

勝利

權右衛門 母は三宅氏の女。

明和五年三月五日遺跡を繼、のち支配勘定をつとめ、天明四年閏正月二十六日班をすゝめられて御勘定となる。寬政五年七月十二日老をつけて務を辭し、小普請となる。この時白銀十枚を賜ふ。六年正月二十二日死す。年八十一。法名性空。四谷の長全寺に葬る。妻は北善五郎保義が女。

保室

友之助 秀五郎 太左衛門 北善五郎保義が養子。

利清

治郎右衛門 父に先だちて死す。妻は小山彌次右衛門良政が女。

女子

中島氏が女。

女子

細川長門守家臣中川藤助政文が妻。

女子

大津五郎左衛門良義が妻。

保利

時五郎 利左衛門 母は保義が女。

はじめ支配勘定の見習をつとめ、天明四年七月二十一日御勘定に列す。寬政元年二月二十三日務を辭し、三月十三日病によりて嗣たらず。

女子

實は小山彌次右衛門良政が女。利清が妻となり、利清死するのち勝利に養はる。

利勝

文治郎 文左衛門 母は上におなじ。

寬政四年三月二十六日御勘定となり、六年四月五日遺跡を繼。時年十八。妻は細川長門守家臣大伴和助要政が女。

女子

實は小山彌次右衛門良政が女。利清が妻となり、利清死するのち勝利に養はる。

女子

實は小山彌次右衛門良政が女。利清が妻となり、利清死するのち勝利に養はる。

家紋 丸に隅四目結 稻穂丸

平田

勝吉

三郎左衛門

某年御廊下番にめしくはへられ、粟米百五十俵をたまふ。のち五十俵の加増あり。

某

長吉

元祿三年二月五日父が罪に坐して放逐せられ、赦免ののち父にさきだちて死す。

勝之

三之助 求馬

元祿三年二月五日放逐せられ、のちゆるさる。十三年七月十二日はじめて常憲院殿に拜謁す。享保五年六月十六日

勝房

辨次郎 母は某氏。

享保十二年十二月二十七日祖父が遺跡を繼、延享三年六月十五日はじめて信院殿にまみえたまつり、明和四年十二月十日致仕す。天明三年八月四日死す。年七十五。法名良風。妻は中村安左衛門正秀が女。

勝伴

萬三郎 母は正秀が氏。

明和四年十二月十日家を繼。時年三十。五年十二月五日はじめて淡明院殿に拜謁し、六年七月十六日小十人となり、安永五年四月日光山にまうでたまふのとき供奉す。

直養

富次郎

女子

鹽入彌六郎興英が妻。

勝英

八十五郎 母は某氏。

寬政四年三月晦日小十人となる。時年十二。八年十二月十日若君に附屬せられて西城に勤仕す。妻は吉田左京直頼が女。

女子

猪三郎 母は直頼が女。

某

九六三



家紋 丸に角四目 鶴織花

山崎

次氏

はじめ御小納戸坊主をつとむ。元祿五年十一月二十三日かつて誠治をよくするに...

女子

茂種

元祿九年八月十三日はじめて常憲院殿に拜謁す。...

次茂

濟之丞 宗圓 母は源大夫某が女。享保二年八月三日遺跡を繼ぐ。...

次美

鎮二郎 壽圓 宗圓 實は湯川壽三春房が六男、母は木下道圓守直が女、次茂が終に隨て養子となり、...

女子

次善

遺酒之進 宗徳 安良 宗運 法眼 母は次茂が女。天明三年三月二十七日家を繼ぐ。...

献す。妻は勝次郎右衛門正扶が養女。

元方

淑吉 安庸 宗徳 實は多紀永壽院元憲が四男、母は松井助大夫保勝が女、次善が養子となる。...

家紋 三蓋菱 輪違

山崎

長悦信泰表坊主をつとめ、四代相繼て信福にいたる。

信福

長巴 岡右衛門 御小納戸坊主をつとむ。元祿十五年七月十八日班をす、められて桐間番に列し、...

信篤

長十郎 岡右衛門 母は吉田氏の女。

卷第千三百二十二

未勘源氏

堀本

重顯

口科の醫を業とし、細川越中守綱利の扶助をうく。元祿五年十一月二十三日めされて御醫師に列し、...

某

一宅 實は木山氏の男、重顯が養子となる。元祿八年七月二十五日はじめて常憲院殿に拜謁し、...

女子

女

正徳三年三月二十四日遺跡を繼ぐ。享保十五年二月十八日御勘定に列し、元文四年四月二十二日仰をうけて越後信濃兩國の新田を檢し、...

信美

長十郎 岡右衛門 母は忠典が女。延享三年三月二十三日はじめて常憲院殿に拜謁す。...

十六

法名日豐。妻は小栗伊右衛門正舎が養女。安十郎 石井彌左衛門政久が養子となり、...

信包

信實

長之助 母は正舎が養女。天明四年十二月二十六日遺跡を繼ぐ、八年十二月二十三日はじめて將軍家に拜謁し、...

忠庸

富之助 竹尾覺左衛門忠高が養子。織之助 兄信實が養子。...

成牧

松之助 織之助 實は信美が三男、母は正舎が養女、信實が嗣となる。...

成牧

寛政七年三月四日遺跡を繼ぐ。天明四年十一月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつる。

女子

家紋 上藤の内三階菱 五三桐



顯晴

好益 一甫 實は松本氏の男、母は重顯が女、重顯が養子となる。正徳三年十一月二十九日家を繼。四年五月七日はじめて有章院殿にまみえたてまつり、寛保二年六月二十日寄合に列し、九月二日より法心院の療治をつとめ、延享三年十月十九日より竹姫君の廣敷に候し、寶曆四年五月二十一日死す。年七十一。法名安庵。妻は添田道策豊壽が女。

顯承

好益 一甫 母は豊壽が女。寛保三年九月十三日はじめて有徳院殿に拜調す。寶曆三年七月二十九日より竹姫君廣敷の療治をうけたまはり、四年八月四日遺跡を繼、十二月二十九日寄合に列し、明和元年十一月十一日竹姫君の診脈に候す。五年六月三日死す。年四十二。法名連庵。妻は桂川甫筑國訓が女。

顯長

女子

好立 好立 好益 一甫 母は國訓が女。明和五年四月九日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、九月六日遺跡を繼。時正十九日。廿一日竹姫君廣敷の療治を

元常

好徹 好徹 家紋 黒餅に三葉柏 根笹 放駒

東條

季昌

覺右衛門 慶長十二年御徒にめし加へられ、のち御侍となり、大姫君に附屬せらる。

季一

勘左衛門 覺右衛門 寛永十九年十二月十日遺跡を繼、父に繼て大姫君につかへ、逝去のちめしかへされ、そのち小丸廣敷番の頭を歴て奥方廣敷の添番となる。

季政

勘左衛門 表火番をつとめ、のち奥火番を歴て添番をつとむ。

季延

虎之助 伊織 權大夫 伊織 母は持田五右衛門某が女。元祿六年正月二十二日御廊下番となり、慶永百五十俵をたまふ。時正十二月十一日御次番に轉じ、七月二十一日桐

阿彌景貞が女。

女子

太田岩太郎盛明が妻。

胤祿

勇三郎 河内舍人胤庸が養子。

女子

實は角南主膳正國明が女。季勝が養女となり、のち家にかへる。

家紋 輪貫九曜 輪貫

岡

忠房

金兵衛

元祿六年十二月二十二日めされて表御右筆となり、二十八日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、七年正月二十九日鷹米二百俵をたまふ。十四年八月二十一日其務に應ぜざるにより小普請に貶さる。寶永五年八月六日致仕す。享保十一年七月七日死す。法名急善。下谷の宗延寺に葬る。後代々葬地とす。

忠春

文左衛門 伊右衛門 母は某氏。

某

喜左衛門 三左衛門 四郎左衛門 別家となり、子孫四郎左衛門某がと

孝長

辨之助 市十郎 母は惣左衛門某が女。享保十年十月二十五日小十人に列し、十三年四月有徳院日光山に詣たまふのときしたがひたてまつる。十四年四月十三日小次郎君に附屬せられ、近習番となり、のち徒頭を歴て目付役に轉じ、其後用人にす。み、寛延三年十二月十八日布衣を着することゝゆるさる。寶曆七年五月七日遺跡を繼。明和三年二月二十八日西城の御納戸頭にうつり、九月五日死す。年六十九。法名寶雲。妻は伴野甚十郎常清が女。

季成

覺右衛門 御徒にめし加へられ、子孫御家人たり。

女子

五味平八郎滋達が妻。

季尚

榮次郎 母は國庸が女。天明三年九月二十五日はじめて淺明院殿にまみえたてまつり、寛政三年八月八日御書院の番士に列す。時正三。妻は半田丹

季勝

權大夫 母は常清が女。寶曆四年三月十一日はじめて樟信院殿に拜調し、明和六年十二月三日遺跡を繼。時正三十四。後の射あるひは御弓揚始の射手に候し、時服黄金等を賜ふ。天明三年八月二十一日小普請の組頭となり、八年三月二十日田安の用人に轉じ、十二月十六日布衣を着する事をゆるされ、その後彼館の番頭となる。妻は角南内藏助國庸が女。



**正純** 某家たの。事は下に見えたり。  
三左衛門 高木喜右衛門正永が養子。  
右衛門七 兄四郎左衛門某が養子。

**忠壽** 金十郎 母は某氏。  
享保二十年十月六日遺跡を繼、元文二年十月十七日死す。年二十七。法名日淨。  
女子 荒川伊兵衛重次が妻。

**忠重** 吉之助 伊右衛門 母は某氏。  
元文二年十二月二日遺跡を繼、時比十寶曆元年三月十九日はじめて悼信院殿に拜謁し、十年正月二十三日西城の小人に列し、十一年八月三日日本城の勤めとなる。十二年十二月十五日より西城に候し、明和六年四月二日新番にうつる。安永五年四月淺明院殿日光山に詣給ふのとき供奉す。天明七年十二月二十六日大坂の御弓奉行に轉じ、寛政六年三月五日務を辭し、十二月二十五日死す。年六十九。法名日顯。  
民三郎 天明八年二月二十三日はじめて將軍家

に拜謁し、寛政二年八月十日父にさきだちて死す。年三十九。

**忠英** 繁太郎 母は某氏。  
寛政七年三月四日祖父が遺跡を繼、時比二寶曆二年 妻は久保新九郎勝福が女。  
女子 宅間左門憲孝が養女。  
女子  
女子

**岡** 四郎左衛門某がとき、嗣なくして家たの。

**某** 喜左衛門 三左衛門 四郎左衛門 岡金兵衛忠房が二男。  
元祿十年三月十八日めされて表御右筆となり、慶米二百俵をたまふ。二十八日はじめて常憲院殿に拜謁し、寶永七年死す。  
右衛門七 實は岡金兵衛忠房が四男、四郎左衛門某が養子となる。  
寶永七年六月二十三日遺跡を繼、二十七日表御右筆の見習となり、享保三年五月十二日務を辭し、小普請となり、

**某** 仁三郎 四郎左衛門  
享保十七年十一月七日遺跡を繼、二十年死す。年二十六。嗣なくして家たの。

**比企** 佐左衛門 喜左衛門  
神田の館につかへ、延寶八年徳松殿西城に入れたまふのときしたがひたてまつり、御家人に列し、支配勘定となり、のち其務にかなはざる事ありてこれをゆるされ、そのち小普請奉行元方支配に屬し、また三丸の張番にうつる。

**勝正** 伊大夫 母は某氏。  
元祿八年十二月十一日御勘定となり、寶永四年五月廿六日遺跡を繼、慶米百五十俵月俸五口を賜ふ。五年六月務を辭し、享保二年四月八日死す。年四十九。法名宗英。中郷の福嚴寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は増井彌左衛門某が女。  
**勝郷** 市十郎 母は彌左衛門某が女。

享保二年六月二十七日遺跡を繼、延享三年六月十五日はじめて悼信院殿に拜謁し、安永二年五月二十二日死す。年七十五。法名了悟。  
**勝則** 勝右衛門 兄勝郷が養子。

**勝美** 勝右衛門 實は勝正が二男、勝郷が嗣となり、のち父にさきだちて死す。  
徳次郎 母は某氏。  
安永二年八月六日祖父が遺跡を繼、寛政三年十二月二十二日死す。年四十四。法名玄的。妻は養笠之助正寅が女、後妻は比留七右衛門正信が女。

女子  
女子  
女子  
**勝猛** 榮太郎 母は正信が女。  
寛政四年閏二月四日遺跡を繼。時比十八寶曆二年 母は正信が女。

**星田** 家紋 丸に三星 五三桐  
卷第千三百二十三 未勳源氏 星田

**正種** 次郎右衛門  
千姫君大坂に入れたまふのとき、めされて附屬せられ、取次役をつとめ、後關東にいらせたまふのとき、したがひたてまつる。  
次郎左衛門 作右衛門  
千姫君につかへたてまつり、取次役をつとむ。逝去のち支配勘定を勤む。

**正勝** 新藏 母は葛山與惣左衛門宗治が女。  
元祿七年三月二十七日家を繼、十年七月二十六日小十人となる。時比四十七寶永六年三月九日御納戸番にうつり、十二月二十二日加増ありて現米をあらためられ、慶米二百俵を賜ひ、月俸は收めらる。寶永四年四月十二日番を辭し、延享四年十月十日死す。年八十。法名念休。駒込の正行寺に葬る。代々葬地とす。妻は秋原與右衛門友長が女。

**某** 左兵衛 父にさきだちて死す。  
金三郎 甚右衛門 實は松井新五兵衛政登が二男、母は石丸定右衛門道輝が女、正勝が養子となり、その女を妻とす。

延享四年十二月二十四日遺跡を繼、明和六年九月二十日死す。年四十。法名念入。妻は正勝が女。  
女子 正真が妻。  
女子 岡田九郎左衛門俊博に嫁し、のち離婚す。

**正利** 富次郎 母は正勝が女。  
明和六年十二月五日遺跡を繼、安永四年閏十二月十五日死す。年二十六。法名到岸。

**正聰** 安五郎 次右衛門 實は一橋の家臣遠藤安左衛門道一が男、母は塚越九右衛門次方が女、正利が養子となる。  
安永五年三月五日遺跡を繼、天明元年十月七日小十人に列し、寛政五年六月六日死す。年四十。法名登純。妻は松井忠左衛門政照が女。

**正直** 吉之丞 母は政照が養女。  
寛政五年五月六日遺跡を繼。時比二十寶曆二年 妻は木城貞右衛門金朝が女。  
元次郎 柳澤伊賀守家臣櫻井次右衛門某が養子。  
**道直** 爲太郎  
九六九



女子

家紋 丸に三星 水車

卷第千三百二十四

未勘源氏

小林

政治

善右衛門 駿河大納言忠長卿につかへ、罪かうぶらせたまひ領國を除かれしとき處士となり、のちめされて表火番となる。

政勝

與左衛門 表火番となり、のち東福門院に附屬せられ、御侍をつとむ。

某

善八郎 與左衛門 延寶五年閏十二月十日遺跡を繼、父に代りて東福門院につかへ、御侍をつとむ。

政彌

萬之助 善右衛門 善大夫 實は政勝が二男、母は某氏、兄與左衛門某が嗣となる。 延寶八年十二月十二日遺跡を繼、後表火番となり、支配勘定に轉じ、そののち班をすめられて御勘定となる。

政房

孫四郎 實は中澤仁兵衛昌倫が二男、母は井伊親貞佐家臣田中藤兵衛某が女、政彌が終にのぞみて養子となり、其女を妻とす。 元祿十二年七月九日遺跡を繼、小普請となる。十五年九月五日御勘定に列し、享保五年十二月二十六日さきに金銀をあらため鑄られしとき、その事をうけたまはりてしばし京師におもむきしにより、黄金二枚をたまふ。六年六月七日としごろ意りなくつとめしにより黄金二枚をたまひ、九月朔日大坂御藏をよび淀川の普請を覆檢せんがため其所々にいたる。七年正月二十六日組頭にすゝみ、十八年八月十九日御代官に轉じ、元文五年七月十八日但馬國生野の官舎に在りて死す。法名武光。生野の玉翁院に葬る。妻は政彌が女、後妻は多喜文左衛門影久が女。

女子

女子

家紋 丸に横二引 上藤丸

小林

理左衛門隆爲紀伊家の臣たり。父子相續て芳隆にいたる。

芳隆

理右衛門

紀伊家に在りて懐信院殿の御抱守をつとめ、享保元年二丸にいらせたまふのとき供奉し、御家人に加へられ、九月九日二丸の御近習番となり、鷹米二百俵をたまふ。二年九月七日死す。年四十五。法名日意。大久保の法善寺に葬る。後代々葬地とす。

長章

五郎八 安大夫 實は隆爲が二男、母は小野權大夫某が女、芳隆が嗣となる。

享保二年十二月二十一日遺跡を繼、小普請となり、四年十一月二十九日二丸の御近習番に列し、のち西城に勤仕す。十年十二月朔日西城の御小納戸にすゝみ、十八日布衣を着する事をゆるさ

女子

女子

女子

政用

初政盛 與茂助 孫四郎 母は政彌が女。 元文五年十二月二十三日遺跡を繼、寛保元年九月十九日小十人に列し、のち的を射て物をたまふ。寛延二年七月六日御代官に轉じ、天明元年閏五月二十四日生野に在りて死す。年六十三。法名勇達。葬地政房におなじ。妻は池田新兵衛富春が女、後妻は林惣兵衛政寛が女、また天野兵部雄明が女を娶る。

信貫

岩之助 五郎左衛門 仁科次郎三郎信方が養子。

政敏

政之助 實曆十年十一月二十五日はじめて浚明院殿に拜謁し、明和元年十二月十七日父にさきだちて死す。 早世 助次郎

某

三郎四郎 齋宮 幸十郎 下田幸大夫尙房が養子。

政信

千之丞 實は津田六之助政恒が二男、政用が養子となる。



る。延享二年九月朔日より本城のつとめとなり、四年六月三日死す。年六十。法名日正。  
女子 石場吉兵衛政至が妻。  
女子 紀伊家の臣栗生新九郎某が妻。

長善

初表春 左平太 安大夫 實は富松喜兵衛基春が三男、母は某氏、長章が養子となりてその女を妻とす。

享保二十年十二月十一日はじめて有徳院殿に拜謁す。三時、延享四年九月四日遺跡を繼、寛延元年閏十月九日西城の御書院番に列し、寶曆三年六月二十五日西城の御小納戸にうつり、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。十年五月十三日より本城に候し、天明三年四月十二日西城御裏門番の頭に轉ず。四年十二月十八日務を辭し、寄合となり、五年六月二十六日死す。年六十三。法名日雄。妻は長章が女。

長利

安五郎 兄長善が養子。

長利

安五郎 實は長章が二男、長善が嗣となる。寶曆十二年四月十八日はじめて淺明院殿

にまみえたてまつり、明和二年五月十四日父に先だちて死す。年三十。

長保

五郎八 父にさきだちて死す。

長豊

善藏 兵庫 左源次 母は長章が女。

長幸

安次郎 實は淺羽市右衛門幸壽が二男、母は遠藤平三郎則朋が女、長豊が終にのぞみて養子となり、その女を妻とす。

長道

初幸道 猪三郎

長道

天明八年十二月二十七日遺跡を繼、寛政八年九月二日死す。年二十五。法名日定。妻は長豊が養女。

長道

實は土屋主水利博が女。長豊に養はれて長幸が妻となり、長幸死するのち父がもとかへる。

實は淺羽市右衛門幸壽が三男、母は遠藤平三郎則朋が女、長幸が終にのぞみて養子となる。

寛政八年十二月三日遺跡を繼。法名日正。

家紋 右三巴 藤巴

小林

八右衛門當成御先銃組の同心にめし加へられ、三代にして當英にいたる。

當英

御先銃組の同心たり。のち御細工所の同心を歴て御賄調役に轉ず。安永六年十一月二十五日班をす、められて御賄敷の用遣となり、天明四年十一月十六日死す。年六十一。法名日妙。深川の本立院に葬る。

當次

大島金左衛門國幹が養女。

當次

菅之助 金大夫 母は某氏。天明四年十二月二十六日遺跡を繼、小普請となる。法名日正。八年十二月二十三日はじめて將軍家にまみえたてまつり、寛政九年十月二十四日御徒目付となる。班次もとのごとし。妻は松井氏の女。

下某 傳之丞

家紋 丸に揚羽蝶 三階菱

服部

與八郎某がとき罪ありて家たの。

保房

八右衛門 はじめ御徒をつとめ、のち組頭となる。

某

早世 小吉

保重

小右衛門 八右衛門 寛文十一年十二月十二日遺跡を繼、後表火番をつとめ、そのち御徒目付にうつる。

某

服部專藏保定が祖。八大夫

保孝

八右衛門 兄保重が養子。

保孝

市左衛門 八右衛門 實は保房が四男、母は某氏、保重が嗣となる。貞享四年七月十一日遺跡を繼、のち支配勘定をつとめ、そのち班をす、め

女子

長坂源十郎基保が妻。

保平

與吉郎 實は淺羽市右衛門貞平が四男、母は某氏、保孝が養子となりて其女を妻とす。

女子

享保九年九月三日遺跡を繼、小普請となる。十九年正月十三日死す。年四十三。法名直善。妻は保孝が女。

女子

山田庄右衛門長秀が妻。

女子

保平が妻。

某

中島源大夫某が妻。

女子

與八郎 母は保孝が女。享保十九年四月二日遺跡を繼、延享三年六月十五日はじめて信院殿に拜謁す。四年四月四日さきに伯父淺野與左衛門貞宜がもと同居し、出奔して貞宜が采地におもむきしことをとがめられて、遠流に處せらる。

家紋 七折車の内切矢筈

服部

某

八大夫 服部八右衛門保房が三男。嚴有院殿の御時御徒にめし加へられ、のち御徒目付をつとむ。

保總

松之助 八大夫 藤九郎 母は鈴木氏の女。

保好

寶永三年十一月十二日遺跡を繼、のち表火番をつとめ、そのち支配勘定にうつる。寶曆十二年十二月二日班をすめられて御勘定となる。法名日正。明和六年十一月四日死す。年六十四。法名實元。目白臺の大泉寺に葬る。のち葬地とす。妻は池田貞阿彌精孝が女。

女子

秋山三十郎惟慶が妻。

保好

造酒次郎 母は精孝が女。はじめ支配勘定の見習をつとめ、明和二年八月十三日御勘定となり、六年十二月二十七日遺跡を繼、安永五年淺明院殿日光山に詣たまふのとき御旅館をよび御賄の事をうけたまはりしにより、六月二十七日黄金一枚をたまふ。



のちしばく美濃伊勢をよび東海道等の川々普請の事にあつかり、其所々に赴きしにより時服黄金をたまふ。天明三年四月二十四日組頭にすゝみ、六年三月十三日死す。年五十五。法名眞海。妻は羽田藤右衛門保久が女。

嘉言 八三郎 藤藏 山田清八郎正尙が養子。  
善行 銀四郎 兄嘉言が養子。

女子 小野田三郎右衛門信利が妻。  
保定 專藏 實は秋山三十郎惟慶が四男、母は保總が女、保好が養子となりて其女を妻とす。

女子 天明四年四月二十五日はじめて凌明院殿に拜謁し、六年六月四日遺跡を繼、小普請となる。時正三十三歳。八月八日御勅定に列し、のち東海道及び甲斐、美濃、伊勢等に赴き、川々の普請を勤めしにより時服黄金をたまふ。妻は保好が女。  
女子 保定が妻。

女子 七桁車の内切矢管 樹形

元文二年十二月二十四日遺跡を繼、四年四月四日大番に列し、寶曆九年十二月十五日としごろ意りなくつとめしにより黄金二枚をたまふ。十二年九月十日死す。年五十二。法名意徳。

義一 彦之丞 彦十郎 實は大塚彦六時勝が二男、母は津輕出羽守家臣坂庭藤七某が女、義府が養子となる。寶曆八年九月十五日はじめて悼信院殿に拜謁し、十二年十一月十日遺跡を繼、明和元年九月七日大番に列し、天明四年十二月六日死す。年五十七。法名祐倉。

女子 森川助左衛門信友が妻。  
女子 姉死して信友が後妻となる。

守一 初義近 銀之助 彦十郎 八郎右衛門 實は梶川主馬正峯が二男、母は大塚彦六時勝が女、義一が養子となる。天明四年十二月二十六日遺跡を繼。時正三十二歳。七年六月十九日大番に列す。妻は高井政五郎武郷が養女。

女子 小柴松安伯盛が妻。  
女子 横山甚助直之が妻。

保庸 藤九郎 母は某氏。櫻田の館に在りて儒者の員にあり。寶永元年文昭院殿にしたがひたてまつり、儒者となり、月俸二十口をたまふ。享保六年六月三日父に先だちて死す。法名道忠。

保考 濟助 母は某氏。櫻田の館に在りて文昭院殿につかへたてまつり、儒者の列にあり。寶永元年西城にいらせたまふのときしたがひたてまつり、御家人に列し、儒者並となり、月俸三十口をたまふ。正徳二年十二月二十七日さきに琉球國返輪の事をうけたまはりしにより時服二領をたまふ。享保十四年十一月二十四日死す。法名洗心。小石川の徳雲寺に葬る。後代々葬地とす。

服部 先祖池原伊兵衛某天正十年東照宮伊賀路を渡御のとき、嚮導したてまつりしにより御家人にめし加へられ、その子新五兵衛保直がとき外家の稱服部にあらむ。保考はその男なり。

服部 家傳に、其先は藤原氏にして朝比奈を稱す。八郎左衛門義勝東照宮につかへたてまつり、男宣勝がとき外家の號服部を稱して源氏にあらむといふ。

宣勝 久左衛門 櫻田の館に在りて清揚院殿につかふ。

成一 兵右衛門 父に繼て櫻田の館につかふ。

守之 與五郎 實は伊谷傳兵衛某が男、母は某氏、成一が養子となる。櫻田の館に在りて小十人をつとめ、のち書替奉行を歴て納戸番の組頭に轉す。寶永元年文昭院殿にしたがひたてまつり、御家人に列し、十二月十二日西城の御納戸番となり、廩米二百俵をたまふ。四年六月二日死す。年五十四。法名道儒。駒込の淨心寺に葬る。後代代葬地とす。妻は松平左近將監家臣岩瀬玄澤正方が妹。

一之 新五郎 與四郎 致仕號當翁 母は正方が妹。寶永四年七月二十七日遺跡を繼、小普

請となり、享保九年十二月十二日御納戸番に列し、十年十一月朔日小五郎普の近習番にうつる。十四年十二月七日御納戸番に復し、十七年番を辭す。十八年十二月十四日致仕し、寶曆三年六月二十五日死す。年七十。法名當翁。小太郎 一之が養女。

某 小太郎 一之が養女。

勝封 半四郎 實は伊谷傳兵衛某が男、母は某氏、一之が養子となりて其女を妻とす。享保十二年十二月初めて有徳院殿に見えたとまつり、十八年十二月四日家を繼、元文二年四月九日西城の御納戸番に列し、開十一月七日死す。年五十一。法名常和。妻は一之が養女。

女子 實は守之が女。一之に養はれて勝封が妻となる。

女子 實は松平左近將監家臣岩瀬久伯正久が女。一之に養はれて山田大之丞直學に嫁す。

義府 三五郎 久左衛門 實は橋八右衛門直俊が三男、母は高橋孫十郎久邊が女、勝封が終にのぞみて養子となる。

保親 藤五郎 新五兵衛 母は某氏。享保十二年十二月十二日はじめて有徳院殿に拜謁し、十四年十二月二十五日祖父が遺跡を繼、小普請となる。十九年四月二十九日小五郎君の近習番となり、のち一橋の館に在りて小十人頭をつとむ。寶曆十一年三月二十九日富士見御寶藏番の頭となり、十二年正月二十三日月俸をあらためて廩米百五十俵をたまふ。明和三年十一月三日死す。年五十六。法名玄氣。妻は加藤武大夫某が女。

保脩 鎌太郎 濟助 母は某氏。寶曆十三年十二月十九日はじめて凌明院殿にまみえたとまつる。時正三十三歳。年十二月二十七日遺跡を繼、天明五年十月十六日死す。年三十八。法名禪義。妻は堀内半三郎氏助が女、後妻は神原權七郎政字が女。

女子 柘植鏡次郎致清が妻。  
女子 實は加藤半次郎某が女。保親に養はれて坂川吉大夫常徳が妻となる。

保光 彌五郎 新五兵衛 實は小柴玄仙保盛が三男、母は佐倉益安宗恒が



女、保脩が終にのぞみて養子となる。

天明五年十二月二十五日遺跡を繼、寛政四年九月二十五日はじめて將軍家に拜謁し、七年十二月二十八日死す。年三十一。法名宗水。妻は飯室彦十郎昌克が女。

女子

吉之助 實は榊原富次郎政綱が二男、母は榊原主馬政勝が女、保光が病篤にのぞみて養子となり、その女を妻とす。

女子

寛政八年三月六日遺跡を繼。時年二十歳。妻は保光が女。保吉が妻。

服部

家傳に、其先伊賀國服部村に住せしより稱號とすといふ。

長勝

治左衛門 慶長九年より御徒をつとめ、のち組頭となる。

長則

久左衛門

御徒の組頭をつとむ。

長徳

次左衛門 甚左衛門 天和元年七月十二日遺跡を繼、のち支配勘定をつとめ、そののち二條御定番の與力となる。

長教

久左衛門 市左衛門 母は伊丹十兵衛正方が女。父に繼て二條御定番の與力をつとめ、のち支配勘定となり、そののち班をすすめられて御勘定となる。正徳五年二月二十八日死す。年五十一。法名日乘。本所の實相寺に葬る。妻は本多十右衛門頭定が女。

長虎

市之進 實は久世大和守家臣豊田七左衛門長伯が男、母は豊田庄大夫妻が女、長教が養子となる。正徳五年四月二十九日遺跡を繼、御勘定となり、享保五年十二月十二日務を辭し、小普請となる。延享二年十二月二十七日致仕し、寶曆八年二月九日死す。年六十五。法名日休。淺草の妙音寺に葬る。妻は本多權左衛門頭孝が女。

長喜

要人 母は頭孝が女。

延享二年十二月二十七日家を繼、三年六月十五日はじめて信濃院殿にまみえたてまつり、寛延元年九月二十八日小十人に列し、寶曆三年十月二日番を辭す。明和六年九月十九日死す。年四十六。法名日明。葬地長教におなじ。妻は永井左衛門正友が女。

長行

源藏 七左衛門 久世大和守家臣豊田七左衛門長賢が養子。

女子

逸見半右衛門光調が妻。

女子

今井喜左衛門武邦が妻。

正長

甚五郎 横地小左衛門正芳が養子。

長芳

彌之助

女子

中島齋宮盛員に嫁し、盛員死するののち伊藤富之助某が妻となり、後隣婚す。

卷第千三百二十五

未勘源氏

早川

はじめ眞野を稱し、數馬某早川にあらたむ。

某

數馬 松平武藏守利隆につかへ、後近衛家の臣となる。天英院殿京都より御下向のときしたがひまいらせ、櫻田の館に勤仕す。

重好

勝七郎 佐渡守 壹岐守 從五位下 致仕號淡也 母は某氏。櫻田の館に在りて天英院殿につかへたてまつり、寶永元年文昭院殿西城にいらせたまふのとき、したがひたてまつり御家人に列し、慶長二百五十俵をたまひ、十二月五日西城御廣敷の用人となり、二十二日布衣を着する事をゆるさる。四年七月十八日二百俵の加恩あり、六年十月七日また二百俵を加へられ、慶長をあらため、上總國夷隅郡のうちをいてすべて六百五十石を知行し、七年十二月十八日從五位下佐渡守

某

早世 富之助 内記 勝七郎 母は昌成が女。寶永二年十一月二十八日はじめて常憲院殿に拜謁し、六年四月六日御小性組の番士となり、享保六年十二月十二日家を繼、八年三月十二日としごろ意りなくつとめしにより黄金一枚をたまふ。二十年六月二十八日御徒の頭にすすみ、十二月十六日布衣を着することゆるさる。元文五年二月二十三日死す。年五十三。法名勇心。

正勝

八左衛門 稻葉出雲守正房が養子。

豐包

藤左衛門 兄包知が養子。

女子

岡野孫四郎敬明が妻。

女子

中根權六直堅が女。

豐包

藤左衛門 實は重好が四男、母は昌成が女、包知が嗣となる。



謙包

元文五年五月六日遺跡を繼、小普請となり、七月十九日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、寛保元年十月二十八日西城の御書院番に列す。延享二年七月十九日死す。年五十二。法名淨利。妻は山中八藏保俊が養女。

女子

豊包が養女。

脩包

頼負 勝七郎 實は水野對馬守忠仲が二男、母は某氏、豊包が養子となりてその女を妻とす。  
延享二年九月十八日遺跡を繼、閏十二月十二日はじめて惇信院殿に拜謁し、十六日御小性組の番士となり、寶曆二年二月二十九日番を辭し、明和八年九月十七日死す。年五十一。法名一如。妻は豊包が養女。

女子

實は包知が女、豊包に養はれて脩包が妻となる。

喜包

日光門主の家人田村權右衛門友亮が妻、離婚してのち各務備之丞元確が妻となる。  
仲 母は豊包が女。  
明和八年十二月六日遺跡を繼、安永元年六月十三日はじめて澄明院殿に拜謁し、四年三月十日死す。年二十八。法名光活。

女子

日光門主の家人田村權右衛門友亮が妻、離婚してのち各務備之丞元確が妻となる。

女子

高尾阿波守信仍が妻。  
七郎右衛門 實は大野藤右衛門定成が二男、廣俊が養子となり、のち父にさきだちて死す。

廣述

櫻田の館に在りて書院番をつとめ、のちしばしば轉役して勘定頭にする。寶永元年文昭院殿西城にうつらせ給ふのとき従ひたてまつり、御家人に列し、十二月十二日西城の桐間番となり、廩米四百俵を賜ひ、四年十月晦日焼火間番の組頭に轉じ、六年十月二十九日焼火間番をやめらるゝにより小普請となる。享保三年五月十九日死す。年六十六。法名宗功。青山の龍岩寺に葬る。妻は窪田藤兵衛正俊が女。

廣支

七郎右衛門 實は廣俊が弟にして嗣となる。

廣政

勘助 廣支が實弟にして養子となる。  
櫻田の館に在りて小性組をつとめ、寶永元年御供に候し、十二月十二日西城の焼火間となり、月俸五十口をたまふ。五年十二月十九日西城の御納戸番に轉じ、のち月俸をあらためて廩米二百俵をたまふ。其後本城に勤仕し、享保二年正月六日死す。年四十九。法名玄泰。

河村

廣俊

彦右衛門  
櫻田の館に在りて濟揚院殿につかふ。

女子

勝太郎 母は政俊が女。

女子

謙橘

女子

謙橘

女子

謙橘

女子

謙橘

女子

謙橘

女子

謙橘

女子

謙橘

家紋 陰の右万字 陰の三万字 丸に鷹羽打違

岡部

義政

源左衛門  
天樹院御方につかへたてまつり、のち濟揚院殿に附屬せらる。

義高

市郎右衛門  
櫻田の館につかふ。

義清

源右衛門  
父に繼りて櫻田の館につかふ。

義信

市郎右衛門 母は塚田氏の女。  
櫻田の館に在りて文昭院殿につかへたてまつり、書院番を勤む。寶永元年西城にうつらせたまふのとき、したがひたてまつり、御家人に列し、十二月十二日廩米二百俵をたまひ、西城の焼火間番となり、四年三月六日死す。法名魏俊。本所の大法寺に葬る。妻は三橋太次右衛門信有が女。

義行

初忠政 長太郎 市郎左衛門 實は三橋九右衛門信安が三男、母は某氏、義信が終にのぞみて養子となる。  
寶永四年五月二十六日遺跡を繼、小普

廣定

葬地廣支におなじ。  
彦右衛門 廣政が養子。  
女子 依田甚之助信正が妻。

廣定

猪之助 彦右衛門 實は廣支が二男、母は正俊が女、廣政が嗣となる。

廣定

享保二年四月二日父が食祿二百俵を賜ひ、小普請となる。時三十八年八月九日祖父が遺跡を繼、さきに賜ふ食祿はさめらる。九年八月十三日甲府の勤番となり、これより甲府にうつり住す。寶曆二年四月十三日死す。年四十八。法名惠日。甲斐國府中の大泉寺に葬る。のち葬地とす。妻は紀伊家の臣窪田玄陸未隆が女。  
女子 永井平兵衛正行が妻。

廣福

平次郎 母は未隆が女。  
寶曆二年七月三日遺跡を繼、勤番となる。十二年三月朔日はじめて澄明院殿に拜謁し、安永四年六月九日死す。年四十。法名臺明。妻は伊勢久四郎貞匡が養女、後妻は太田新十郎林寛が女。

廣原

彦五郎  
匡が養女、後妻は太田新十郎林寛が女。

廣政

廣十郎 天野彦五郎政輝が養子。

女子

杉浦與惣右衛門勝貞が妻。

女子

永井勘左衛門正甫が妻、のち離婚す。

女子

根岸長兵衛永從が妻。

女子

矢部求馬春胤が妻。

女子

小笠原熊之助貞房が妻。

廣定

駒太郎 七郎右衛門 母は定匡が養女。  
安永四年九月六日遺跡を繼、勤番となる。時三十七歳。寛政二年六月朔日はじめて將軍家にまみえたてまつる。妻は天野彦五郎政輝が女、後妻は中村喜藏房が女。

信近

左平次 間宮宗七郎信全が養子。

景廣

光五郎 山岡由吉景輔が養子。

廣支

貞十郎 母は政輝が女。妻は郡司又右衛門勝睦が女。

女子

金右衛門 母は勝睦が女。

廣次

二重總甲の内花菱